〒371 前橋市上泉町664－4
前橋市教育委員会管理部文化財保護課
TEL 0272－31－9531

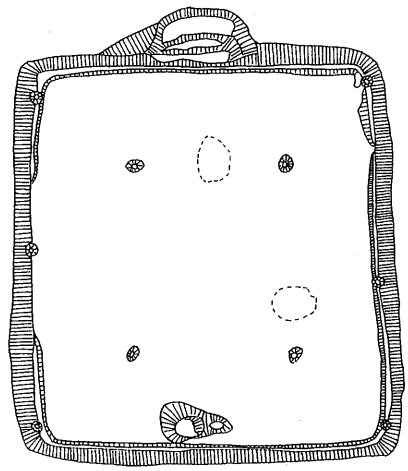
内堀遺跡群Ⅳ

－大室公園整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報－

1991

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

内堀遺跡群 IV



階段状施設を持つ大形住居

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1　赤城山と大室公園予定地

2．E区全景

3．平安時代の大地震による地割れ

はじめに

内堀遺跡群のある大室地区は、自然景観に恵まれた場所です。先人の汗によって造られた五料沼には、多くの水鳥が飛来し、林に一歩足を踏み込めば蟬時雨を浴びることができます。また、ここには国指定史跡である前・中・後・小二子古墳という4基の前方後円墳とこれらの古墳に葬られた豪族の館である梅木遺跡も存在し、悠久の時間を体験させてくれます。情報が氾濫し、時間の短縮に追われる現代であるからこそ、自然・歴史的空間の持つゆとりが、人間性の回復のために必要と思われます。

前橋市では、こういった貴重な場所であることから公園を造ることになりました。ここに報告する内堀遺跡群下縄引II遺跡は、公園造成に先立って行われている発掘調査で解明されてきました。遺跡の調査は、昭和62年から継続して実施されてきました。これまでの調査で、約1万年前の狩りの道具もみつかりました。その後も連綿と生活の跡がみられ、集落が形成されるのは、古墳時代初頭（西暦350年前後）です。この時代の住居跡は、100軒近い数が予想され、昭和55年にすぐ北で調査された「上縄引遺跡」の円形周溝墓が、本遺跡の人々の墓と考えられます。集落と墓域が有機的な関係で存在しているため、当時の社会を復原する上で重要な遺跡といえます。また、古墳時代初頭は新たな文化の幕明けであるため当時の人々の脈動が、本遺跡で出土した日本各地の地域色をもつ土器からも窺えます。

さらに、本年度の調査での大きな成果は、階段状施設をもつ大形住居跡で、県内でも類例が無く、集落構造を研究する上で貴重な発見となりました。

最後に発掘調査と遺物整理を円滑に進められたのは、公園緑地課をはじめとする関係機関や各方面の方々の御配慮の結果といえます。また、本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、斯学の参考になればさいわいと存じます。

平成3年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　遠藤次也

例　　言

1　本報告書は、前橋市公園緑地課（前橋市長　藤嶋清多）が造成する大室公園に係る内堀（うちぼり）遺跡群発掘調査報告書である。

2　遺跡は群馬県前橋市（まえばしし）西大室町（にしおおむろまち）1295番地ほかに所在する。

3　調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　遠藤次也が前橋市長　藤嶋清多と委託契約を締結し実施した。調査担当および調査期間は以下の通りである。

　発掘・整理担当者　　前原　豊・伊藤　良（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

　試掘・発掘調査期間　　平成２年５月９日～昭和２年11月30日

　整理・報告書作成期間　平成２年12日５日～平成３年３月25日

4　本書の原稿執筆・編集は前原・伊藤が行った。整理作業をはじめ報告書の作成には、伊藤孝子・佐手利子・佐藤佳子・竹内るり子・内藤貴美子・巾　千恵子・峰岸あや子・吉田真理子の協力があった。

5　住居址の構造について、奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏、発掘調査に関して千葉大学麻生　優教授・岡本東三助教授に現地指導をいただいた。地質分野の鑑定は早田　勉氏（古環境研究所）、土器については小島純一氏（粕川村教育委員会）・若狭　徹氏（群馬町教育委員会）、常滑焼については大江正行氏（財団法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団）にご指導をいただいた。

6　発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に、建設省国土地理院１／20万地形図（長野、宇都宮）と１／５万地形図（前橋）を使用した。

3　本遺跡の略称は２Ｅ11である。

4　各遺構の略称は次の通りである。

　ＪＴ…縄文時代の竪穴状遺構、Ｈ…古墳時代の住居址、Ｔ…竪穴状遺構、

　Ｚ…遺物集中区、Ｉ…井戸、Ｄ…土坑、Ｗ…溝、Ｘ…地割れ

5　遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

　遺構　　住居址・土坑・井戸…１/60、全体図１/400、

　遺物　　土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/2、1/4

6　スクリーントーンの使用は次の通りである。

　遺構平面図　　焼土…淡点、炭化物…粗い斑、粘土…細かい斑

　遺構断面図　　火山降下物…濃点、焼土…淡点、粘土…細かい斑、構築面…斜線

　遺物実測図　　黒色処理…斑、須恵器断面…黒塗、施釉陶器断面…点、

　　繊維含有土器の断面…点、石器使用痕…線

7　遺物分布図のシンボルの使用は次の通りである。

　●…土器、○…土製品、▲…鉄器、■…石器・石製品、□…種子（果核）、

　　なお接合状態は実線で結んだが、個体別資料数の多いものは結んでいない。

目　　次

はじめに

I　調査に至る経緯 …… 1

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地 …… 1

2　歴史的環境 …… 3

III　調査の経過

1　調査方針 …… 6

2　調査経過 …… 7

IV　層　　序 …… 10

V　遺構と遺物

1　住居址 …… 12

2　竪穴状遺構 …… 27

3　遺物集中区 …… 28

4　井　　戸 …… 28

5　土　　坑 …… 28

6　　溝 …… 30

7　地割れ …… 32

8　グリッド出土の遺物 …… 33

VI　成果と問題点

1　古墳時代の土器について …… 33

2　古墳時代の住居址について …… 39

3　階段状施設を持つ大形住居について …… 39

4　古墳時代前期の集落 …… 41

付　　編

内堀遺跡群下縄引遺跡のテフラと地割れ（早田　勉） …… 43

図　版

口絵　1　赤城山と大室公園予定地
口絵　2　Ｅ区全景
口絵　3　平安時代の大地震による地割れ

ＰＬ．1　平成２年度調査区全景
2　遺跡全景
3　住居址にみられる地割れ
4　Ｈ—35～38号住居址
5　Ｈ—39・40・42号住居址
6　Ｈ—43～47号住居址
7　Ｈ—48・49号住居址
8　Ｈ—49～53号住居址
9　Ｈ—54・56～59号住居址
10　Ｈ—59・61・62号住居址
11　Ｈ—63～65号住居址
12　Ｈ—66・82～85号住居址
13　Ｈ—86・89・90・91号住居址、Ｔ—１～３号竪穴状遺構
14　ＪＴ—１号竪穴状遺構、Ｉ—１号井戸、Ｄ—１～４号土坑
15　Ｄ—５・６・10～15号土坑
16　Ｄ—16・17号土坑、Ｗ—１・２・９号溝
17　Ｗ—３・４・８・10号溝、Ｘ—１号地割れ
18　Ｘ—２～５号地割れ、瓦塔出土状態、記念撮影
19　Ｈ—35～39号住居址出土の土器
20　Ｈ—39・40・43・45・46号住居址出土の土器
21　Ｈ—46・47号住居址出土の土器
22　Ｈ—47～49号住居址出土の土器
23　Ｈ—49・50号住居址出土の土器
24　Ｈ—50号住居址出土の土器
25　Ｈ—51～53号住居址出土の土器
26　Ｈ—54・56・57・59・62号住居址出土の土器
27　Ｈ—62～64号住居址出土の土器
28　Ｈ—64・65号住居址出土の土器
29　Ｈ—65・66・82号住居址出土の土器
30　Ｈ—82～84・85・90号住居址、Ｄ—２号土坑出土の土器
31　石製品・土製品・石器
32　鉄器・石器・縄文土器・常滑焼・瓦塔

挿　図

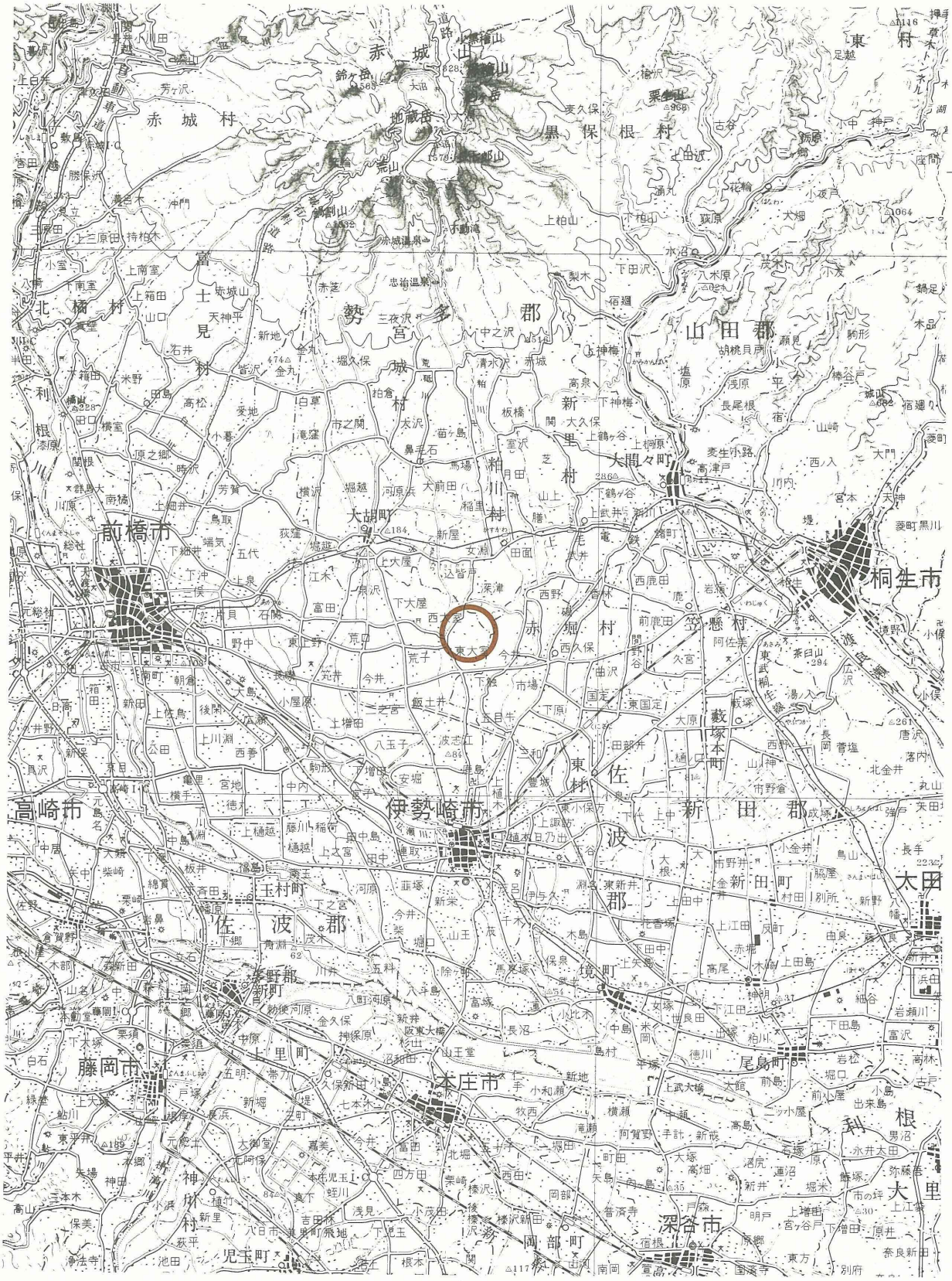
			頁
Fig.	1	内堀遺跡群の位置	viii
	2	内堀遺跡群位置図	2
	3	内堀遺跡群周辺図	4・5
	4	平成２年度調査区呼称図	6
	5	内堀遺跡群調査経過図	7
	6	内堀遺跡群Ａ～Ｃ区全体図	8・9
	7	内堀遺跡群Ｄ・Ｅ区全体図	10
	8	内堀遺跡群標準土層図	11
	9	土器片種類の割合	35
	10	土器集成変遷図	36・37
Fig.	11	住居址規模相関図	39
	12	住居址分類図	40
	13	Ｈ—35・36号住居址	55
	14	Ｈ—37・38号住居址	56
	15	Ｈ—39号住居址	57
	16	Ｈ—40・42号住居址	58
	17	Ｈ—43号住居址	59
	18	Ｈ—44・45号住居址	60
	19	Ｈ—46号住居址	61
	20	Ｈ—47・48号住居址	62

Fig. 21 H—50・51号住居址 …… 63
22 H—49号住居址(1) …… 64
23 H—49号住居址(2) …… 65
24 H—52・53号住居址 …… 66
25 H—54・56号住居址 …… 67
26 H—57・58号住居址 …… 68
27 H—59号住居址 …… 69
28 H—61号住居址 …… 70
29 H—62・65号住居址 …… 71
30 H—63号住居址 …… 72
31 H—64号住居址 …… 73
32 H—66号住居址 …… 74
33 H—82号住居址 …… 75
34 H—83・89号住居址 …… 76
35 H—84号住居址 …… 77
36 H—85号住居址 …… 78
37 H—86号住居址 …… 79
38 H—90・91号住居址、
ＪＴ－１号竪穴状遺構 …… 80
39 Ｚ－１号遺物集中区、
Ｉ－１号井戸 …… 81
40 Ｔ－１～３号竪穴状遺構、
Ｄ－１～４号土坑 …… 82
41 Ｄ－５～７・10～17号土坑 …… 83
42 Ｘ－１号地割れ …… 84
43 Ｘ－１～５号地割れ …… 85
44 Ｗ－１～４・８・９号溝 …… 86
45 H—35～37号住居址出土の土器 … 87
46 H—38～40・42・43号住居址
出土の土器 …… 88
Fig. 47 H—44・45号住居址出土の土器 … 89
48 H—45・46号住居址出土の土器 … 90
49 H—46・47号住居址出土の土器 … 91
50 H—47号住居址出土の土器 …… 92
51 H—47～49号住居址出土の土器 … 93
52 H—49号住居址出土の土器 …… 94
53 H—49・50号住居址出土の土器 … 95
54 H—50号住居址出土の土器 …… 96
55 H—50号住居址出土の土器 …… 97
56 H—51～53号住居址出土の土器 … 98
57 H—53・54号住居址出土の土器 … 99
58 H—56・57・59号住居址
出土の土器 ……100
59 H—61・62号住居址出土の土器 …101
60 H—63・64号住居址出土の土器 …102
61 H—64・65号住居址出土の土器 …103
62 H—65号住居址出土の土器 ……104
63 H—66・82号住居址出土の土器 …105
64 H—82号住居址出土の土器 ……106
65 H—83～85号住居址出土の土器 …107
66 H—85・86・90号住居址、
Ｚ－１号遺物集中区、Ｄ－１・
４号土坑出土の土器 ……108
67 Ｄ－２号土坑・Ｗ－８号溝出土
の土器と土・石製品 ……109
68 土製品・石器・鉄器 ……110
69 石製品 ……111
70 石製品 ……112
71 縄文土器 ……113
72 縄文石器・常滑焼 ……114

表

頁
Tab. 1 住居址時期別一覧表……38
Tab. 2 遺物観察表……45～54

内堀遺跡群の位置（丸印）


赤城村
黒保根村
東村
勢多郡
山田郡
北橘村
富士見村
新里村
大間々町
大胡町
前橋市
桐生市
赤堀村
笠懸村
東村
佐波郡
新田郡
伊勢崎市
高崎市
玉村町
境町
太田
尾島町
藤岡市
本庄市
利根
大里
神流村
深谷市
岡部町
児玉町
1：200,000　宇都宮
0　5　10　15　20 キロメートル

I　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市の「大室公園整備事業」に先立って行われたものである。この調査は昭和62年度に始まり今年度で４年目になるが、公園建設予定地の埋蔵文化財を調査し公園設計の基礎資料にすることが目的である。

昭和62年度は、公園予定地約370,000㎡のうち国指定史跡である前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳、小二子古墳や山林、沼などを除く約200,000㎡について東西に10m間隔でトレンチを入れる方法で確認調査を行い、予定地全域についての埋蔵文化財の分布状況を知るとともに、その結果を踏まえ、昭和63年度には予定地の北西部約10,000㎡についての発掘調査を実施した。また、平成元年度は、昭和63年度調査区の西側を中心に約12,600㎡について発掘調査を実施した。

今年度は、昭和63年度と平成元年度の調査区を取り囲む範囲の発掘調査と確認調査を実施した。発掘調査の面積は約9,000㎡・確認調査の面積は約2,500㎡で合計11,500㎡である。当初は公園整備において便益施設が予定される地域であったため、記録保存を目的とした調査であったが、３カ年の調査で検出された古墳や集落跡の内容を鑑みて公園整備に活用するべく現地保存が決定された。

今年度の調査は、平成２年４月５日に市長（公園緑地課担当）より発掘調査の依頼が教育長あて提出され、４月10日に前橋市埋蔵文化財発掘調査団で調査受諾を決定し、４月27日付けで発掘調査委託契約が締結された。初年度以前の経緯については『内堀遺跡群Ⅰ』に詳しく述べられているので本書では省略する。

II　遺跡の位置と環境

1　遺 跡 の 立 地

内堀遺跡群が所在する前橋市西大室町は、前橋市の中心市街地から東へ約15kmの所にある。遺跡は国道50号線東大室十字路より北へ２kmで、県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点から北東１kmに位置している。またＪＲ両毛線伊勢崎駅から遺跡へは北約７kmにあり、上毛電鉄粕川駅からは南南西に約３kmにある。東側は多田山と呼ばれる火山泥流による丘陵地形があり、赤堀町との境となっている。また、北に接する粕川村とは、七ツ石とよばれる信仰の対象となっている巨石のある丘陵とそれに連なる丘陵地形を行政上の境界としている。

本遺跡の東側には五料山とよばれる自然丘陵があり、上縄引遺跡のある西側の台地と挟まれるように並んでいる。南側の後二子古墳のある位置も丘陵地形となっている。この西側にある小山もやはり自然丘陵で、最近まで砕石を切り出していた跡がある。この地区の丘陵地形の基盤は、

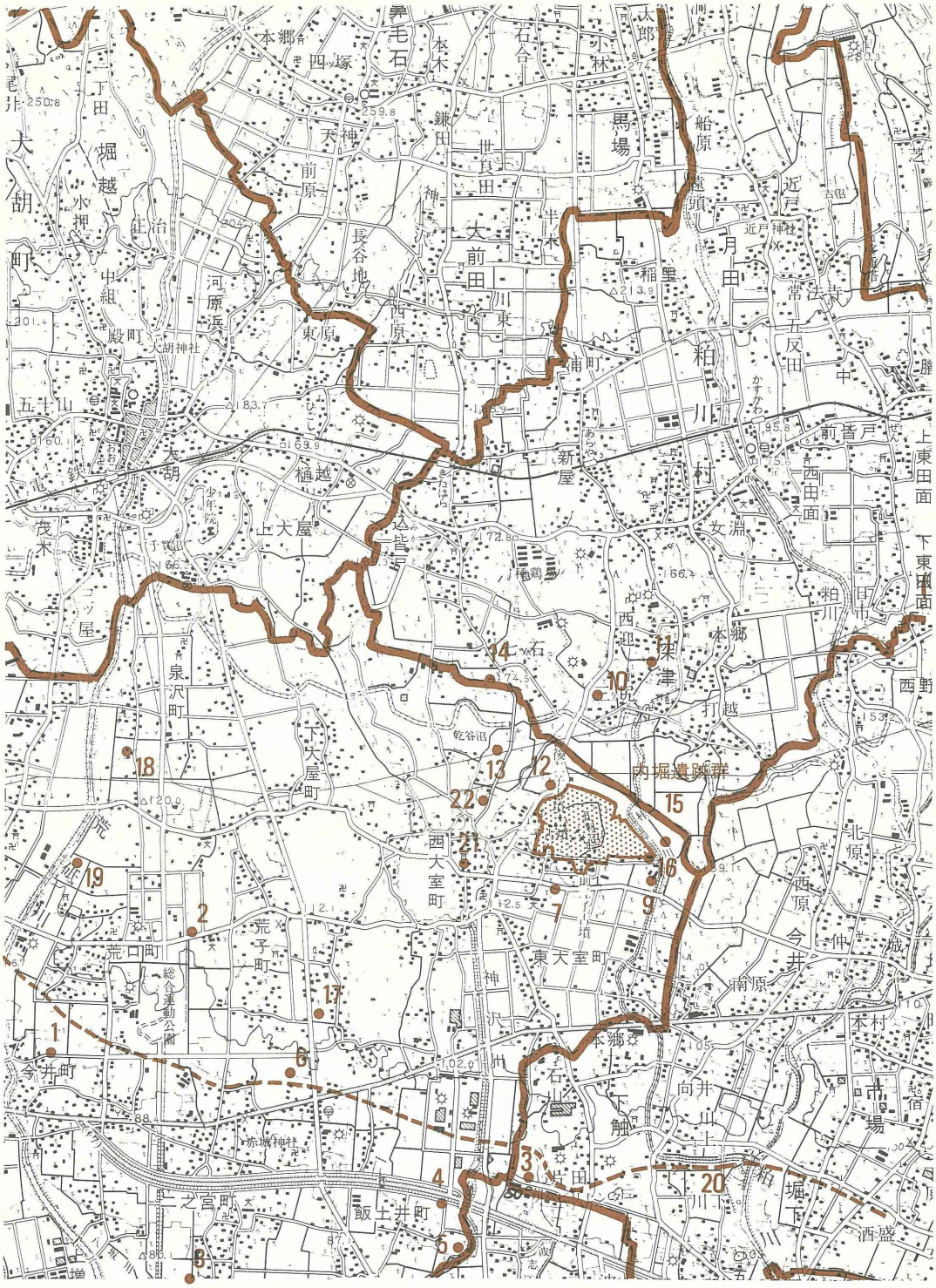


Fig.2 内堀遺跡群位置図

すべてこうした輝石安山岩よりなる火山泥流によって形成されており、それらが露出しているのが、七ツ石や石山観音、産泰神社裏の巨石などである。本遺跡と後二子古墳との間には小さな谷地が入り、かつては湧水による小河川があったものと推定される。また、現在も五料山と本調査区の間に小河川が流れており、江戸時代に谷地の南側に堤をつくり、堰止めてできたものが五料沼である。本遺跡のある丘陵の北側には現在水田地帯が広がっているが、下縄引遺跡や粕川村五反田遺跡の存在から生産基盤と考えることが難しいため、この谷地を含めた南側に生産基盤を求めたい。本遺跡地の標高は、130m～137mである。

2　歴史的環境

内堀遺跡群のある荒砥地区は自然に恵まれた風光明媚な所であるとともに、3（4）二子古墳をはじめとした周知の遺跡が存在する考古学上にも重要な地域である。そこで、本遺跡の遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境をみてみたい。

まず、荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に荒砥北三木堂遺跡①、また、宮川の沖積地に臨む柳久保遺跡群②においてナイフ形石器、細石刃等の旧石器文化の遺物が出土している。続く縄文時代には、草創期の遺跡として爪形文土器が検出された下触牛伏遺跡③がある。二本松遺跡④や柳久保遺跡群からは、田戸下層期の土器が出土している。前期の遺跡は、荒砥二之堰遺跡⑤、荒砥上ノ坊遺跡⑥、荒砥上諏訪遺跡⑦など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているが、いずれも5～10軒の中・小規模の集落にとどまっており、赤城村三原田遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。

弥生時代の遺跡は水田耕作に適した沖積地を臨む台地や微高地に立地しており、中期後半から後期の小規模集落が荒砥島原遺跡⑧、荒砥上川久保遺跡⑨、西原遺跡⑩、西迎遺跡⑪などで見られる。古墳時代前期の遺跡としては、本遺跡の北西に隣接する上縄引遺跡⑫をはじめ、北山遺跡⑬、七ツ石遺跡⑭、久保皆戸遺跡⑮、梅木遺跡⑯などがある。この時期の遺跡は、住居出土の土器を見る限り複雑な様相を呈しており、弥生時代後期の樽式・赤井戸式土器はこの時期まで残存し、土師器と共伴する。そのうち、浅間C軽石降下後およびFA降下前の各遺跡の住居は、本年度内堀遺跡群の集落に対応するものであると考えられる。5世紀後半から6世紀代に入ると、強大な支配者の存在を暗示する3（4）二子古墳が築造され、この地区が当時の中心的様相を呈するようになる。梅木遺跡で検出された首長層の居宅は3（4）二子古墳と何らかの関係があると推定される。このほかに居館址として、荒砥荒子遺跡⑰、丸山遺跡⑱などがある。6世紀後半から7世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、1～3基程度の散在する小円墳も出現するようになり、支配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。奈良・平安時代には居住域が台地全体に広がり、水田開発が進み、荒砥諏訪西遺跡⑲では微高地まで水田化している。また、12世紀の中頃、開削されたとされる女堀⑳の遺構も残存している。中世以降の城郭としては、大室城㉑、元大室城㉒、今井城、赤石城などがあり、荒砥北三木堂遺跡などでは多数の墓坑が調査され

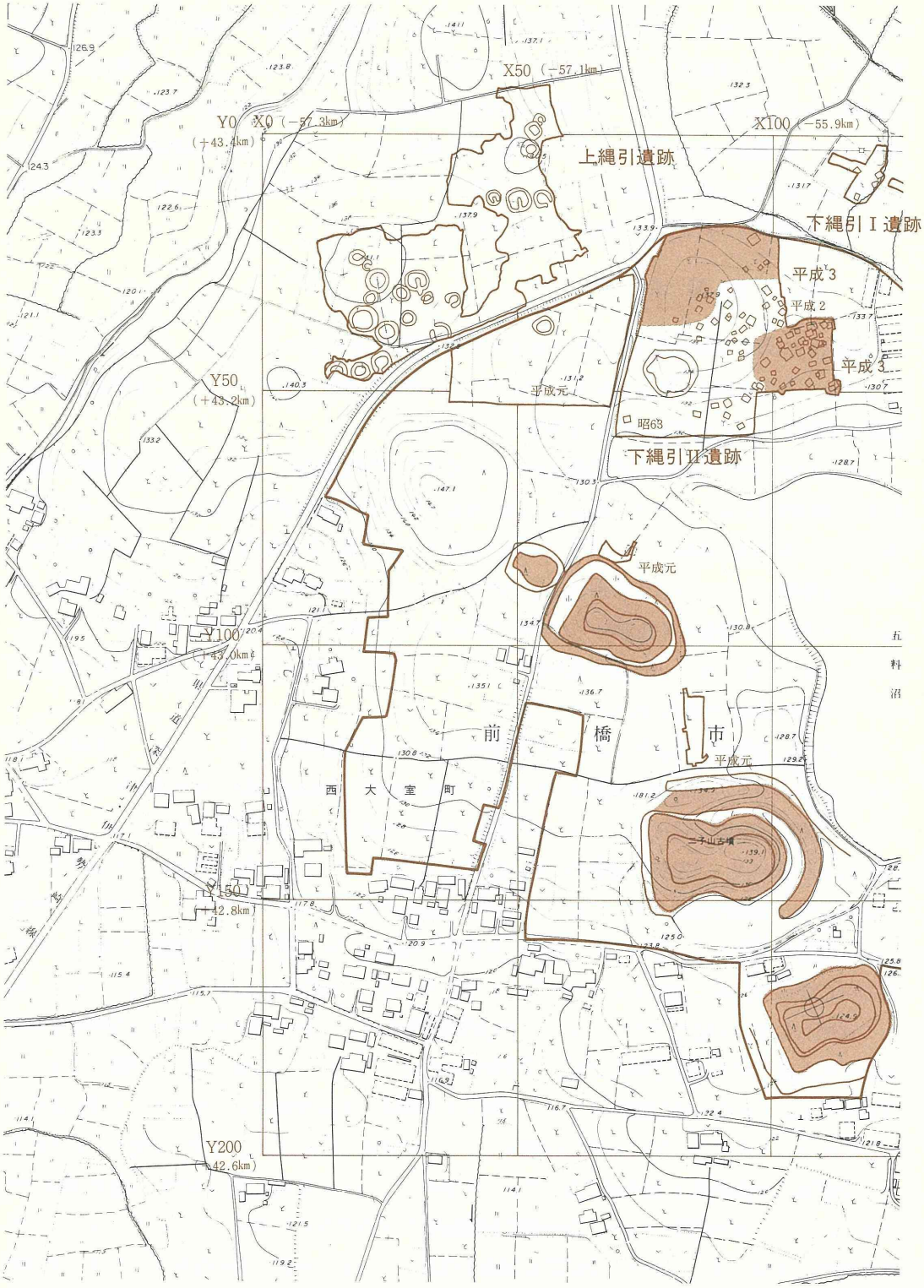
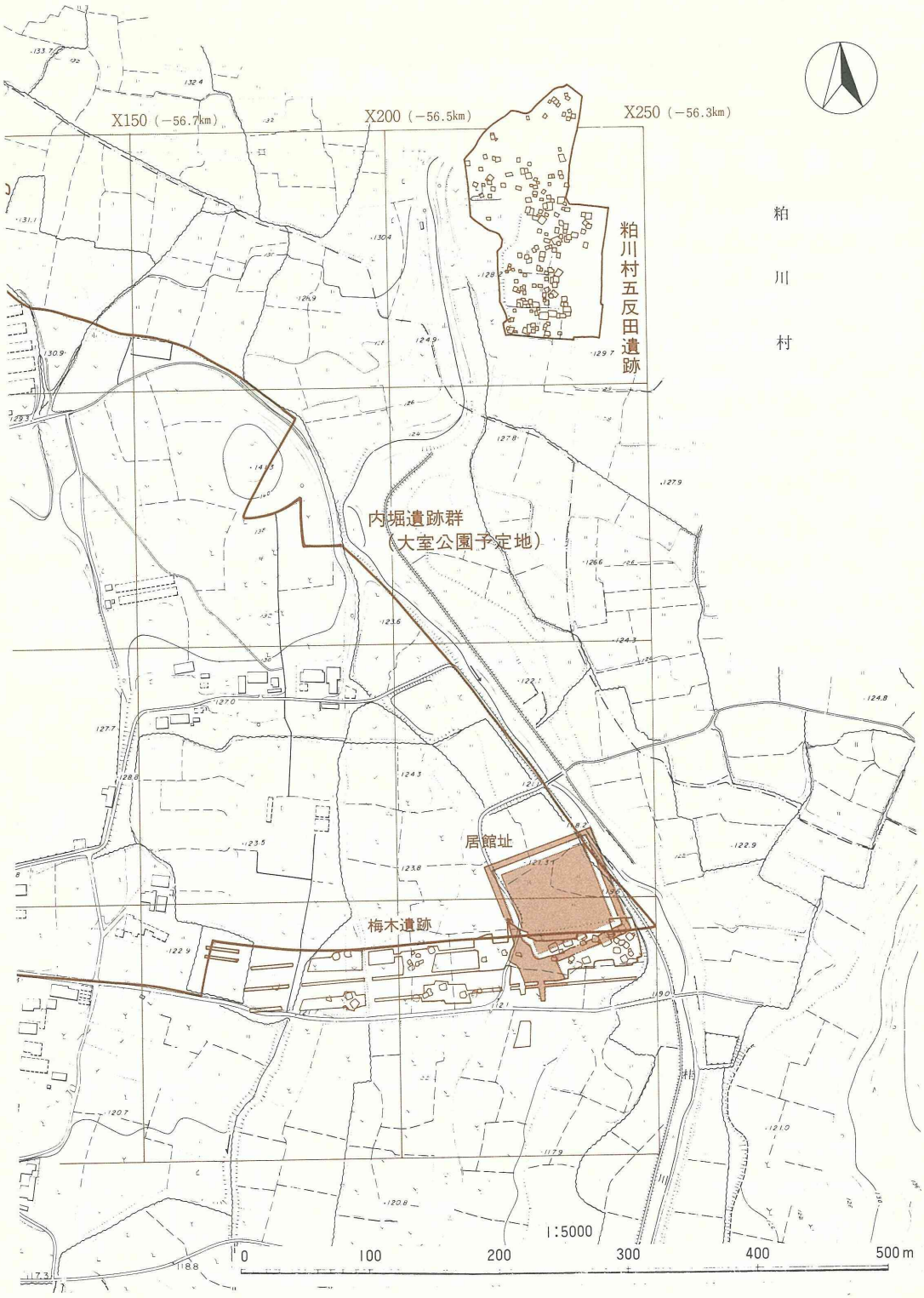


Fig.3　内堀遺跡群周辺図


X150（−56.7km）
X200（−56.5km）
X250（−56.3km）
粕川村五反田遺跡
粕川村
内堀遺跡群
（大室公園予定地）
居館址
梅木遺跡
1:5000
0
100
200
300
400
500m

ている。また、井戸や溝など近世の遺構も、多くの遺跡で確認されている。

III 調査の経過

1 調査方針

調査開始にあたって、発掘調査区域の大部分に麦が栽培されており、麦の収穫を待たなければならなかった。そこで、空いている土地から逐次調査を進行させるため、遺跡全体を細かくA～Eまでの5つの調査区にわけて呼称し、発掘調査できる調査区から行うことにした。調査の実施にあたっては、国家座標に基づいた原点を据えて、調査区全体に4mグリッドの設定を行った。各グリッドの呼称は北西隅の杭を用い、西から東へ算用数字、北から南へカタカナで番付を行った。ちなみにサ—10Gは第IX系の—57km・＋43.3kmである。なお、各年度毎の調査区設定枠が微妙に異なっているため内堀遺跡群全域にわたるグリッド設定を行った。4mグリッドを基本とし、西から東へX 0～X250・北から南へY 0～Y200の設定を行った。サ—10Gは全体グリッドではY 25—X75Gになる。調査は、期間的制約があるため掘削用重機を用いて表土の除去を行い、As-Cが混じる黒色土面もしくは、軟質（ソフト）ローム上面を出した。この時点で直ちに古墳時代以降の遺構の確認に入り、並行してグリッド設定、B．M．の設置を行った。その後、平板測量で遺構の配置図を縮尺1/100にて作成し、各遺構の調査工程を検討した。その結果、住居址の調査は、

1　中央部でクロスするセクションベルトを設けて土層観察を行う。

2　遺物について、10cm四方以上のものは縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。

3　炉と竈の図化については、原則と

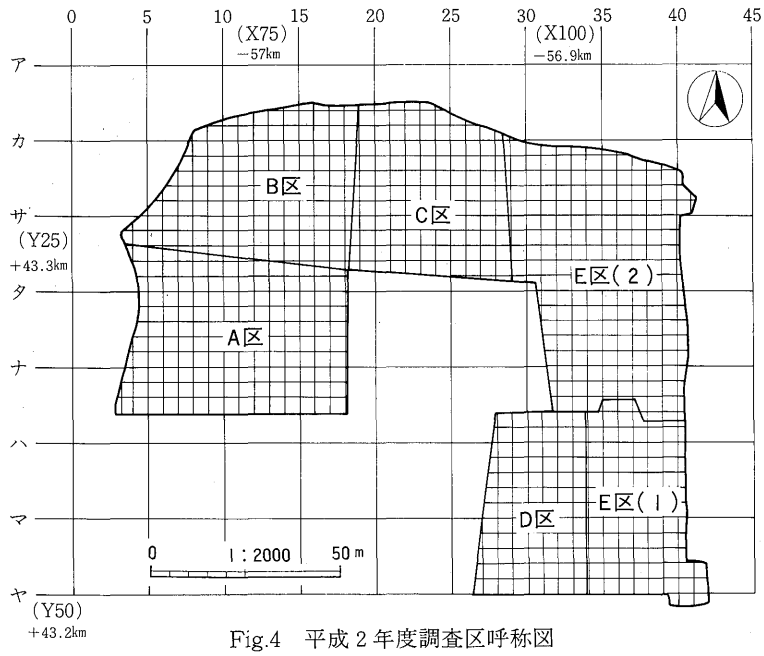


Fig.4　平成2年度調査区呼称図

して縮尺1/10にて、遺構平面図については、原則として縮尺1/20にて実施する。

以上、大まかな方針のもとに調査を進めたが、予想をはるかに超えた多数の住居址の検出と例年にない猛暑と乾燥化は、大きく進捗を阻んだ。

なお、本遺跡は大室公園予定地内で、地下に存在する遺構は十分に保存されるということで、原則として弥生時代以前の遺構調査は行っていない。

2 調 査 経 過

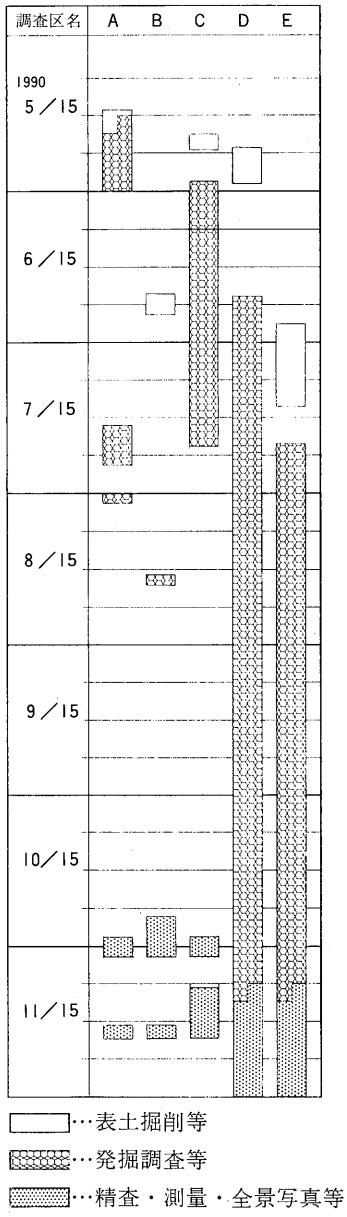
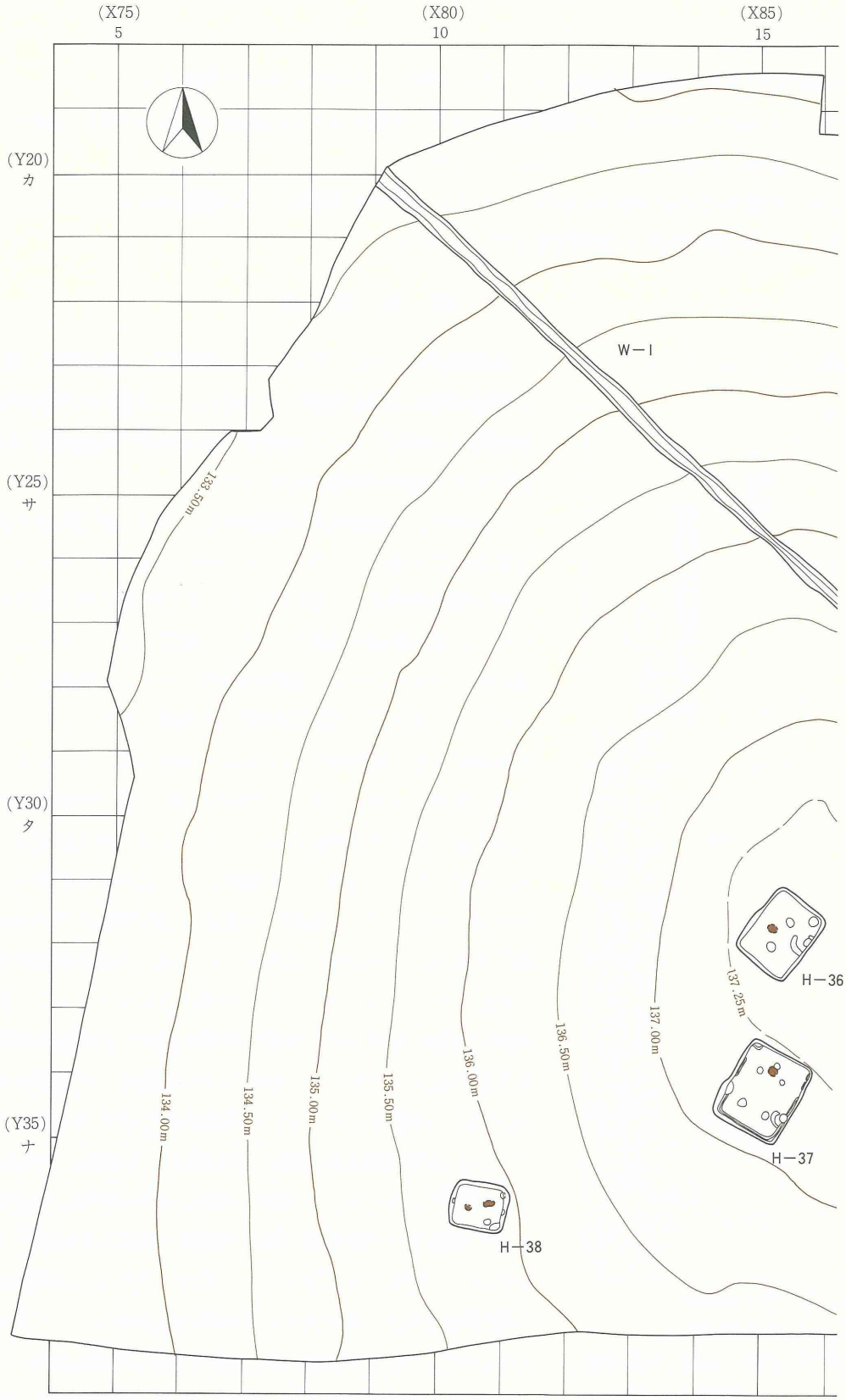


Fig.5 発掘調査経過図

発掘調査は、平成2年4月より現地調査、発掘事務手続き、公園緑地課との事前協議などを行い、4月27日に発掘調査の委託契約を締結してから現場事務所の設置や発掘調査用具の搬入など本格的な準備が始まった。

5月14日より発掘調査を開始する。同日、麦畑以外の調査可能なA区からバックフォー(0.7m³)と10tダンプトラックとで表土掘削を開始し、続いてC区→D区の順に表土掘削を済ませた。表土掘削に追従してプラン確認を行い、A区から遺構の掘り下げを進めた。調査の結果、A区より住居址5軒・土坑1基・溝1条・縄文時代竪穴状遺構1基が、またC区より住居址4軒・遺物集中区1カ所・土坑5基・井戸1基・溝3条・地割れ4条、D区より住居址13軒・竪穴状遺構1基・土坑5基・溝2条が検出された。B・E区の表土掘削を、麦刈りが終了した6月22日より開始した。E区の表土剝ぎは途中であったが、プラン確認した結果、30軒を超える住居址が検出された。このため、E区については、当面の調査範囲を『40』ライン以西・『ネ』ライン以南に定めるとともに、調査内容の見直しを計った。当初の予測を超えた住居数や遺構保存状況の良さと相俟って、例年にない猛暑は、発掘調査の進捗に著しく影響を及ぼした。現地調査は11月末日をもって完了した。調査面積は11,500m²(発掘調査…9,000m²、確認調査…2,500m²)に及んだ。その間、現地説明会の実施、業者委託による気球空中写真撮影・住居平面図・遺跡全体測量や土器の水洗・注記もすべて完了した。特に、11月4日に実施した現地研修会では、季節はずれの台風を思わせるような悪天候にもかかわらず、100名を超える熱心な市民の参加があった。

12月3日に器材・出土品の運搬、4日に整理事務所の開設、


(X75)
5
(X80)
10
(X85)
15
(Y20)
カ
(Y25)
サ
(Y30)
タ
(Y35)
ナ
W－I
133.50m
134.00m
134.50m
135.00m
135.50m
136.00m
136.50m
137.00m
137.25m
H－36
H－37
H－38

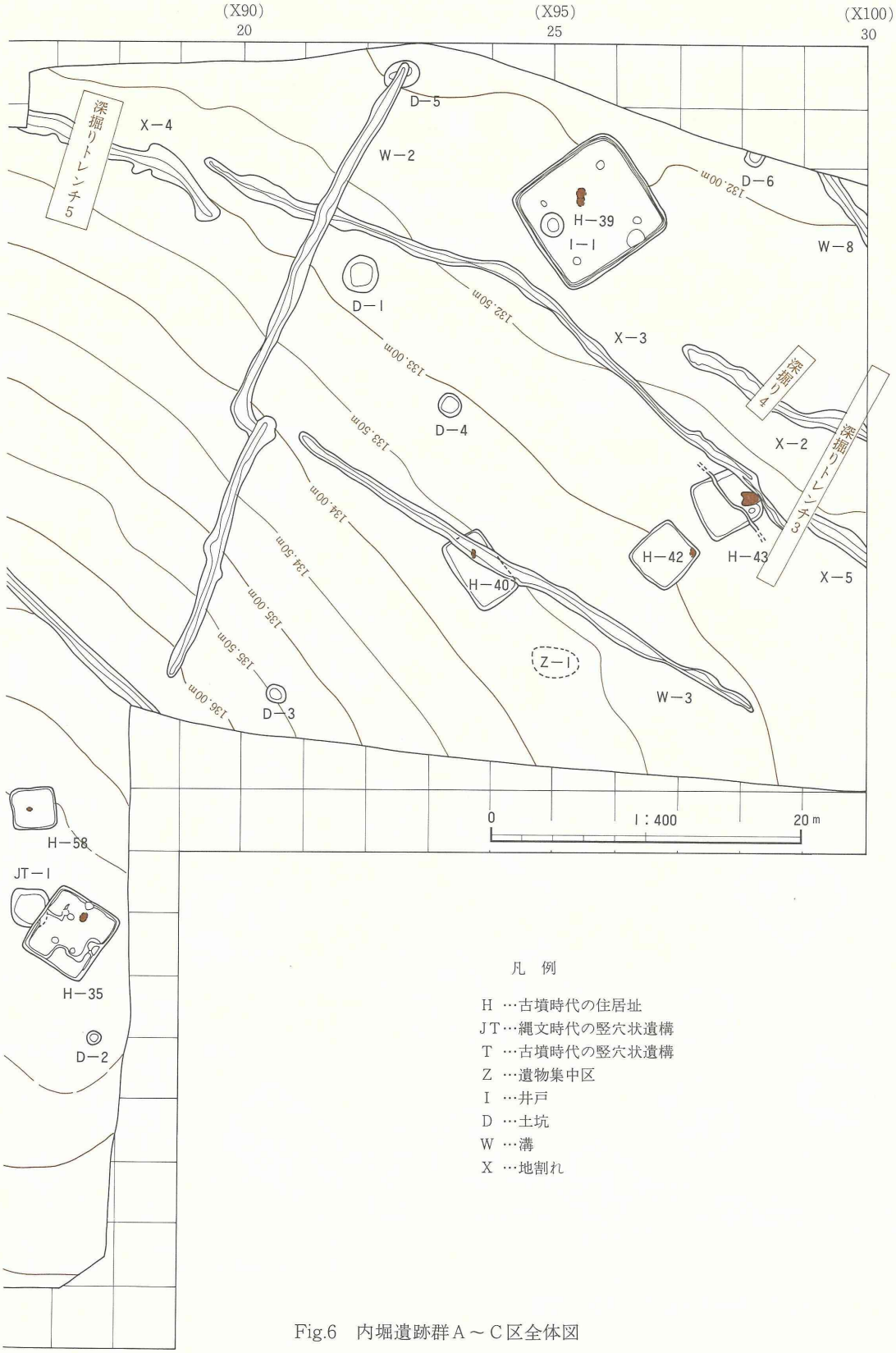


Fig.6 内堀遺跡群A～C区全体図

5日より平成3年度3月25日まで遺物整理作業と報告書作成を行った。

Ⅳ 層　　序

ケー28グリッドの土層を基にして本遺跡の標準土層図を作成した。本遺跡は、内堀遺跡群の北部に存在し、約20～30万年前に赤城山の山体崩壊によって、引き起こされた梨木泥流によって形

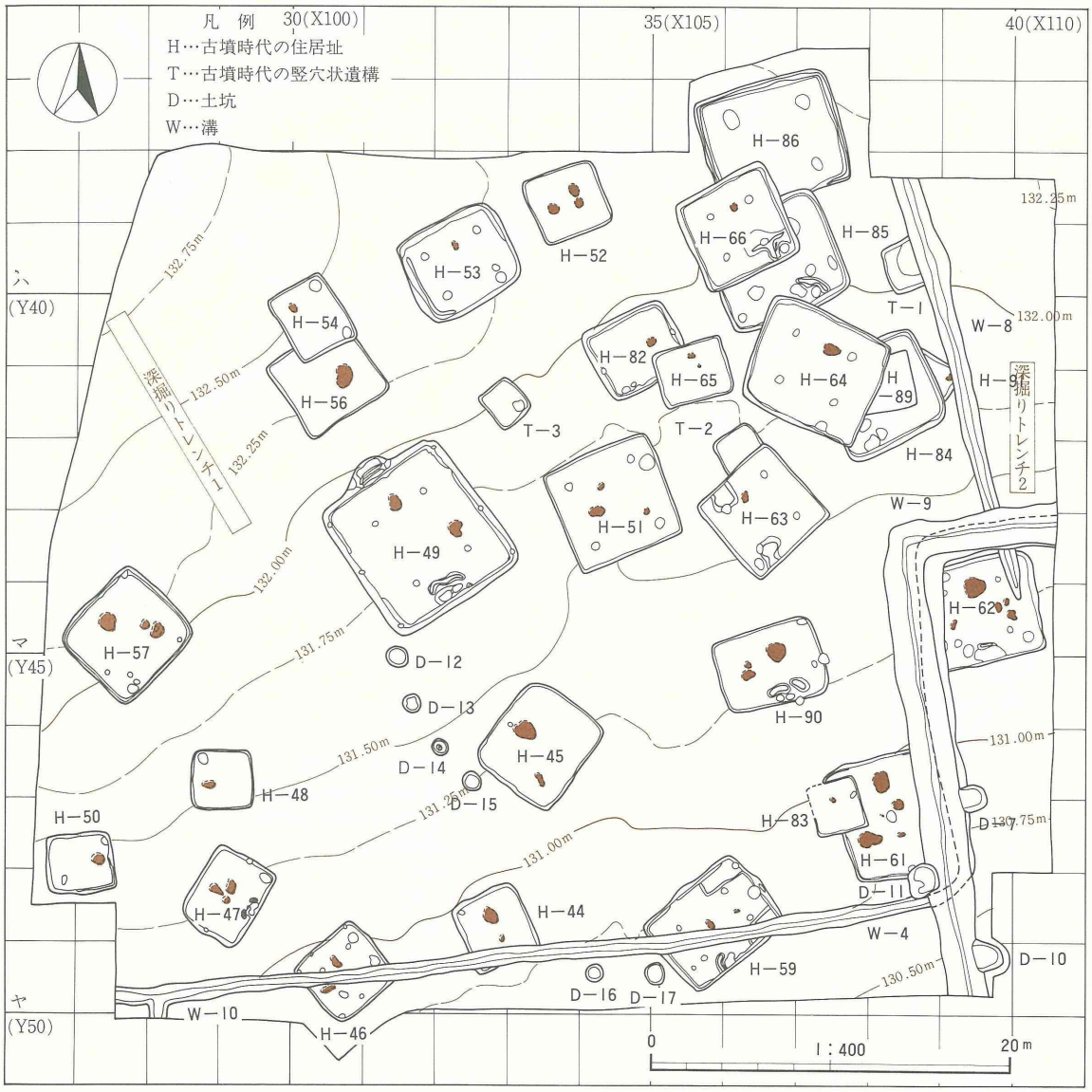


Fig.7　内堀遺跡群D・E区全体図

成された流山を中心とした標高130～137mの丘陵性台地である。流山の頂上には梨木泥流によって運ばれた大形の礫が一部露出し、土層の堆積も薄く、ちなみにⅦ層のＡＴが表面から50～60cm程度で検出できる。この台地と沖積地の比高は６～７ｍである。

Ⅰａ層　黒褐色粗砂層。耕作土層。As-B(1108年降下)を50%以上含む。粘性なく、締まりあり。

Ⅰｂ層　黒褐色土層。As-B、浅間Ｃ軽石(As-C、４世紀中葉降下)、二ツ岳軽石(Hr-FP、６世紀中葉降下)を含む粗砂層。粘性はないが、締まりはある。

Ⅱａ層　黒色細砂層。As-C、Hr-FP(径20mm)を15%含む細砂層。粘性を少し有し、締まりあり。

Ⅱｂ層　暗灰黄色細砂層。粘性は少しあるが、締まりが弱い。

Ⅲ　層　黄褐色細砂層。淡色黒ボク土。ソフトローム層。粘性は少しあるが、締まりが弱い。縄文時代遺物包含層。

Ⅳａ層　明黄褐色硬質ローム層。As-YP(約1.3～1.4万年前)を10%、As-SP(約1.5万年前)を５%を含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

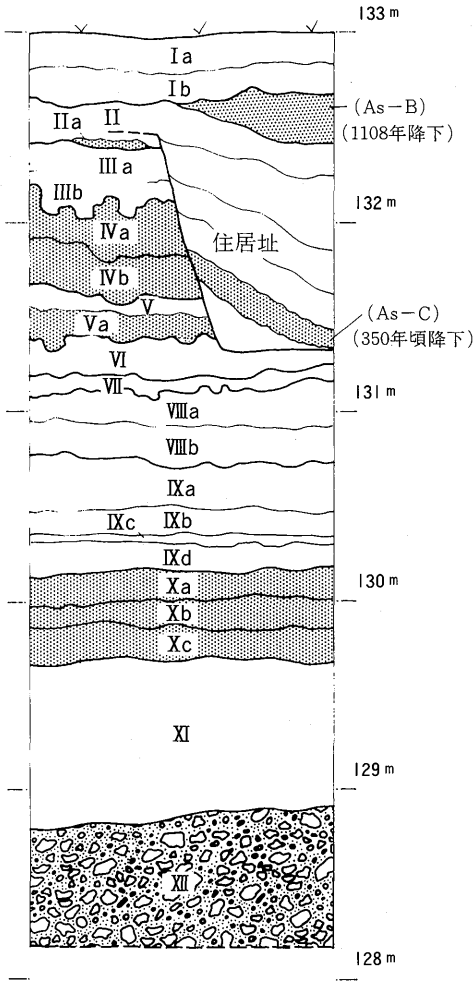


Fig.8　内堀遺跡群標準土層図

Ⅳｂ層　明黄褐色土層。ハードローム層。As-YPを５%、As-SPを10%程度含む微砂層。粘性があり、かたくしまる。

Ⅴ　層　明黄褐色硬質ローム層。As-BP(1.6～2.1万年前)をブロックで20～30%程度含む層。粘性があり、硬く締まる。

Ⅵ　層　明黄褐色硬質ローム層。As-BPをブロックで15%程度含む層。粘性があり、締まりが弱い。

Ⅶ　層　明黄褐色微砂層。風化土壌。粘性を有し締まりは弱い。AT(約2.1～2.2万前)の含有が極大値を示す。

Ⅷ　層　明黄褐色粘土層。暗色帯。粘性が強く、締まりの弱い粘土層。色調でa・bの２亜層に分類できる。

Ⅸ　層　明黄褐色粘土層。粘性が強く、締まりのある粘土層。a～dの４亜層に分類できる。

Ⅹ　層　明黄褐色軽石層。Hr-HP(4.1万年前)。３亜層に分類でき、Ⅹa層は比較的大粒な軽石層、Ⅹb層は火山灰層、Ⅹc層は軽石層である。

Ⅺ　層　褐色粘土層。水性堆積で非常に粘性が強い。

Ⅻ　層　青灰色砂礫層。巨礫によって構成される。梨木泥流(約20～30万年前)。

V 遺構と遺物

本年度の発掘調査では、住居址37軒・竪穴状遺構4基・遺物集中区1基・土坑15基・井戸1基・溝7条・縄文時代包含層のほか、平安時代の大地震によって形成された地割れが南北2カ所に検出された。調査の主体となった古墳時代初頭の住居址は32軒を数え、すでに『内堀遺跡群II』『内堀遺跡群III』で報告されている住居址を合わせると70軒近い数になる。このほかに、古墳時代中期の住居址4軒と後期の住居址1軒を検出した。竪穴状遺構4基のうち1基は、縄文時代後期初頭のものであった。残りの3基は、古墳時代前期のもので、遺物集中区と土坑5基も同様に古墳時代前期であった。井戸1基と溝1条が古墳時代後期の所産で同時期の住居址との関連が考えられる。このほかの土坑や溝は中世から近世にかけてのものと考えられる。W—9号溝と呼んだものは、方形区画の溝の一部分の調査であったが、本地域の中世を考察する上で重要な遺構となった。縄文時代や旧石器時代の調査は、遺跡保存のため実施しなかった。しかし、縄文土器や石器が古墳時代の住居覆土や遺構確認作業の際に出土した。

1 住　居　址

H—35号住居址（Fig. 13・45・67・70、PL. 4・19・31）

（位置）チ～テ—16～18G（重複）JT—1を切る。（形状）正方形（規模）長軸5.30×短軸4.58m。確認面からの壁高80cm（面積）20.8m²（方位）N—35°—E（覆土）3層に大別できる。1層がAs-Bを含み、2層がAs-C混じりで、3層がローム土を主体とする。（床面）炉址周辺と主柱穴に囲まれた部分がきわめて堅緻であった。（炉址）主柱穴を結んだ線より外に設置される。北東壁寄り中央で、長径60×短径44×深さ6cmで炉縁石を使用。（柱穴）4個の主柱穴が検出された。規模は、P_1・長径38×短径36×深さ52cm、P_2・長径46×短径36×深さ56cm、P_3・長径36×短径34×深さ43cm、P_4・長径36×短径31×深さ45cm、ほかに、P_5・長径43×短径42×深さ23cmがP_1の北西隣りで、また、入り口ピットと思われるP_7・長径61×短径58×深さ34cmが、南東壁際中央で検出された。（貯蔵穴）北東壁際中央部でP_6・長径53×短径45×深さ61cmが検出。（周溝）全周（馬蹄形状施設）南東壁際中央部のP_7周辺にある。（ベッド状遺構）北隅と南隅とに段差5cmの高低差を有する。（遺物）出土遺物は総数135点である。このうち、赤井戸式や樽式系の土器は、15%程度占める。刷毛目を有する破片は出土しなかった。図示した遺物は7個体である。4はH—36の破片と接合をみせる。このほかに紡錘車と砥石が出土している。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はI期に位置付けられる。

H—36号住居址（Fig. 13・45、、PL. 4・19）

（位置）チ・ツ—14～16G（形状）正方形（規模）長軸4.86×短軸4.04m。確認面からの壁高63cm

（面積）18.0m²（方位）N－38°－E（覆土）3層に大別できる。1層がAs-Bを含み、2層がAs-C混じりで、3層がローム土を主体とする。(床面)ほぼ平坦であり、馬蹄形状施設から中央部にかけて堅緻面が広がる。(炉址)住居の中心より北西壁寄りに位置し、長径77×短径49×深さ2cmの規模で、土器2片と1石を用いていた。（柱穴）長軸線上に2個の主柱穴を検出。P_3・長径57×短径46×深さ49cmで、P_4・長径56×短径53×深さ51cmである。ほかに、P_2・長径51×短径38×深さ29cmの入り口ピットが南東壁際中央付近で検出された。(貯蔵穴）東隅でP_1・長径65×短径63×深さ61cmが検出された。(馬蹄形状施設）南東壁ぎわ中央付近のP_2周辺にある。(遺物）遺物は総数43点と少なかった。赤井戸式や樽式系の割合は13%程度である。刷毛目を持つ破片はない。このうち2個体を図示した。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期はⅠ期に位置付けられる。

H－37号住居址（Fig. 14・45、PL. 4・19）

（位置）ツ～ナ－14・15G（形状）正方形（規模）長軸5.37×短軸4.60m。確認面からの壁高77cm（面積）22.8m²（方位）N－29°－E（覆土）3層に大別できる。1層がAs-Bを含み、2層がAs-C混じりで、3層がローム土を主体とする。(床面)住居の北東半分に焼土3カ所、炭化物2カ所あり。(炉址)P_1とP_4の主柱穴を結んだ線より外部に位置し、土器破片を石の代わりに用いた長径61×短径54×深さ8cmである。(柱穴）4個の主柱穴が検出された。規模は、P_1・長径45×短径39×深さ55cm、P_2・長径46×短径42×深さ53cm、P_3・長径43×短径35×深さ62cm、P_4・長径32×短径31×深さ55cmである。ほかに、P_5・長径49×短径46×深さ44cmの入り口ピットが南東壁際で検出された。(貯蔵穴）北西壁を抉りこんだ形で横穴形貯蔵穴P_6・長径85×短径75×深さ26cmが検出された。(周溝）北東、南東、南西壁に沿ってみられる。(馬蹄形状施設）南東壁際のP_5周辺にある。（遺物）総数89点の遺物が出土した。赤井戸式や樽式系は10%の割合である。磨きを多用するものが多い。このうち3点が図示。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期はⅠ期に位置付けられる。

H－38号住居址（Fig. 14・45、PL. 4・19）

（位置）ナ・ニ－10・11G（形状）正方形（規模）長軸3.75×短軸3.08m。確認面からの壁高68cm（面積）9.9m²（方位）N－81°－W（覆土）5層に大別できる。1層は、As-Bを含み、2～4層はAs-C混じりで、特に5層には、よごれたAs-Cが高い割合で検出された。(床面)ほぼ全面にわたって堅緻面を検出できた。(炉址)住居長軸上に2個検出。F_1は、北東隅寄りに位置し、長径68×短径34cm×深さ9cmで炉縁石を使用。F_2は、住居の中央からやや西壁寄りに位置し、長径46×短径33cm。(柱穴）長軸に直行する2壁面に、斜めの掘り込みを持つ主柱穴P_4・P_5がそれぞれ1個ずつ検出。立ち上がりの角度はP_4が73°、P_5が71°であった。規模はP_4が長径29×短径22×深さ46cm、P_5が長径23×短径12×深さ49cmである。ほかに、P_3・長径20×短径19×深さ34cm、が確認された。

P_2は、長径35×短径27×深さ33cmの規模を有し、馬蹄形状施設に囲まれて存在することから、入り口ピットと判断できた。（貯蔵穴）北東隅に横穴形貯蔵穴P_1・長径59×短径41×深さ20cmが検出された。（馬蹄形状施設）南東隅。入り口ピットP_2を伴う。床面と比べ3cm前後の高まりを持つ。（遺物）総数4点のうち土器が2点と極めて少なかった。このうち、1点は、口縁部分を除いて完存していた。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はⅠ期に位置付けられる。

H—39号住居址（Fig. 15・46、PL. 5・20）

（位置）オ～キ—24～26G（重複）Ⅰ—1に切られる。（形状）正方形（規模）長軸8.06×短軸7.84m。確認面からの壁高43cm（面積）58.3m²（方位）N—57°—E（覆土）3層に大別できる。1層はAs-Bを主体とし、2層はAs-C混じりで、3層は、ローム土を主体とする。（床面）ほぼ平坦な床であった。丘陵の低い面に構築されていたため、床面の構築層が軟らかく、やや確認が困難であった。しかし、部分的に貼床が認められ、炉址周辺に堅緻面が存在していた。（炉址）主柱穴で囲まれた部分のやや北西壁寄りに位置する。炉体土器として甕の下半分を用い、長径60×短径57×深さ8cmの規模。炉体土器は調査中、行方不明。（柱穴）主柱穴4個が検出。規模は、P_1・長径44×短径40×深さ79cm、P_2・長径36×短径35×深さ68cm、P_3・長径53×短径36×深さ43cm、P_4・長径56×短径44×深さ64cmである。（貯蔵穴）北東壁際やや北寄りに一段テラスを持った状態のP_5が検出された。長径134cm×短径98cm、深さ98cm。覆土中位から多量の粘土が出土。（周溝）壁面に沿って全周。（遺物）総数557点の遺物が出土。このうち図示したものは、7点である。H—49の98と接合関係を持つ破片が出土している。遺物の出土状態は、貯蔵穴に集中していた。接合関係はあまりみられない。赤井戸式や樽式系はほとんど出土しなかった。ほかにS字状口縁台付甕破片が20数点出土している。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はⅢ期に位置付けられる。

H—40号住居址（Fig. 16・46、PL. 5・20）

（位置）サ～ス—23・24G（重複）W—3に切られる（形状）長方形（規模）長軸5.10×短軸3.06m。確認面からの壁高18cm（面積）13.8m²（方位）N—34°—W（覆土）最上部に撹乱層があったが、2層に大別できる。1層は黒色土主体で少しAs-C・Hr-FPを含み、2層はローム土を主体とする。壁・床面の検出は困難であった。（床面）ソフトローム面で形成され、堅緻面も存在しない。（炉址）住居中央よりやや北隅に位置し、長径53×短径48cmの地床炉。（遺物）総数45点の遺物が出土。樽式系が20%近くを占める。図示した遺物は2点である。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期は、Ⅰ期に位置付けられる。

H—41号住居址　遺構確認で、遺物分布・土層から住居址と判断したが、精査によってZ—1号遺物集中区に名称変更を行った。従って、H—41号住居址は欠番扱いとなる。

H－42号住居址（Fig. 16・46・68、ＰＬ. 5・31）

（位置）サ・シ－26・27Ｇ（形状）正方形（規模）長軸3.47×短軸3.42m。確認面からの壁高46cm（面積）11.1m²（方位）Ｎ－46°－Ｅ（覆土）３層に大別できる。１層はAs-B混じり、２層はAs-C、Hr-FP混じりの黒色土で、３層はローム土主体とする。（床面）住居の東隅に焼土が堆積していた。（遺物）総数96点の遺物が出土した。このうち樽式系の破片が53％を占める。図示したものは、有段口縁の壺である。Ｓ字状口縁台付甕の破片は１点である。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期は、Ｉ期に位置付けられる。

H－43号住居址（Fig. 17・46、ＰＬ. 6・20）

（位置）コ・サ－27・28Ｇ（重複）Ｘ－３に切られる（形状）正方形（規模）長軸3.76×短軸3.71m。確認面からの壁高58cm（面積）13.1m²（方位）Ｎ－25°－Ｗ（覆土）As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入度によって５層に細分できる。（床面）Ｘ－３数条によって床面が破壊され、段差を有してした。堅緻面は竈前面に広がっていた。（竈址）東壁中央南寄りに位置し、Ｘ－３によって煙道の一部を破壊されている。主軸方向はＮ－66°－Ｅで、推定全長141cm、幅115cmを測る。構築材に粘土を主体として用いていた。（貯蔵穴）竈の右隣で、P_1・長径64×短径47×深さ51cmが検出された。（周溝）南東壁ぎわに一部みられる。（遺物）総数218点の遺物が出土。土師器が主体を占めたが、須恵器も12点出土した。図示した24はＭＴ－15に比定できよう。このほかに３点の遺物を図示した。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期は、Ｖ期に位置付けられる。

H－44号住居址（Fig. 18・47、ＰＬ. 6）

（位置）メ・モ－32・33Ｇ（重複）Ｗ－４に切られる。（形状）正方形（規模）長軸4.27×短軸3.85m。確認面からの壁高26cm（面積）15.2m²（方位）Ｎ－23°－Ｗ（覆土）３層に大別できる。１層にはAs-Cの純層がみられ、最大厚18cm堆積していた。（床面）ほぼ平坦に作出されており、炉址周辺に堅緻面が認められた。（炉址）主軸方向に２個並んで検出。F_1は北寄りに位置し、長径98×短径76cmの地床炉。F_2は南寄りに位置し、長径44×短径28cmの地床炉。（柱穴）北西隅にP_1・長径40×短径27×深さ11cmの楕円形のものが検出された。（遺物）総数68点の遺物が出土。このうち、赤井戸式１％と樽式系21％を占める。図示した遺物は２点である。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期は、Ｉ期に位置付けられる。

H－45号住居址（Fig. 18・47・48・67・68、ＰＬ. 6・20・31）

（位置）マ～ム－32～34Ｇ（形状）正方形（規模）長軸5.89×短軸5.28m。確認面からの壁高29cm（面積）28.9m²（方位）Ｎ－37°－Ｅ（覆土）As-C、Hr-FP、ローム土等の混入度から４層に大別できる。特に、３層には、よごれたAs-Cが80％以上も含まれていた。（床面）西側一帯には、堅緻面が広がっていた。（炉址）炉を２個検出。F_1は中央西壁寄りに位置し、長径130×短径99×深さ

6cmの地床炉。F_2は南隅付近に位置し、長径81×短径40cmの地床炉。(柱穴) 2個検出。規模は、P_1・長径26×短径25×深さ14cm、P_2・長径81×短径40×深さ29cm。なお、P_2は入り口ピットと思われる。(周溝) 壁面に沿って全周。(遺物) 総数411点が出土。赤井戸式13%、樽式系27%を占める。このうち12個体を図示。遺物分布は北西壁側に集中して分布。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、Ⅰ期に位置付けられる。

H—46号住居址 (Fig. 19・48・49・67・69、PL. 6・20・31)

(位置) メ～ヤ—30・31G (重複) W—4に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸4.49×短軸4.27m。確認面からの壁高77cm (面積) 17.6m² (方位) N—48°—E (覆土) As-B、As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入度によって、6層に細分できる。特に、1層はAs-Bが主体で、また、5層はよごれたAs-Cを高比率で含有していた。(床面) ほぼ全面にわたって堅緻面が存在。東隅に粘土が分布。(炉址) 2個検出。F_1は北寄りに位置し、長径72×短径41×深さ3cmで炉縁石を使用。F_2は南西寄りに位置し、長径86×短径39×深さ4cmの地床炉。(柱穴) 4個の主柱穴が検出された。規模は、P_1・長径32×短径24×深さ69cm、P_2・長径35×短径26×深さ68cm、P_3・長径48×短径39×深さ71cm、P_4・長径32×短径28×深さ69cmである。主柱穴と関連をみせるかのようにP_7～P_{10}が存在していた。この中で、馬蹄形状施設の在り方から、P_{10}は入り口ピットの可能性も考えられる。規模はP_7・長径23×短径22×深さ9cm、P_8・長径25×短径22×深さ7cm、P_9・長径39×短径22×深さ12cm、P_{10}・長径50×短径40×深さ29cmである。さらに、南東壁寄り中央付近にP_{11}・長径28×短径21×深さ32cmを、また、北東壁寄りにP_{12}・長径67×短径52×深さ26cmを検出できた。なお、P_{11}も入り口ピットの可能性が考えられる。

(貯蔵穴) 北西壁際にP_5・長径58×短径32×深さ39cmの横穴形貯蔵穴、北隅付近にP_6・長径61×短径56×深さ77cmのほぼ円形のものが検出された。(馬蹄形状施設) P_{10}を取り囲んで存在。(遺物) 総数487点の遺物が出土。土器の割合は赤井戸式が4%・樽式系が14%を占めていた。図示した土器は8点で、ほかに管玉・砥石がある。48の台付甕は受口状を呈する。また住居址の周囲から滑石製勾玉も出土。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、Ⅰ期に位置付けられる。

H—47号住居址 (Fig. 20・50・51・68、PL. 6・21・22・32)

(位置) ム～モ—28・29G (形状) 長方形 (規模) 長軸4.88×短軸3.80m。確認面からの壁高72cm (面積) 17.4m² (方位) N—31°—E (覆土) As-C、ロームブロック等の混入度によって、8層に細分できる。特に、5層には、よごれたAs-Cが70%含まれていた。(床面) 全面にわたって堅緻面が広がっていた。(炉址) 中央部に3個検出。F_1は北西壁寄りに位置し、長径82×短径51×深さ5cmの地床炉。F_2はほぼ中央に位置し、長径39×短径34×深さ6cmで炉縁石を使用。F_3は北東壁寄りに位置し、長径76×短径62cmの地床炉。(柱穴) 向かい合う壁の中央に斜めに掘られた主柱穴P_3・P_4を検出。規模は、P_3・長径60×短径40×深さ76cm、P_4・長径67×短径38×深さ60cm。ほかに、

南東壁際中央付近でP_5・長径22×短径13×深さ38cmの入り口ピットを検出する。(貯蔵穴) 住居東隅に楕円形のP_1・長径60×短径47×深さ47cmのものと南東壁際中央部にP_2・長径93×短径50×深さ60cmの瓢箪形のものが検出された。(馬蹄形状施設)南東壁際P_2、P_5を取り囲んで存在。(遺物) 総数1,174点の遺物が出土。土器の割合は赤井戸式7%・樽式系20%を占める。図示したものは26個体である。このほかに鉄鏃1点を図示。遺物は西壁に寄った部分からの出土が多い。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期は、Ⅰ期に位置付けられる。

H－48号住居址 (Fig. 20・51・67、PL. 7・22・31)

(位置) ミ・ム－28・29G (形状) 正方形 (規模) 長軸3.38×短軸3.38m。確認面からの壁高9cm (面積) 10.3m² (方位) N－2°－W (覆土) As-C、Hr-FP、ローム土の混入度によって1層を2つに細分化する。(床面) Ⅲ層面構築のため検出困難であったが、部分的に貼床面検出する。(炉址)住居西壁寄りに位置し、長径75×短径39cmの規模を有する地床炉。(貯蔵穴)北西隅に長径69×短径53×深さ53cmのものを検出する。(遺物) 総数367点の遺物が出土。土器の割合は、赤井戸式11%・樽式系14%である。図示した遺物は赤井戸式の甕1個体である。ほかに手捏土器を図示。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期は、Ⅰ期に位置付けられる。

H－49号住居址 (Fig. 21・22・51～53・67～69・72、PL. 7・8・22・23・31・32)

(位置) フ～ホ－30～33G (形状) 正方形 (規模) 長軸9.50×短軸8.27m。確認面からの壁高117cm (面積) 69.6m² (方位) N－34°－W (覆土) 3層に大別できる。1層はAs-B主体で、As-Bの純層が多量に存在していた。2層、3層は、As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって分けられる。なお、3層からは、粘土、焼土、炭化物が多量に出土したため焼失住居址と判断できた。(床面)全体にわたって堅緻面を検出できた。(炉址) 2個検出。F_1は北西壁寄り中央に位置し、長径100×短径75×深さ8cmの地床炉。F_2は南東壁寄りほぼ中央に位置し、長径88×短径84×深さ8cmの地床炉。(柱穴) 柱受け粘土貼りの主柱穴を4個検出。各主柱穴の規模は、P_1・長径36×短径29×深さ95cm、P_2・長径42×短径36×深さ92cm、P_3・長径39×短径34×深さ81cm、P_4・長径37×短径37×深さ70cmである。また、南西壁と北東壁とにそれぞれ3個ずつ計6個の壁柱穴を検出。各壁柱穴の規模は、P_6・長径37×短径30×深さ33cm、P_7・長径35×短径26×深さ34cm、P_8・長径33×短径24×深さ44cm、P_9・長径30×短径24×深さ50cm、P_{10}・長径37×短径28×深さ50cm、P_{11}・長径28×短径27×深さ49cmである。ほかに、P_{12}・長径63×短径43×深さ52cmの入り口ピットが、南東壁際中央に検出された。(貯蔵穴) 南東壁際中央P_{12}の南西にP_5・長径107×短径78×深さ46cmのものが検出された。(周溝)南西壁際の一部を除いて、ほぼ壁面に沿って巡らされている。(馬蹄形状施設) 南東壁際、P_5・P_{12}の周りにある。(階段状施設) 北西壁中央に間口2.45m・奥行き1.12mの住居外へ掘りこんだ「階段状施設」が存在した。3段の階段状になっており、下から1段め・間口157×奥行き26×高さ26cm、2段め・間口160×奥行き12×高さ34cm、3段め・間口157×

奥行き44×高さ36cmである。（遺物）総数7,245の遺物が出土。覆土上部から多くの土器片が出土しており、平安時代の土師質土器（77）・古墳時代後期の椀（80）が出土している。土器の割合は赤井戸式0.6％・樽式系1.9％と少なくそのほかの土器が主体を占める。図示した土器は33個体である。このうち95～97は特殊器台であり、98は外来系の壺である。このほかに、算盤玉状土製品・匙形土製品・手捏土器３個体・鉄器３点・土製円盤・凹石・磨石が出土。他の住居址との遺物の接合関係は、98がＨ―39・100がＨ―38を有し、Ｈ―50の124との関係も有す。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期は、III期に位置付けられる。

Ｈ―50号住居址（Fig. 23・53～55・68・72、ＰＬ. ８・23・24・32）

（位置）ム・メ―26・27Ｇ（形状）正方形（規模）長軸3.77×短軸3.43m。確認面からの壁高55cm（面積）11.7m²（方位）Ｎ―82°―Ｅ（覆土）As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって、４層に大別できる。２b層によごれたAs-Cが多量に入る。（床面）貼床で施され、堅緻面が全面にわたって分布。（炉址）東壁寄り中央に長径73×短径67×深さ５cmの地床炉。（貯蔵穴）２個検出。P_1は南西隅に位置し、長径47×短径35×深さ41cm。P_2は北東隅に位置し、長径45×短径36×深さ44cm。（周溝）南東部に存在。（遺物）総数268点の遺物が出土。このうち図示したものは、18個体にのぼる。ほかに、鉄器１点を図示。113・117は東海系の高杯。118は片口甕・124は東関東系の甕・122は赤井戸式の甕と考えられる。124はＨ―49と接合関係を有する。土器の割合は、赤井戸式10％・樽式系20％を占める。（備考）出土遺物から、住居址の所産時期はＩ期に位置付けられる。

Ｈ―51号住居址（Fig. 23・56、ＰＬ. ８・25）

（位置）ヒ～ヘ―33～35Ｇ（形状）正方形（規模）長軸6.28×短軸6.12m。確認面からの壁高16cm（面積）36.7m²（方位）Ｎ―68°―Ｅ（覆土）２層に大別できる。１層はAs-C、Hr-FP等を含む粗砂層で、２層はローム土主体の細砂層である。（床面）ソフトローム面で構築されていたため確認が困難であったが、貼床面が検出できた。炉址より南に堅緻面が広がっていた。（炉址）３個検出。F_1は住居中央やや北壁寄りに位置し、長径43×短径31cmの地床炉。F_2は住居中央やや西壁寄りに位置し、長径98×短径60cmの地床炉。F_3は東隅寄りに位置し、長径42×短径33cmの地床炉。（柱穴）４個の主柱穴を検出する。規模は、P_1・長径44×短径42×深さ50cm、P_2・長径47×短径42×深さ51cm、P_3・長径61×短径51×深さ60cm、P_4・長径41×短径39×深さ57cmである。（貯蔵穴）東壁際北東隅寄りに位置し、長径91×短径83×深さ40cmの規模。（遺物）総数415点の遺物が出土。土器の割合は、赤井戸式や樽式系にくらべＳ字台甕が多い割合を示す。図示した土器は、５個体である。128は台付壺である。（備考）出土遺物から、住居址の所産時期はIII期に位置付けられる。

H－52号住居址（Fig. 24・56、ＰＬ. 8・25）

（位置）ネ・ノ－33・34Ｇ（形状）正方形（規模）長軸4.22×短軸3.83m。確認面からの壁高13cm（面積）14.9m²（方位）Ｎ－71°－Ｅ（覆土）As-Cの混入率の違いによって２層に大別できる。（床面）ソフトローム面に構築されていたため確認が困難であったが、炉址周辺に堅緻面を確認できた。（炉址）３個検出。F_1は北寄りに位置し、長径76×短径61cmの地床炉。F_2は西寄りに位置し、長径70×短径53cmの地床炉。F_3はやや南寄りに位置し、長径63×短径48cmの地床炉。（遺物）総数69点の遺物が出土。このうち図示したものは１個体である。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H－53号住居址（Fig. 24・56・57・67・68、ＰＬ. 8・25・31・32）

（位置）ネ～ハ－31～33Ｇ（重複）Ｘ－１に切られる。（形状）正方形（規模）長軸6.04×短軸5.33m。確認面からの壁高69cm（面積）28.9m²（方位）Ｎ－66°－Ｅ（覆土）As-C、Hr-FP等の混入率の違いによって、５層に大別できた。（床面）西壁に沿って高まりを検出。主柱穴に囲まれた部分に堅緻面が存在。（炉址）住居中央やや北西壁寄りで、長径57×短径38×深さ６cmの地床炉を検出。（柱穴）４個の主柱穴を検出する。各主柱穴の規模は、P_1・長径46×短径43×深さ74cm、P_2・長径54×短径47×深さ66cm、P_3・長径48×短径42×深さ48cm、P_4・長径54×短径40×深さ70cmである。（貯蔵穴）P_5・長径67×短径60×深さ45cmが、東隅付近に検出された。また、周囲はテラスを持つ。（周溝）北壁中心にやや幅広の周溝が存在。（遺物）総数619点の遺物が出土。このうち図示したものは12個体である。136～138は棒状浮文を持つ壺、142は小形丸底の坩、143は小形の横刷毛を持つＳ字台甕である。このほか、鉄器・手捏土器３個体である。土器の割合は、赤井戸式0.7％・樽式系6.6％を占め、Ｓ字台甕が３％を占める。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H－54号住居址（Fig. 25・57、ＰＬ. 9・26）

（位置）ノ・ハ－29・30Ｇ（重複）Ｘ－１に切られ、Ｈ－56を切る。（形状）正方形（規模）長軸4.25×短軸3.56m。確認面からの壁高30cm（面積）14.1m²（方位）Ｎ－30°－Ｗ（覆土）As-B、As-C、Hr-FP等の混入率の違いによって、３層に大別できる。特に、１層は、As-Bを50％含む。（床面）住居南側、東西方向にＸ－１号地割れが走り、床面に亀裂を生じている。中央部に堅緻面が存在。（炉址）北西隅で、長径56×短径37×深さ４cmの地床炉を検出。（貯蔵穴）２個検出。P_1は北東隅に位置し、長径68×短径66×深さ27cm、P_2は東南隅に位置し、長径67×短径54×深さ19cmである。（遺物）総数249点の遺物が出土。このうち図示したのは５点である。土器の構成はＳ字状口縁台付甕が49％と主体を占めていた。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はIII期に位置付けられる。

H－55号住居址　精査の結果、遺構ではなくなったため欠番扱い。

H－56号住居址（Fig. 25・58、PL. 9・26）

（位置）ハ・ヒ－29・31G（重複）H－54に切られる。（形状）正方形（規模）長軸5.17×短軸4.88m。確認面からの壁高11cm（面積）推定24.5m²（方位）N－56°－E（覆土）遺構構築面が極めて浅かったため、覆土はほとんど存在しなかった。しかし、As-C、Hr-FPの混入率の違いによって、3層に細分できた。（床面）炉址周辺に堅緻面が存在した。（炉址）住居中央やや東寄りに、長径136×短径83の地床炉を検出する。（遺物）総数25点と遺物の数は少なかった。このうち図示できたのは、4点である。151は東海系の高杯脚部、152は樽式系の壺、153は欠山式高杯脚部に類似した器台、154は内面頸部に横刷毛調整がなされ、外面に格子目に刷毛が入るS字状口縁台付甕である。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H－57号住居址（Fig. 26・58・67、PL. 9・26・31）

（位置）へ～マ－26・28G（形状）正方形（規模）長軸6.04×短軸5.66m。確認面からの壁高30cm（面積）36.7m²（方位）N－56°－E（覆土）As-C等の混入率の違いによって4層に大別できる。特に、2層はよごれたAs-Cを50～70％含む。（床面）全体にわたって堅緻面が確認された。（炉址）3個検出。F_1は西寄りに位置し、長径103×短径94×深さ7cmの地床炉。F_2は東寄りに位置し、長径92×短径64cmの地床炉。F_3はF_2の西側にあり、長径53×短径53cmの地床炉。（柱穴）6個検出。P_2は東隅にあり、長径32×短径29×深さ42cm、P_3はP_1の北東側に位置し、長径37×短径27×深さ23cm、P_4はP_1の北側に位置し、長径37×短径27×深さ23cm、P_5は南西壁際にあり、長径33×短径26×深さ10cm、P_6は北隅にあり、長径47×短径36×深さ24cm、P_7は炉址F_2の下にあり、長径33×短径28×深さ36cmである。（貯蔵穴）P_1は南隅にあり、長径66×短径60×深さ47cmである。（周溝）全周。（遺物）総数209点の遺物が出土。このうち図示したものは、3点である。土器の割合は、樽式系が30％と高比率を占める。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はI期に位置付けられる。

H－58号住居址（Fig. 26、PL. 9）

（位置）タ－16・17G（形状）正方形（規模）長軸2.87×短軸2.58m。確認面からの壁高14cm（面積）6.8m²（方位）N－83°－E（覆土）2層に大別でき、1層がAs-C混じりで、2層はローム土を主体とする。（床面）ソフトローム面で構築されていたため床面の認定が困難であった。また、炉址周辺にわずかな堅緻面が検出できた。（炉址）住居中央に位置し、長径39×短径30の地床炉。（遺物）総数13点と遺物はすくなかった。（備考）古墳時代前期の所産。細かな時期判定は困難。

H－59号住居址（Fig. 27・58・67・68、PL. 9・10・26・31・32）

（位置）ム～モ－34～36G（重複）W－4に切られる。（形状）長方形（規模）長軸6.80×短軸5.18m。確認面からの壁高87cm（面積）32.1m²（方位）N－50°－E（覆土）As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって、10層に大別できる。特に、9層にはよごれたAs-Cが50％以上入る。（床面）全面にわたって極めて堅緻な床面が検出できた。（炉址）3個検出。F_1は住居のほぼ中央に位置し、長径68×短径38×深さ6cmの地床炉。F_2は南西壁寄り中央に位置し、長径101×短径52×深さ6cmで土器片を使用。F_3は北東壁寄り中央に位置し、長径33×短径19cm。（柱穴）4個の主柱穴を検出する。規模は、P_1・長径30×短径28×深さ78cm、P_2・長径31×短径31×深さ81cm、P_3・長径34×短径32×深さ74cm、P_4・長径39×短径33×深さ83cmである。ほかに、P_7・長径31×短径19×深さ33cmが南隅付近で、P_8・長径39×短径34×深さ30cmが北隅際にあり、入り口ピットと考えられるP_{10}・長径44×短径33×深さ33cmが南東壁際ほぼ中央に検出された。（貯蔵穴）P_5・P_9は北東壁に2個まとまって検出された。P_5は横穴形貯蔵穴である。規模は長径66×短径60×深さ52cm。P_9は円形で、長径63×短径63×深さ135cmである。P_9の覆土に多量のロームブロックが堆積していたことから、P_9→P_5という変遷がとらえられた。ほかに、P_6・長径65×短径59×深さ30cmが南東壁に存在。（周溝）ほぼ全周。（馬蹄形状施設）南東壁際のP_6・P_{10}に沿って存在。（ベッド状遺構）北隅と東隅に向かいあって2基が、ほぼ長軸に線対象の位置で検出。2基とも長方形をしており、北は幅2.4×長1.0×高6cm、東は幅2.1×長0.8×高8cmである。（遺物）総数1,089点の遺物が出土。このうち図示したものは、8個体である。ほかに、鉄鏃・紡錘車・手捏土器2個体を図示。土器の割合は赤井戸式が5％・樽式系が1％を占める。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はⅠ期に位置付けられる。

H－60号住居址　確認調査を実施。メ・モ－39・41Gに存在。H－88号住居址に切られる。

H－61号住居址（Fig. 28・59・67・68・70、PL. 10・31・32）

（位置）ミ～メ－37～39G（重複）W－4・9、H－83、D－11に切られる。（形状）正方形（規模）長軸6.82×短軸推定5.93m。確認面からの壁高44cm（面積）推定40.9m²（方位）N－16°－W（覆土）As-B、As-C、ロームブロック等の混入率の違いによって5層に大別できる。1層はAs-Bを20～30％含む。3層はよごれたAs-Cが30～40％入る。（床面）ほぼ全面にわたって堅緻面が確認された。（炉址）地床炉を7個検出。F_1は北壁に位置し、長径120×短径86×深さ8cmの地床炉。F_2は住居中央に位置し、長径76×短径62×深さ6cmの地床炉。F_3は東壁寄りに位置し、長径80×短径59cmの地床炉。F_4は西壁寄りに位置し、長径132×短径92×深さ7cmの地床炉。F_5は住居中央やや南壁寄りに位置し、長径132×短径92cmの地床炉。F_6は住居中央に位置し、長径15×短径11cmの地床炉。F_7は北西隅近くに位置し、長径38×短径23cmの地床炉。（柱穴）2個検出。P_1は住居のほぼ中央にあり、長径65×短径59×深さ90cm。P_2は南壁中央にあり、長径49×短径47×深

さ64cm。入り口ピットか。（周溝）部分的に存在。（遺物）総数1,197点の遺物が出土。このうち図示したものは、3点である。ほかに、鉄器・紡錘車・砥石がある。遺物の割合は、赤井戸式4％、樽式系18％である。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はⅠ期に位置付けられる。

H―62号住居址（Fig. 29・59・67、PL. 10・27・31）

（位置）へ～マ―38～40G（重複）W―4・8・9に切られる。（形状）正方形（規模）長軸推定6.74×短軸5.80m。確認面からの壁高30cm（面積）推定37.7m²（方位）N―75°―E（覆土）As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって4層に大別できた。（床面）ほぼ平坦な床で中央部に堅緻面が検出できた。（炉址）4個検出。F_1は最も北壁寄りに位置し、長径127×短径115×深さ6cmの地床炉。F_2は東壁寄りに位置し、長径103×短径55cmの地床炉。F_3はF_2の南東にあり、長径70×短径49cmの地床炉。F_4は西壁寄りにあり、長径57×短径23cmの地床炉。（柱穴）9個検出された。4個の主柱穴の規模は、P_1・長径27×短径22×深さ72cm、P_2・長径45×短径37×深さ75cm、P_3・長径32×短径30×深さ72cm、P_4・長径32×短径32×深さ83cmである。ほかに、P_6・長径96×短径72×深さ34cm、P_7・長径62×短径57×深さ37cm、P_8・長径51×短径47×深さ17cm、P_9・長径68×短径53×深さ55cm、P_{10}・長径72×短径54×深さ22cmである。なお、P_9は入り口ピットと思われる。（貯蔵穴）南壁際中央にP_5・長径72×短径54×深さ22cmが検出。（馬蹄形状施設）南壁中央付近P_5・P_9の北側にみられる。（遺物）総数1,419点の遺物が出土。このうち図示したのは、12個体である。175は南関東系の壺で胴下半部に赤色塗彩が施される。ほかに、紡錘車が1点出土。土器の割合は赤井戸式・樽式系・S字状口縁台付甕の破片がそれぞれ3％程度の比率で構成される。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はⅡ期に位置付けられる。

H―63号住居址（Fig. 30・60・70、PL. 11・27・31）

（位置）フ・へ―35～37G（重複）T―2を切る。（形状）正方形（規模）長軸5.43×短軸5.37m。確認面からの壁高43cm。（面積）27.9m²（方位）N-42°-E（覆土）As-C、炭化物、ローム土等の混入率の違いによって3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦な床で中央部に堅緻面が存在。（炉址）中央北壁寄りに位置し、長径71×短径43×深さ8cmで炉縁石を使用。（柱穴）4個の主柱穴を検出する。規模は、P_1・長径59×短径50×深さ73cm、P_2・長径47×短径40×深さ66cm、P_3・長径39×短径35×深さ67cm、P_4・長径38×短径35×深さ50cmである。なお、P_1・P_3・P_4の底部に柱受け用の粘土が検出された。（貯蔵穴）P_5・長径60×短径53×深さ30cmが南隅で検出された。（類ベッド状遺構）北西壁側と南東壁側とにほぼ長軸を線対象とする位置にみられる。（遺物）総数518点の遺物が出土。このうち図示した土器は2個体である。このうち320はH―83の遺物と接合する。ほかに砥石が1点出土。土器の割合は赤井戸式・樽式系・S字状口縁台付甕が極めて少ない。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はⅣ期に位置付けられる。

H－64号住居址（Fig. 31・60・61・68・71、PL. 11・27・28・31）

（位置）ハ～フ－36～38G（重複）H－84・85・89を切る。（形状）正方形（規模）長軸7.20×短軸6.47m。確認面からの壁高66m（面積）43.1m²（方位）N－68°－W（覆土）As-B、As-C、Hr-FP、ロームブロック等の混入率の違いによって4層に大別できる。1層はAs-Bを50%程度含む。（床面）床面は堅緻面の分布が少ないため、検出が困難であった。また、東西方向に4条の地割れが走り、床面を壊している。（炉址）北東壁寄り中央に位置し、長径99×短径66×深さ10cmの壺の上半部を炉体土器として使用。（柱穴）柱受け用の粘土が貼ってある主柱穴を4個検出。規模は、P_1・長径44×短径38×深さ77cm、P_2・長径49×短径43×深さ89cm、P_3・長径45×短径36×深さ91cm、P_4・長径49×短径43×深さ77cmである。（貯蔵穴）P_5・長径66×短径61×深さ47cmが南壁際に検出。（周溝）北・西・南の3壁に沿ってみられた。（遺物）総数518点の遺物が出土。このうち図示したのは12個体である。187は大形の壺である。土器破片の割合はS字状口縁台付甕が高比率を占める。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はIV期に位置付けられる。

H－65号住居址（Fig. 29・61・62・68、PL. 11・28・29・31）

（位置）ハ・ヒ－35・36G（重複）H－82を切る。（形状）長方形（規模）長軸4.02×短軸3.21m。確認面からの壁高34cm（面積）12.3m²（方位）N－74°－E（覆土）As-C、Hr-FP、ローム土等の混入率の違いによって2層に大別できる。（床面）構築面が浅かったため床の検出は困難であった。（炉址）2個検出。F_1は北壁寄り中央に位置し、長径45×短径31cmの地床炉。F_2は住居中央やや東壁寄りに位置し、長径22×短径21cmの地床炉。（遺物）総数241点の遺物が出土。このうち図示したのは12個体である。ほかに小形の砥石が出土。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はIV期に位置付けられる。

H－66号住居址（Fig. 32・63・68・70・71、PL. 12・29・32）

（位置）ネ・ノ－35～37G（重複）H－85・86を切る。（形状）正方形（規模）長軸5.62×短軸5.45m。確認面からの壁高68cm（面積）28.2m²（方位）N－64°－E（覆土）As-B、Hr-FP、As-C、ロームブロック等の混入率の違いによって4層に大別できる。1層はAs-Bを40%含む。また、炭化材の出土もみられたことから焼失住居址といえる。（床面）ほぼ平坦な床で、堅緻面が主柱穴を囲んだ部分に存在。（炉址）P_1とP_4を結んだ線上に位置し、長径46×短径38cmの地床炉。（柱穴）4個の主柱穴が存在。規模は、P_1・長径38×短径34×深さ59cm、P_2・長径42×短径32×深さ50cm、P_3・長径46×短径36×深さ56cm、P_4・長径47×短径46×深さ54cmである。なお、P_1・P_3・P_4の底に柱受け用の粘土を検出する。（貯蔵穴）ほぼ円形を呈するP_5が東南隅に存在する。長径60×短径49×深さ50cm。（周溝）東壁を除く3壁に巡らされている。（馬蹄形状施設）P_5を取り囲む形で東隅にT字状で検出された。高さ11cmと他の馬蹄形状施設に比べ際立って高い。（遺物）総数584点の遺物が出土。このうち図化したものは、3個体である。ほかに鉄器・敲石が1点ずつ出土して

いる。土器の割合は、S字台甕が6.4%を占めている。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はIV期に位置付けられる。

H—67号住居址 確認調査を実施。ト～ニ—31～33Gに存在。

H—68号住居址 確認調査を実施。ナ・ニ—34～36Gに存在。

H—69号住居址 確認調査を実施。ヌ・ネ—39・40Gに存在。H—87号住居址に切られる。

H—70号住居址 確認調査を実施。ナ—40Gに住居西隅を確認する。

H—71号住居址 確認調査を実施。ツ・テ—38・39Gに存在。

H—72号住居址 確認調査を実施。チ・ツ—38・39Gに存在。

H—73号住居址 確認調査を実施。ソ～チ—37～39Gに存在。

H—74号住居址 確認調査を実施。ス～ソ—37～40Gに存在。

H—75号住居址 確認調査を実施。シ～セ—36～38Gに存在。

H—76号住居址 確認調査を実施。ケ・コ—39・40Gに存在。

H—77号住居址 確認調査を実施。コ・サ—36・37Gに存在。

H—78号住居址 確認調査を実施。ク・ケ—34・35Gに存在。東壁に竈を持つ。

H—79号住居址 確認調査を実施。コ・サ—33・34Gに存在。

H—80号住居址 確認調査を実施。コ・サ—31・32Gに存在。

H—81号住居址 確認調査を実施。ス・セ—30～32Gに存在。

H—82号住居址 (Fig. 33・63・64・67～69、PL. 12・29～32)

(位置) ハ・ヒ—34・35G (重複) H—65に切られる。(形状) 正方形 (規模) 長軸5.04×短軸4.25m。確認面からの壁高80cm (面積) 20.4m² (方位) N—61°—E (覆土) As-B、As-C、ローム土の混入率の違いによって5層に大別できる。特に、5層にはよごれたAs-Cが鍵層として存在する。(床面)全体にわたって堅緻面が広がっていた。東西方向に地震による地割れが4条走り、床面に段差が生じている。(炉址)住居の中軸線のやや東寄りに、長径61cm×短径42cmで2個の炉縁石を用いた深さ6cmの炉。(柱穴)西壁と東壁の中央にそれぞれ1個ずつ斜めに掘られた柱穴を検出する。柱穴の規模は、P_1・長径32×短径28×深さ63cm、P_2・長径32×短径26×深さ67cmである。ほかに、入り口ピットと思われるP_5・長径41×短径24×深さ19cmが南隅近くに存在。(貯蔵穴) 2個検出。P_3は横穴形貯蔵穴である。東隅に位置し、長径98×短径79×深さ31cmである。P_4は南西コーナーに位置し、長径68×短径40×深さ36cm。(周溝) 全周。(馬蹄形状施設) P_5に沿って存在する。(遺物) 総数1,204点の遺物が出土。このうち図化したものは20個体である。このほかに鉄器・敲石・手捏土器・勾玉が出土している。土器の割合は赤井戸式3.6%・樽式系3.4%・赤色塗彩3.7%・S字台甕3.1%と多岐にわたっている。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H—83号住居址（Fig. 34・65・69・70、PL. 12・30・31）

（位置）ミ・ム—37G（重複）H—61を切る。（形状）正方形（規模）長軸2.96×短軸2.80m。確認面からの壁高30cm（面積）推定8.2m²（方位）N—16°—W（覆土）As-B・As-C・Hr-FP等の混入率の違いによって、3層に大別できる。（床面）構築面が浅かったため、床面は軟質であり確認が困難であった。（炉址）住居中央の北寄りで、長径42×短径32cmの地床炉。（貯蔵穴）P_1が東壁際に検出された。規模は長径42×短径31×深さ53cmである。（遺物）総数166点の遺物が出土。H—61と重複関係をもつため遺物の流入がみられた。図示した遺物は231の高杯1個体である。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H—84号住居址（Fig. 35・65・67・69、PL. 12・30・31）

（位置）ハ～フ—37～39G（重複）H—64・89に切られ、H—91を切る。（形状）正方形（規模）長軸6.29×短軸5.81m。確認面からの壁高81cm（面積）33.7m²（方位）N—61°—E（覆土）As-C、ロームブロック、黒色土等の混入率の違いによって6層に分かれる。特に、5層はAs-Cが鍵層として入る。（床面）ほぼ東西方向に多数の地割れが存在するため、床面に亀裂と段差が生じている。しかし、床面はほぼ水平に造られ炉址を中心に堅緻面が存在した。（炉址）2個検出。F_1は北壁寄りの中央に位置し、長径73×短径44×深さ7cmで炉縁石を使用。F_2は住居の東寄りに位置し、長径31×短径22cmの地床炉。（柱穴）4個の主柱穴を検出する。規模は、P_1・長径62×短径57×深さ80cm、P_2・長径74×短径65×深さ79cm、P_3・長径49×短径43×深さ83cm、P_4・長径60×短径43×深さ80cmである。（貯蔵穴）2個検出。P_5・長径92×短径66×深さ70cmを南東隅にあり、P_6は隣接して、長径74×短径58×深さ37cmの規模を有する。ほかに、P_7が長径30×短径27×深さ51cmの規模で北側の主柱穴に存在する。（周溝）全周（遺物）総数659点の遺物が出土。このうち図示したものは8個体である。ほかに土玉・砥石2点を図示。土器の割合は赤井戸式2.9%・樽式系3.6%・S字台甕2.1%で構成される。（備考）出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H—85号住居址（Fig. 36・65～67・72、PL. 12・30・31）

（位置）ネ～ハ—35～27G（重複）H—64・66に切られる。（形状）正方形（規模）長軸7.10×短軸6.26m。確認面からの壁高42cm（面積）推定42.0m²（方位）N—67°—E（覆土）As-C、Hr-FP、ロームブロック、黒色土等の混入率の違いによって5層に大別できる。3層によごれたAs-Cが入る。（床面）全面的に堅緻面が広がっていた。（柱穴）底に柱受け用の粘土が貼ってある主柱穴を4個検出する。規模は、P_1・長径67×短径52×深さ75cm、P_2・長径93×短径82×深さ61cm、P_3・長径64×短径61×深さ61cm、P_4・長径120×短径100×深さ63cmである。ほかに、P_6・長径90×短径48×深さ58cm。P_7・長径89×短径63×深さ51cm。P_8・長径52×短径46×深さ21cm。なお、P_6は入り口ピットと思われる。（貯蔵穴）馬蹄形状施設に囲まれたP_5は、長径60×短径50×深さ58cmの規模を有し、南壁際に存在する。（周溝）重複関係で不詳な部分も多いが、全周するものと考えら

れる。(馬蹄形状施設) 南東壁際でP_5の周りにみられる。(遺物) 総数324点の遺物が出土。このうち図示したものは10個体である。このほかに、手捏土器が1個体出土。赤井戸式や樽式系をはじめS字台甕が同比率で構成される。(備考)出土遺物から本住居址の所産時期はIII期に位置付けられる。

H—86号住居址 (Fig. 37・66、PL. 13・30)

(位置) ニ・ネ—35・37G (重複) H—66・85に切られる。(形状) 2段の掘り込みを持つ正方形 (規模) 長軸7.67×短軸6.62m。確認面からの壁高73cm (面積) 推定49.5m² (方位) N—74°—E (覆土) As-C混入の黒色土主体の土層とロームブロックを多く含む土層とが交互に混じり合っている。(床面)炉址は検出されず、また床面に凹凸もみられ、構築途中で廃棄された住居と思われる。(柱穴) 4個の大形の掘り方を持つ主柱穴を検出する。規模は、P_1・長径107×短径95×深さ87cm、P_2・長径63×短径57×深さ83cm、P_3・長径73×短径61×深さ89cm、P_4・長径85×短径73×深さ95cmである。(遺物) 総数270点の遺物が出土。このうち図示したものは3個体である。土器片の構成は、赤井戸式6.1%・樽式系4.5%と比率が高い。(備考) 出土遺物から本住居址の所産時期はII期に位置付けられる。

H—87号住居址 確認調査。ニ～ネ—38・39Gに存在。H—69を切り、W—8に切られる。

H—88号住居址 確認調査。メ～ヤ—39～41Gに存在。H—60を切る。北東壁に竈。

H—89号住居址 (Fig. 34、PL. 13)

(位置) ハ・ヒ—37・38G (重複) H—64に切られ、H—84を切る。(形状) 長方形 (規模) 長軸推定4.01m×短軸3.13m。確認面からの壁高54cm (面積) 現存12.4m² (方位) N—77°—E (覆土) As-C、Hr-FP、黒色土等の混入率の違いで、2層に大別できる。(床面)H—64・84の重複によって、南東部半分の床面のみしか検出できなかったが、黒色土による貼床が施されていた。(遺物) 総数19点の遺物が出土。図化できるものはなかった。(備考) 古墳時代前期の所産。

H—90号住居址 (Fig. 38・66・68、PL. 13・30・32)

(位置) ホ・マ—35～37G (形状) 長方形 (規模) 長軸5.77×短軸4.47m。確認面からの壁高26cm (面積) 18.6m² (方位) N—75°—E (覆土) As-C、ローム土等の混入率の違いで、3層に分けられる。(床面) 平坦な床である。南側に堅緻面が存在。(炉址) 3個検出。F_1はほぼ中央に位置し、長径109×短径104×深さ12cmの地床炉。F_2はやや西寄りに位置し、長径75×短径52×深さ3cmの地床炉。F_3はF_2の北に位置し、長径43×短径40cmの地床炉。(柱穴) 3個検出。規模は、P_1は南壁ほぼ中央に位置し、長径39×短径35×深さ52cm、P_2はP_1の東に位置し、長径45×短径35×深さ51cm、P_4は東壁際にあり、長径35×短径31×深さ22cmを測る。P_1・P_2は入り口ピットか。(貯蔵穴)

P_3は北東隅に位置し、長径54×短径39×深さ19cmである。（馬蹄形状施設）南壁近くのP_1・P_2の北側に２カ所に分かれて存在。（遺物）総数139点の遺物が出土。このうち図化したものは赤井戸式の甕１点である。ほかに鉄鏃が１点出土。土器片は赤井戸式が12％・樽式系が15％と高比率を占める。（備考）出土遺物からＩ期の所産と考えられる。

Ｈ―91号住居址（Fig. 38、ＰＬ. 13）

（位置）ハ・ヒ―38・39Ｇ（重複）Ｈ―84・Ｗ―８に切られる。（形状）方形（規模）長軸現存2.52×短軸現存1.75m。確認面からの壁高18cm（面積）現存7.5m²（方位）Ｎ―32°―Ｅ（覆土）As-CやHr-FPが混じった層で構成される。（床面）Ｈ―84・Ｗ―８に切られており、東隅付近のみしか検出できず。（炉址）東隅付近で長径45×短径20cmの規模の地床炉。（遺物）総数69点の遺物が出土。図化できるものはなかった。（備　考）古墳時代前期の所産と考えられるが、遺構・遺物について情報がすくないため詳細は不明。

2　竪穴状遺構

ＪＴ―１号竪穴状遺構（Fig. 38・71、ＰＬ. 14・32）

（位置）Ａ区、チ・ツ―16Ｇ（重複）Ｈ―35に切られる。（形状）不整円形。（規模）長軸2.78×短軸2.72m。確認面からの壁高142cm（方位）Ｎ―45°―Ｅ（覆土）大きく２層に分けられ、ローム土層が主体を占める。（底面）ほぼ水平である。（遺物）縄文土器５片・石器１点が出土。これらは、中期・加曽利Ｅ４式土器、後期・称名寺１式土器である。（備考）出土遺物から、遺構の所産時期は後期称名寺期と考えられる。

Ｔ―１号竪穴状遺構（Fig. 40・68、ＰＬ. 13・31）

（位置）Ｅ区、ノ―38Ｇ（重複）Ｗ―８に切られる。（形状）正方形ないし長方形を呈すると考えられる。（規模）南北長2.87×東西現存長2.24m。確認面からの壁高29cm（方位）Ｎ―25°―Ｗ（覆土）大きく２層に分けられ、１a層が「Ｃ混じり黒土層」である。（底面）中央部が径２×1.5mの範囲でくぼんでいる。床面の施工はない。（遺物）土師器が87点出土。（備考）出土遺物から、古墳時代前期の所産である。

Ｔ―２号竪穴状遺構（Fig. 40、ＰＬ. 13）

（位置）Ｅ区、ヒ・フ―35・36Ｇ（重複）Ｈ―63に切られる。（形状）正方形ないし長方形を呈すると考えられる。（規模）南北現存長2.19×東西長2.46m。確認面からの壁高10cm（方位）Ｎ―59°―Ｅ（覆土）大きく２層に分けられ、ローム混じりの土層である。（底面）ほぼ水平で、床面の施工はない。（遺物）土師器が12点出土。（備考）出土遺物から古墳時代前期の所産。

Ｔ―３号竪穴状遺構（Fig. 40・68、ＰＬ. 13・30）

（位置）Ｄ区、ヒ―32・33Ｇ（形状）正方形を呈する。（規模）長軸2.35×短軸2.13m。確認面からの壁高28cm（方位）Ｎ―41°―Ｗ（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じり黒土層」で

ある。（底面）ほぼ水平である。床面の施工はない。（施設）東隅に不整形のピットが存在。長軸68×短軸60×深さ20cmの規模を有する。（遺物）土師器46点と鉄器１点が出土。このうち鉄器を図示した。（備考）出土遺物から、遺構の所産時期は古墳時代前期である。

3　遺物集中区

Ｚ－１号遺物集中区（Fig. 39・66・68、ＰＬ．14）

（位置）Ｃ区、ス・セ―24・25Ｇ（形状）施設は認められないため不明。（規模）遺物分布範囲は南北軸3.0×東西軸2.0m。（覆土）１層から遺物の多くが出土した。１層は「Ｃ混じり黒土層」である。（遺物）土師器144点が出土。このうち２個体の土器を図示。（備考）出土遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。旧名称、Ｈ―41号住居址。

4　井　　戸

Ｉ－１号井戸（Fig. 39、ＰＬ．14）

（位置）Ｃ区、カ・キ―24・25Ｇ（重複）Ｈ―39を切る。（形状）長径1.66×短径1.50×深さ2.09mで円形。（覆土）大きく３層に分けられ、１層・As-Bを80％以上含む粗砂層である。（遺物）土器総数47点と礫が多数出土した。図示できなかったが、土師器椀・杯、須恵器破片である。（備考）出土遺物から、本遺構の所産時期は、Ｖ期に位置付けられる。

5　土　　坑

Ｄ－１号土坑（Fig. 40・66、ＰＬ．14）

（位置）Ｃ区、キ・ク―21・22Ｇ（形状）長径2.35×短径2.33×深さ0.37mで円形を呈する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じり黒土層」である。（遺物）総数569点の遺物が出土。土師器の多くは、未焼成もしくは焼戻しと思われる状態で検出された。出土状態は西半分にまとまって分布がみられ、帯び重なった堆積状態で出土。このうち１個体を図示。（備考）出土遺物から本遺構の所産時期は古墳時代前期である。

Ｄ－２号土坑（Fig. 40・67、ＰＬ．14・30）

（位置）Ａ区、テ・ト―17Ｇ（形状）長径0.83×短径0.74×深さ0.16mで円形を呈する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じり黒土層」である。（遺物）総数15点の遺物が出土。このうち２個体を図示。（備考）出土遺物から本遺構の所産時期は古墳時代前期である。

Ｄ－３号土坑（Fig. 40、ＰＬ．14）

（位置）Ｃ区、セ―20Ｇ（形状）長径1.27×短径1.08×深さ0.18mでほぼ円に近い形を呈する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じり黒土層」である。（備考）覆土から本遺構の所産時期は古墳時代前期と考えられる。

D－4号土坑（Fig. 40・66、ＰＬ. 14）

（位置）Ｃ区、ケ―23Ｇ（形状）長径1.43×短径1.36×深さ0.20mで円形を呈する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じり黒土層」である。（遺物）総数76点の遺物が出土したが、ほとんど同一個体に帰属する。この個体を図示。（備考）出土遺物から本遺構の所産時期は古墳時代前期である。

D－5号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 15）

（位置）Ｃ区、エ―22Ｇ（重複）Ｗ―２に切られる。（形状）長径2.14×短径1.72×深さ1.27mで楕円形を呈する。（覆土）大きく５層に分けられ、１層が「Ｃ混じり黒土層」である。（備考）縄文時代のいわゆる「陥し穴」に形態から類似するが、覆土から本遺構の所産時期は古墳時代前期と推定される。

D－6号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 15）

（位置）Ｃ区、オ―28Ｇ（形状）長径現存1.15×短径1.13×深さ0.13mで、北側が調査区域外で未確認のため楕円形を呈すると考えられる。（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じり黒土層」である。（備考）覆土から本遺構の所産時期は古墳時代前期と考えられる。

D－7号土坑（Fig. 41）

（位置）Ｅ区、ミ・ム―39Ｇ（重複）Ｗ―４を切る。（形状）長径1.51×短径1.50×深さ0.40mで楕円を切った形を呈する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層がAs-B混じりの粗砂層である。（遺物）総数２点の遺物が出土。（備考）出土遺物と覆土から本遺構の所産時期は中世以降と考えられる。

D－8号土坑　確認調査のみ実施。Ｅ区、ク―32・33Ｇに存在。

D－9号土坑　確認調査のみ実施。Ｅ区、コ―39Ｇに存在。

D－10号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 15）

（位置）Ｅ区、モ―39Ｇ（形状）長径1.88×短径1.72×深さ0.30mで楕円を切った形を呈する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層がAs-B混じりの土層である。（遺物）総数12点の遺物が出土しているが混入品。（備考）覆土から本遺構の所産時期は中世以降と考えられる。

D－11号土坑（Fig. 41・72、ＰＬ. 15）

（位置）Ｅ区、ム・メ―38Ｇ（形状）長径1.96×短径1.76×深さ0.45mでほぼ円に近い形を呈する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層がAs-B混じりの土層である。

（遺物）総数21点出土しているが混入品。常滑焼はＷ―４の混入品。（備考）覆土から中世以降の所産と考えられる。

D－12号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 15）

（位置）Ｄ区、ホ・マ―31Ｇ（形状）長径1.17×短径1.12×深さ0.20mで円形を呈する。（覆土）As-B30％程度含む。（遺物）１点出土しているが混入品。（備考）覆土から中世以降の所産。

D－13号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 15）

（位置）Ｄ区、マ－31Ｇ（形状）長径0.93×短径0.89×深さ0.18mで円形を呈する。（覆土）As-Bを30％程度含む。（遺物）３点出土しているが混入品。（備考）覆土から中世以降の所産。

D－14号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 15）

（位置）Ｄ区、ミ－31･32Ｇ（形状）長径0.86×短径0.80×深さ0.09m（床面）中心部に長径29×短径22×深さ24cmのピット状の落ち込みあり。（覆土）大きく２層に分けられ、１層にAs-Bを30％程度含む。（遺物）１点出土しているが混入品。（備考）覆土から中世以降の所産。

D－15号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 15）

（位置）Ｄ区、ミ－32Ｇ（形状）長径1.04×短径0.92×深さ0.15mでほぼ円に近い形を呈する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層がAs-Bを30％程度含む土層である。（備考）覆土から中世以降の所産と考えられる。

D－16号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 16）

（位置）Ｄ区、モ－34Ｇ（形状）長径0.97×短径0.92×覆土0.20mで円形を呈する。（覆土）As-Bを30％程度含む。（遺物）２点出土しているが混入品。（備考）覆土から中世以降の所産。

D－17号土坑（Fig. 41、ＰＬ. 16）

（位置）Ｅ区、モ－34･35Ｇ（形状）長径1.16×短径1.06×深さ0.33mで円形を呈する。（覆土）As-B70％を含む粗砂層である。（備考）覆土から中世以降の所産。

D－18号土坑　確認調査のみ実施。Ｅ区、ソ・タ－35・36Ｇに存在。

6　溝

W－１号溝（Fig. 6・44、ＰＬ. 16）

（位置）Ａ・Ｂ区、オ～セ－９～18Ｇ（形状）平成元年度調査のW－１号溝の続きで、Ａ区北東隅からＢ区の北西方向に位置し、断面は、楕円を半分に切った形をしている。幅80～90cm、深さ15cm程度で、長さ52mを発掘調査する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じりの黒土層」である。（遺物）数点の土師器が出土。（備考）出土遺物と覆土から平安時代以降の所産と考えられる。

W－２号溝（Fig. 6・44、ＰＬ. 16）

（位置）Ｃ区、エ～セ－18～22Ｇ（形状）Ｃ区南西隅からＤ－５まで北東方向に位置し、断面は、すり鉢状の形を呈する。幅80～90cm、深さ25～35cm程度で、長さ42mを発掘調査する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じりの黒土層」である。（遺物）土師器３点が出土したが他の時期の混入品。（重複）Ｄ－５を切る。（備考）出土遺物から平安時代以降の所産。

W－３号溝（Fig. 6・44、ＰＬ. 17）

（位置）Ｃ区、コ～セ－20～28Ｇ（形状）Ｃ区南東隅からW－２付近までに位置し、断面は、緩やかなＵ字形を呈する。幅80cm、深さ10cm程度で、長さ34mを発掘調査する。（覆土）大きく２層

に分けられ、１層が「Ｃ混じりの黒土層」である。（遺物）１点出土したが他の時期の混入品。（重複）Ｘ－３を切る。（備考）Ｘ－３を切ることから818年以後であり平安時代以降の所産。

Ｗ－４号溝（Fig.７・44・67、ＰＬ．17）

（位置）Ｄ・Ｅ区、フ～モ－29～40Ｇ（形状）昭和63年度調査のＷ－15号溝の続きで、Ｄ区南西隅からＥ区Ｈ－62北側までに位置し、断面は、すり鉢状の形を呈す。幅90cm、深さ30～50cm程度で、長さ74mを発掘調査する。（覆土）３層に大別でき、１層はAs-B混じりである。（遺物）大ポリ１袋の遺物が出土したが、常滑甕８片以外は他の時代の混入品。（重複）Ｗ－10と合流し、Ｈ－46・44・59・61・62、Ｗ－８を切り、Ｄ－11・７、Ｗ－９に切られる。（備考）出土遺物から14世紀代の溝と考えられる。

Ｗ－５号溝　確認調査のみ実施。Ｅ区、チ～ト－39・40Ｇに存在。

Ｗ－６号溝　確認調査のみ実施。Ｅ区、キ～コ－36～40Ｇに存在。

Ｗ－７号溝　確認調査のみ実施。Ｅ区、キ～ス－32～34Ｇに存在。

Ｗ－８号溝（Fig.７・44・67、ＰＬ．17）

（位置）Ｃ・Ｅ区、カ～ホ－29～40Ｇ。ネライン以北、30ライン以東は確認調査のみ。（形状）Ｈ－62号住居址からＣ区北東隅まで北西方向に位置し、断面は、すり鉢状で底に平坦なくぼみがある。幅110～120cm、深さ80～110cm程度で、長さ31mを発掘調査する。（覆土）大きく２層に分けられ、１層が「Ｃ混じりの黒土層」である。（遺物）殆どは住居から流入したものであるが、僅かに古墳時代後期の土器が認められた。（重複）Ｈ－62・91、Ｔ－１を切り、Ｗ－４・９に切られる。（備考）出土遺物からＶ期の所産と考えられる。

Ｗ－９号溝（Fig.７・44・67・68・72、ＰＬ．16・31）

（位置）Ｅ区、フ～モ－38～40Ｇ（形状）Ｅ区南東隅からＨ－62号住居址の北側までに位置し、断面は、底部がＵ字形を呈し、壁はＶ字状に広がる。幅210cm、深さ80cm程度で、長さ34mを発掘調査する。（覆土）３層に大別でき、１層はAs-B混じりである。（遺物）大ポリ３袋の土器が出土したが、６片の常滑焼以外は他の時代の混入品。（重複）Ｈ－61・62、Ｗ－４を切り、Ｄ－７・10・11号土坑に切られる。（備考）Ｗ－９号溝は特徴的な断面形を有する。直角方向しか調査できなかったが、おそらく50m四方の区画になるものと試掘結果から想定できる。出土した常滑焼きの大甕片はＷ－４と共有し、堀の形態から14世紀代の所産と考えられる。市内では昭和57・58年に調査した端気遺跡群の溝と形態や堀の周辺に施設を持たない点から共通点が認められ、自立農民層の館跡と推定できる。また、館址として著名な高崎市矢島館址や寺の内館址などは、付属施設の在り方から15世紀に位置付けられており、本遺構に後続するものといえる。

Ｗ－10号溝（Fig.７・44、ＰＬ．17）

（位置）Ｄ区、モ・ヤ－28Ｇ（形状）Ｄ区南東隅に位置し、断面は、Ｕ字形を呈す。幅90cm、深さ20cm程度で、長さ１ｍを発掘調査する。（覆土）Ｗ－４に類似。（重複）Ｗ－４号溝に接続する。（備考）Ｗ－４と接続をみせることから14世紀代の所産と考えられる。

7 地　割　れ

X－1号地割れ（Fig.42・43、ＰＬ.17）

（位置）Ｄ・Ｅ区（形状）昭和63年度調査のＸ－１の続きで、Ｄ区の西側からＥ区の東側までほぼ等高線の方向に沿うように位置し、Ｄ区西部に深掘りトレンチ１（ノ～ヘ—27～29Ｇ、幅60～70cm）とＥ区東部に深掘りトレンチ２（ハ～フ—39・40Ｇ、幅60～70cm）を入れた。その結果、幅５～８m、深さ１～1.5m、長さ60mの規模で、断面がＶ字形の無数の地割れが検出できた。Ⅴ・Ⅶ層から亀裂がはじまっており、軽石や火山灰が衝撃吸収層になっていることと考えられる。また、Ⅷ層が噴砂状に盛り上がっていることも観察できた。（重複）Ｈ—54・56・53・82・65・85・64・89・84・91、Ｗ－８を破壊している。（備考）昭和63年度調査のＸ－１に接続することから、弘仁９（818）年の大地震によって形成された地割れと考えられる。

X－2号地割れ（Fig.６・43、ＰＬ.18）

（位置）Ｃ区、ク～コ—27～30Ｇ（形状）Ｃ区の東側、等高線132.50mに沿うように位置し、幅1.1～1.2m、深さ1.1～1.2m、長さ13mを発掘調査する。また、Ｅ区東に２カ所、深掘りトレンチ３（ケ～シ—28～30Ｇ、幅60cm）と深堀りトレンチ４（ケ・コ—28・29Ｇ、幅150～170cm）を入れた。その結果、断面は、Ｖ字形を呈し、幅2.0m、深さ1.5m程度でⅦ層（AT層）まで達しているものや幅1.1m、深さ2.2mのところでⅧ層（暗色帯）を切り、Ｘ層まで続くものと推定される。（備考）弘仁９（818）年の大地震に際に形成された地割れと考えられる。

X－3号地割れ（Fig.６・43・71、ＰＬ.18）

（位置）Ｃ区、オ～サ—19～28Ｇ（形状）Ｃ区北西からＨ—43までほぼ等高線132.50mに沿うように位置し、幅0.6～0.7m、深さ0.8m、長さ46mを発掘調査する。また、深掘りトレンチ３（ケ～シ—28～30Ｇ、幅60cm）から、断面は不整のＵ字形を呈し、深さ1.5mでⅧ層（暗色帯）まで達していることがわかった。（重複）Ｈ—43とＷ－２を切る。（備考）弘仁９（818）年の大地震に際に形成された地割れと考えられる。

X－4号地割れ（Fig.６・43、ＰＬ.18）

（位置）Ｂ・Ｃ区、オ～カ—16～19Ｇ（形状）Ｂ・Ｃ区の北側境付近、等高線133.00mに沿うように位置し、長さ14mを発掘調査する。また、Ｂ区北東に深掘りトレンチ５（ウ～カ—17・18Ｇ、幅110～150cm）を入れた。その結果、断面はＵ字形を呈し、幅2.5m、深さ3.2mでＸ層（Hr-HP）まで達しており、0.2mの段差を有していることがわかった。（備考）弘仁９（818）年の大地震に際に形成された地割れと考えられる。

X－5号地割れ（Fig.６・43、ＰＬ.18）

（位置）Ｃ区、サ・シ—29・30Ｇ（形状）Ｃ区東側、Ｘ－３号地割れの延長上に位置し、幅1.0m、深さ0.9～1.0m、長さ５mを発掘調査する。また、深掘りトレンチ３（ケ～シ—28～30Ｇ、幅60cm）から、断面はＶ字形を呈し、深さ1.3mでⅥ層まで達していることがわかった。（備考）弘仁９（818）

年の大地震に際に形成された地割れと考えられる。

以上、地割れは南にX－1、北にX－2～5の2つのまとまりで検出された。平面的には、X－1は住居址の床面を破壊する状態で4～5条、X－2～5は幅をもった地割れとして検出された。しかし、平面確認では不十分であったため、深掘りトレンチを遺構を避けて5条設定し断面観察を行った。その結果、それぞれ無数の地割れが存在していることが判明した。また、地割れはHr-HP、暗色帯、As-BP等を衝撃吸収層としてその上部に発達していることも観察できた。さらに地割れが形成される場所は、地形の傾斜変換点の等高線に沿っており、地盤や周囲の地質・地形によって形成される規模が左右されるものと考えられた。深掘りトレンチ1では、地割れの下部に、液状化現象に伴う噴砂状の持ち上がりも観察できた。

8　グリッド出土の遺物

古墳時代の遺構について現地保存が決定されたため、縄文時代以前の遺構・遺物については、積極的な調査を実施しなかった。そのため全貌は明らかではないが、H－35号住居址と重複してＪＴ－1号竪穴状遺構を検出できた。このほかに、各調査区から早期末葉の条痕文系土器群、前期後半の竹管文系土器群、中期初頭の五領ケ台式・中期後半の加曽利Ｅ式土器、後期初頭の称名寺式土器、後期後半の加曽利Ｂ式土器など各時期の土器や石器が出土した。

さらに、本年度の西大室町横俵遺跡群の発掘調査で流れ山の頂上部からAT前後の旧石器時代石器群が検出されたことから、本遺跡でも旧石器時代文化層の存在が考えられよう。

また、へ－39Ｇから瓦塔1片が出土した。昭和57年度実施の西大室遺跡群Ⅳには多数の瓦塔が報告されていることから、それらとの関連も考えられる。

Ⅵ　成果と問題点

1　古墳時代の土器について

土器破片を赤井戸式・樽式系・赤色塗彩・Ｓ字状口縁台付甕とそのほかの5種類に分けた割合を Fig. 9に示した。このグラフは、各住居址毎に採り上げた土器片数に対して識別が容易な有文部（縄文・櫛描文）や特徴ある破片（Ｓ字状口縁台付甕・赤色塗彩）を摘出して比率を求めたため、土器の個体数とは幾分異なっている。また、住居址出土遺物が、その住居の時期を反映しているものとし、仮に他の住居から廃棄行為があったとしても近時間的な行為とした上での操作であることを断っておきたい。

グラフから縄文と櫛描文を構成要素とするまとまりをＩグループ、縄文と櫛描文を保有しながらＳ字状口縁台付甕を含むまとまりをⅡグループ、Ｓ字状口縁台付甕に縄文と櫛描文が払拭されるまとまりをⅢグループとして、3グループに分けることができた。これらは前者から後者にい

くに従い時間的な推移を表出しているものとして把握できる。これらの外に和泉型高杯や坩を有するH—63・65・66・83号住居址をⅣグループとし、竈を備えたH—43号住居址をⅤグループとした。As-Cの入り方や土器型式の観点からみて、それぞれⅠ期〜Ⅴ期と時間的な変移として置き換えることが可能と考えた。この時期区分を基本にして作成した土器集成変遷図が Fig. 10である。

Ⅰ期は、壺や甕の大形器種が赤井戸式や樽式系によって構成される。樽式系の器種は壺・甕・台付甕・高杯で構成され、赤井戸式は壺・甕・甑で構成される。両者とも類似器形に、施文具を替えて文様を付けることが頻繁になされている。この時期に対応する小形土器は、東海系の高杯や器台で補塡される。また、東関東系と考えられる付加縄を施文した甕の出土もみられた。台付甕は在来の赤井戸式や樽式系が主体を占めるが、H—50号住居址では口縁部での確認はできないがS字状口縁台付甕と考えられる胴部片が出土しているため、S字状口縁台付甕が器種構成に加わりつつある状況といえる。

Ⅱ期になると壺や甕は樽式系や赤井戸式のものが減少し、磨きや刷毛で調整された折り返し口縁や単口縁の壺・甕が台頭してくる。さらに、S字状口縁台付甕や単口縁台付甕の使用が一般化される。小形器種はⅠ期の継続性が認められるが、器台の器受部に無孔のものが消滅し、器受部外面に稜線が認められるようになる。また、南関東系の赤色塗彩の壺の共伴がみられた。

さらに、H—56号住居址は破片数が少ないため、不詳な部分を残すが、樽式系や赤井戸式の破片が認められなかったことや古段階のS字状口縁台付甕や欠山式の脚部に類似した器台をもつことから本時期に組み入れた。

Ⅲ期の特徴は、在来系である樽式系は消滅し、僅かに赤井戸式の甕が認められる。その甕も縄文施文はまばらになり、輪積み痕は偏平化してくる。それに替わって有段口縁の壺やS字状口縁台付甕・単口縁台付甕が隆盛する時期である。小形器種はⅠ期からの系譜でとらえられるが、器台の器受部には明白な外稜が認められる。また、H—49号住居址では特殊器台が3個体出土している。

また、高崎市将軍塚古墳出土に類似した壺がH—49号住居址から出土している。この壺の出自は伊勢湾周辺が考えられている。

以上、3期に分けられたが、時間的な関係をみたい。Ⅰ期はAs-Cとの関係がみられる時期である。As-Cの堆積に関しては2次堆積の問題が提出されているため慎重を要するが、H—44・57号住居址では粒径の均質なAs-C純層が堆積していた。しかし、H—45・46・47・50・59・61・82・84号住居址のAs-Cは、その堆積も一様ではなく、土層に混じった状態であるため2次堆積と考えられる。すなわち、2軒の住居以外はAs-C降下以後に廃絶され、2次的なAs-Cが流入した結果といえる。しかし、本地域においてAs-Cの降下がすぐさま土器型式や社会構造に大きな変化をもたらせたかというと、2種類のAs-Cが入る住居のあり方から、降下前後において土器組成に大きな

影響がないことと考えられる。

また、H—44号住居址にみるように、As-C降下以前に東海系といわれる器台や高杯の採用は認められる。I期はAs-C降下前後の時間軸が与えられ、II期はAs-C降下以後でI期に近接した時間である。III期は、S字状口縁台付甕が刷毛目調整されるものから消滅する段階までの時間幅が認められる。

続くIV期はS字状口縁台付甕が消滅し、やや肩部の張る甕や高杯・坩で器種構成される。年代的には、5世紀初頭に位置付けられよう。V期は甕・杯と須恵器杯蓋等の器種構成が認められる。須恵器杯蓋がMT—15に比定できるため6世紀前半に位置付けられ、前二子古墳との近接した時期といえる。

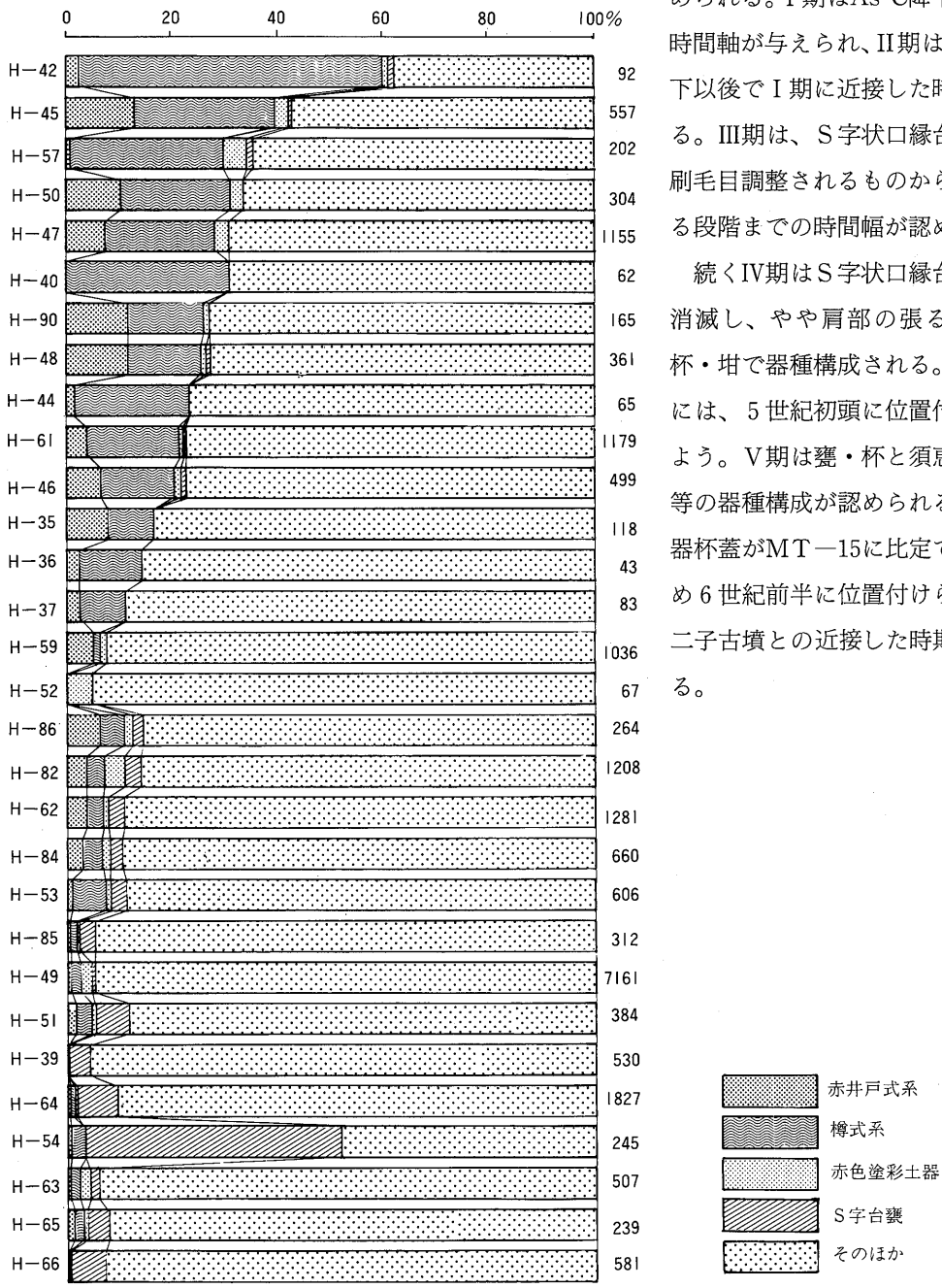


Fig.9　土器片種類の割合

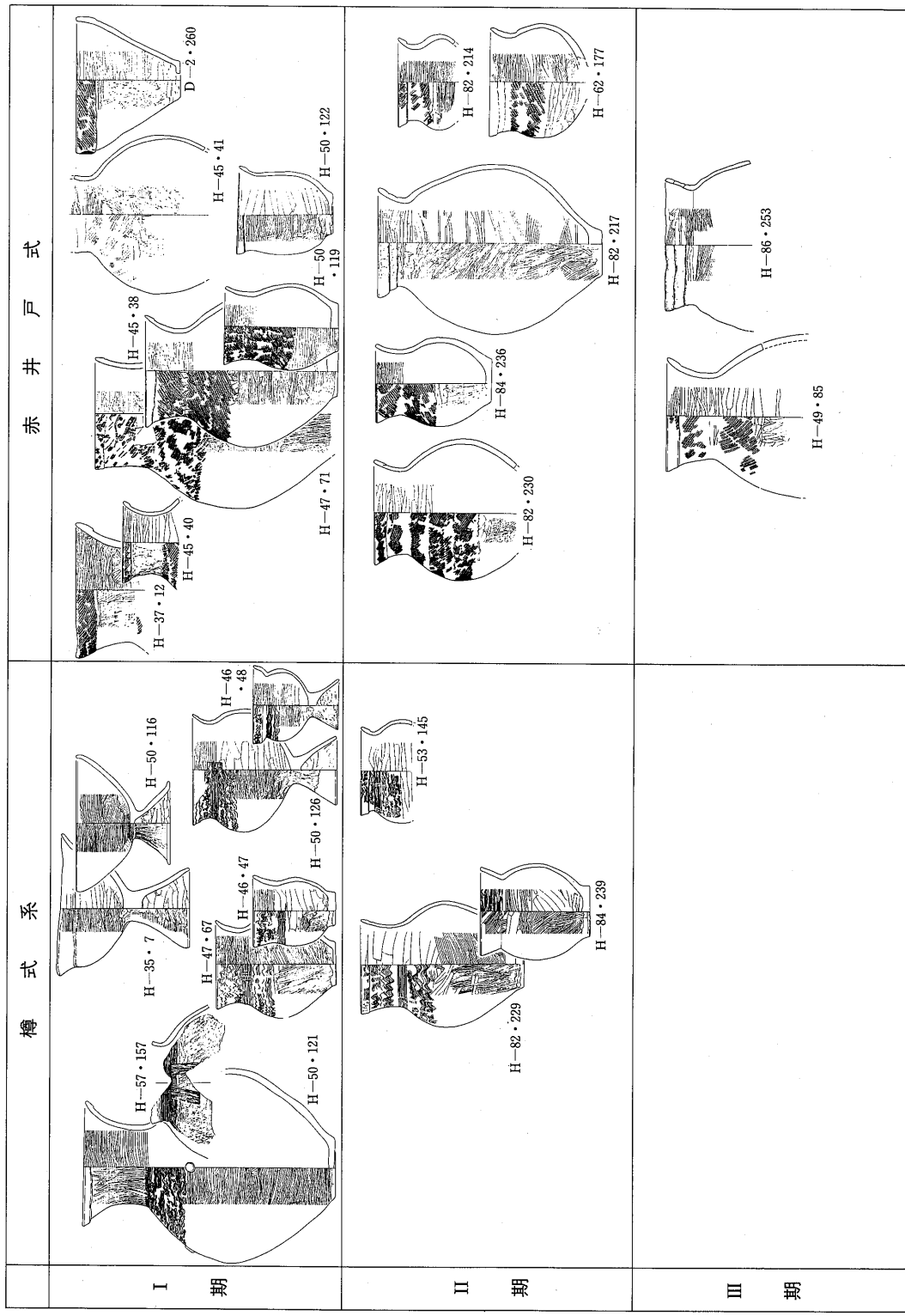


Fig. 10　土器集成変遷図

	そ の ほ か（土 師 器）	外 来 系
I 期	H—50・118　H—36・9　H—47・66　H—35・6　H—50・113　H—35・3　H—50・114　H—50・115　H—47・59　H—50・112　H—47・50　H—37・11　H—44・29　H—35・2　H—35・5　H—50・110　H—59・159　H—46・45　H—47・54	H—50・124
II 期	H—82・211　H—82・213　H—62・180　H—53・135　H—82・219　H—56・154　H—84・238　H—84・235　H—56・153　H—62・174　H—62・178　H—53・142　H—62・173　H—82・224　H—82・218　H—56・151　H—53・140　H—53・134　H—62・179　H—62・171　H—53・143　H—82・223　H—62・172	H—62・175　H—53・138
III 期	H—85・250　H—49・109　H—85・249　H—49・84　H—49・104　H—49・105　H—49・99　H—49・101　H—49・88　H—49・79　H—49・90　H—85・244　H—49・106　H—51・130　H—49・81　H—85・247　H—51・128　H—54・150　H—64・187　H—39・20　H—64・192　H—49・83　H—39・18　H—49・97	H—49・98

Tab. 1　住居址時期別一覧表

名称	時期	平面形	柱穴	規模				主軸	炉		附属施設			備考
				南北	東西	深さ	面積		数	材料	馬蹄形	貯蔵穴	その他	
H—42	I	正	—	3.5	3.4	0.5	11.1	46E	1					円盤
H—45	I	正	—	5.9	5.3	0.3	28.9	37E	2					勾玉・円盤・紡錘車・As-C
H—57	I	正	—	6.0	5.7	0.3	36.7	56E	3					手捏・As-C純層
H—50	I	正	—	3.8	3.4	0.6	11.7	82W	1					鉄器・As-C・焼失・＋H—49
H—47	I	長	2斜	4.9	3.8	0.7	17.4	31E	3	炉縁石	南東			鉄鏃・As-c
H—40	I	長	—	5.1	3.1	0.2	13.8	34E	1					
H—90	I	長	—	5.8	4.5	0.3	18.6	75E	3		南東			鉄鏃
H—48	I	正	—	3.4	3.4	0.1	10.3	2W	1					手捏
H—44	I	正	—	4.3	3.9	0.3	15.2	23W	2					As-C純層
H—61	I	正	—	6.8	[5.9]	0.4	[40.9]	16W	5		南			鉄器・紡錘車・砥石・As-C・＋H—62
H—46	I	正	4	4.5	4.3	0.8	17.6	48E	2	炉縁石	南東	横		管玉・勾玉・砥石・As-C
H—35	I	正	4	5.3	4.6	0.8	20.8	35E	1	炉縁石	東	類横	ベッド	紡錘車・砥石・＋H—36
H—36	I	正	2直	4.9	4.0	0.6	18.0	38E	1	炉縁石・土器片	東			＋H—35
H—37	I	正	4	5.4	4.6	0.8	22.8	29E	1	土器片	東	横		
H—59	I	長	4	6.8	5.2	0.9	32.1	50E	3	土器片	南	横	ベッド	鉄鏃・手捏2・紡錘車・As-C
H—52	I	正	—	4.2	3.8	0.1	14.9	71E	3					
H—38	I	正	2斜	3.8	3.1	0.7	9.9	81W	2	炉縁石	南東	横		As-C
H—56	II	正	—	5.2	(4.9)	0.1	[24.5]	56E	1					
H—86	II	正	4	7.7	6.6	0.7	[49.5]	74E	—					
H—82	II	正	2斜	5.0	4.3	0.8	20.4	61E	1	炉縁石				鉄器・手捏・勾玉・敲石・As-C・地割れ・＋H—49
H—62	II	正	4	[6.7]	5.8	0.3	[37.7]	75E	5		南			紡錘車・焼失・＋H—61
H—84	II	正	4	6.3	5.8	0.8	33.7	61E	2	炉縁石				土玉・砥石2・As-C・地割れ
H—53	II	正	4	6.0	5.3	0.7	28.9	66E	1					鉄器・手捏3
H—85	III	正	4	7.1	6.3	0.4	[42.0]	67E	—		南東		柱穴粘土	手捏
H—49	III	正	4	9.5	8.3	1.2	69.6	34W	2		南東		柱穴粘土 階段状施設	鉄器3・手捏3・算盤玉・土匙・円盤・凹石・磨石 焼失・＋H—39・50・82
H—51	III	正	4	6.3	6.1	0.2	36.7	68W	3					
H—39	III	正	4	8.1	7.8	0.4	58.3	57E	1	炉体土器	類東			焼失か・＋H—49
H—64	III	正	4	7.2	6.5	0.7	43.1	68W	1	炉体土器			柱穴粘土	地割れ
H—54	III	正	—	4.3	3.6	0.3	14.1	30W	1					
H—63	IV	正	4	5.4	5.4	0.4	27.9	42E	1	炉縁石			柱穴粘土	砥石・＋H—83・類ベッド
H—65	IV	長	—	4.0	3.2	0.3	12.3	74E	2					砥石(ミニ)
H—66	IV	正	4	5.6	5.5	0.7	28.2	64E	1				柱穴粘土	鉄器・敲石・焼失
H—83	IV	正	—	3.0	2.8	0.3	[8.2]	16W	1					砥石2・＋H—63
H—43	V	正	—	3.8	3.7	0.6	13.1	25W	竈					地割れ
H—58	—	正	—	2.9	2.6	0.1	6.8	83E	1					
H—89	—	長	—	[4.0]	[3.1]	0.5	[12.4]	77E	—					
H—91	—	—	—	(2.5)	(1.8)	0.2	(7.5)	32E	1					

註) 1．正は正方形、長は長方形の略である。
2．規模の(　)は現存値、[　]は推定値を表す。
3．主軸のEおよびWは北からの角度である。
4．馬蹄形・貯蔵穴の類は近似するものを示す。
5．備考の＋は接合関係を示す。また、「As-C」と表記したものは、純層で無く、よごれたAs-Cの層である。

2　古墳時代の住居址について

次に、各時期別に一表にしたものをTab. 1に示した。昭和63・平成元年の調査住居を含めて住居址規模相関図と分類図をFig. 11・12に示した。重複によって形状が不明なものは削除してある。62軒の住居を規模相関図でみると、最小が2.5m四方で最大が9m四方である。相関図のまとまりから小形・4m以下、中形・4m～6m、大形・6m～8m、特大形・8m以上と大きく4つに分類できよう。平面形については短軸：長軸の比が4：5を超えるものを長方形とし、それ以下を正方形として扱った。正方形が50軒と圧倒的に多く、長方形のものは12軒と少ない。さらに、正方形の住居を細かくみると無柱穴正方形が25軒、次いで4本柱正方形20軒と2種類が大多数を占め、2本斜柱穴正方形が2軒、2本直柱穴正方形が1軒、4本柱＋壁柱穴正方形が2軒存在している。

一方、長方形は無柱穴長方形が9軒、4本柱長方形が2軒、2本斜柱穴長方形が1軒に分けられる。形態的には、各時期にわたって正方形が主流をしめるものの、Ⅰ期に長方形の住居形態が多いことが指摘できる。Ⅱ期からは正方形を基調とする住居形態が主体を占める。面積ではⅠ期の最大が36.7m²で最小が10.3m²であり、平均が20m²である。Ⅱ期では、平均が30.8m²でⅢ期は41.4m²である。ちなみにⅣ期の平均は19.0m²である。Ⅰ期の住居面積はまとまりがみられ、Ⅱ期はややこぶりになり、Ⅲ期には面積差が大きくなる傾向を示している。炉址は、Ⅰ期に複数もつ住居址が単数のものより多く、最大5基を有し、平均2基である。Ⅱ期は単数炉が一般化するが、H—62号住居址には5基認められることは古い要素であろうか。Ⅲ期は、H—49号住居址に2基・H—51号住居址に3基つくものの、基本的には1基である。

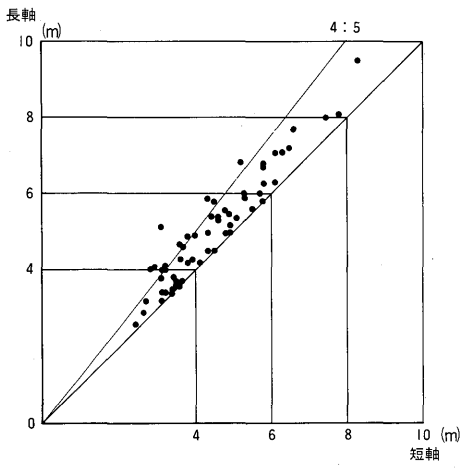


Fig.11　住居址規模相関図

炉の構築材としてⅠ期には炉縁石や土器片が用いられ、Ⅱ期には炉縁石、Ⅲ期には炉体土器が用いられる。また、2本柱穴はⅠ・Ⅱ期に用いられ、横穴形貯蔵穴やベッド状遺構もⅠ期に限定される。さらに、出土遺物でみると鉄鏃や土製紡錘車は、Ⅰ期に限定されて出土していることが指摘できる。

また、柱穴の底部の粘土貼りはⅢ・Ⅳ期に限って施工された技法といえ他の時期には認められない。

3　階段状施設を持つ大形住居について

H—49号住居址は本集落最大規模の住居址であるとともに、北壁に地山のローム層を掘りこん

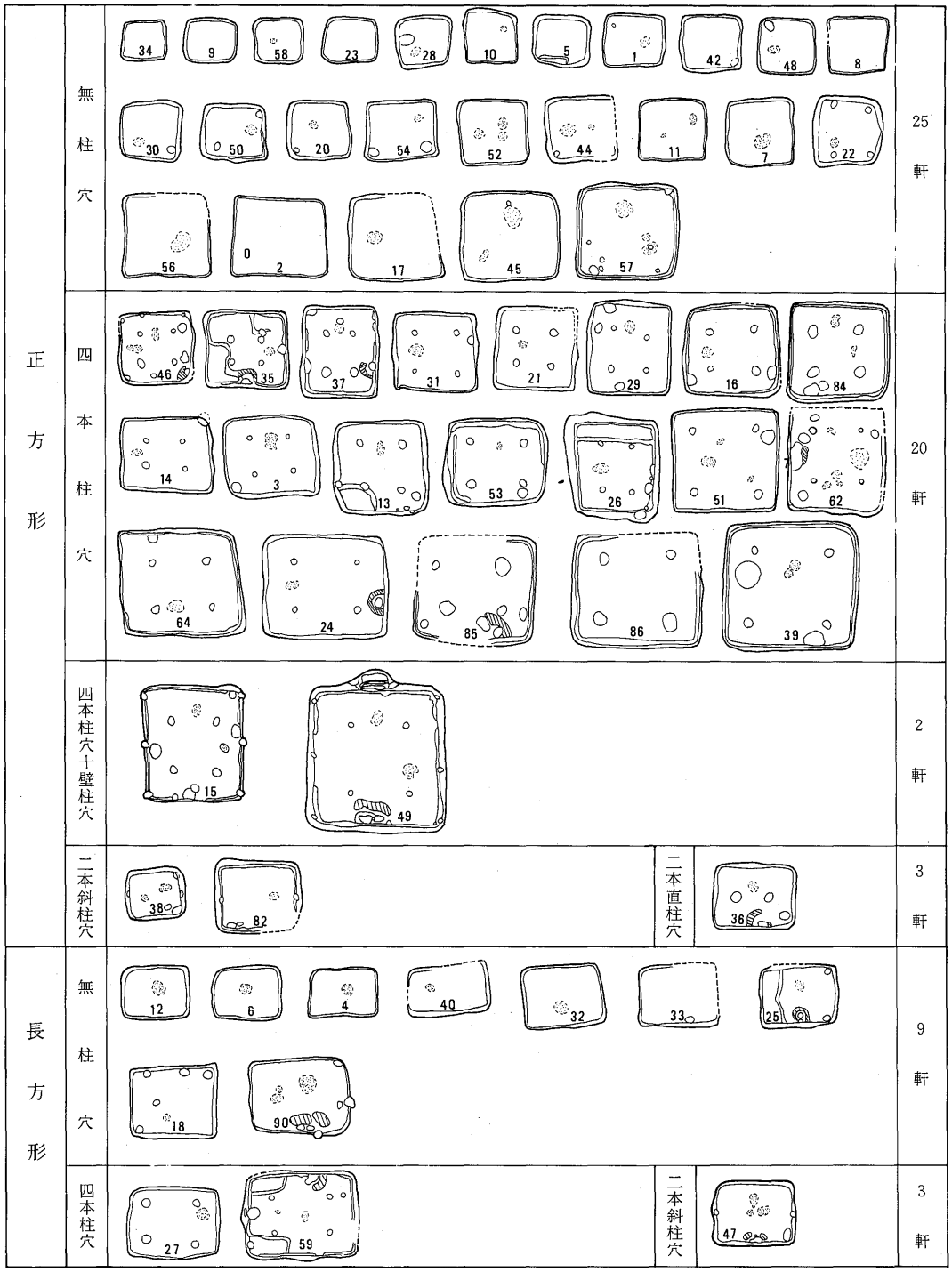

正方形
無柱穴
34 9 58 23 28 10 5 1 42 48 8
30 50 20 54 52 44 11 7 22
56 0 2 17 45 57
25軒
四本柱穴
46 35 37 31 21 29 16 84
14 3 13 53 26 51 7 62
64 24 85 86 39
20軒
四本柱穴十壁柱穴
15 49
2軒
二本斜柱穴
38 82
二本直柱穴
36
3軒
長方形
無柱穴
12 6 4 40 32 33 25
18 90
9軒
四本柱穴
27 59
二本斜柱穴
47
3軒

Fig.12　住居分類図

だ形で３段の階段状施設が付設されていた。用途面から昇降用階段、棚などが考えられるが、南壁中央に出入り口ピットがあるため一番奥まった場所であることや、北側は季節風を直接受ける点から昇降用階段は考えにくい。また、実用的な棚と考えればもう少し大きなものが必要とされる。住居内の遺物出土状態からみても、板などを置いた痕跡もないことから決定要素に欠けている。住居規模や付属施設、さらに匙形土製品、算盤玉形土製品・手捏土器などの特殊遺物の存在から実用的な用途は考えにくい。また、匙形土製品は共通したものが、北の低地を挟んだ対岸の粕川村西原遺跡２号住居址から出土している。管見する限りでは他に類例が無いため、何らかの形で西原遺跡と交流があったものと考えられる。

遺跡の中で住居構造からみて、昭和63年度調査のＨ―15号住居址と規模や形態の面で極似している。Ｈ―15号住居址と有機的な関連が考えられ、建て替えを想定すると、前の住居においてこの施設は認めれなかったものであり、本住居址構築にあたって新たに設置されたものと理解される。

また、赤堀町多田山東遺跡41号住居址の東壁に同様な造作がみられるが、多田山遺跡例は東壁であり掘り込みの幅も狭いため、入り口施設としての用途が考えられよう。現段階では類例が乏しいため、今後の資料増加に待つ点が大きいが、現時点では祭祀的な要素が高いものとして理解しておきたい。

４　古墳時代前期の集落

古墳時代初頭前後の住居址は、昨年度までの調査で32軒が調査されている。今年度は32軒を調査できたので、合計64軒となる。この時期の集落は、市内において調査事例が極めて少ないため、集落変遷や土器組成の変容、地域性を解明する上で貴重な資料となった。また、住居址覆土にAs-C（浅間山Ｃ軽石：４世紀中葉降下）を堆積するものが多数検出されたため、年代決定の上でも指標になり得るものといえる。今回調査した集落は、内堀遺跡群下縄引II遺跡に所属し、集落は更に東に拡大をみせるため100軒前後の住居址が推定できる。

周辺遺跡では、本遺跡に隣接して北の沖積状低地に、下縄引Ｉ遺跡や五反田遺跡（粕川村）をはじめ多くの集落遺跡が展開している。特に下縄引Ｉ遺跡は、今年度調査のＨ―39号住居址と連続する可能性が生じた。従来、生産基盤として想定されていた場所に数多くの集落が立地していることが判明しつつあるため、現時点での本遺跡の生産域は、現五料沼のある沖積地一帯を想定しておきたい。

さらに、円形周溝墓12基が調査されている上縄引遺跡とは、As-C降下前後の同時代であることや至近な距離であるため、有機的な関連を持つことと考えられ、本遺跡の居住者が埋葬された蓋然性が極めて高いものといえよう。

註）　平成元年度調査分内堀遺跡群III（1990）の住居址名称変更について

H－1→H－20　H－2→H－21　H－3→H－22　H－4→H－23　H－5→H－24
H－6→H－25　H－7→H－26　H－8→H－27　H－9→H－28　H－10→H－29
H－11→H－30　H－12→H－31　H－13→H－18　H－14→H－32　H－15→H－33
H－16→H－34

参　考　文　献

桑原　昭・園部守央　1988　『内堀遺跡群Ⅰ－確認調査報告書－』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
園部守央・加部二生　1989　『内堀遺跡群Ⅱ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
園部守央・鈴木雅浩　1990　『内堀遺跡群Ⅲ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
飯塚　誠・杉浦つや子ほか　1981　『西大室遺跡群Ⅱ』　前橋市教育委員会
井野誠一・入内島裕美　1981『富田遺跡群Ⅱ』前橋市教育委員会
前原照子・松村親樹ほか　1982　『富田遺跡群Ⅲ・西大室遺跡群Ⅲ』前橋市教育委員会
江部和彦・前原照子ほか　1983　『西大室遺跡群Ⅳ』前橋市教育委員会
松村親樹ほか　1983　『端気遺跡群Ⅰ』　前橋市教育委員会
木暮　誠・前原　豊　1984　『端気遺跡群Ⅱ』　前橋市教育委員会
前原照子・濱田博一ほか　1985　『柳久保遺跡群Ⅰ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
千田幸生ほか　1986　『梅木遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前原　豊・関根吉晴　1988　『柳久保遺跡群Ⅶ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
駒倉秀一・都所敬尚　1990　『横俵遺跡群Ⅰ』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
小島純一　1985　『深津地区遺跡群　昭和60年度』　群馬県粕川村教育委員会
小島純一　1986　『深津地区遺跡群　昭和61年度』　群馬県粕川村教育委員会
小島純一ほか　1987　『粕川村の遺跡』　群馬県粕川村教育委員会
小島純一　1988　『堤頭遺跡』　群馬県粕川村教育委員会
小島純一　1990　『西迎遺跡』　群馬県粕川村教育委員会
松村一昭　1982　『多田山東遺跡発掘調査概報』赤堀町教育委員会
若狭　徹　1988　『保渡田遺跡群Ⅳ』　群馬県群馬町教育委員会
田口一郎　1985　『元島名将軍塚古墳』　高崎市教育委員会
女屋和志雄ほか　1989　『下佐野遺跡Ⅱ地区(1)』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
高橋一夫　1990　「古墳時代の集落」『古墳文化の研究』雄山閣

付　編　内堀遺跡群下縄引遺跡のテフラと地割れ

早　田　　勉（古環境研究所）

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．テフラ層序
Ⅲ．地割れについて
Ⅳ．まとめ

Ⅰ．はじめに

下縄引遺跡は、赤城火山南麗に広がる梨木岩屑なだれの堆積面上に位置している。ここには、テフラ層を多く挟むいわゆるローム層（火山灰土）が厚く堆積している。遺跡の発掘調査では、多くの地割れが検出された。ここでは、土層断面を観察して示標テフラの層序を記載するとともに、地割れの特徴について述べる。

Ⅱ．テフラ層序

代表的な下縄引遺跡のローム層の断面を、図1および図2に示す。断面を観察した結果、合わせて6層のテフラを検出することができた。ここでは、下位より下縄引第1～6テフラ（Sn-1～6）と呼ぶことにする。以下、各テフラの特徴を記載する。

Sn-1：亜円礫を含む粘土を整合に覆う、層厚39cmの黄色降下軽石層である。含まれる軽石および石質岩片の最大径は、各々41mm、13mmである。本テフラは、その特徴から約4.0-4.4万年前に榛名一八崎軽石（Hr-HP，新井，1962，鈴木，1976，大島，1986）に対比される。

Sn-2：ローム層中に散在する赤褐色のスコリア粒子である。スコリアの最大径は、6mm。本テフラの起源については、いまのところ不明である。

Sn-3：暗色帯中に認められる淡色の土層である。本土層中には、透明で平板状のいわゆるバブル型火山ガラスが大量に含まれている。このガラスは、その特徴から約2.1-2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976）に対比される。

Sn-4：暗色帯の直上に認められる、層厚4cmの橙色降下軽石層である。軽石の最大径は、5mmである。このテフラは、層相から約1.6-2.1万年前に浅間火山か

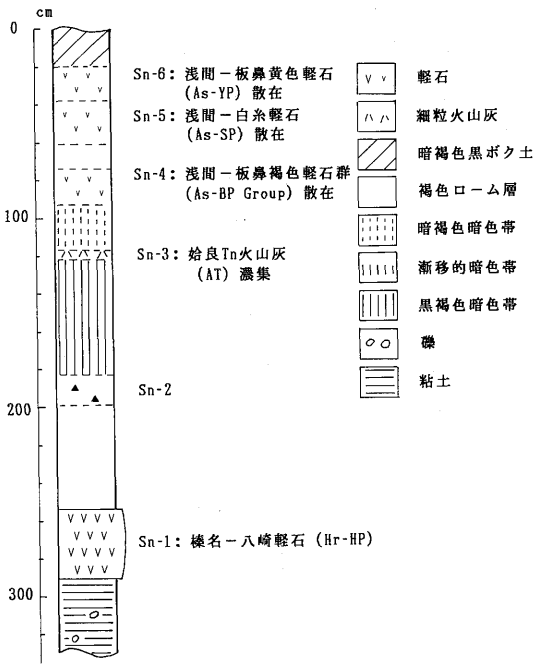


図1　下縄引遺跡第3地割れトレンチのテフラ層序

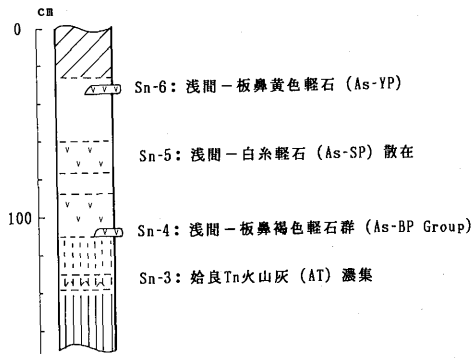


図2　下縄引遺跡第1地割れトレンチのテフラ層序

ら噴出した浅間一板鼻褐色軽石群（As-BP Group，新井，1962，町田ほか，1984）の一つに対比される。

Sn-5：Sn-4とSn-6の間のローム層中に濃集する白色軽石である。白色軽石の最大径は、8㎜である。層位および軽石の特徴から、約1.5万年前に浅間火山から噴出した浅間一白糸軽石（As-SP，町田ほか，1984）に由来するものと思われる。

Sn-6：ローム層最上部に層位ある黄色軽石層である。軽石層の層厚は、4㎝である。含まれる軽石の最大径は、8㎜である。層相から、このテフラは約1.3—1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石（As-YP，新井，1962，町田ほか，1984）に対比される。

Ⅲ．地割れについて

第3地割れトレンチでは、地割れで挟まれた比較的大規模な地溝状の落込みが認められた。落込みは、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C，新井，1979，石川ほか，1979）に富む土層を斬って発達している。また地割れは黒ボク土で充填されており、As-YP降灰以後に形成されたものであることがわかる。この地割れはHr-HP以上で認められ、Hr-HPの下位に有る粘土層は変形を受けていない。すなわち地割れは、粘土層上面を滑り面としてHr-HP以上のローム層が移動したことにより形成されたものと考えられる。

第1地割れトレンチでは、下位の土層で充填された地割れが認められた。この土層は、暗色帯上部のAT層準に相当する淡色の土層である。テフラ検出分析を行ったところ、実際に地割れを充填した土層から大量のATの火山ガラスが検出された。おそらく微妙な土層の粒径組成の違いが反映されて、地震動に伴ってAT層準の土層が噴砂状に上位に移動したのであろう。

下縄引遺跡で認められた地割れの形成年代については、第3地割れトレンチの地割れがAs-Cを斬っていることから、As-C降灰以降すなわち4世紀中葉以降と考えられる。また内堀遺跡群では、他にもAs-C降灰以降に形成された大規模な落込みが検出されており、天仁元（1108）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B，新井，1979）に覆われていることが明らかにされている（前橋市教育委員会，1984）。このような地割れは、赤城山南麓一帯で数多く検出されており、それらは弘仁9（818）年の地震によって形成されたことが指摘されている（能登ほか，1990）。このことから、下縄引遺跡の発掘調査で検出された地割れは、いずれも弘仁9（818）年の地震に伴って形成された可能性が大きいと考えられる。

Ⅳ．まとめ

下縄引遺跡のローム層には、6層のテフラが確認された。テフラは、下位より2番目のスコリアを除いて、Hr-HP、AT、As-BP Groupの一つ、As-SP、As-YPにそれぞれ対比される。第3地割れトレンチで検出された地溝状の落込みは、Hr-HP以上のローム層が変形を受けて形成されたものである。また、第1地割れトレンチで認められた噴砂状の土層の立ち上がりは、AT層準の土層が変形を受けて形成されたものと考えられる。いずれの地割れも、弘仁9（818）年の地震によって形成された可能性がある。

参　考　文　献

新井房夫　（1962）　関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫　（1979）　関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，№157，p.41-52.

石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一　（1979）　火山堆積物と遺跡Ⅰ．考古学ジャーナル，№157，p.3-40

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　（1989）　「内堀遺跡群Ⅱ」.

能登　健・内田憲治・早田　勉　（1990）　赤城山南麓の歴史地震一弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析一．信濃，42，10．p.755-772.

大島　治　（1986）　榛名火山．日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」，p.222-224.

鈴木正男　（1976）　Fission Track年代測定法の人類遺跡への二，三の応用例．日本第四紀学会講演要旨集，№5，p.24.

Tab. 2　遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
1	H－35	椀	14.2	(6.0)	①細粒②極良③浅黄橙④ほぼ完形	内外面とも篦磨き。	69	
2	H－35	器台	8.6	8.1	①細粒②極良③橙④ほぼ完形	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔3単位。	88外	
3	H－35	器台	8.2	9.9	①細粒②極良③橙④ほぼ完形	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔4単位。	72外	穿孔なし
4	H－35	壺	15.1	(7.8)	①細粒②極良③にぶい橙④口縁部のみ	外面ナデ、頸部簾状文。内面篦磨き。	5外	＋H－36 樽式系
5	H－35	壺	——	13.8	①中粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	外面篦磨き。内面ナデ。	71	胴部焼成前穿孔
6	H－35	高杯	16.2	11.7	①細粒②極良③浅黄橙④ほぼ完形	外面杯部ナデ、脚部篦磨き。内面篦磨き・横ナデ。透孔4単位。	70外	
7	H－35	高杯	19.6	18.1	①細粒②極良③橙④ほぼ完形	外面篦磨き。内面刷毛状工具によるナデ。	73外	樽式系
8	H－36	椀	16.6	7.6	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	外面ナデ後篦磨き。内面篦磨き。	17	
9	H－36	椀	17.4	7.8	①中粒②良好③橙④完形	外面口縁部篦削り、胴部ナデ後篦磨き。内面篦磨き。	43	
10	H－37	高杯	12.8	(5.0)	①中粒②良好③橙④杯部のみ	内外面篦磨き。	62	
11	H－37	高杯	11.9	(7.4)	①細粒②極良③赤褐④¾	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔4単位。	66外	全面赤色塗彩
12	H－37	壺	18.6	(9.5)	①中粒②良好③浅黄橙④口縁部のみ	外面口縁部・肩部縄文ＲＬ、頸部篦磨き。内面篦磨き。	61	赤井戸式
13	H－38	小壺	——	(10.5)	①中粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	外面篦磨き。	1	
14	H－39	高杯	[15.2]	(2.6)	①細粒②極良③橙④口縁部破片	外面輪積痕を残す。内面篦磨き。	231	赤井戸式
15	H－39	高杯	——	(6.4)	①細粒②極良③にぶい橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ、裾横ナデ。	162	
16	H－39	台付甕	——	(6.3)	①粗粒②良好③黄④台部のみ	外面底部ナデ、台部刷毛後ナデ。内面ナデ、裾横ナデ。	505	
17	H－39	器台	——	(8.2)	①細粒②極良③にぶい黄橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面接合部ナデ、裾刷毛後ナデ。透孔3単位。	220	
18	H－39	小甕	10.6	8.2	①粗粒②良好③淡黄④ほぼ完形	外面ナデ、底部篦削り。内面ナデ。	300	Ｓ字状口縁
19	H－39	小甕	11.7	12.1	①粗粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	外面ナデ、口縁部指オサエ・横ナデ・輪積痕あり。内面ナデ。	280	
20	H－39	壺	17.2	(16.0)	①粗粒②良好③浅黄橙④⅓	外面口縁部横ナデ、頸部～肩部刷毛後篦磨き。内面口縁部篦磨き、頸部～肩部刷毛後ナデ。	400	
21	H－40	小鉢	7.9	7.3	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	外面口縁部篦磨き、胴部縦方向の木端工具後ナデ。内面口縁部刷毛目、胴部ナデ。	22外	
22	H－40	甕	10.0	16.1	①粗粒②良好③橙④⅗	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文、胴部篦磨き。内面篦磨き。	25外	樽式系
23	H－42	壺	[14.3]	(4.8)	①中粒②良好③にぶい黄褐④口縁部¼	外面ナデ。内面刷毛目・ナデ。	26	内外面赤色塗彩
24	H－43	須恵蓋	14.4	5.4	①細粒②極良③灰④¾	外面轆轤ナデ、回転篦削り。内面轆轤ナデ。	39外	須恵器
25	H－43	杯	14.0	4.1	①細粒②極良③橙④完形	外面口縁部横ナデ、底部篦削り。内面口縁部横ナデ、底部篦磨き。	163外	鬼高式
26	H－43	坏	[13.2]	(4.0)	①細粒②極良③明赤褐④破片	外面口縁部横ナデ、底部篦削り。内面口縁部横ナデ、底部ナデ。	126	鬼高式
27	H－43	大甕	[26.4]	(9.9)	①中粒②極良③橙④破片	外面篦削り。内面ナデ。	151	鬼高式
28	H－44	甑	——	(5.5)	①中粒②極良③橙④底部⅗	内外面とも篦磨き。	50	
29	H－44	器台	8.6	8.6	①中粒②極良③橙④完形	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔3単位。	37外	
30	H－45	高杯	——	(6.4)	①中粒②良好③にぶい橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。透孔3単位。	105外	
31	H－45	高杯	——	6.9	①中粒②良好③にぶい赤褐④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。透孔3単位。	340	
32	H－45	台付甕	[10.2]	(8.5)	①粗粒②良好③にぶい橙④甕部⅘	外面頸部簾状文、肩部波状文、胴部ナデ。内面篦磨き。	1外	樽式系

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
33	H－45	甕	[11.1]	(8.3)	①中粒②良好③にぶい黄橙④破片	外面縄文ＲＬ。内面口縁部～頸部ナデ、肩部篦磨き。	188外	赤井戸式
34	H－45	高杯	[21.8]	(6.8)	①中粒②良好③橙④杯部½	内外面とも篦磨き。	21外	
35	H－45	甕	——	(9.0)	①中粒②良好③にぶい褐色④¼	内外面とも篦磨き。	186外	
36	H－45	甕	——	(13.8)	①粗粒②良好③にぶい橙④破片	外面口縁部～肩部縄文ＬＲ、胴部篦磨き。内面篦磨き。	343外	赤井戸式
37	H－45	甕	[13.9]	(6.1)	①中粒②良好③にぶい褐④口縁部½	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文。内面篦磨き。	115外	樽式系
38	H－45	甕	15.3	26.2	①中粒②良好③明黄褐④ほぼ完形	外面口縁部～肩部刷毛後縄文ＬＲ、胴部刷毛後篦磨き。内面篦磨き。	26	赤井戸式
39	H－45	壺	——	(9.7)	①中粒②良好③明黄褐④破片	外面縄文ＬＲ後Ｔ字文、頸部円形貼付文あり。内面ナデ。	285外	縄文と櫛描文
40	H－45	壺	11.2	(7.7)	①中粒②良好③にぶい橙④口縁部¾	外面口縁部・肩部縄文ＲＬ、頸部ナデ後篦磨き。内面篦磨き。	229外	赤井戸式
41	H－45	甕	——	(18.0)	①粗粒②良好③橙④⅓	外面篦磨き・ナデ後無節縄文Ｒ。内面篦磨き。	404外	赤井戸式
42	H－46	高杯	16.5	(5.5)	①中粒②良好③橙④杯部⅔	内外面とも篦磨き。	380外	
43	H－46	台付甕	——	(6.0)	①中粒②良好③黄褐④台部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。	103	
44	H－46	高杯	——	(7.5)	①中粒②良好③にぶい橙④脚部のみ	外面篦磨き、裾ナデ。内面ナデ。	232	
45	H－46	高杯	[14.3]	10.0	①中粒②良好③黄④⅔	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。	28外	
46	H－46	壺	——	(32.0)	①中粒②良好③橙④¾	外面口縁部・胴部篦磨き、頸部簾状文、肩部波状文。内面篦磨き。	93外	樽式系
47	H－46	小甕	9.8	11.2	①中粒②良好③浅黄橙④¾	外面口縁部波状文、頸部簾状文、肩部ナデ、胴部篦磨き。内面口縁部篦磨き、胴部ナデ。	257外	樽式系
48	H－46	台付甕	10.8	11.5	①細粒②極良③赤褐④⅔	外面口縁部～肩部波状文、胴部・台部篦磨き、接合部ナデ。内面甕部篦磨き、台部ナデ。	268外	樽式系
49	H－46	甕	12.9	(12.2)	①中粒②良好③にぶい赤褐④口縁部¾	外面ナデ後縄文ＲＬ。内面ナデ。	436外	赤井戸式
50	H－47	高杯	13.1	8.1	①細粒②極良③橙④⅔	内外面とも篦磨き。	1076	
51	H－47	高杯	——	(6.6)	①中粒②良好③にぶい黄橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ・篦磨き。	390	
52	H－47	高杯	——	(5.0)	①中粒②良好③にぶい橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。	340	
53	H－47	高杯	——	(6.7)	①細粒②極良③にぶい橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。	250	
54	H－47	器台	6.0	6.9	①中粒②極良③橙④ほぼ完形	外面杯部ナデ、脚部篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔３単位。	900	
55	H－47	高杯	——	(6.2)	①中粒②良好③橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。透孔４単位。	310	
56	H－47	高杯	——	(8.4)	①細粒②極良③浅黄橙④¼	内外面とも篦磨き。	186	
57	H－47	器台	7.7	10.0	①中粒②極良③橙④完形	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔３単位。	500外	穿孔なし
58	H－47	高杯	——	(8.3)	①中粒②良好③橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。	108	
59	H－47	高杯	17.0	(5.9)	①細粒②極良③橙④杯部のみ	内外面とも篦磨き。	230	
60	H－47	高杯	——	(7.9)	①中粒②良好③浅黄橙④⅓	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔３単位。	50	
61	H－47	高杯	——	(9.7)	①細粒②良好③浅黄橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。透孔４単位。	650	
62	H－47	高杯	——	(9.6)	①細粒②極良③橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。透孔４単位。	518	
63	H－47	高杯	——	(3.3)	①中粒②良好③橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。透孔４単位。	620	
64	H－47	小甕	6.4	8.1	①中粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外面ナデ口縁部指オサエ。内面ナデ。	300	
65	H－47	椀	14.5	6.1	①中粒②良好③明黄褐④ほぼ完形	内外面とも篦磨き。	1101	
66	H－47	椀	14.3	5.6	①細粒②良好③浅黄橙④⅔	内外面とも篦磨き。	187外	
67	H－47	甕	12.1	16.2	①中粒②極良③にぶい黄橙④完形	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文、胴部ナデ後篦磨き。内面篦磨き。	400	樽式系
68	H－47	甕	15.0	(8.2)	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁部のみ	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文。内面篦磨き。	1085外	樽式系

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
69	H－47	甕	13.7	(7.4)	①中粒②極良③にぶい褐④口縁部⅔	外面波状文。内面篦磨き、頸部ナデ。	717外	樽式系
70	H－47	甕	[13.8]	(7.0)	①中粒②極良③橙④口縁部½	外面縄文ＲＬ、口縁部輪積痕。内面篦磨き。	475	赤井戸式
71	H－47	甕	15.1	(32.4)	①細粒②極良③浅黄橙④⅗	外面口縁部～肩部縄文Ｒ＜$^{R}_{L}$、胴部篦磨き。内面篦磨き。	1100外	赤井戸式
72	H－47	大甕	——	(15.1)	①粗粒②良好③橙④¼	内外面とも篦磨き。	100外	
73	H－47	台付甕	——	(6.8)	①粗粒②良好③橙④台部⅔	内外面ナデ。	169外	
74	H－47	台付甕	——	(7.8)	①粗粒②良好③明褐灰④台部のみ	内外面ナデ。	460外	
75	H－47	壺	18.5	(10.2)	①細粒②極良③にぶい黄橙④口縁部½	外面口縁部篦磨き、頸部簾状文。内面篦磨き。	1070外	樽式系
76	H－48	甕	14.1	(13.7)	①粗粒②良好③にぶい橙④½	外面縄文ＬＲ。内面篦磨き。	90	赤井戸式
77	H－49	土師質椀	13.5	5.8	①細粒②良好③黒④完形		310外	内外面黒色処理
78	H－49	椀	[7.6]	5.2	①中粒②良好③淡黄④½	外面刷毛目・ナデ。内面ナデ。	226外	
79	H－49	椀	[9.3]	5.2	①中粒②良好③橙④½	外面ナデ。内面篦磨き、脚部ナデ。	500	
80	H－49	小甕	10.6	8.1	①粗粒②良好③灰白④⅚	外面口縁部横ナデ、肩部輪積痕、胴部篦削り。内面口縁部～肩部横ナデ、胴部篦ナデ。	320	鬼高式
81	H－49	椀	10.6	5.7	①中粒②良好③橙④½	外面ナデ。内面口縁部横ナデ。	65外	
82	H－49	小甕	9.6	8.2	①中粒②良好③橙④完形	外面口縁部横ナデ、肩部ナデ、胴部削り風ナデ。内面ナデ、口縁部横ナデ。	2644	
83	H－49	甑	[19.0]	10.6	①粗粒②良好③浅黄橙④⅓	内外面ともナデ。	3540	
84	H－49	甕	16.4	(8.8)	①中粒②良好③にぶい黄橙④⅓	外面刷毛目、口縁部指オサエ・ナデ・刷毛目。内面横ナデ、口縁部刷毛後篦磨き。	544外	
85	H－49	甕	[15.7]	(16.8)	①中粒②良好③にぶい黄橙④⅓	外面口縁部・肩部縄文ＲＬ、胴部篦磨き。内面口縁部篦磨き、胴部ナデ。	3720外	赤井戸式
86	H－49	器台	6.8	(6.3)	①細粒②極良③橙④½	外面杯部篦磨き、脚部刷毛後篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部刷毛目。透孔２段交互に３単位。	2508外	
87	H－49	器台	8.0	8.2	①中粒②良好③浅黄橙④⅔	外面篦磨き。内面刷毛目。透孔３単位。	5693	
88	H－49	器台	7.9	8.4	①中粒②良好③橙④¾	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部刷毛目、裾ナデ。透孔３単位。	5753	
89	H－49	器台	——	(7.2)	①中粒②良好③橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面篦削り・刷毛目、裾部篦磨き	2526外	
90	H－49	高杯	11.1	7.7	①中粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外面口縁部・脚部篦磨き、胴部ナデ。内面杯部篦磨き、接合部ナデ、裾刷毛目。	4300	
91	H－49	高杯	10.8	8.4	①中粒②極良③明赤褐④ほぼ完形	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。	6550外	赤色塗彩
92	H－49	高杯	7.6	(4.7)	①中粒②良好③橙④杯部⅚	外面篦磨き、接合部ナデ。内面篦磨き。	3210	
93	H－49	高杯	——	(6.2)	①細粒②極良③にぶい黄橙④脚部½	外面篦磨き。内面刷毛目。透孔３単位。	401	
94	H－49	高杯	——	(9.0)	①細粒②極良③橙④脚部⅔	外面篦磨き。内面篦削り、裾刷毛目。透孔２段交互に３単位。	5803	
95	H－49	特殊器台	——	(4.0)	①細粒②極良③明赤褐④破片	内外面とも篦磨き。透孔４単位か。	2515外	
96	H－49	特殊器台	——	(4.1)	①細粒②極良③橙④破片	内外面とも篦磨き。透孔４単位か。	6504	
97	H－49	特殊器台	16.4	(10.2)	①細粒②極良③明黄褐④½	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部刷毛・ナデ。透孔杯部４単位、脚部３単位か。	2097外	
98	H－49	壺	——	(11.0)	①中粒②良好③灰白④⅓	外面肩部凹線・刺突文・波状文、胴部篦磨き。内面刷毛後ナデ。	495外	＋Ｈ－39 外来系
99	H－49	小鉢	8.0	5.1	①細粒②極良③明赤褐④⅔	外面篦磨き、底部ナデ。内面篦磨き。	3511	
100	H－49	特殊器台	——	(4.2)	①中粒②良好③赤④杯部破片	外面ナデ。内面篦磨き・ナデ。透孔２段で単位か。	919外	外面赤色塗彩＋Ｈ－82
101	H－49	高杯	[18.1]	(7.3)	①粗粒②良好③橙④杯部⅔	内外面とも篦磨き。	550	
102	H－49	台付甕	——	(6.6)	①中粒②良好③浅黄橙④台部½	外面刷毛目、裾ナデ。内面刷毛目。	137外	
103	H－49	高杯	——	(6.1)	①細粒②良好③橙④脚部½	外面篦磨き。内面ナデ。	6234外	
104	H－49	台付甕	——	(7.8)	①粗粒②良好③にぶい橙④台部のみ	内外面とも刷毛後ナデ。	4290	
105	H－49	台付甕	——	(7.8)	①中粒②良好③にぶい橙④台部のみ	外面ナデ後刷毛目。内面底部ナデ、台部ナデ後刷毛目。	2171外	

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
106	H—49	台付甕	11.2	17.2	①粗粒②良好③浅黄橙④⅝	内外面とも刷毛後ナデ。	2000外	
107	H—49	大甕	16.0	(15.0)	①中粒②良好③橙④⅔	外面ナデ。内面口縁部横ナデ、胴部篦磨き。	4270外	
108	H—49	甕	[13.9]	(11.8)	①細粒②良好③にぶい橙④口縁部破片	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文、胴部篦磨き。内面横方向の篦磨き。	2850	樽式系
109	H—49	壺	17.0	(6.0)	①中粒②極良③浅黄橙④口縁部のみ	外面口縁部横ナデ、頸部刷毛目、内面口縁部篦磨き、頸部刷毛目、肩部指ナデ。	2280	
110	H—50	大鉢	24.7	19.0	①中粒②良好③赤褐④⅝	外面ナデ後篦磨き。内面ナデ。	79	
111	H—50	高杯	12.5	(4.9)	①中粒②極良③浅黄橙④杯部のみ	内外面とも篦磨き。	100	
112	H—50	高杯	13.0	(5.7)	①中粒②極良③黄橙④杯部のみ	内外面とも篦磨き。透孔4単位。	200	
113	H—50	高杯	12.4	9.4	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	外面ナデ。内面杯部ナデ・篦磨き、脚部ナデ。	81	
114	H—50	器台	9.3	8.8	①中粒②良好③橙④⅔	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔3単位。	68外	
115	H—50	小壺	7.0	10.8	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	外面篦磨き、底部篦削り。内面篦磨き。	112	
116	H—50	高杯	18.9	12.7	①細粒②極良③赤④ほぼ完形	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。赤色塗彩(脚部内面は除く)	244外	赤色塗彩
117	H—50	高杯	——	(5.3)	①細粒②極良③にぶい黄橙④脚部⅔	外面篦磨き。内面ナデ。透孔3単位。	255	
118	H—50	片口付小形甕	11.6	(7.6)	①中粒②良好③黄橙④口縁部破片	内外面とも刷毛目・ナデ。	51	
119	H—50	甕	10.8	15.5	①中粒②極良③浅黄橙④完形	外面口縁部～肩部縄文LR、胴部～底部篦磨き。内面篦磨き。	110	赤井戸式
120	H—50	甕	13.2	(7.7)	①中粒②良好③浅黄橙④口縁部のみ	外面口縁部縄文RL後篦磨き。内面篦磨き。	107	赤井戸式
121	H—50	壺	17.1	31.5	①中粒②良好③橙④完形	外面口縁部・胴部篦磨き、頸部簾状文、肩部波状文、胴部上部円形貼付文。内面篦磨き。	115外	樽式系
122	H—50	甕	12.1	22.9	①粗粒②良好③黄橙④完形	外面篦磨き。内面ナデ。	111	赤井戸式
123	H—50	甕	——	(19.7)	①細粒②極良③橙④⅓	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文、胴部篦磨き。内面篦磨き。	108外	樽式系
124	H—50	甕	15.2	21.6	①中粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外面付加条第1種。内面ナデ。	148	＋H-49 東関東系
125	H—50	甕	13.9	(19.0)	①中粒②良好③明赤褐④⅓	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文、胴部篦磨き。内面篦磨き、口縁部刷毛後篦磨き。	121外	樽式系
126	H—50	台付甕	15.3	19.5	①中粒②良好③にぶい黄橙④⅝	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文、胴部～篦磨き。内面口縁部篦磨き、肩部～ナデ。	237外	樽式系
127	H—50	台付甕	——	(10.5)	①中粒②良好③黄橙④胴部～台部⅓	外面刷毛目。内面ナデ。	78	
128	H—51	台付壺	8.5	(17.1)	①粗粒②良好③橙④ほぼ完形	外面篦磨き。内面口縁部篦磨き。	190	
129	H—51	椀	13.8	5.0	①細粒②極良③明赤褐④¾	内外面とも篦磨き。	415	
130	H—51	甑	18.8	10.2	①中粒②良好③灰褐④⅝	外面刷毛後ナデ、底部ナデ。内面篦磨き・刷毛後ナデ、口縁部横ナデ。	1	
131	H—52	高杯	——	(6.2)	①中粒②良好③橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。透孔4単位。	30	
132	H—52	高杯	——	(6.2)	①細粒②極良③にぶい橙④脚部のみ	外面接合部刷毛目、脚部篦磨き。内面ナデ、裾篦磨き。透孔4単位。	1	
133	H—52	甕	15.9	(8.2)	①粗粒②良好③黒④口縁部⅔。	内外面口縁部横ナデ、肩部刷毛目風ナデ。	10	
134	H—53	壺	15.4	25.6	①細粒②極良③浅黄橙④ほぼ完形	外面口縁部刷毛・ナデ後篦磨き、胴部篦磨き、底部ナデ。内面ナデ・篦磨き。	300外	
135	H—53	坩	10.6	14.6	①中粒②極良③浅黄橙④完形	外面刷毛後篦磨き。内面口縁部ナデ後篦磨き、胴部ナデ。	85	
136	H—53	壺	——	(7.3)	①中粒②極良③浅黄橙④破片	外面刷毛後篦磨き、棒状浮文。内面篦磨き。口唇部に刷毛目工具による刻み。	20外	
137	H—53	壺	——	(3.8)	①中粒②良好③黄橙④破片	外面篦磨き棒状浮文。内面篦磨き。	398	
138	H—53	壺	26.5	(12.7)	①細粒②良好③にぶい橙④口縁部のみ	外面口縁部ナデ・棒状浮文、頸部ナデ後刷毛目・櫛描凸線、肩部篦磨き。内面ナデ。	474	内面剝離顕著
139	H—53	小形土器	——	(2.8)	①中粒②良好③浅黄橙④破片	外面刷毛後篦磨き。内面ナデ後篦磨き。	555	

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
140	H—53	器台	8.4	(5.8)	①中粒②極良③灰白④⅔	外面杯部横ナデ・ナデ、脚部篦磨き。内面口縁部篦磨き、脚部ナデ。透孔2段交互に3単位。	586	
141	H—53	台付甕	——	(4.9)	①中粒②良好③黄橙④台部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。	100外	
142	H—53	坩	9.5	6.0	①中粒②極良③橙④¾	外面口縁部横ナデ、胴部刷毛目・篦磨き、底部篦削り。内面篦磨き。	38外	
143	H—53	小S字台付甕	7.5	8.5	①中粒②良好③にぶい黄橙④完形	外面刷毛目、肩部簾状文。内面刷毛目・ナデ。	310	
144	H—53	坩	[11.0]	(6.0)	①細粒②極良③にぶい黄橙④口縁部破片	外面口縁部横ナデ・篦磨き、頸部刷毛後ナデ。内面口縁部篦磨き、頸部刷毛目・ナデ。	157外	
145	H—53	台付甕	12.1	(6.8)	①粗粒②良好③橙④破片	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文、胴部ナデ。内面ナデ。	156外	樽式系
146	H—54	坩	5.8	6.8	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	外面口縁部横ナデ、肩部ナデ、胴部幅広の磨き状ナデ・篦削り。内面ナデ、口縁部横ナデ。	10	
147	H—54	甕	15.8	(6.8)	①中粒②極良③にぶい橙④口縁部のみ	外面ナデ、篦磨き。内面口縁部刷毛後横ナデ、肩部ナデ後篦磨き。	12外	
148	H—54	S字台甕	13.7	(3.2)	①細粒②極良③褐灰④口縁部のみ	外面刷毛目・ナデ。内面指ナデ・ナデ・刷毛目、口縁部横ナデ。	180外	
149	H—54	S字台甕	13.6	(20.8)	①中粒②良好③浅黄橙④甕部のみ	外面刷毛・ナデ後刷毛目。内面ナデ、頸部指オサエ。	100外	
150	H—54	S字台甕	14.6	(28.7)	①中粒②極良③灰白④⅔	外面刷毛目。内面ナデ。	21外	
151	H—56	高杯	——	(4.9)	①細粒②極良③明褐④脚部のみ	外面篦磨き、裾ナデ。内面ナデ。透孔ずれた3単位。	10	
152	H—56	壺	15.4	(6.3)	①中粒②極良③橙④口縁部のみ	外面口縁部刻み後篦磨き。頸部篦磨き。内面篦磨き。	——	樽式系
153	H—56	器台	8.2	9.5	①中粒②極良③にぶい黄橙④⅚	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。	23	欠山式に類似
154	H—56	S字台甕	14.4	(11.5)	①粗粒②良好③にぶい橙④口縁部のみ	外面刷毛目。内面頸部刷毛目、胴部ナデ。	1外	
155	H—57	小甕	[8.2]	(6.9)	①中粒②良好③橙④口縁部～胴部¼	外面口縁部～肩部縄文LR、胴部ナデ。内面篦磨き。	178	赤井戸式
156	H—57	高杯	18.7	(4.7)	①細粒②極良③橙④杯部½	内外面とも篦磨き。	92外	
157	H—57	壺	——	(10.2)	①中粒②極良③にぶい橙④破片	外面頸部T字文、肩部ナデ後篦磨き。内面横方向の刷毛目、口縁部ナデ。	1	樽式系
158	H—59	甕	10.7	(3.4)	①中粒②極良③褐④口縁部½	外面縄文R、頸部ナデ。内面ナデ。	770	赤井戸式
159	H—59	小鉢	6.0	4.6	①細粒②極良③橙④½	内外面とも篦磨き。	297外	
160	H—59	台付甕	——	(5.7)	①中粒②良好③にぶい橙④台部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。	767	
161	H—59	高杯	——	(6.5)	①細粒②極良③橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ、篦磨き。透孔ずれた3単位。	500	
162	H—59	高杯	——	(5.6)	①中粒②良好③にぶい黄橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面篦削り。	1054	
163	H—59	高杯	——	(6.4)	①細粒②極良③暗赤④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。脚部内面除き赤色塗彩	724外	赤色塗彩
164	H—59	甕	12.3	(9.1)	①中粒②良好③橙④口縁部½	外面口縁部～肩部波状文、胴部篦磨き。内面篦磨き。	490外	樽式系
165	H—59	大甕	15.7	(13.0)	①中粒②良好③にぶい橙④口縁部のみ	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文。内面篦磨き。	510外	樽式系
166	H—61	甕	[12.6]	(5.0)	①細粒②極良③にぶい橙④口縁部⅔	外面波状文。内面篦磨き。	566外	樽式系
167	H—61	甕	[14.7]	(5.0)	①中粒②極良③橙④口縁部破片	外面縄文LR、輪積痕を残す。内面篦磨き。	197	赤井戸式
168	H—61	壺	17.2	(9.0)	①中粒②良好③橙④口縁部のみ	外面口縁部篦磨き、頸部簾状文、肩部波状文。内面口縁部篦磨き、肩部ナデ。	1009外	樽式系
169	H—62	小形土器	——	(2.5)	①細粒②極良③にぶい黄橙④底部破片	外面内外面ともに篦磨き。	734	
170	H—62	小形土器	——	(3.3)	①細粒②極良③褐灰④底部のみ	外面篦磨き・ナデ。内面刷毛目。	632外	
171	H—62	小台付甕	6.7	6.8	①中粒②極良③明赤褐④⅚	外面篦磨き。内面口縁部篦磨き、頸部～ナデ。	1170外	
172	H—62	椀	[10.4]	6.8	①粗粒②良好③赤④破片	外面篦削り。内面ナデ。	546外	
173	H—62	高杯	——	(7.6)	①細粒②極良③にぶい橙④脚部⅔	外面篦磨き。内面脚部ナデ、裾横ナデ。	1153外	

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
174	H—62	台付甕	——	(7.4)	①中粒②良好③灰白④台部¾	内外面とも刷毛目。	1271外	
175	H—62	壺	——	(9.8)	①細粒②極良③にぶい橙④破片	外面肩部縄文ＬＲ、胴部篦磨き・赤色塗彩。内面ナデ、底部刷毛目。	596外	南関東系 赤色塗彩
176	H—62	甕	[11.0]	(12.9)	①粗粒②良好③にぶい黄橙④⅜	外面ナデ、底部篦削り。内面刷毛後ナデ。	166外	
177	H—62	台付甕	15.0	(13.0)	①粗粒②良好③にぶい橙④⅝	外面頸部～肩部縄文ＬＲ、胴部ナデ、口縁部輪積痕。内面篦磨き。	1200	赤井戸式
178	H—62	Ｓ字台甕	[15.4]	(5.2)	①中粒②良好③浅黄橙④口縁部¼	外面ナデ・刷毛目。内面横ナデ・指オサエ。	759外	
179	H—62	甕	[17.5]	(14.6)	①中粒②良好③浅黄④口縁部～胴部¼	外面刷毛目。内面ナデ、口縁部刷毛目。	——	
180	H—62	壺	16.8	(10.0)	①中粒②極良③浅黄橙④⅙	外面肩部篦磨き。内面刷毛目、頸部指オサエ。	221外	
181	H—63	高杯	22.7	16.6	①中粒②良好③明赤褐④ほぼ完形	外面口縁部横ナデ、胴部・裾暗紋、底部篦磨き、脚部ナデ。内面杯部篦磨き、脚部絞り目・ナデ、裾横ナデ。	170	
182	H—63	甕	18.7	25.3	①粗粒②良好③橙④ほぼ完形	外面ナデ、口縁部横ナデ・指オサエ。内面ナデ	150	
183	H—64	高杯	[15.8]	(9.7)	①粗粒②良好③橙④⅓	外面刷毛後篦削り、接合部刷毛目。内面刷毛後篦削り、脚部刷毛目。	541	
184	H—64	器台	7.0	6.7	①中粒②良好③明黄褐④½	外面杯部ナデ、脚部篦磨き。内面ナデ。透孔３単位。	1157外	
185	H—64	蓋	——	3.9	①中粒②良好③黄橙④ツマミのみ	外面刷毛目。内面ナデ。	——	
186	H—64	高杯	10.3	(4.4)	①細粒②極良③赤④杯部のみ	内外面とも篦磨き。脚部内面を除き赤色塗彩。透孔単位不明。	1292	赤色塗彩
187	H—64	壺	21.2	(34.1)	①中粒②良好③橙④⅔	外面篦磨き。内面ナデ。	926外	
188	H—64	器台	8.9	(8.1)	①細粒②極良③橙④⅔	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔３単位。	444	
189	H—64	台付甕	——	(4.3)	①粗粒②良好③にぶい橙④台部のみ	外面刷毛後ナデ。内面杯部ナデ、脚部刷毛後ナデ。	940	
190	H—64	台付甕	——	(6.3)	①中粒②良好③にぶい橙④台部⅜	内外面とも刷毛目。	541	
191	H—64	Ｓ字台甕	13.8	(6.0)	①中粒②良好③橙④口縁部½	外面刷毛目。内面口縁部横ナデ頸部指オサエ。	1514外	
192	H—64	Ｓ字台甕	[17.6]	(8.0)	①細粒②極良③浅黄④口縁部～胴部¼	外面篦削り。内面ナデ。	230外	
193	H—64	坩	[23.4]	(9.9)	①中粒②極良③赤④破片	外面口縁部篦磨き。頸部刷毛目。内面刷毛目。	487外	
194	H—64	壺	——	(18.1)	①中粒②極良③にぶい橙④⅔	外面篦磨き、口縁部刷毛後ナデ。内面ナデ・篦磨き。	1854	炉体土器
195	H—65	坩	9.2	9.8	①中粒②極良③明赤褐④ほぼ完形	外面口縁部～肩部横ナデ後刷毛目、胴部ナデ・篦削り。内面口縁部横ナデ、胴部ナデ。	140	
196	H—65	坩	14.2	20.0	①中粒②極良③にぶい橙④ほぼ完形	内外面とも口縁部暗紋、胴部ナデ。	175	
197	H—65	坩	10.2	11.9	①中粒②良好③明赤褐④ほぼ完形	外面口縁部～肩部横ナデ・ナデ後暗紋、胴部篦削り。内面口縁部篦磨き、胴部ナデ。	197外	
198	H—65	坩	8.6	8.9	①中粒②極良③にぶい褐④ほぼ完形	外面口縁部横ナデ、肩部ナデ、胴部篦削り。内面口縁部横ナデ、胴部ナデ。	190	
199	H—65	高杯	19.3	(7.5)	①中粒②極良③橙④杯部のみ	外面ナデ・篦削り。内面ナデ。	150外	
200	H—65	高杯	19.8	(7.3)	①中粒②極良③明赤褐④杯部のみ	外面刷毛後ナデ。内面口縁部横ナデ、胴部刷毛目。	100外	
201	H—65	高杯	20.0	15.3	①中粒②良好③橙④¾	外面篦磨き状ナデ。内面ナデ。	198外	
202	H—65	高杯	20.2	15.8	①細粒②極良③にぶい橙④ほぼ完形	外面杯部・脚部暗紋、接合部篦磨き。内面杯部暗紋、脚部絞り目。	199	
203	H—65	甑	12.6	7.5	①中粒②極良③橙④ほぼ完形	外面口縁部横ナデ、胴部ナデ、底部篦削り。内面口縁部横ナデ、胴部ナデ、底部篦ナデ。	200外	
204	H—65	高杯	——	(10.1)	①細粒②極良③橙④脚部¾	外面篦磨き。内面篦削り。	88	
205	H—65	甕	[13.7]	(6.9)	①粗粒②極良③橙④口縁部½	内外面ともナデ。	——	
206	H—65	甕	15.7	21.5	①中粒②極良③明赤褐④⅝	内外面ともナデ。	146外	
207	H—65	甕	15.1	26.8	①中粒②良好③橙④完形	外面刷毛後ナデ。内面刷毛目・ナデ。	1	

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
208	H－66	小甕	10.9	9.4	①粗粒②良好③にぶい橙④⅚	外面篦削り・ナデ。内面ナデ。	416外	
209	H－66	坩	——	(10.6)	①中粒②極良③にぶい橙④⅚	内外面ともナデ。	378	
210	H－66	坩	[10.3]	11.9	①中粒②良好③赤褐④½	内外面ともナデ。	161	
211	H－82	壺	[15.2]	(7.0)	①中粒②良好③浅黄④口縁部½	外面刷毛後ナデ、頸部～篦磨き。外面刷毛後ナデ。	598	
212	H－82	甕	[15.3]	(2.3)	①中粒②良好③にぶい④口縁部½	外面横ナデ。内面ナデ。	876外	
213	H－82	壺	16.4	(5.4)	①中粒②極良③明黄褐④口縁部のみ	外面篦磨き。内面篦磨き、頸部篦削り。	762外	
214	H－82	台付甕	[12.3]	(7.7)	①中粒②極良③にぶい橙④⅙	外面口縁部～肩部縄文ＲＬ、胴部篦磨き。内面篦磨き。	1108	赤井戸式
215	H－82	甕	13.8	(10.6)	①中粒②極良③にぶい黄④⅓	外面口縁部～肩部縄文ＲＬ。内面篦磨き。	492	赤井戸式
216	H－82	Ｓ字台甕	[18.5]	(9.1)	①中粒②極良③淡黄④破片	外面刷毛目。内面ナデ。	734	
217	H－82	甕	15.0	30.6	①粗粒②極良③淡黄④⅔	外面篦磨き、口縁部輪積痕、指オサエ。内面篦磨き。	70外	赤井戸式
218	H－82	器台	7.4	(5.6)	①中粒②良好③橙④⅜	外面篦磨き。内面口縁部篦磨き。透孔４単位。	377外	
219	H－82	台付甕	——	(6.4)	①粗粒②良好③橙④台部のみ	外面底部刷毛目、台部ナデ。内面底部刷毛目、台部篦削り。	215外	
220	H－82	高杯	——	(8.4)	①細粒②極良③浅黄橙④½	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ。透孔３単位。	954外	
221	H－82	高杯	——	(5.2)	①中粒②良好③浅黄橙④脚部のみ	外面篦磨き、裾部ナデ。内面ナデ。	914	
222	H－82	小甕	9.6	(5.1)	①中粒②良好③にぶい褐④口縁部½	内外面とも刷毛目。	150	
223	H－82	台付甕	9.7	9.5	①中粒②良好③にぶい黄④ほぼ完形	外面篦磨き。内面甕部篦磨き、台部ナデ。	715外	
224	H－82	高杯	——	(7.4)	①細粒②極良③橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。	525	
225	H－82	高杯	——	(7.9)	①細粒②極良③黄橙④脚部のみ	外面篦磨き。内面ナデ。	721外	
226	H－82	台付甕	10.5	(10.1)	①粗粒②良好③にぶい橙④⅚	内外面ともナデ。	890	
227	H－82	台付甕	——	(13.1)	①中粒②極良③浅黄④台部のみ	外面底部刷毛目、台部篦磨き・ナデ。内面底部篦磨き、台部ナデ。	768外	
228	H－82	小壺	——	(12.9)	①中粒②良好③橙④⅜	外面ナデ。内面ナデ、肩部指オサエ。	965外	
229	H－82	甕	[13.0]	22.2	①中粒②良好③浅黄④ほぼ完形	外面口縁部・肩部波状文、頸部簾状文、胴部篦磨き。内面口縁部～肩部ナデ、胴部篦磨き。	948外	樽式系
230	H－82	甕	14.5	(19.3)	①中粒②極良③橙④⅜	外面口縁部～胴部上半縄文ＲＬ、胴部下半～篦磨き。内面口縁部篦磨き、胴部ナデ。	716外	赤井戸式
231	H－83	高杯	18.4	13.6	①中粒②良好③橙④⅚	外面口縁部横ナデ、胴部ナデ、脚部刷毛後ナデ・裾横ナデ。内面溝切痕・絞り目。	21外	
232	H－84	台付甕	——	(5.8)	①粗粒②良好③浅黄橙④台部⅔	外面刷毛後ナデ。内面刷毛目。	391外	
233	H－84	甕	10.4	(4.4)	①中粒②極良③灰黄褐④口縁部½	外面ナデ後篦磨き。内面篦磨き。	555外	
234	H－84	小甕	7.0	5.9	①中粒②極良③明赤褐④完形	外面口縁部・胴部篦磨き、頸部刷毛目、底部篦削り。内面篦磨き、底部ナデ。	615	
235	H－84	高杯	16.4	(5.9)	①細粒②極良③浅黄橙④杯部½	内外面とも篦磨き。	508	
236	H－84	甕	10.2	15.8	①粗粒②極良③にぶい褐④完形	外面口唇部～肩部縄文ＬＲ、胴部～底部篦削り後篦磨き。内面篦磨き。	540	赤井戸式
237	H－84	台付甕	——	(5.3)	①粗粒②良好③にぶい黄橙④台部½	外面底部刷毛目、台部ナデ。内面刷毛目。	249	
238	H－84	甑	11.5	8.2	①細粒②極良③橙④⅜	外面刷毛後篦磨き、底部篦磨き・ナデ。内面篦磨き。	652外	
239	H－84	甕	12.2	14.9	①中粒②極良③橙④ほぼ完形	外面口縁部～肩部刷毛後ナデ、胴部篦磨き、底部ナデ。内面刷毛目・篦磨き・ナデ。	500外	樽式系
240	H－84	壺	[20.1]	(4.6)	①中粒②極良③浅黄橙④口縁部破片	外面刷毛後ナデ。内面ナデ・刷毛目。	303外	
241	H－85	台付甕	——	(5.2)	①中粒②極良③浅黄橙④台部½	内外面とも刷毛目。	219外	
242	H－85	器台	6.4	(6.3)	①中粒②良好③にぶい黄橙④⅔	外面杯部篦磨き、脚部刷毛後篦磨き。内面刷毛目。透孔４単位。	293	穿孔なし。
243	H－85	台付甕	——	(5.6)	①中粒②良好③明褐灰④台部⅔	外面刷毛目、ナデ。内面刷毛目。	121	

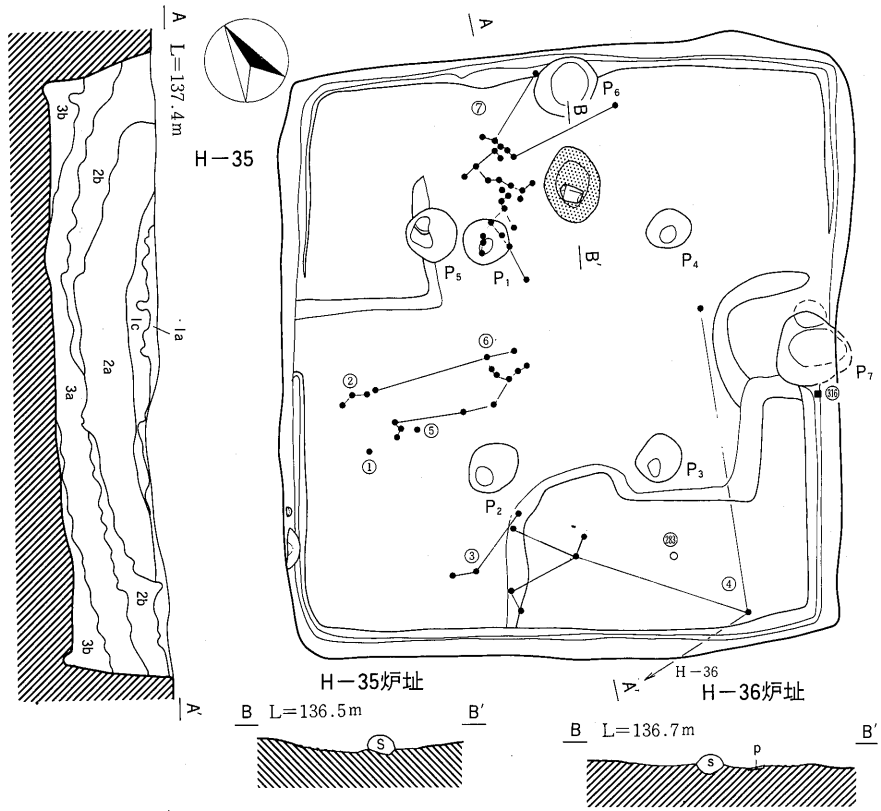
番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
244	H－85	器台	7.9	7.8	①細粒②極良③にぶい橙④½	外面篦磨き。内面杯部篦磨き、脚部ナデ・櫛状の工具による強い線。透孔3単位。	133外	
245	H－85	壺	12.4	(7.9)	①中粒②良好③明赤褐④口縁部½	外面刷毛後篦磨き。内面口縁篦磨き、頸部ナデ	122外	
246	H－85	台付甕	——	(5.7)	①粗粒②良好③にぶい橙④台部⅔	外面刷毛目・ナデ。内面底部ナデ、台部刷毛目・ナデ。	224外	
247	H－85	高杯	[11.0]	(5.6)	①細粒②極良③浅黄④¼	外面篦磨き。内面刷毛後篦磨き。透孔2段交互に3単位。	145	
248	H－85	甕	[17.7]	(6.0)	①中粒②良好③にぶい褐④口縁部破片	外面刷毛目。内面ナデ、口縁部横ナデ。	155	
249	H－85	壺	17.2	(5.2)	①細粒②極良③橙④口縁部⅔	外面刷毛後ナデ。内面篦磨き。	395外	
250	H－85	壺	21.7	(6.6)	①中粒②極良③淡黄④口縁部のみ	外面ナデ・刷毛目。内面篦磨き。	87外	
251	H－86	台付甕	——	(4.2)	①中粒②良好③灰白④台部のみ	外面接合部刷毛目、脚部ナデ。内面ナデ。	225	
252	H－86	台付甕	——	(5.8)	①中粒②良好③明褐④台部½	外面刷毛目。内面刷毛後ナデ。	71	
253	H－86	甕	18.2	(11.6)	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁部½	外面篦磨き、口縁部指オサエ・輪積痕。内面篦磨き・ナデ。	222外	赤井戸式
254	H－90	甕	12.9	(10.7)	①粗粒③良好④橙④⅓	外面口縁部～肩部縄文ＬＲ、胴部篦磨き。内面篦磨き。	50	赤井戸式
255	Z－1	壺	[15.3]	(7.8)	①細粒②極良③にぶい橙④口縁部破片	外面口縁部横ナデ・篦磨き。内面ナデ。	36	樽式系か
256	Z－1	高杯	——	(8.4)	①中粒②良好③にぶい橙④脚部½	外面篦磨き。内面ナデ。	145	
257	D－1	甕	——	(5.0)	①中粒②不良③灰黄褐④底部破片	外面刷毛目・ナデ、底部木葉痕あり。内面篦磨き・ナデ。	17外	
258	D－4	甕	23.0	(27.8)	①粗粒②良好③にぶい黄橙④⅔	内外面とも刷毛後ナデ。	1	
259	D－2	高杯	19.2	(5.6)	①中粒②良好③黄褐④杯部⅓	外面口縁部横ナデ、杯部篦磨き、接合部ナデ。内面篦磨き。	4	
260	D－2	甑	19.0	14.0	①粗粒②良好③橙④⅔	外面口縁部縄文ＬＲ、胴部篦磨き、底部篦削り。内面篦磨き、底部ナデ。	10外	赤井戸式
261	W－8	杯	[13.5]	(3.7)	①中粒②極良③暗灰黄④口縁部破片	外面口縁部横ナデ、胴部篦削り。内面横ナデ。	——	
262	H－84	土玉	《長1.6・幅1.6・厚1.3・重3.0》①細粒②良好③橙④完形⑤ナデ。				130	
263	モ－31G	勾玉	① 2.1 ② 1.3 ③ 0.7 ④ 2.0 ⑤ 完形⑥滑石				——	H－46に所属か
264	H－46	管玉	① 1.6 ② 0.7 ③ 0.6 ④ 1.0 ⑤ 完形⑥滑石				50	
265	H－82	勾玉	《長(2.1)・幅(1.8)・厚1.3・重(4.0)》①細粒②良好③橙④⅓残存⑤ナデ。				865	
266	H－45	土製勾玉	《長 4.6 ・幅 2.2 ・厚1.6・重13.0 》①細粒②良好③橙④完形⑤ナデ。				255	
267	H－57	手捏土器	2.5	1.7	①細粒②良好③橙④完形	外面指オサエの後ナデ、内面ナデ。	200	
268	H－49	手捏土器	3.0	2.8	①細粒②良好③にぶい黄橙④完形	折り返し口縁。外面指オサエ、内面ナデ。	1082	
269	H－53	手捏土器	3.4	2.5	①細粒②良好③黒褐④完形	外面指オサエ、内面ナデ。	477	
270	H－49	手捏土器	——	(1.0)	①細粒②良好③にぶい橙④台部完形	指オサエの後ナデ。	3169	
271	H－49	手捏土器	——	(1.1)	①細粒②良好③淡黄④⅔	外面指オサエ、内面ナデ。	878	
272	H－59	手捏土器	2.9	1.8	①細粒②良好③赤橙④完形	外面指オサエ、内面ナデ。	900	
273	H－59	手捏土器	[3.6]	(1.3)	①細粒②良好③橙④⅓	折り返し口縁。外面指オサエ。	P_2フク土	
274	H－48	手捏土器	[3.8]	1.5	①細粒②良好③黄褐④ほぼ完形	口唇外縁に刻み。外面指オサエ、内面ナデ。	111	
275	H－82	手捏土器	4.2	1.7	①細粒②良好③橙④¼	折り返し口縁。外面指オサエ、内面ナデ。	867	
276	H－53	手捏土器	——	(1.4)	①細粒②良好③浅黄橙④¼	外面指オサエ、内面ナデ。	484	
277	H－53	手捏土器	4.3	2.0	①細粒②良好③浅黄橙④完形	内外面ともナデ。内面は丁寧なナデ。	584	
278	H－85	手捏土器	4.0	1.6	①細粒②良好③浅黄橙④完形	ナデ。	P_4方	製作仕損じか
279	H－49	土製品	《長 2.9 ・幅2.7・厚1.0・重(7.0)》①細粒②良好③暗褐④破片⑤ナデ				3821	土器装飾の一部か
280	H－59	土製品	《長(5.2)・幅1.1・厚0.8・重(6.0)》①細粒②良好③にぶい黄褐④破片⑤ナデ				323	〃
281	モ－35G	土製品	《長(3.7)・幅1.1・厚0.7・重(4.0)》①細粒②良好③黒褐④破片⑤ナデ				——	H－59の所属か
282	H－61	紡錘車	《径4.0・厚2.0・重(26.0)・孔径0.7》①細粒②極良③橙④¾残存⑤磨き。				——	
283	H－35	紡錘車	《径5.5・厚1.7・重(37.0)・孔径0.6》①細粒②良好③橙④½残存⑤磨き。				37	
284	H－59	紡錘車	《径4.6・厚1.2・重 34.0 ・孔径0.6》①細粒②極良③橙④完形⑤磨き。				780	
285	H－45	紡錘車	《径4.4・厚1.3・重(13.0)・孔径0.7》①細粒②良好③橙④½残存⑤磨き。				53	
286	ム－39G	紡錘車	《径6.5・厚1.3・重(32.0)・孔径0.7》①細粒②良好③浅黄橙④½残存⑤磨き。				——	H－61の所属か
287	H－65	砥石	① 4.9 ② 1.4 ③ 1.7 ④ 17.0 ⑤完形⑥流紋岩(4面使用)				237	
288	T－1	土製品	《長(3.7)・幅1.1・厚0.7・重(10.0)》①中粒②良好③暗褐④破片⑤ナデ				59	
289	H－64	土製品	《長(6.1)・幅4.7・厚3.0・重(76.0)》①細粒②極良③橙④破片⑤ナデ				1273	
290	H－49	算盤玉状土製品	《径3.6・厚3.4・重25.0・孔径0.3》①細粒②極良③浅黄橙④完形⑤磨き。				3300	
291	H－49	匙形土製品	《長 10.7・幅(5.7)・厚2.3・匙部長8.6・匙部深1.0・重81.0》①細粒②極良③橙④ほぼ完形⑤磨き。				3164	周縁に摩耗痕

番号	出土位置	器形	大きさ 口径 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
292	へ—39G	瓦塔	《長(6.2)・幅(4.3)・厚2.7・重(78.0)》	①細粒②極良③灰白④破片⑤ナデ		——	
293	H—42	土製円盤	《径4.4・厚1.4・重(22.0)》	①細粒②良好③橙④完形⑤部分的に研磨。		86	
294	H—45	土製円盤	《径3.9・厚0.9・重(9.0)》	①細粒②良好③赤褐④完形⑤ほぼ全周研磨。		222	
295	H—49	土製円盤	《径4.4・厚0.6・重(9.0)》	①細粒②良好③橙④完形⑤全周研磨。		7142	櫛描波状文
296	H—49	鉄器	①(3.3)② 1.1 ③ 0.8 ④(3.0)⑤破片			——	
297	H—66	鉄器	①(5.2)②(1.1)③(0.3)④(5.0)⑤破片			——	
298	H—61	鉄器	①(2.6)②(0.8)③(0.2)④(1.0)⑤破片			1029	
299	H—50	鉄器	①(2.3)②(0.8)③(0.4)④(2.0)⑤破片			——	
300	表採	鉄器	①(2.6)②(2.2)③(0.8)④(7.0)⑤破片			——	
301	H—49	鉄器	①(3.1)②(1.8)③(0.1)④(3.0)⑤破片			3770	
302	H—53	鉄器	①(2.7)②(0.2)③(0.2)④(3.0)⑤破片			513	
303	H—82	鉄器	①(1.8)②(4.1)③(0.2)④(5.0)⑤破片			240	
304	H—49	鉄器	①(2.6)②(2.6)③(0.4)④(9.0)⑤破片			760	
305	T—3	鉄器	①(2.4)②(1.4)③(0.1)④(2.0)⑤破片			3	
306	H—59	鉄器	①(3.8)②(2.3)③(0.2)④(4.0)⑤破片			850	
307	H—90	鉄器	①(3.3)②(2.2)③(0.1)④(3.0)⑤破片			120	
308	H—47	鉄器	①(2.9)②(3.4)③(0.1)④(4.0)⑤破片			560	
309	H—46	敲石	① 9.4 ② 2.5 ③ 1.2 ④ 36.0	⑤完形	⑥雲母石英片岩	25	
310	H—49	砥石	①11.0 ② 7.5 ③ 4.4 ④ 238.0	⑤破片	⑥粗粒安山岩(1面使用)	3060	
311	H—84	砥石	①12.5 ② 6.5 ③ 3.4 ④ 310.0	⑤破片	⑥流紋岩 (3面使用)	494	
312	H—84	砥石	①15.4 ② 9.9 ③ 6.8 ④1000.0	⑤完形	⑥粗粒安山岩(4面使用)	519	
313	H—83	敲石	①13.9 ② 5.7 ③ 3.9 ④ 500.0	⑤完形	⑥粗粒安山岩(先端使用)	5	
314	H—82	敲石	①11.2 ② 7.6 ③ 5.8 ④ 575.0	⑤完形	⑥粗粒安山岩(2カ面使用)	——	
315	H—49	凹石	① 9.7 ② 7.2 ③ 6.0 ④ 456.0	⑤完形	⑥粗粒安山岩(3面使用)	6404	
316	H—35	砥石	①15.6 ②11.8 ③ 7.8 ④1400.0	⑤完形	⑥粗粒安山岩(4面使用)	40	
317	H—66	敲石	①11.0 ② 8.6 ③ 6.4 ④ 815.0	⑤完形	⑥粗粒安山岩(先端使用)	197	
318	マ—38G	砥石	① 8.8 ② 4.3 ③ 3.1 ④ 166.0	⑤完形	⑥砥沢石 (4面使用)	——	
319	H—61	砥石	① 4.1 ② 4.0 ③ 1.9 ④ 29.0	⑤完形	⑥粗粒安山岩(2面使用)	353	
320	H—63	砥石	①22.8 ②12.1 ③ 4.5 ④2200.0	⑤完形	⑥流紋岩 (4面使用)	352	＋H-83
321	JT—1	縄文深鉢	①細粒②極良③淡黄④口縁部⑤	口縁部無文・縄文LR		1	加曽利E 4
322	JT—1	縄文深鉢	①中粒②極良③淡黄④胴部⑤縄文LR			5	加曽利E 4
323	JT—1	縄文深鉢	①中粒②極良③浅黄橙④胴部⑤無文部			3	称名寺
324	JT—1	縄文深鉢	①中粒②極良③浅黄橙④胴部⑤縄文RL			4	加曽利E 4
325	JT—1	縄文深鉢	①中粒②極良③淡黄④把手⑤円形文・沈線			6	称名寺
326	H—64	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤内外とも貝殻条痕文			931	早期終末
327	H—66	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤内外とも貝殻条痕文			496	早期終末
328	オ—24G	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤内外とも貝殻条痕文			——	早期終末
329	オ—24G	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④胴部⑤外面に縄文、内面は貝殻条痕文。			——	早期終末～前期初頭
330	オ—24G	縄文深鉢	①繊維②良好③明黄褐④胴部⑤外面に縄文、内面は貝殻条痕文。縄文LR。			——	早期終末～前期初頭
331	ケ—25G	縄文深鉢	①中粒②良好③浅黄橙④口縁部⑤集合沈線			——	諸磯a
332	ト—37G	縄文深鉢	①中粒②良好③淡黄④口縁部⑤円形刺突・集合沈線			——	諸磯a
333	メ—28G	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄褐④胴部⑤刻み・鋸歯状平行沈線			——	諸磯a
334	マ—29G	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄褐④胴部⑤鋸歯状平行沈線			——	諸磯a
335	へ—33G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④口縁部⑤連続爪形文・円管文			——	諸磯a
336	ホ—34G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④胴部⑤連続爪形文・円管文			——	諸磯a
337	へ—34G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④胴部⑤連続爪形文・円管文			——	諸磯a
338	ノ—40G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④口縁部⑤口唇刻み・刻み・沈線			——	五領ケ台
339	コ—22G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④胴部⑤沈線・連続刺突			——	五領ケ台
340	テ—33G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④胴部⑤沈線・連続刺突			——	五領ケ台
341	ネ—39G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④胴部⑤沈線・連続刺突			——	五領ケ台
342	H—64	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④胴部⑤沈線・連続刺突			834外	五領ケ台
343	テ—32G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④胴部⑤沈線・連続刺突			——	五領ケ台
344	フ—39G	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④底部⑤沈線			——	五領ケ台
345	ノ—31G	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤沈線と磨消縄文・縄文LR			——	称名寺1
346	ヒ—34G	縄文深鉢	①中粒②良好③黄灰④胴部⑤沈線と磨消縄文・縄文LR			——	称名寺
347	ハ—34G	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤微隆起帯による円形貼付文			——	称名寺
348	キ—24G	縄文深鉢	①中粒②良好③橙④口縁部⑤沈線と磨消縄文・縄文LR・鎖状隆帯			——	堀之内2
349	へ—29G	縄文深鉢	①中粒②良好③浅黄④口縁部⑤隆帯・縄文LR・沈線と刻み			——	加曽利E 2
350	セ—19G	縄文深鉢	①中粒②良好③ 灰④口縁部⑤条線			——	堀之内
351	キ—24G	縄文深鉢	①中粒②良好③橙④底部⑤無文部			——	堀之内
352	ハ—34G	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④底部⑤無文部			——	堀之内
353	ケ—21G	石鏃	① 2.0 ② 1.5 ③ 0.3 ④ 0.5	⑤完形	⑥黒曜石	——	凹基無茎式
354	H—63	石鏃	①(2.2)② 1.1 ③ 0.4 ④ 0.5	⑤先端・基部欠損	⑥黒曜石	328	鋸歯縁
355	へ—38G	石鏃	①(2.6)② 1.5 ③ 0.3 ④(1.0)	⑤先端・基部欠損	⑥チャート	——	鋸歯縁

番号	出土位置	器形	大きさ 口径 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
356	ム—30G	石鏃	① 2.8 ② 1.5 ③ 0.5 ④ 1.0 ⑤欠損⑥黒色頁岩			——	飛行機鏃気味
357	H—50	石鏃	① 4.0 ② 1.5 ③ 0.6 ④ 3.0 ⑤欠損⑥黒色頁岩			120	凹基無茎式
358	H—49	石匙	① 3.4 ② 2.4 ③ 0.7 ④ 5.0 ⑤完形⑥チャート			1734	横形石匙
359	ヌ—9G	打製石斧	①15.6 ② 8.5 ③ 3.8 ④665.0 ⑤完形⑥黒色頁岩			——	片刃形
360	サ—39G	打製石斧	① 9.3 ② 5.9 ③ 1.6 ④ 79.0 ⑤完形⑥黒色頁岩			——	分銅形
361	I—5G	ｽﾀﾝﾌﾟ形石器	①10.8 ②10.0 ③ 4.9 ④735.0 ⑤完形⑥ホルンフェルス			——	
362	D—11	常滑甕	①細粒②極良③暗褐④胴部⑤内外面に叩き。			——	
363	W—9	常滑甕	①細粒②極良③にぶい赤褐④胴部⑤内外面に叩き。押印。			——	
364	W—9	常滑甕	①細粒②極良③にぶい赤褐④胴部⑤内外面に叩き。			——	

註) 1．縄文土器・常滑甕の観察項目は、①胎土②焼成③色調④残存⑤文様・整形方法の順で記載した。
2．玉・土製品・石器・石製品の観察項目は、①最大長②最大幅③最大厚④重さ⑤残存⑥石材の順で記載した。
3．① 胎土は細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0mm1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。
② 焼成は極良、良好、不良の3段階評価。
③ 色調は土器外面を観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。
④ 大きさの単位はcm、gであり、現存値を( )、復元値〔 〕で示した。その他の小片については所属部位を記載した。

H-35～37号
住居址層序説明
1 a 層　にぶい黄褐色粗砂層。
1 b 層　オリーブ褐色粗砂層。
1 c 層　黒褐色粗砂層。
2 a 層　黒色細砂層。「C混じり黒土層」。
2 b 層　褐色細砂層。
2 c 層　褐色細砂層。
3 a 層　黄褐色細砂層。
3 b 層　明黄褐色細砂層。
3 c 層　にぶい黄褐色細砂層。



H-38号
住居址層序説明
1　層　暗褐色粗砂層。
2 a 層　黒褐色細砂層。「C混じり黒土層」。
2 b 層　黒褐色細砂層。
3　層　オリーブ褐色細砂層。
4　層　黒褐色細砂層。
4 a 層　オリーブ褐色細砂層。
5 a 層　黄褐色細砂層。
5 b 層　明黄褐色細砂層。
5 c 層　明黄褐色細砂層。

H-38号住居址炉址
層序説明
1　層　ローム土主体。焼土混じり。

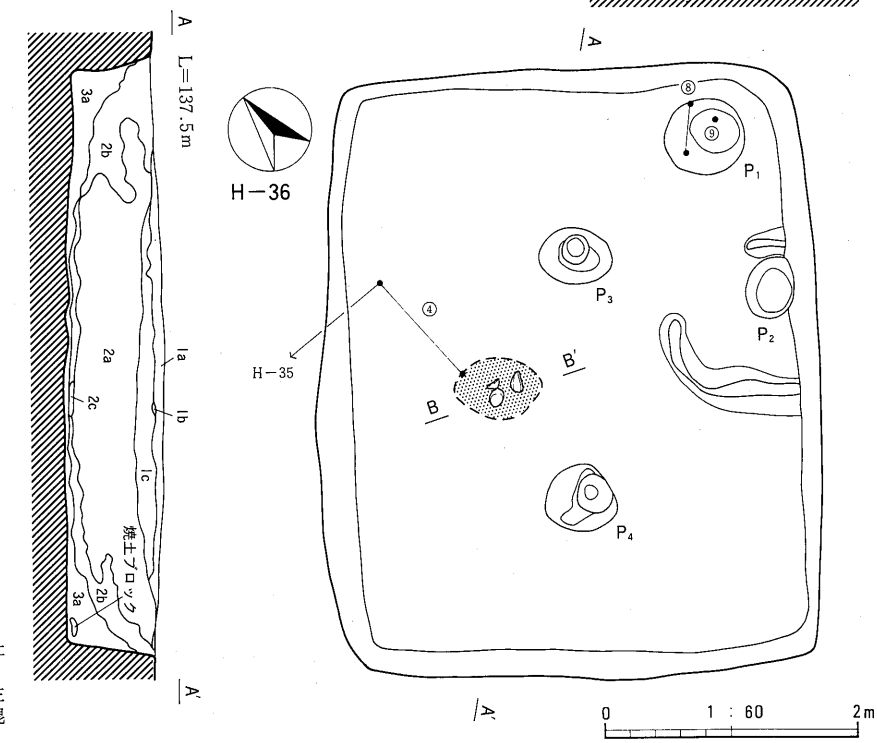


Fig.13　H－35・36号住居址

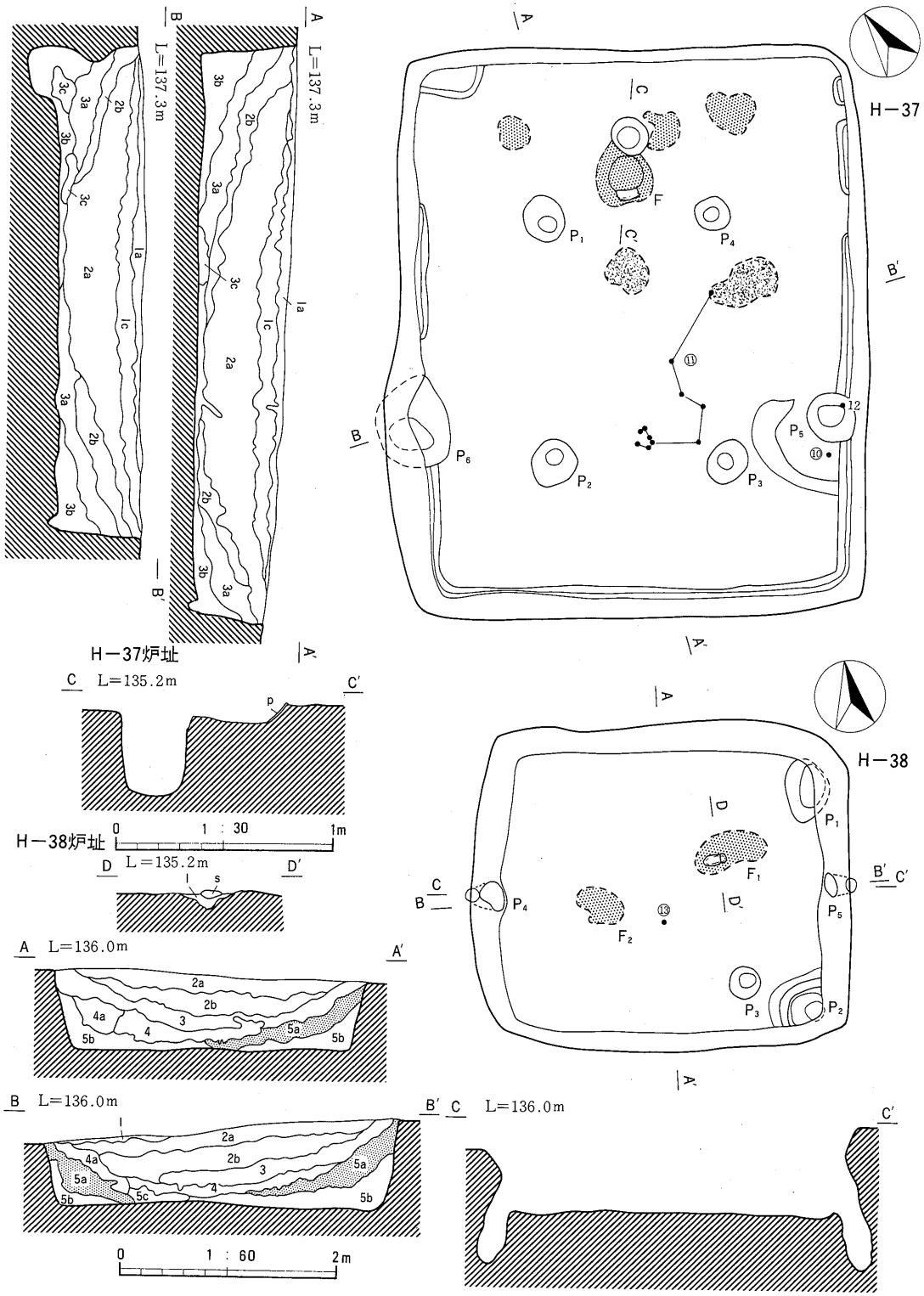


Fig.14 H−37・38号住居址

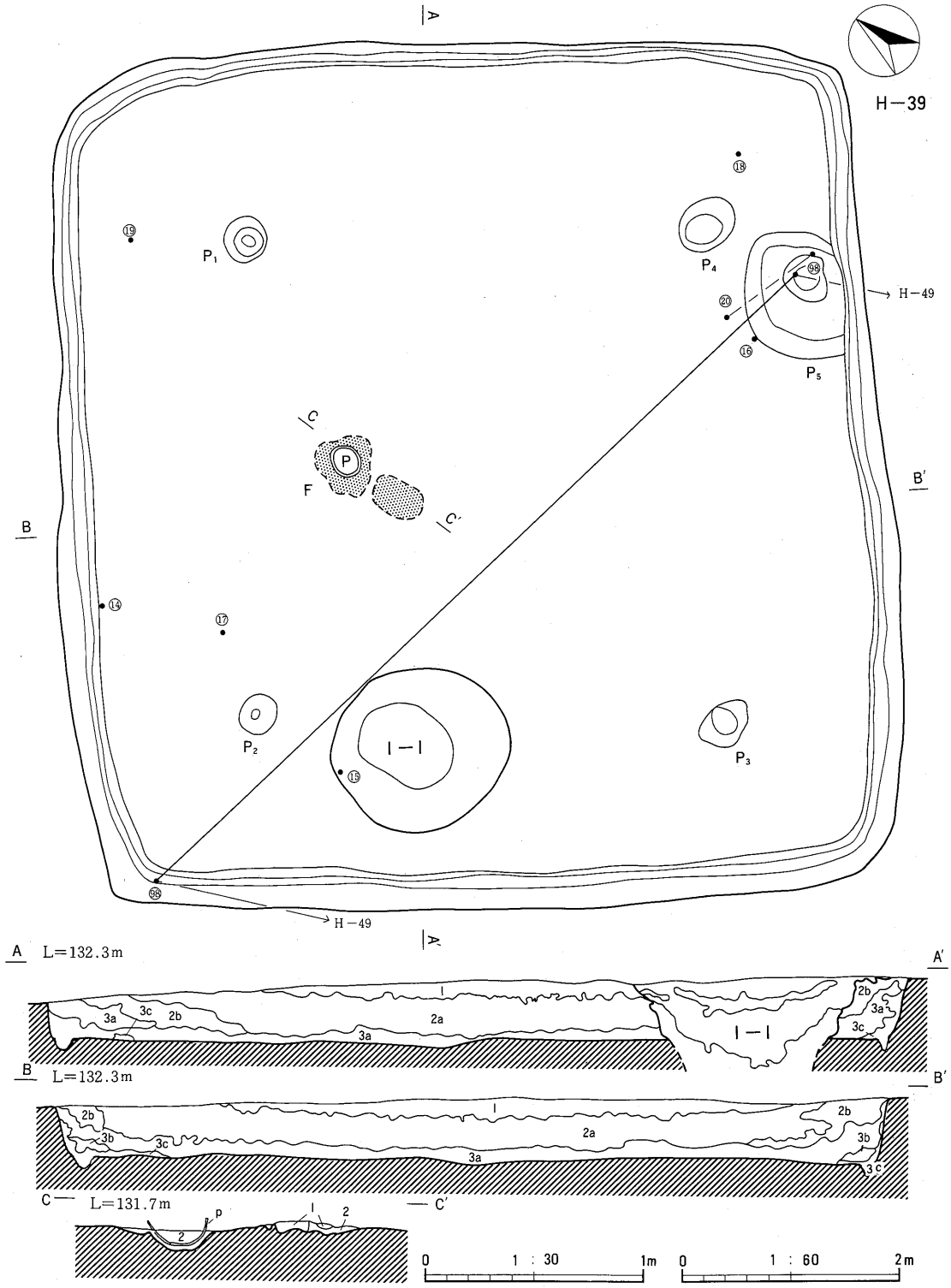
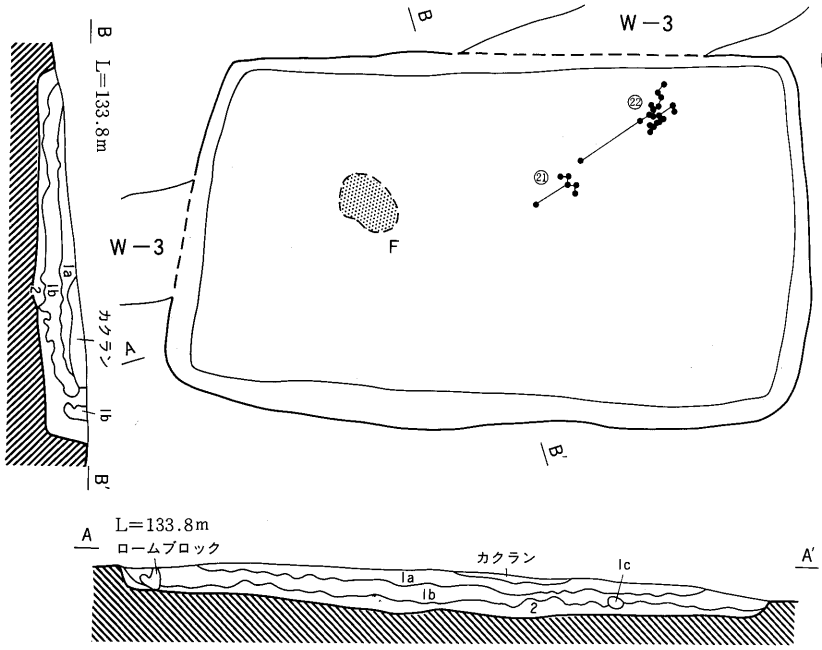


Fig.15 H−39号住居址



H－40

H-39号住居址層序説明

1　層　暗灰黄色粗砂層。Ａｓ-Ｂが鍵層で入る。

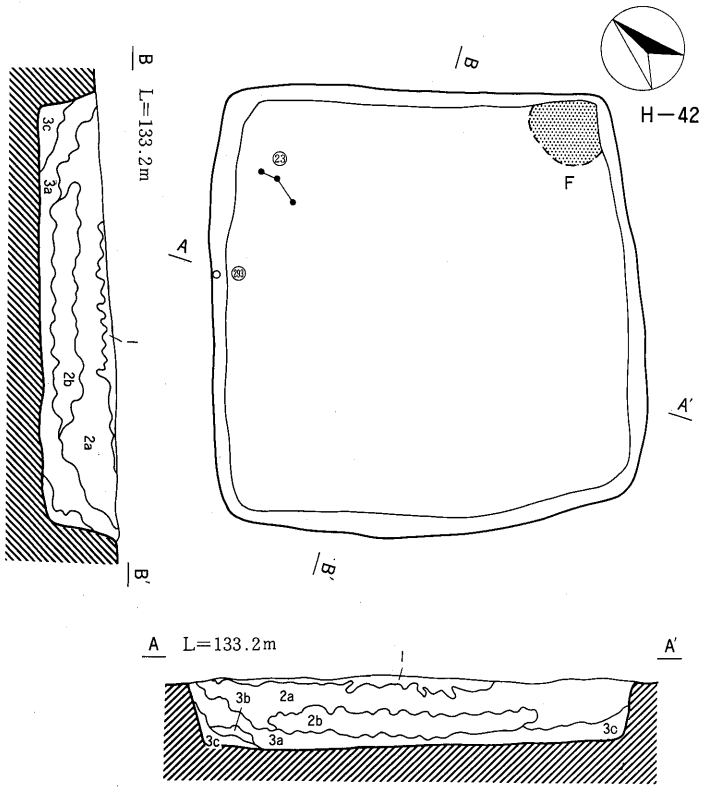
2ａ層　黒色細砂層。「Ｃ混じり黒土層」。

2ｂ層　黒褐色細砂層。

3ａ層　オリーブ褐色細砂層。

3ｂ層　暗灰黄色細砂層。

3ｃ層　黄褐色細砂層。ローム土主体。



H－42

H-39号住居址層序説明

1　層　焼土混じり。

2　層　ローム土主体。

H-40号住居址層序説明

1ａ層　暗褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを10％含む。

1ｂ層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを７％含む。

2　層　明黄褐色微砂層。ローム土主体。

H-42号住居址層序説明

1　層　黒褐色粗砂層。Ａｓ-Ｂを鍵層とする。

2ａ層　黒褐色細砂層。「Ｃ混じり黒土層」で、Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを15～20％含む。

2ｂ層　黒色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを10％含む。

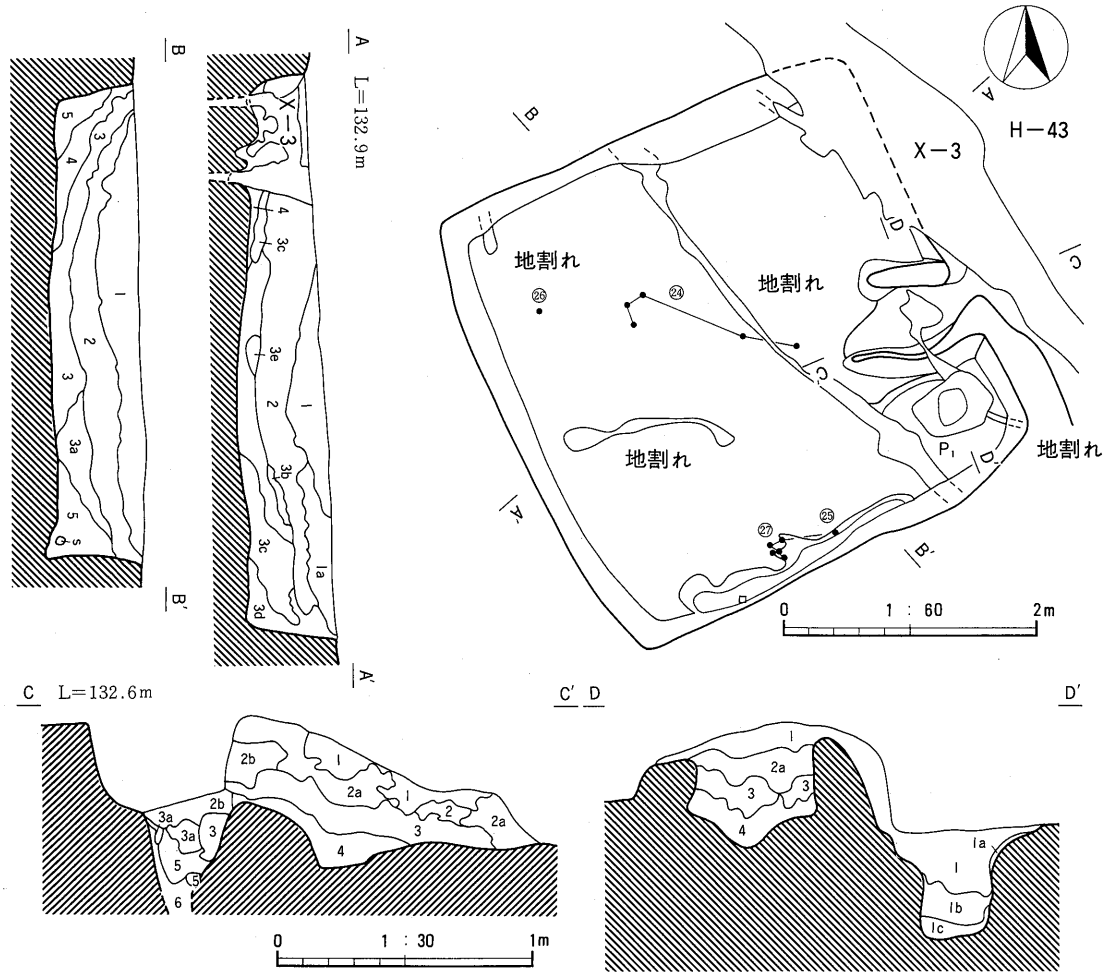
3ａ層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを10％含む。

3ｂ層　暗灰黄色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを７％含む。

3ｃ層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを５％含む。

0　1：60　2m

Fig.16　Ｈ－40・42号住居址



H-43号住居址層序説明

1　層　黒褐色細砂層。As-C・Hr-FPが15%入る。
1a層　にぶい黄褐色細砂層。As-C・Hr-FPを15%とロームブロックを含む。
2　層　オリーブ褐色細砂層。As-C・Hr-FPを10%とロームブロックを含む。
3　層　オリーブ褐色細砂層。As-C・Hr-FPを10%とロームブロックを含む。
3a層　褐色細砂層。As-C・Hr-FPを7%、ロームブロックを含む。
3b層　暗灰黄色細砂層。As-C・Hr-FPを10%含む。
3c層　オリーブ褐色細砂層。As-C・Hr-FPを10%含む。
3d層　オリーブ褐色細砂層。As-C・Hr-FPを5%とロームブロックを含む。
3e層　オリーブ褐色細砂層。3層に焼土粒子が10%混入。
4　層　オリーブ褐色微砂層。As-C・Hr-FPを3%とロームブロックを含む。
5　層　オリーブ褐色微砂層。As-C・Hr-FP・ロームブロックを含む。

H-43号住居址窟層序説明

1　層　黄褐色細砂層。ロームブロックを含む。
1a層　黄橙色細砂層。ローム土を含む。
1b層　明黄褐色細砂層。ロームブロックを含む。
1c層　黄橙色細砂層。ローム土を含む。
2　層　黄橙色細砂層。ローム土を含む。
2a層　橙色細砂層。ロームブロック、焼土を含む。
2b層　赤褐色細砂層。焼土を20%含む。
3　層　赤色細砂層。焼土30～40%とロームブロック混入。
3a層　3層に粘土が40～50%入ったもの。
4　層　黄褐色細砂層。ロームブロックを含む。
5　層　ハードローム層。Ac-YP、SPブロック混入。
6　層　黄褐色細砂層。地割れに落ち込んだ層。ロームブロックも入る。

Fig.17　H－43号住居址

H-44号住居址層序説明

1　層　オリーブ褐色軽石層。As-Cの純層。

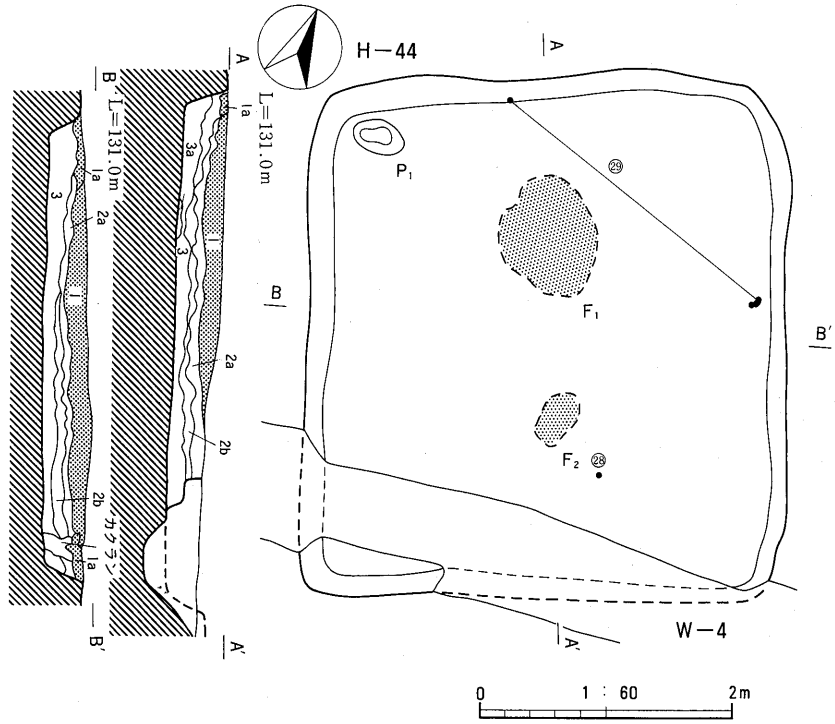
1a層　オリーブ褐色粗砂層。As-Cが鍵層で、As-Cとクロボクの混合。

2a層　暗灰黄色微砂層。As-Cを10%含む。

2b層　にぶい黄褐色微砂層。

3　層　オリーブ褐色微砂層。

3a層　明褐色微砂層。炉址部分の上面。



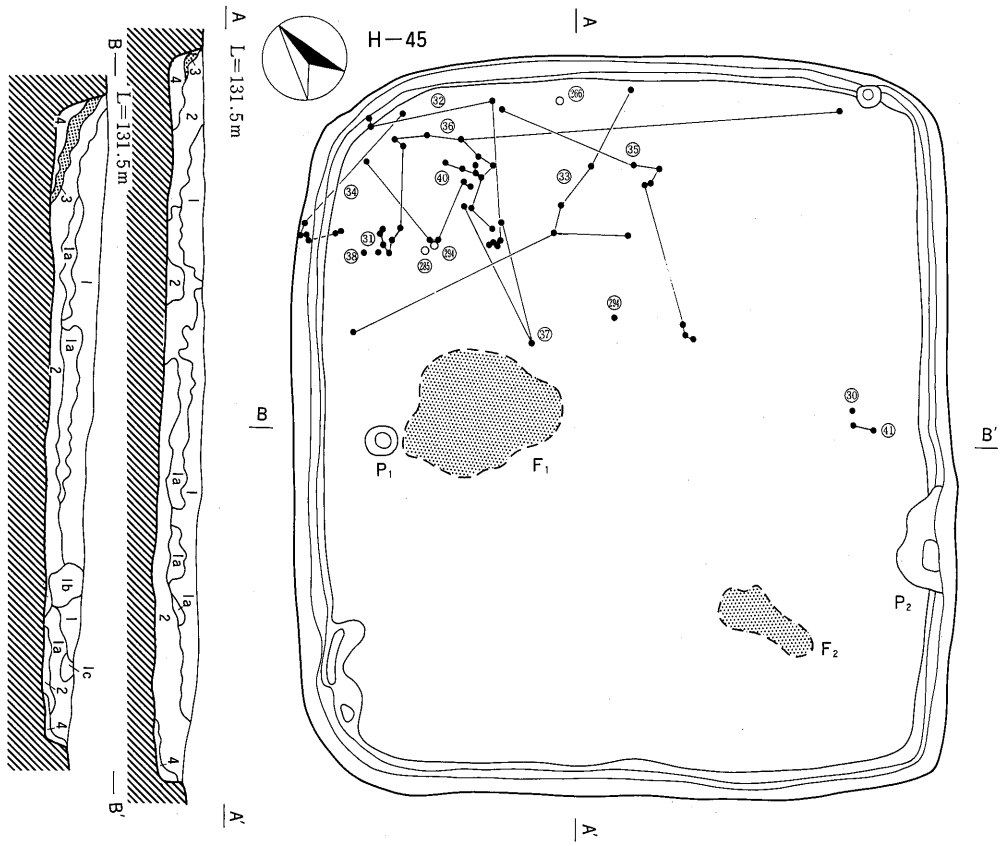
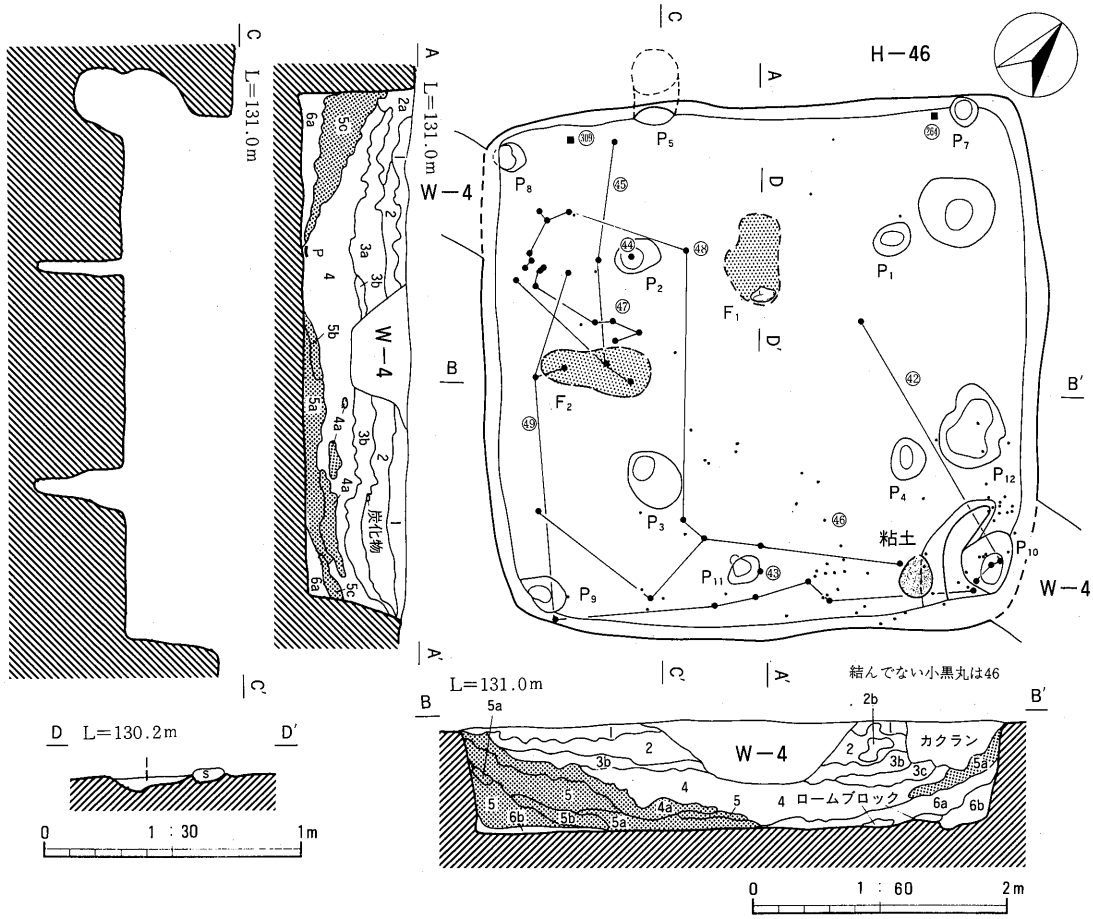


Fig.18　H－44・45号住居址



H-45号住居址層序説明

1　層　にぶい黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを10%、ローム土を20～30%含む。
1ａ層　黄褐色細砂層。ローム土50%以上含む。
1ｂ層　にぶい黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを７～10%含む。
1ｃ層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを30%含む。
2　層　黒褐色微砂層。Ａｓ-Ｃを５～７%含む。
3　層　にぶい黄褐色軽石層。よごれたＡｓ-Ｃが80%以上入る。
4　層　オリーブ褐色微砂層。ローム土主体。

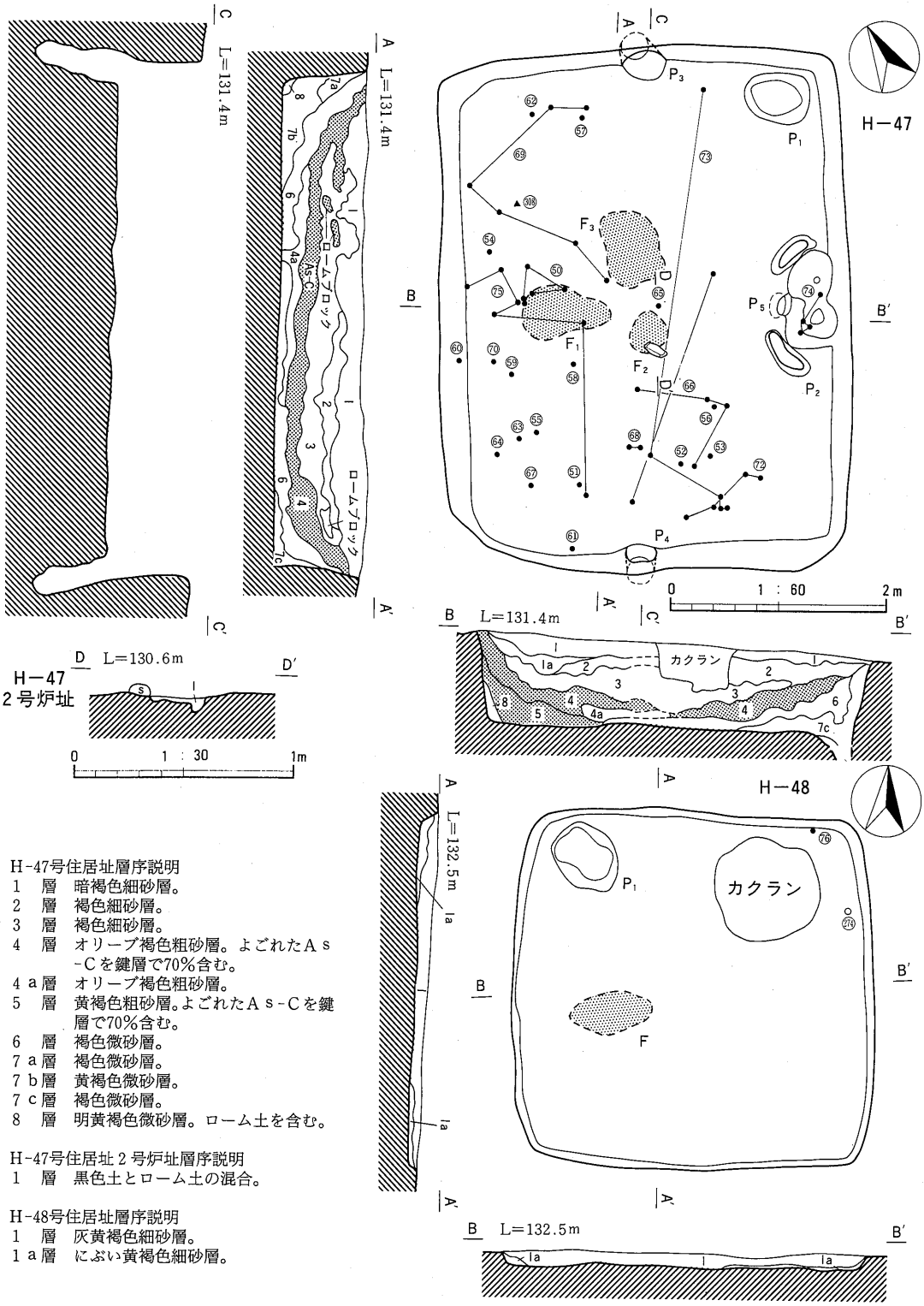
H-46号住居址炉址層序説明

1　層　黒色土主体。少量焼土が混じる。

H-46号住居址層序説明

1　層　黄褐色粗砂層。Ａｓ-Ｂ主体。
2　層　明黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを３～５%、ロームブロックを10～15%含む。
2ａ層　暗褐色微砂層。黒色土主体。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを７～10%含む。
2ｂ層　黄橙色細砂層。ロームブロック主体。
3ａ層　黄橙色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを５～７%、ロームブロックを10～15%含む。
3ｂ層　明黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを20%、ロームブロックを５～７%含む。
3ｃ層　明黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを５～７%、ロームブロックを30～40%含む。
4　層　暗オリーブ褐色細砂層。黒色土主体。Ａｓ-Ｃとローム土が30%混じる。
4ａ層　黄褐色細砂層。よごれたＡｓ-Ｃが鍵層としてブロックでみられる。4層よりＡｓ-Ｃとローム土の混入が多くなる。
5　層　オリーブ褐色粗砂層。よごれたＡｓ-Ｃの健層。
5ａ層　黄褐色粗砂層。よごれたＡｓ-Ｃが鍵層で入り、ローム土主体。
5ｂ層　暗灰黄色粗砂層。よごれたＡｓ-Ｃが鍵層で、黒色土主体。
5ｃ層　黄褐色粗砂層。よごれたＡｓ-Ｃが鍵層で、ローム土主体。
6ａ層　黄灰色微砂層。黒色土主体。
6ｂ層　黄褐色微砂層。ローム土主体。

Fig.19　Ｈ－46号住居址

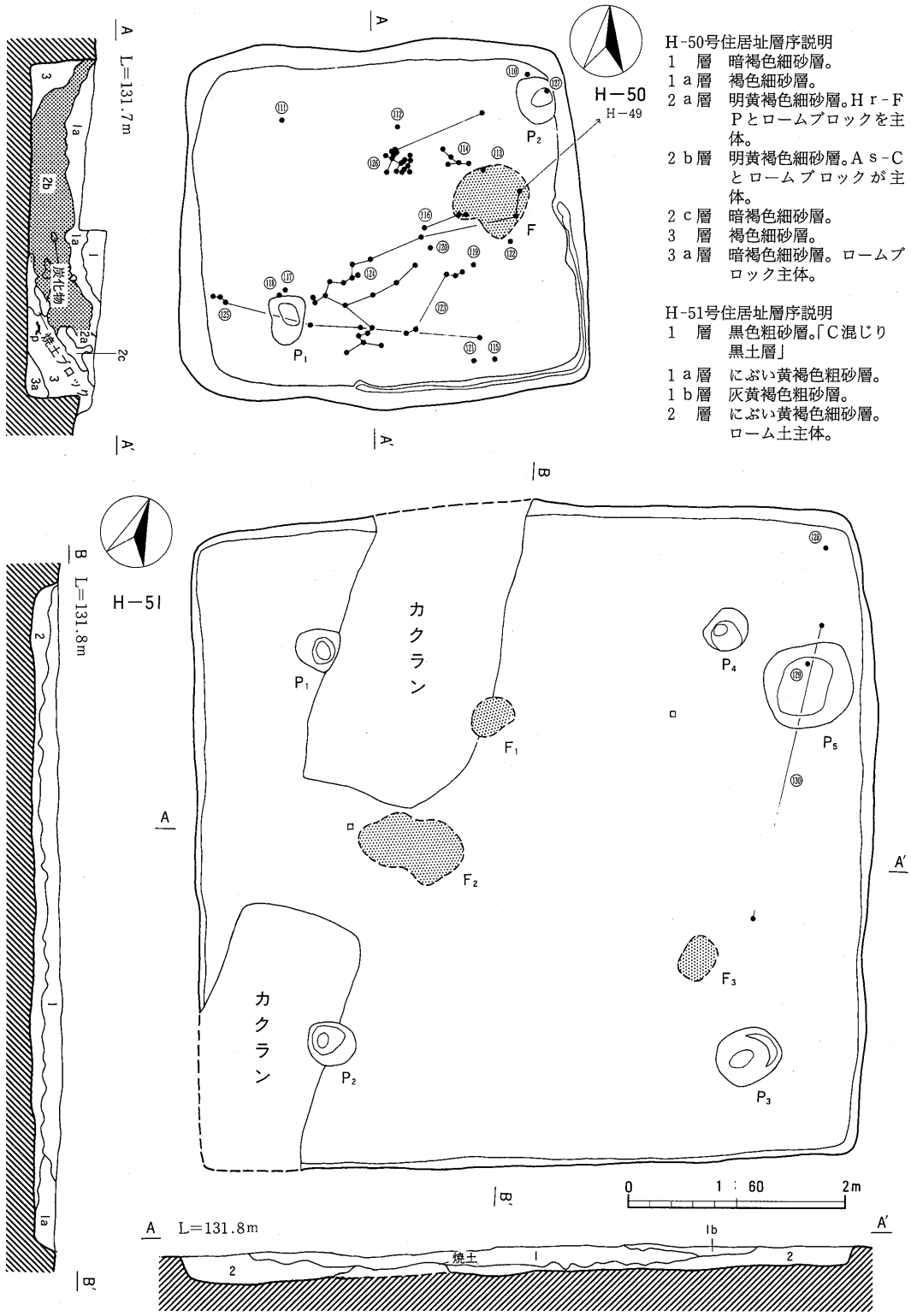


H-47号住居址層序説明
1　層　暗褐色細砂層。
2　層　褐色細砂層。
3　層　褐色細砂層。
4　層　オリーブ褐色粗砂層。よごれたＡｓ-Ｃを鍵層で70％含む。
4ａ層　オリーブ褐色粗砂層。
5　層　黄褐色粗砂層。よごれたＡｓ-Ｃを鍵層で70％含む。
6　層　褐色微砂層。
7ａ層　褐色微砂層。
7ｂ層　黄褐色微砂層。
7ｃ層　褐色微砂層。
8　層　明黄褐色微砂層。ローム土を含む。

H-47号住居址２号炉址層序説明
1　層　黒色土とローム土の混合。

H-48号住居址層序説明
1　層　灰黄褐色細砂層。
1ａ層　にぶい黄褐色細砂層。

Fig.20　H－47・48号住居址



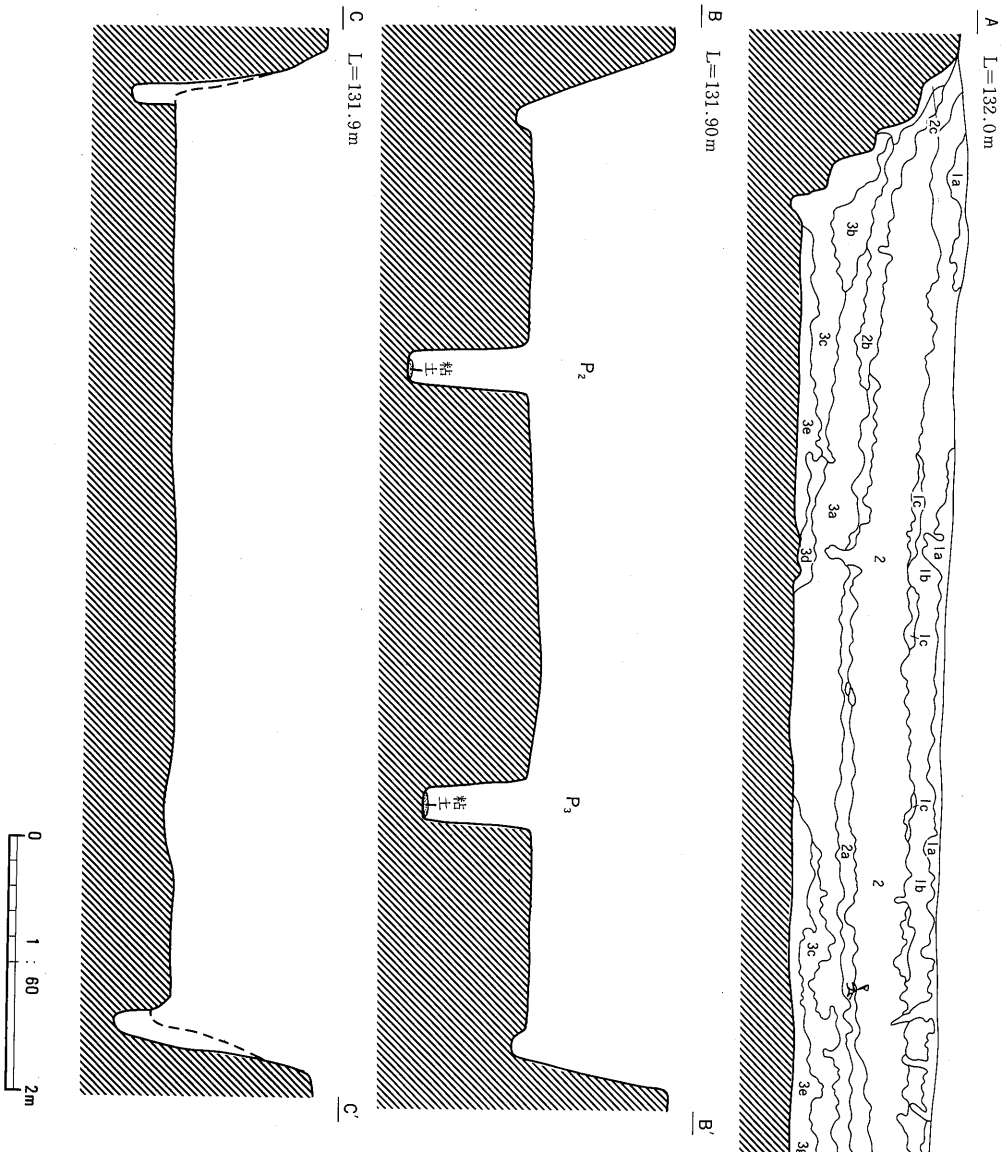
H-50号住居址層序説明

1　層　暗褐色細砂層。
1 a 層　褐色細砂層。
2 a 層　明黄褐色細砂層。Hr-FPとロームブロックを主体。
2 b 層　明黄褐色細砂層。As-Cとロームブロックが主体。
2 c 層　暗褐色細砂層。
3　層　褐色細砂層。
3 a 層　暗褐色細砂層。ロームブロック主体。

H-51号住居址層序説明

1　層　黒色粗砂層。「C混じり黒土層」
1 a 層　にぶい黄褐色粗砂層。
1 b 層　灰黄褐色粗砂層。
2　層　にぶい黄褐色細砂層。ローム土主体。

Fig.21　H−50・51号住居址（1）



H-49号住居址層序説明

1ａ層　黄褐色粗砂層。Ａｓ-Ｂと耕作土で構成されている。

1ｂ層　暗灰黄色粗砂層。Ａｓ-Ｂが鍵層で、主体を占める。

1ｃ層　黒褐色粗砂層。Ａｓ-Ｂ純層を含む。

2　層　黒褐色細砂層。「Ｃ混じり黒土層」

2ａ層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを10～15％とＨｒ-ＦＰを含む。

2ｂ層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを７～10％とＨｒ-ＦＰを含む。

3ａ層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを10～15％とＨｒ-ＦＰを含む。

3ｂ層　暗オリーブ褐色。Ａｓ-Ｃを10～15％とＨｒ-ＦＰ・粘土・ロームブロックを含む。

3ｃ層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを10～15％とＨｒ-ＦＰ・焼土・炭化物・ロームブロックを含む。

3ｄ層　オリーブ褐色細砂層。３ｃ層に比べ、ロームブロックが多い。

3ｅ層　オリーブ褐色細砂層。ローム土主体。Ａｓ-Ｃを７～10％と炭化物・焼土を含む。

3ｆ層　黄褐色細砂層。黒色土主体。ロームブロックが30％入る。

3ｇ層　明黄褐色細砂層。ローム土主体。

Fig.22　Ｈ－49号住居址（１）

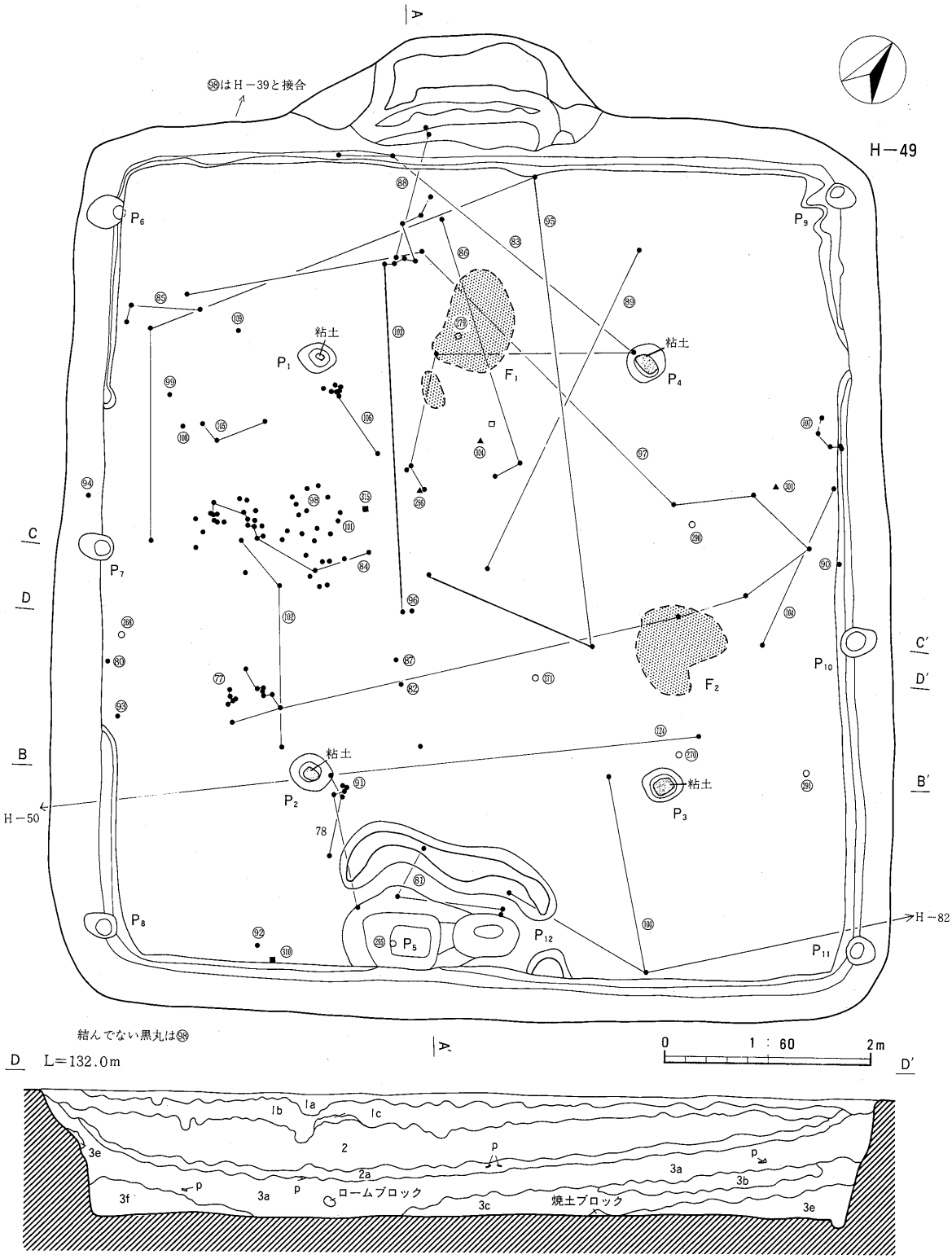
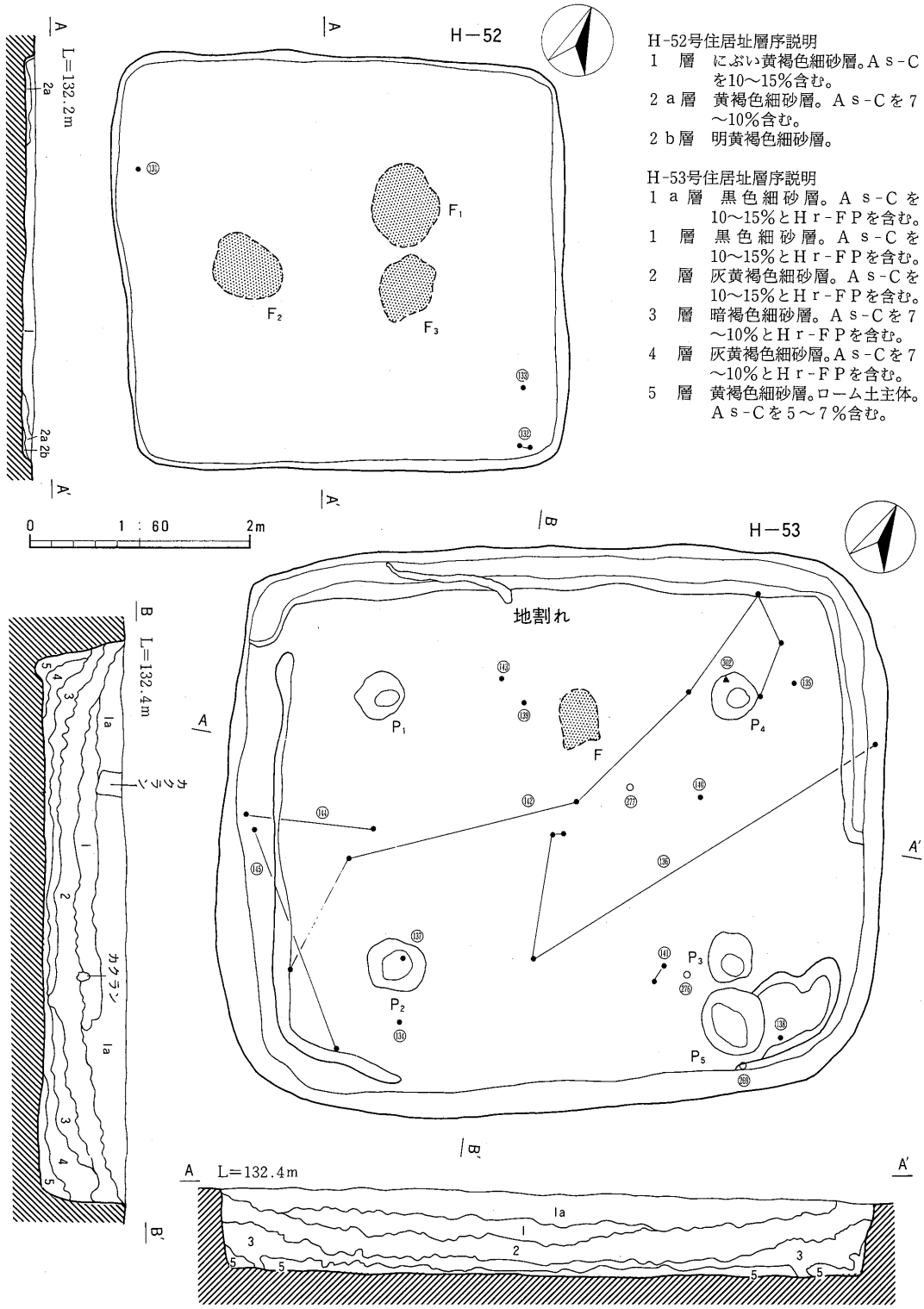


Fig.23 H－49号住居跡（2）



H-52号住居址層序説明

1　層　にぶい黄褐色細砂層。As-Cを10～15%含む。

2a層　黄褐色細砂層。As-Cを7～10%含む。

2b層　明黄褐色細砂層。

H-53号住居址層序説明

1a層　黒色細砂層。As-Cを10～15%とHr-FPを含む。

1　層　黒色細砂層。As-Cを10～15%とHr-FPを含む。

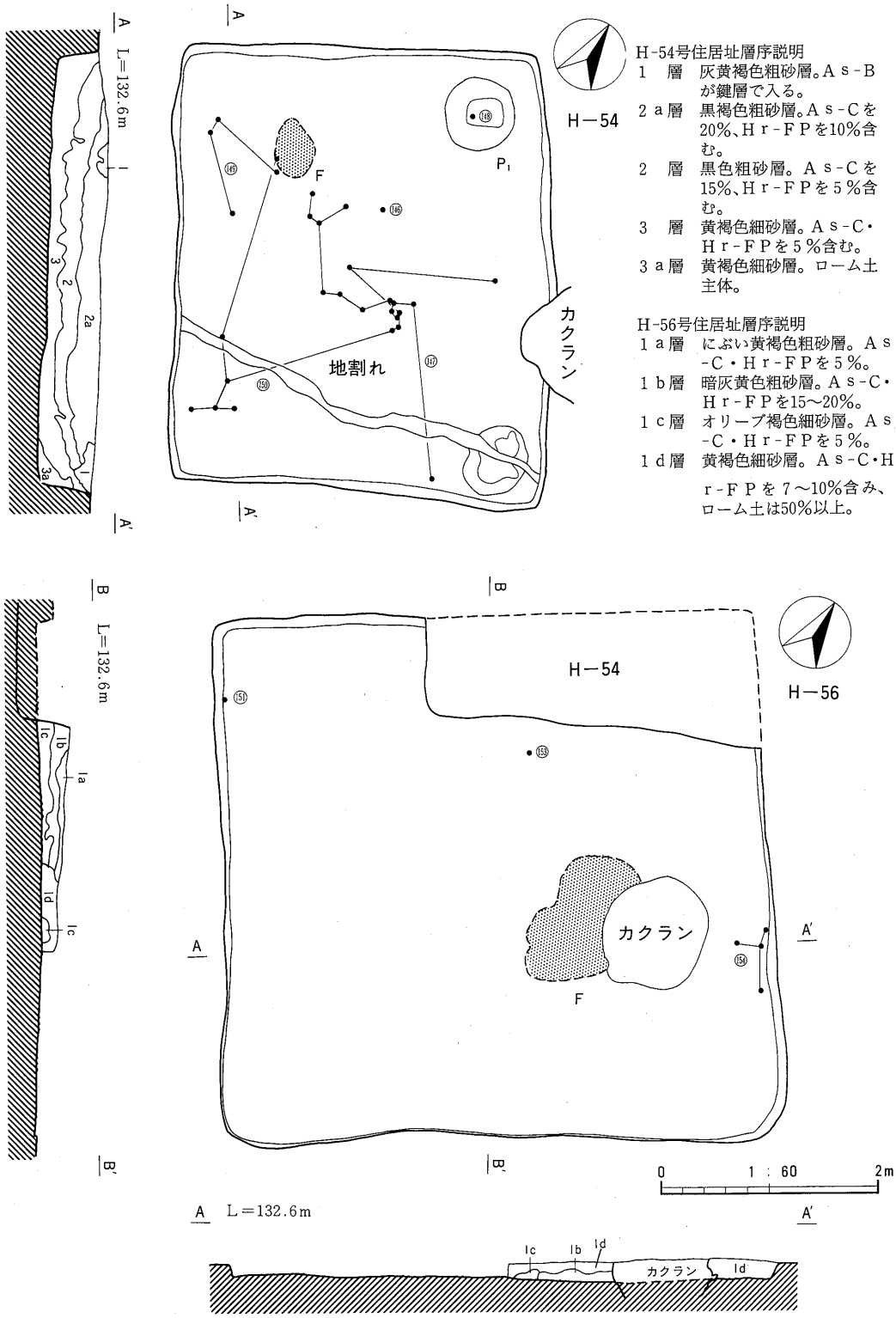
2　層　灰黄褐色細砂層。As-Cを10～15%とHr-FPを含む。

3　層　暗褐色細砂層。As-Cを7～10%とHr-FPを含む。

4　層　灰黄褐色細砂層。As-Cを7～10%とHr-FPを含む。

5　層　黄褐色細砂層。ローム土主体。As-Cを5～7%含む。

Fig.24　H－52・53号住居址



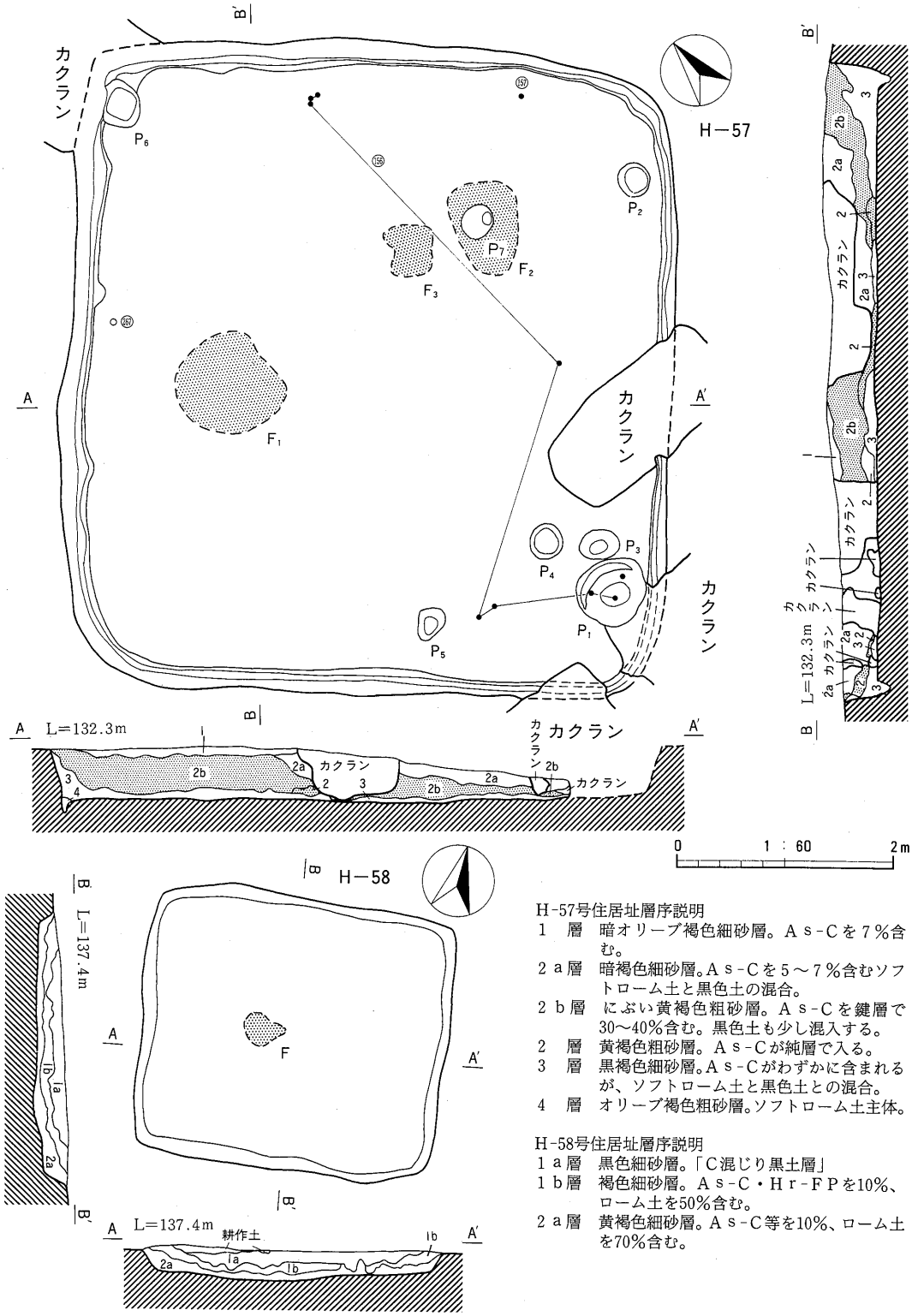
H-54号住居址層序説明

1　層　灰黄褐色粗砂層。As-Bが鍵層で入る。
2a層　黒褐色粗砂層。As-Cを20%、Hr-FPを10%含む。
2　層　黒色粗砂層。As-Cを15%、Hr-FPを5%含む。
3　層　黄褐色細砂層。As-C・Hr-FPを5%含む。
3a層　黄褐色細砂層。ローム土主体。

H-56号住居址層序説明

1a層　にぶい黄褐色粗砂層。As-C・Hr-FPを5%。
1b層　暗灰黄色粗砂層。As-C・Hr-FPを15〜20%。
1c層　オリーブ褐色細砂層。As-C・Hr-FPを5%。
1d層　黄褐色細砂層。As-C・Hr-FPを7〜10%含み、ローム土は50%以上。

Fig.25　H−54・56号住居址



H-57号住居址層序説明

1　層　暗オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを７％含む。

２ａ層　暗褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを５～７％含むソフトローム土と黒色土の混合。

２ｂ層　にぶい黄褐色粗砂層。Ａｓ-Ｃを鍵層で30～40％含む。黒色土も少し混入する。

２　層　黄褐色粗砂層。Ａｓ-Ｃが純層で入る。

３　層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｃがわずかに含まれるが、ソフトローム土と黒色土との混合。

４　層　オリーブ褐色粗砂層。ソフトローム土主体。

H-58号住居址層序説明

１ａ層　黒色細砂層。「Ｃ混じり黒土層」

１ｂ層　褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ・Ｈｒ-ＦＰを10％、ローム土を50％含む。

２ａ層　黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃ等を10％、ローム土を70％含む。

Fig.26　H－57・58号住居址

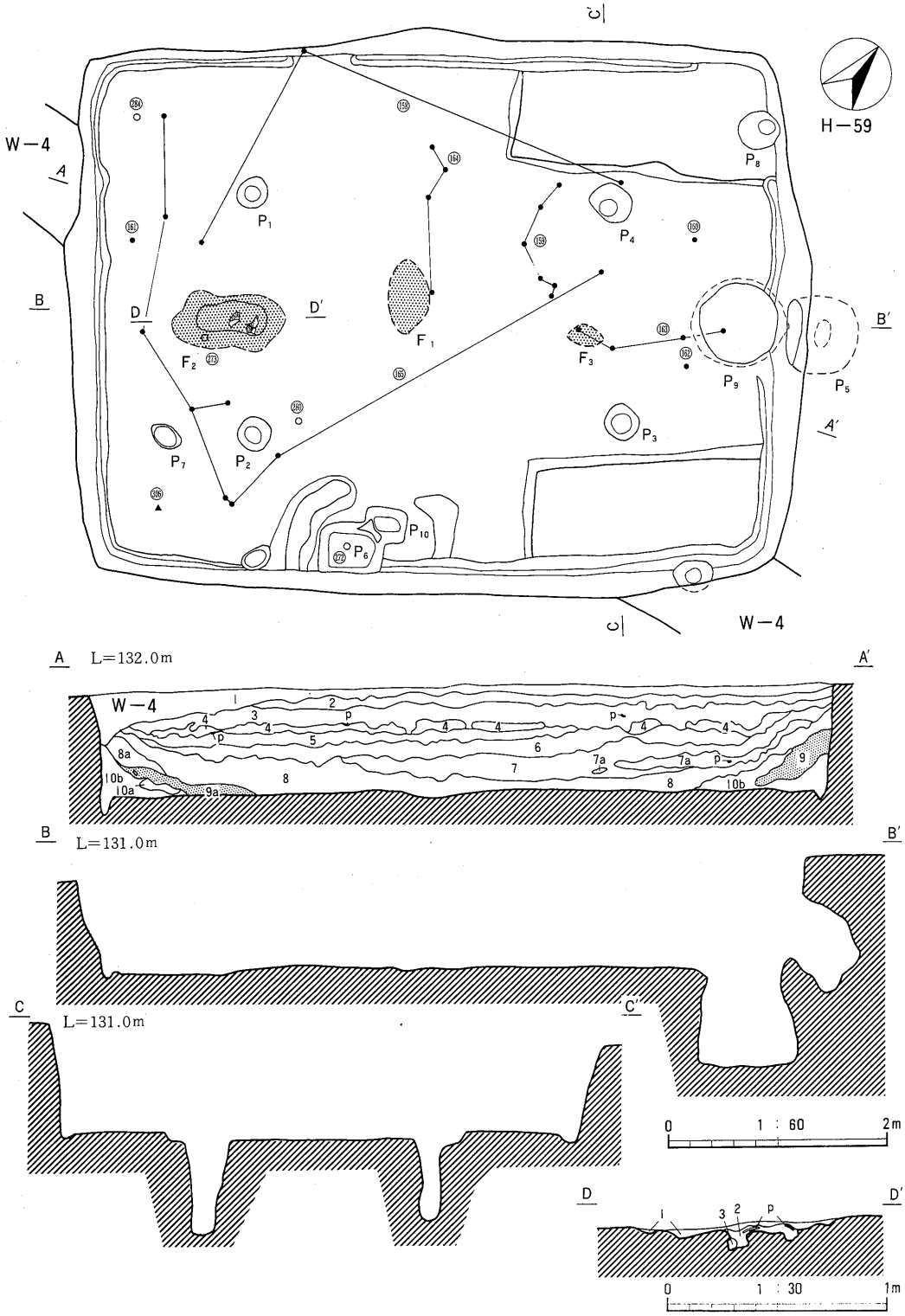
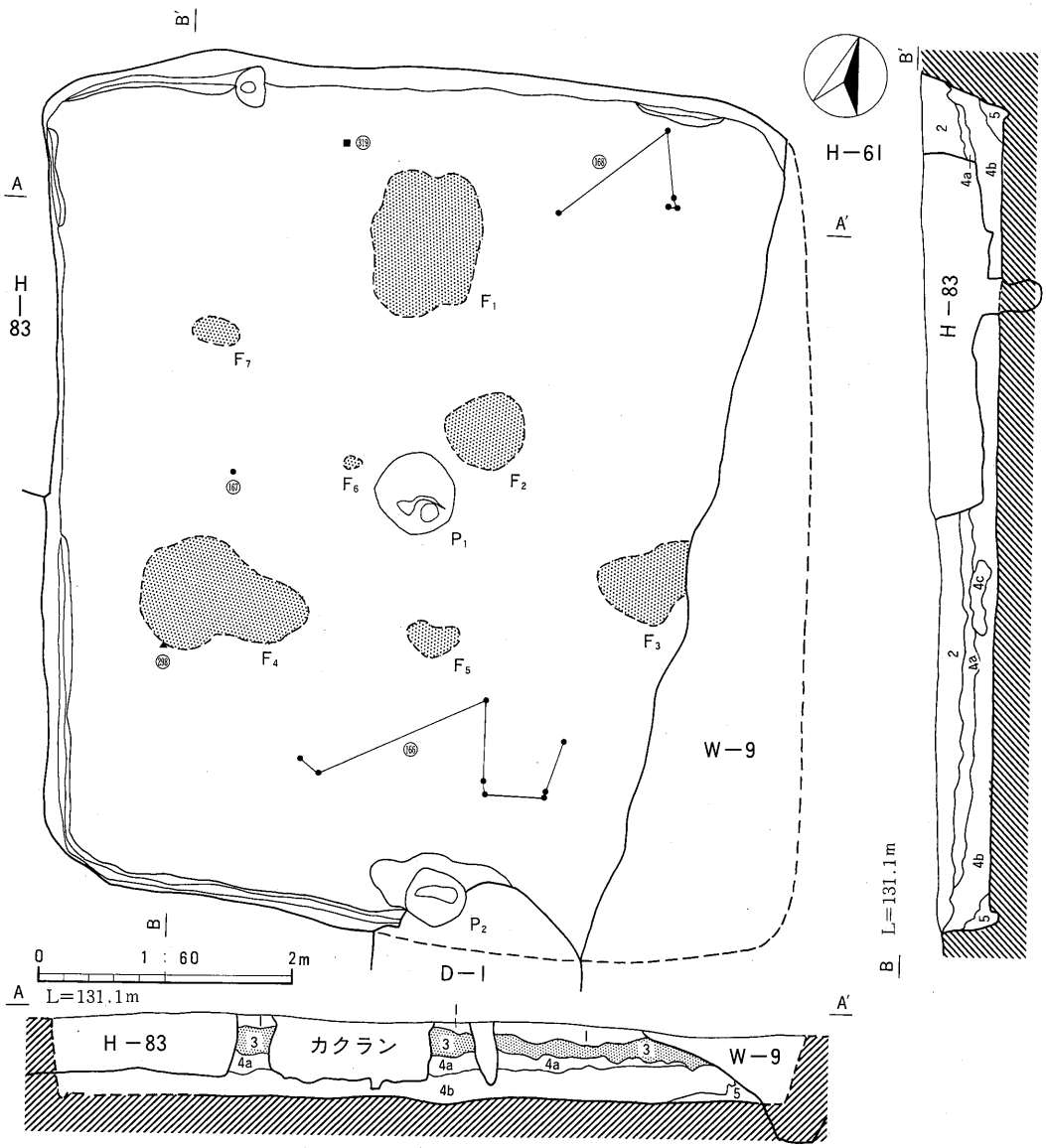


Fig.27 H－59号住居址



H-59号住居址層序説明

1　層　黒褐色細砂層。黒色土主体。
2　層　黒褐色細砂層。黒色土主体。
3　層　暗オリーブ褐色細砂層。
4　層　黄褐色細砂層。
5　層　黒褐色細砂層。
6　層　オリーブ褐色細砂層。
7　層　黒褐色細砂層。
7ａ層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｃの純層ブロックがみられる。
8　層　オリーブ褐色細砂層。
8ａ層　暗オリーブ褐色細砂層。
9　層　オリーブ褐色粗砂層。Ａｓ-Ｃが鍵層。
9ａ層　黄褐色粗砂層。Ａｓ-Ｃ純層が鍵層。
10ａ層　黒褐色細砂層。黒色土主体。
10ｂ層　オリーブ褐色細砂層。

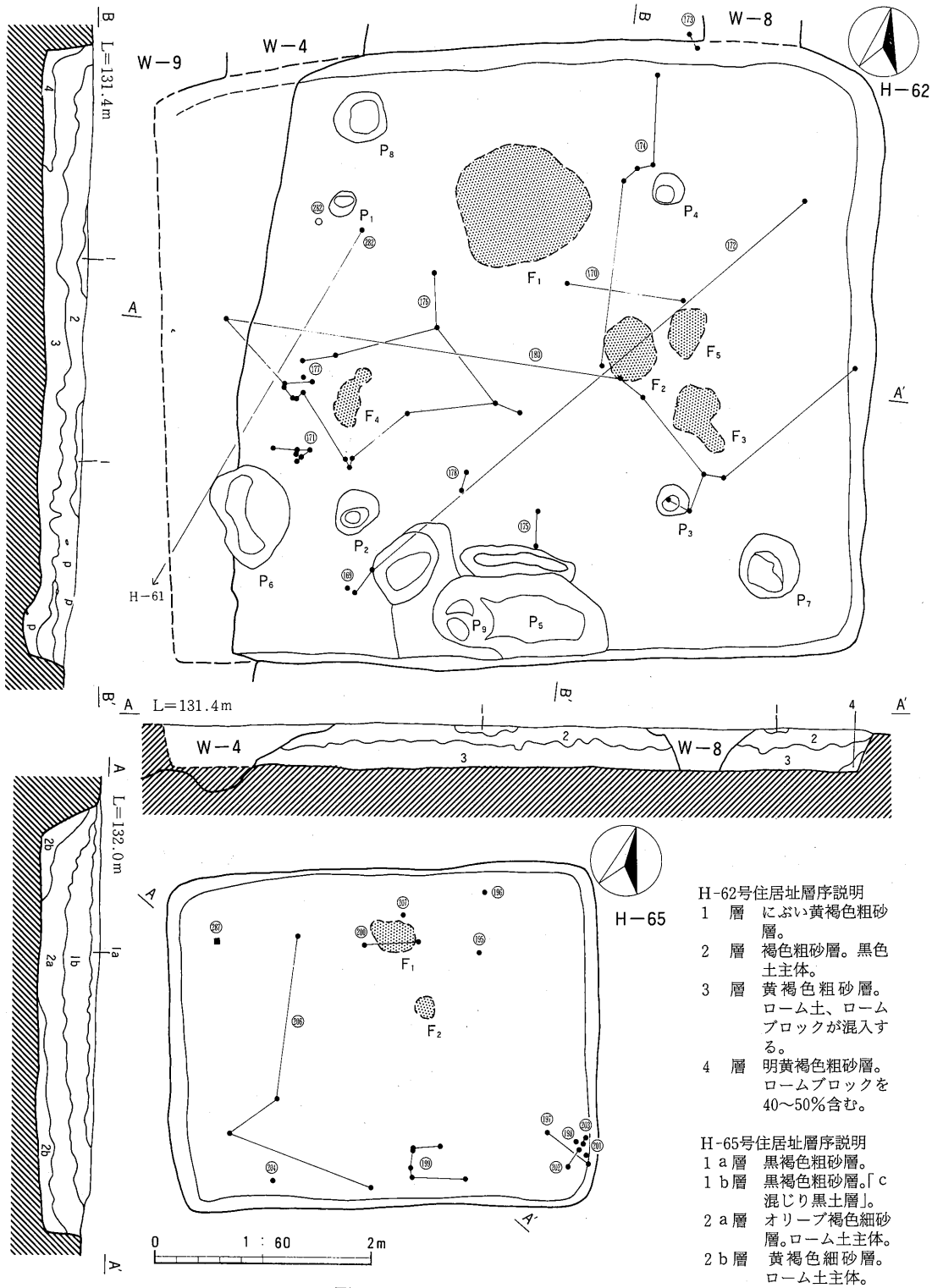
H-59号住居址２号炉址層序説明

1　層　黒ボクとローム土との混合。焼土粒子を若干含む。
2　層　ローム土主体。
3　層　黒ボク土主体。

H-61号住居址層序説明

1　層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｂを20～30％含む。
2　層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを７～10％含む。
3　層　にぶい黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃが鍵層で30～40％含む。
4ａ層　灰黄褐色細砂層。
4ｂ層　黒褐色細砂層。均一。
4ｃ層　にぶい黄褐色微砂層。
5　層　褐色微砂層。ローム土主体。

Fig.28　Ｈ－61号住居址



H-62号住居址層序説明

1　層　にぶい黄褐色粗砂層。

2　層　褐色粗砂層。黒色土主体。

3　層　黄褐色粗砂層。ローム土、ロームブロックが混入する。

4　層　明黄褐色粗砂層。ロームブロックを40〜50%含む。

H-65号住居址層序説明

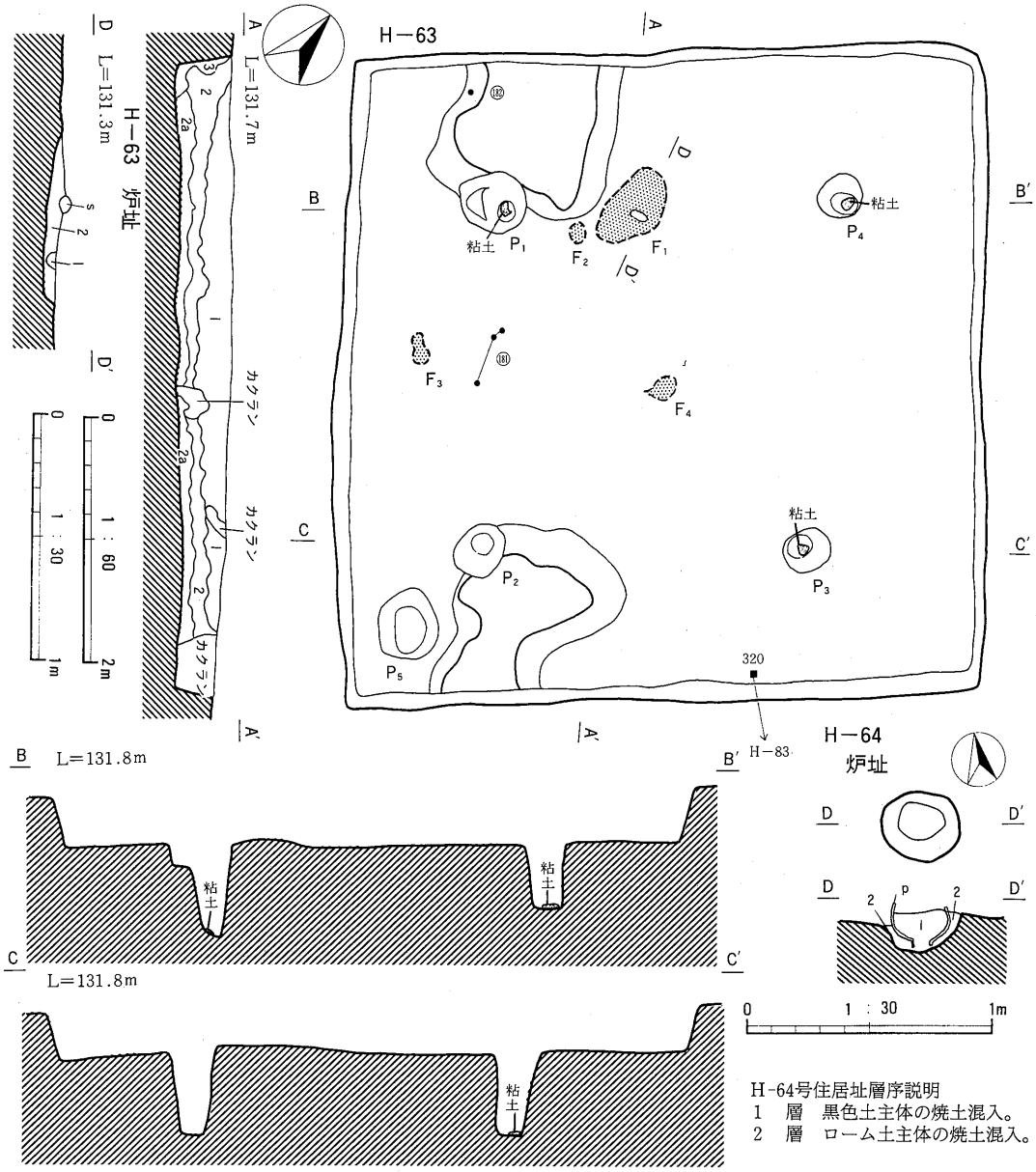
1 a 層　黒褐色粗砂層。

1 b 層　黒褐色粗砂層。「c混じり黒土層」。

2 a 層　オリーブ褐色細砂層。ローム土主体。

2 b 層　黄褐色細砂層。ローム土主体。

Fig.29　H−62・65号住居址



H-64号住居址層序説明
1　層　黒色土主体の焼土混入。
2　層　ローム土主体の焼土混入。

H-63号住居址層序説明
1　層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを10～15％含む。
2　層　褐色微砂層。Ａｓ-Ｃを15～20％、ローム土を15～20％含む。
2ａ層　にぶい黄褐色微砂層。ローム土を10％含む。
3　層　黄褐色微砂層。ローム土30％以上含む。

H-63号住居址炉址層序説明
1　層　焼けたロームブロック。
2　層　ローム土と黒色土との混合。

H-64号住居址層序説明
1　層　オリーブ褐色粗砂層。Ａｓ-Ｂを鍵層で50％含む。
2ａ層　黒褐色細砂層。
2ｂ層　暗オリーブ褐色細砂層。
2ｃ層　黒褐色細砂層。Ｈｒ-ＦＰを５％、Ａｓ-Ｃを10％含む。
3　層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを７％含み、ローム土に黒色土が混入する。
3ａ層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを少し含む。
3ｂ層　褐色細砂層。ローム土と黒色土の混合。
4　層　明黄褐色細砂層。ソフトローム土主体。

Fig.30　Ｈ－63号住居址

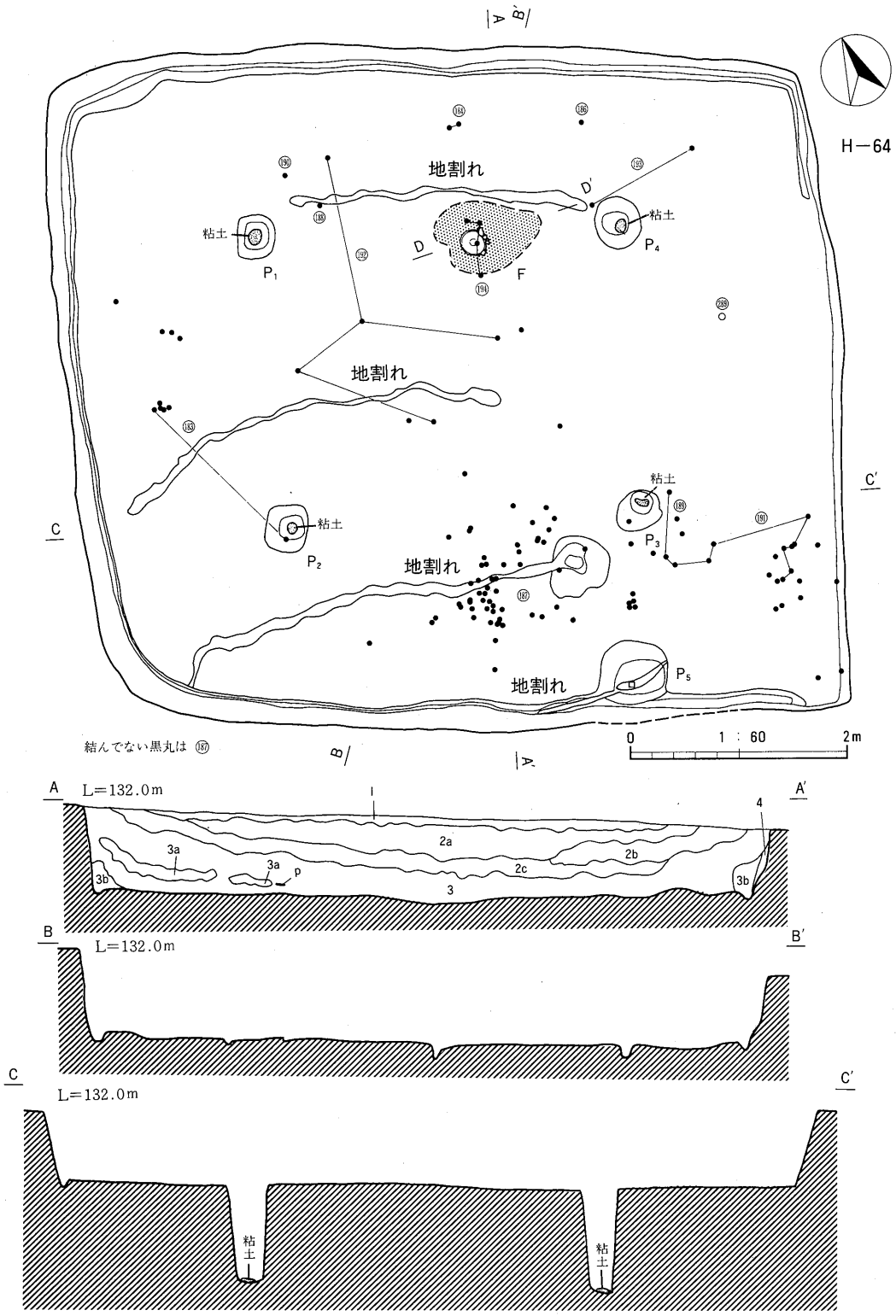
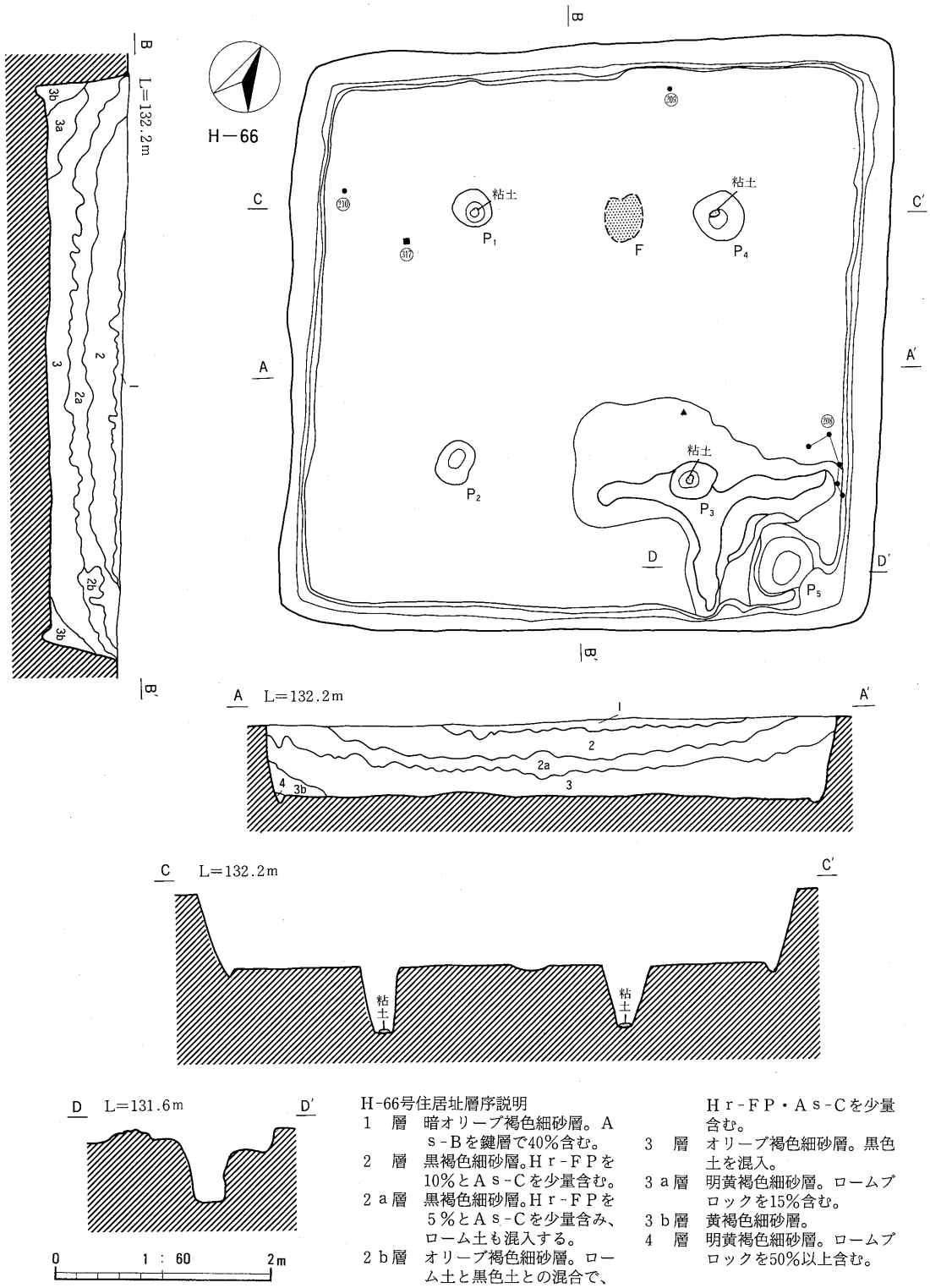


Fig.31　H－64号住居址



H-66号住居址層序説明

1　層　暗オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｂを鍵層で40％含む。

2　層　黒褐色細砂層。Ｈｒ-ＦＰを10％とＡｓ-Ｃを少量含む。

2ａ層　黒褐色細砂層。Ｈｒ-ＦＰを５％とＡｓ-Ｃを少量含み、ローム土も混入する。

2ｂ層　オリーブ褐色細砂層。ローム土と黒色土との混合で、Ｈｒ-ＦＰ・Ａｓ-Ｃを少量含む。

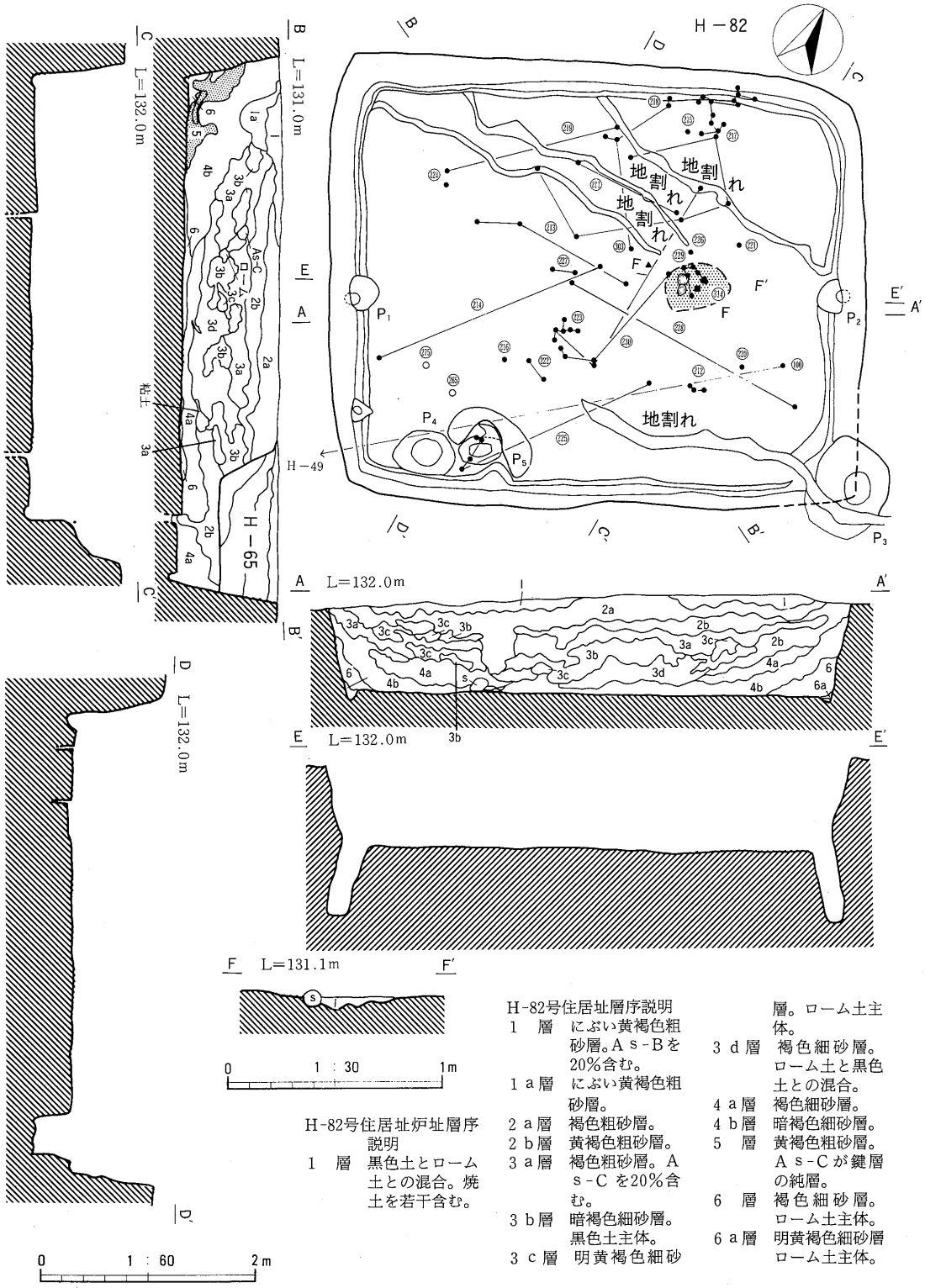
3　層　オリーブ褐色細砂層。黒色土を混入。

3ａ層　明黄褐色細砂層。ロームブロックを15％含む。

3ｂ層　黄褐色細砂層。

4　層　明黄褐色細砂層。ロームブロックを50％以上含む。

Fig.32　Ｈ－66号住居址



H-82号住居址炉址層序説明

1　層　黒色土とローム土との混合。焼土を若干含む。

H-82号住居址層序説明

1　層　にぶい黄褐色粗砂層。As-Bを20%含む。

1a層　にぶい黄褐色粗砂層。

2a層　褐色粗砂層。

2b層　黄褐色粗砂層。

3a層　褐色粗砂層。As-Cを20%含む。

3b層　暗褐色細砂層。黒色土主体。

3c層　明黄褐色細砂層。ローム土主体。

3d層　褐色細砂層。ローム土と黒色土との混合。

4a層　褐色細砂層。

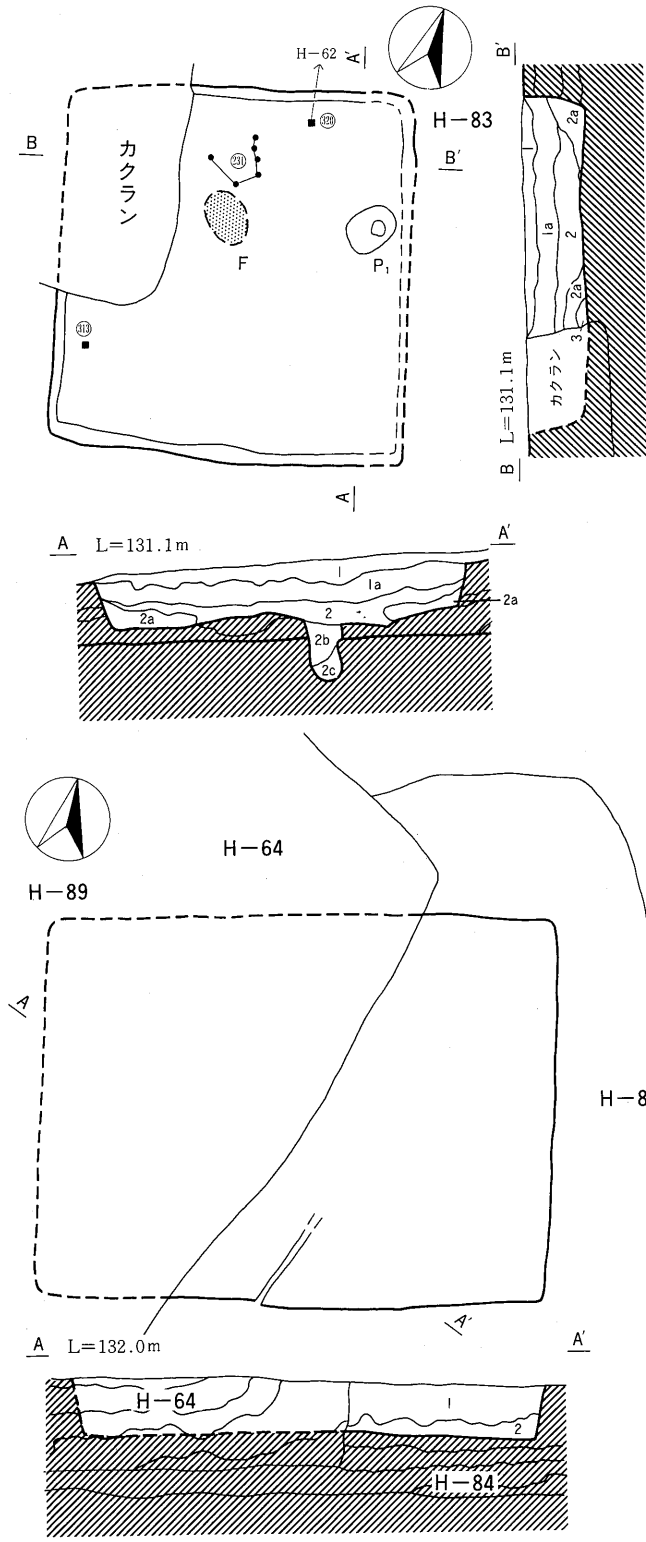
4b層　暗褐色細砂層。

5　層　黄褐色粗砂層。As-Cが鍵層の純層。

6　層　褐色細砂層。ローム土主体。

6a層　明黄褐色細砂層ローム土主体。

Fig.33　H－82号住居址



H-83号住居址層序説明

1　層　黒褐色細砂層。As-Bを20〜30%含む。

1a層　黒褐色細砂層。「C混じり黒土層」で、As-C・Hr-FPを10〜15%含む。

2　層　にぶい黄橙色細砂層。As-C・Hr-FPを10〜15%含む。

2a層　褐色細砂層。As-C・Hr-FPを5〜7%含む。

2b層　黄褐色微砂層。ローム土主体。

2c層　明黄褐色微砂層。ローム土90%以上。

3　層　オリーブ褐色微砂層。ローム土主体。

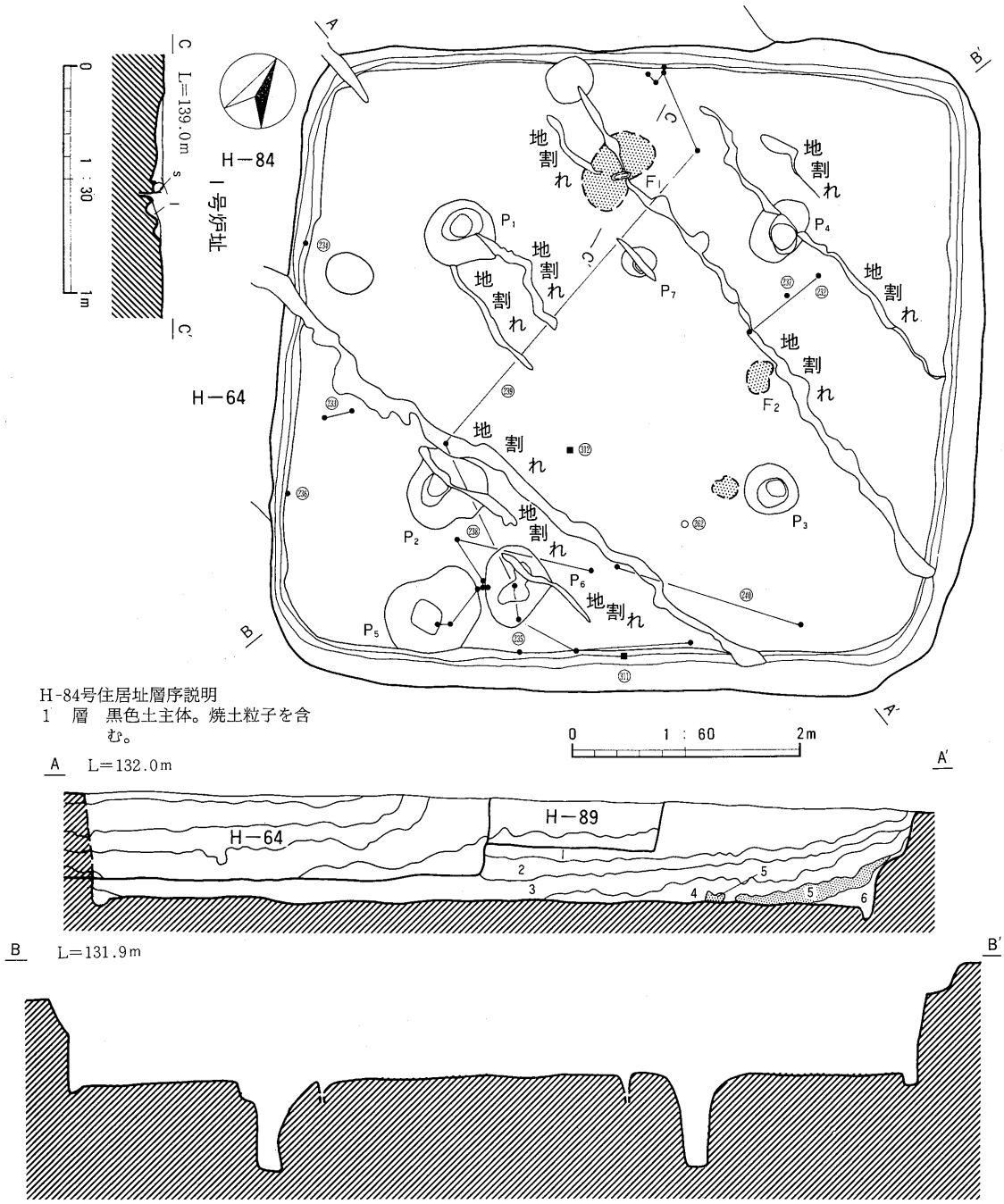
H-89号住居址層序説明

1　層　黄褐色細砂層。As-Cを10〜15%、Hr-FP・黒色土を少量含む。

2　層　オリーブ褐色細砂層。As-Cを鍵層で30%含み、黒色土を少し混入する。

0　1：60　2m

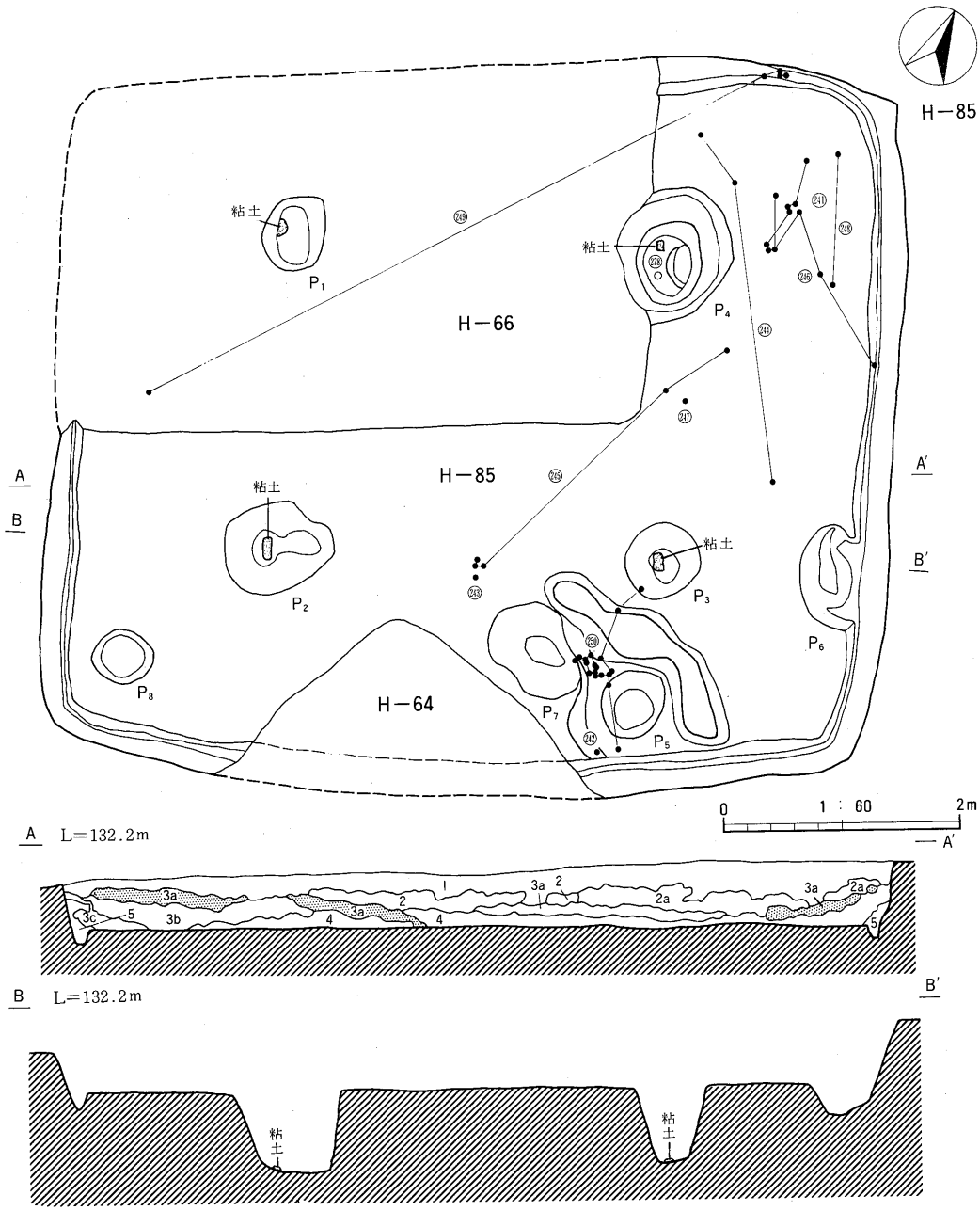
Fig.34　H−83・89号住居址



H-84号住居址層序説明
1　層　黒色土主体。焼土粒子を含む。

H-84号住居址層序説明
1　層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを10％含み、ロームブロックが少し混じる。
2　層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを7％含み、ロームブロックが７％混じる。
3　層　褐色微砂層。Ａｓ-Ｃが10％、黒色土が10％、ロームブロックが10％混入する。
4　層　黄褐色微砂層。ローム土主体。Ａｓ-Ｃを少量含み、ロームブロックが15％、黒色土も少し混じる。
5　層　暗褐色粗砂層。Ａｓ-Ｃが鍵層で20～30％含む。
6　層　にぶい黄褐色微砂層。ローム土主体。ロームブロック・黒色土も少し混じる。

Fig.35　Ｈ－84号住居址



H-85号住居址層序説明

1　層　にぶい黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを15%、Ｈｒ-ＦＰ・黒色土も少量含む。

2　層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを7～10%、ロームブロックも少し含む。

2ａ層　オリーブ褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを10%、ロームブロックを７%含む。

3ａ層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｃが鍵層で30%含む。

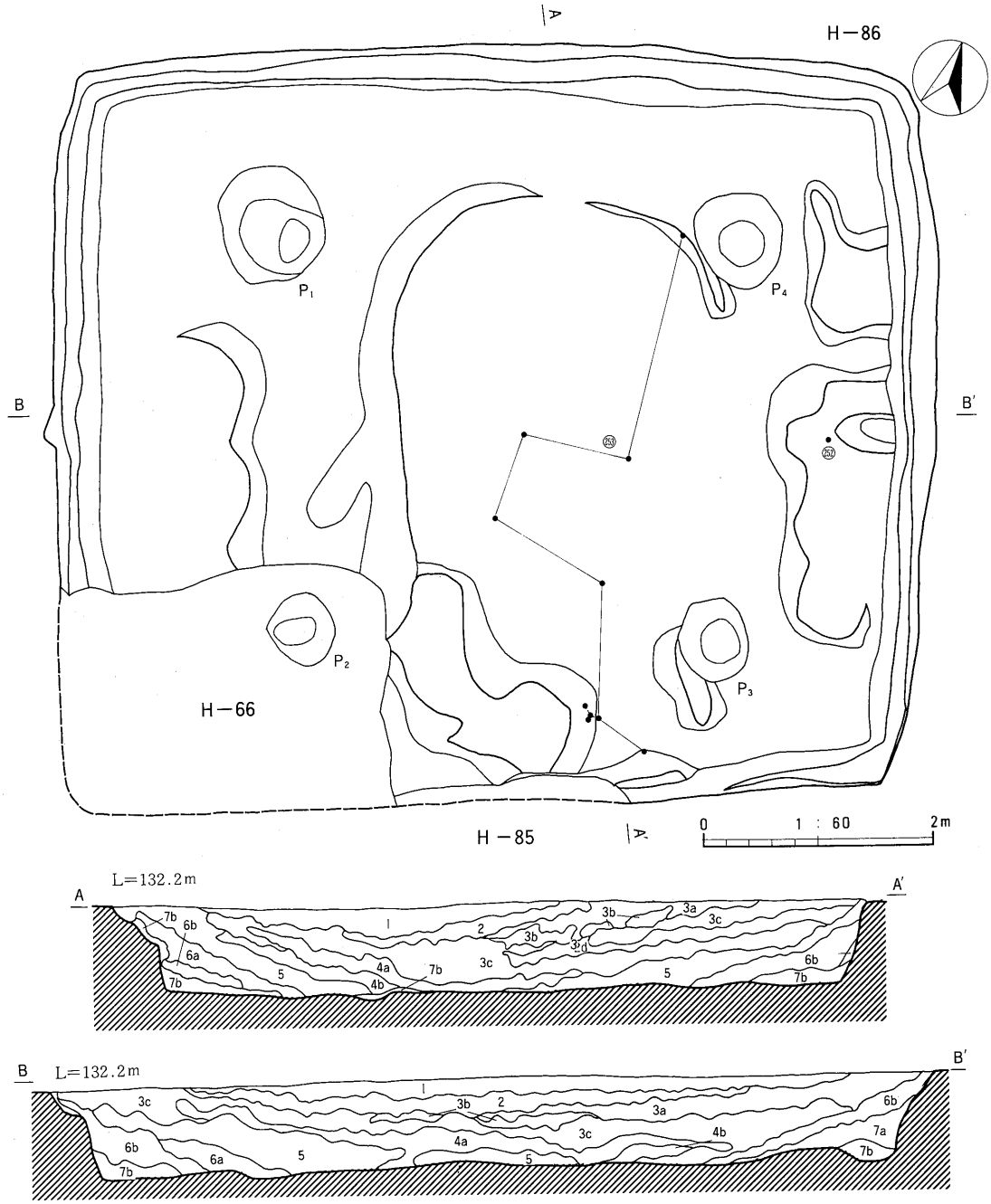
3ｂ層　にぶい黄褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを15%含む。

3ｃ層　黒褐色細砂層。Ａｓ-Ｃを10%含む。

4　層　オリーブ褐色。黒色土とローム土の混合。Ａｓ-Ｃを５～７%、ロームブロックも少し含む。

5　層　黄褐色細砂層。ソフトローム土主体。ロームブロックが少し混じる。

Fig.36　Ｈ－85号住居址



H-86号住居址層序説明

1　層　黄褐色細砂層。
2　層　明黄褐色細砂層。ロームブロックが30%混入する。
3 a 層　オリーブ褐色細砂層。
3 b 層　暗オリーブ褐色粗砂層。黒色土。
3 c 層　黄褐色細砂層。ロームブロックを40～50%含む。
3 d 層　オリーブ褐色細砂層。黒色土。
4 a 層　暗オリーブ褐色細砂層。黒色土。
4 b 層　オリーブ褐色細砂層。
5　層　明黄褐色細砂層。ロームブロックを40%含む。
6 a 層　オリーブ褐色細砂層。
6 b 層　黒褐色細砂層。黒色土。
7 a 層　黄褐色細砂層。
7 b 層　明黄褐色細砂層。ロームブロックを60%以上含む。

Fig.37　H－86号住居址

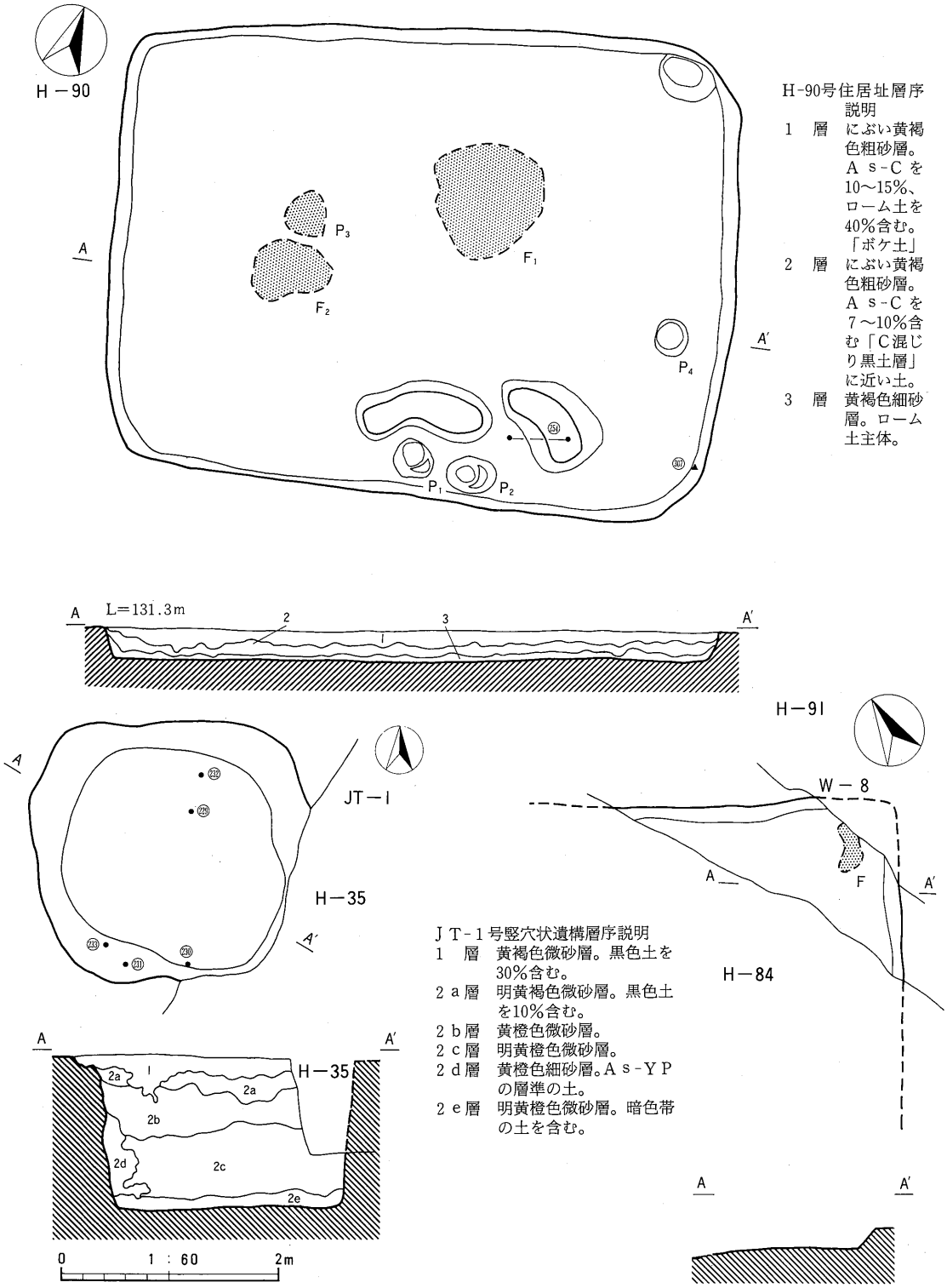
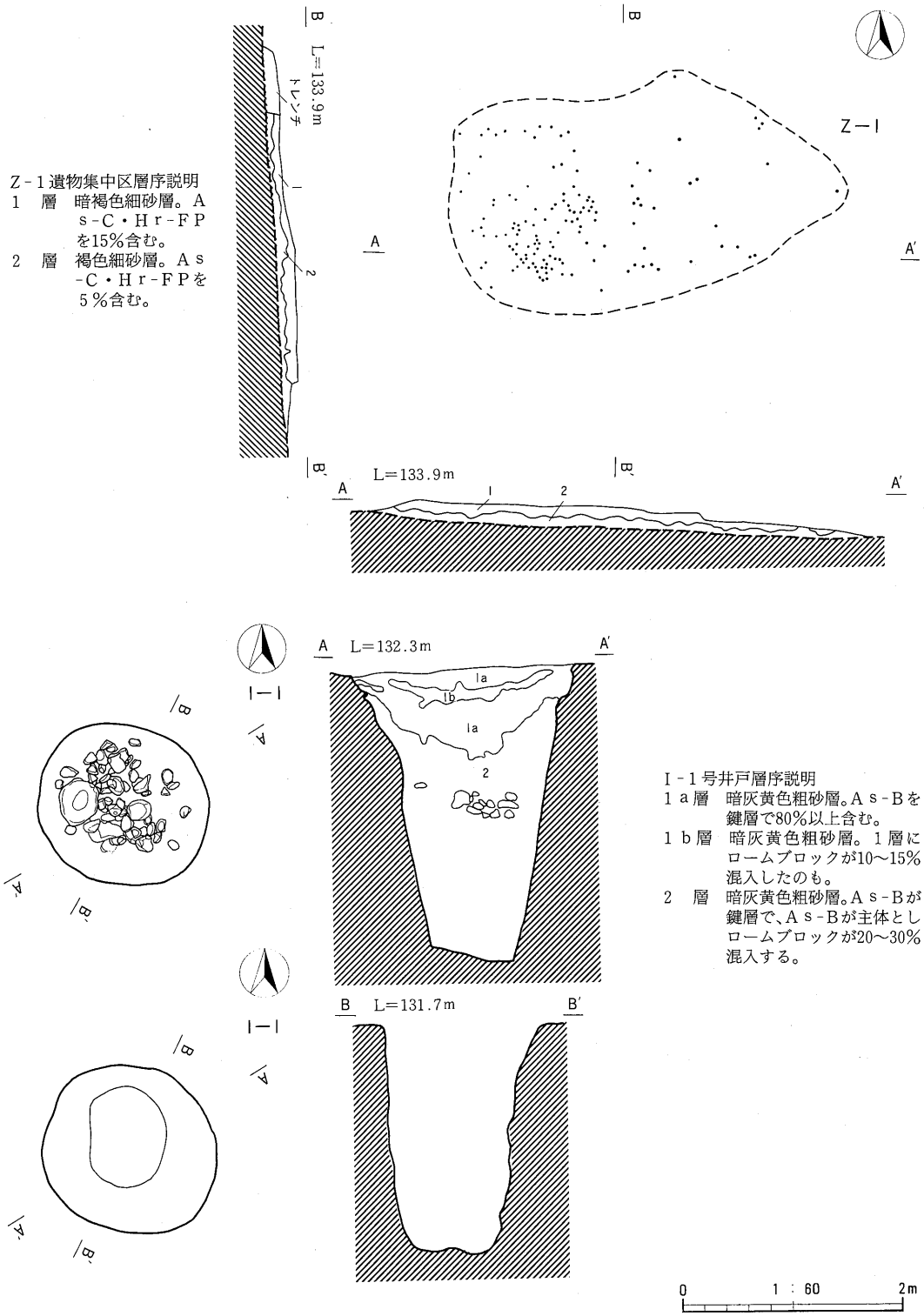


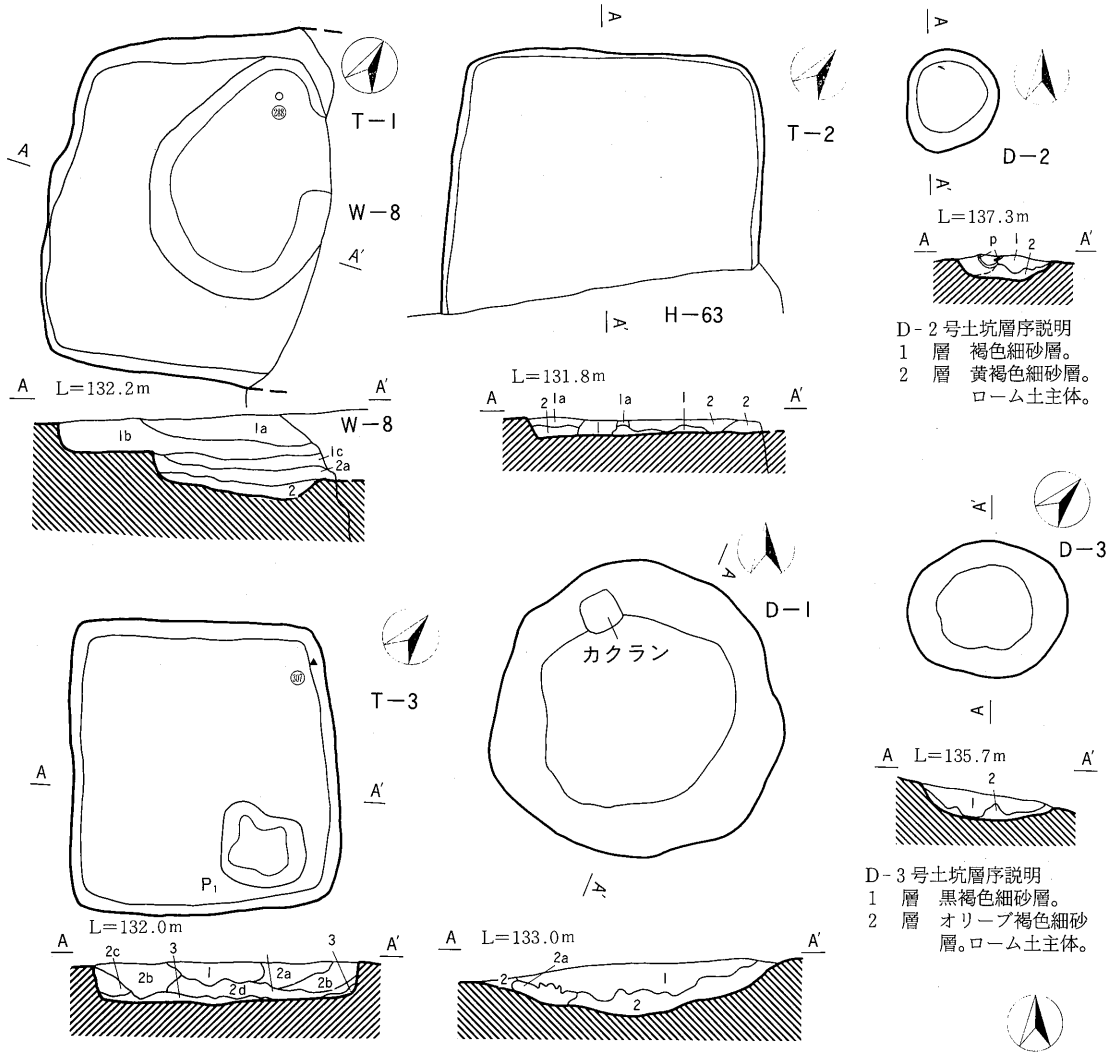
Fig.38　H－90・91号住居址、JT－1号竪穴状遺構

Z－1遺物集中区層序説明
1　層　暗褐色細砂層。As-C・Hr-FPを15%含む。
2　層　褐色細砂層。As-C・Hr-FPを5%含む。



I－1号井戸層序説明
1a層　暗灰黄色粗砂層。As-Bを鍵層で80%以上含む。
1b層　暗灰黄色粗砂層。1層にロームブロックが10～15%混入したのも。
2　層　暗灰黄色粗砂層。As-Bが鍵層で、As-Bが主体としロームブロックが20～30%混入する。

Fig.39　Z－1遺物集中区、I－1号井戸



T－1号竪穴状遺構層序説明
1a層　黒褐色粗砂層。As-C・Hr-FPを10～15%含む。
1b層　暗褐色細砂層。
1c層　黒褐色細砂層。
2a層　褐色微砂層。
2　層　黄褐色微砂層。ロームブロックを20%含む。

T－2号竪穴状遺構層序説明
1　層　オリーブ褐色粗砂層。As-Cを10～15%含み、ロームブロック混じり。
1a層　暗灰黄色粗砂層。「C混じり黒色土」。
2　層　暗オリーブ褐色細砂層。

T－3号竪穴状遺構層序説明
1　層　黒褐色細砂層。As-Cを10%含む。
2a層　暗褐色細砂層。
2b層　褐色細砂層。黒色土を10%含む。
2c層　暗褐色細砂層。As-Cの混入率が高い部分あり。
2d層　褐色細砂層。ローム土主体。
3　層　黄褐色微砂層。ローム土主体。

D－1号土坑層序説明
1　層　黒褐色細砂層。As-Cを15%含む。
2　層　にぶい黄褐色細砂層。ローム土40%と炭化物ブロックが入る。
2a層　にぶい黄褐色細砂層。粘土を主体。この粘土は土器が粘土化したもの。下部にローム土を含む。

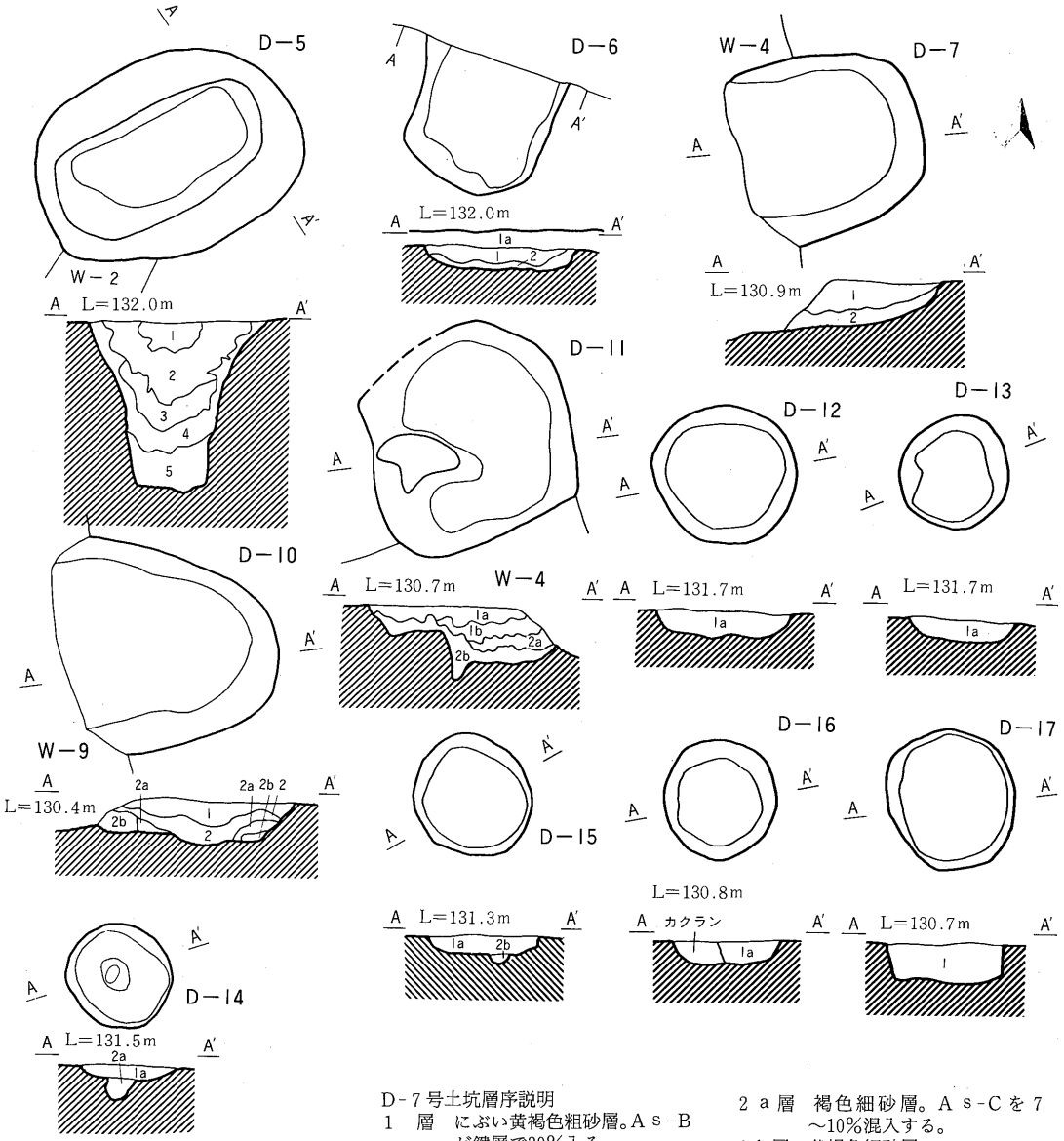
D－2号土坑層序説明
1　層　褐色細砂層。
2　層　黄褐色細砂層。ローム土主体。

D－3号土坑層序説明
1　層　黒褐色細砂層。
2　層　オリーブ褐色細砂層。ローム土主体。

D－4号土坑層序説明
1　層　黒褐色細砂層。
2　層　黄褐色細砂層。
3　層　赤色細砂層。焼土を含む。

0　1：60　2m

Fig.40　T－1～3号竪穴状遺構、D－1～4号土坑



D-5号土坑層序説明

1　層　黒褐色細砂層。As-Cを15～20%含む。
2　層　黒褐色細砂層。As-Cを20%含む。
3　層　灰黄褐色細砂層。
4　層　オリーブ褐色細砂層
5　層　黄褐色微砂層。ローム土主体。

D-6号土坑層序説明

1a層　褐色細砂層。As-C15%含む。
1　層　にぶい褐色細砂層。As-C 20～30%含む。
2　層　オリーブ褐色細砂層。As-Cを10%混入する。

D-7号土坑層序説明

1　層　にぶい黄褐色粗砂層。As-Bが鍵層で30%入る。
2　層　黄褐色細砂層。As-Bが10%、ローム土が20%混じる。

D-10号土坑層序説明

1　層　オリーブ褐色細砂層。As-Bが20%入る。
2　層　黄褐色細砂層。As-Cを10%含む。
2a層　黄褐色微砂層。ローム土主体。
2b層　オリーブ褐色微砂層。均一的。

D-11号土坑層序説明

1a層　にぶい黄褐色細砂層。As-Bを40～50%含む。
1b層　褐色細砂層。As-Bを40～50%含む。
2a層　褐色細砂層。As-Cを7～10%混入する。
2b層　黄褐色細砂層。

D-12～17号土坑層序説明

1　層　暗褐色粗砂層。As-Bを鍵層で70%含む。
1a層　黒褐色細砂層。As-Bを30%含む。
2a層　暗褐色細砂層。As-Cを20%含む。
2b層　褐色細砂層。

0　1：60　2m

Fig.41　D−5～7・10～17号土坑

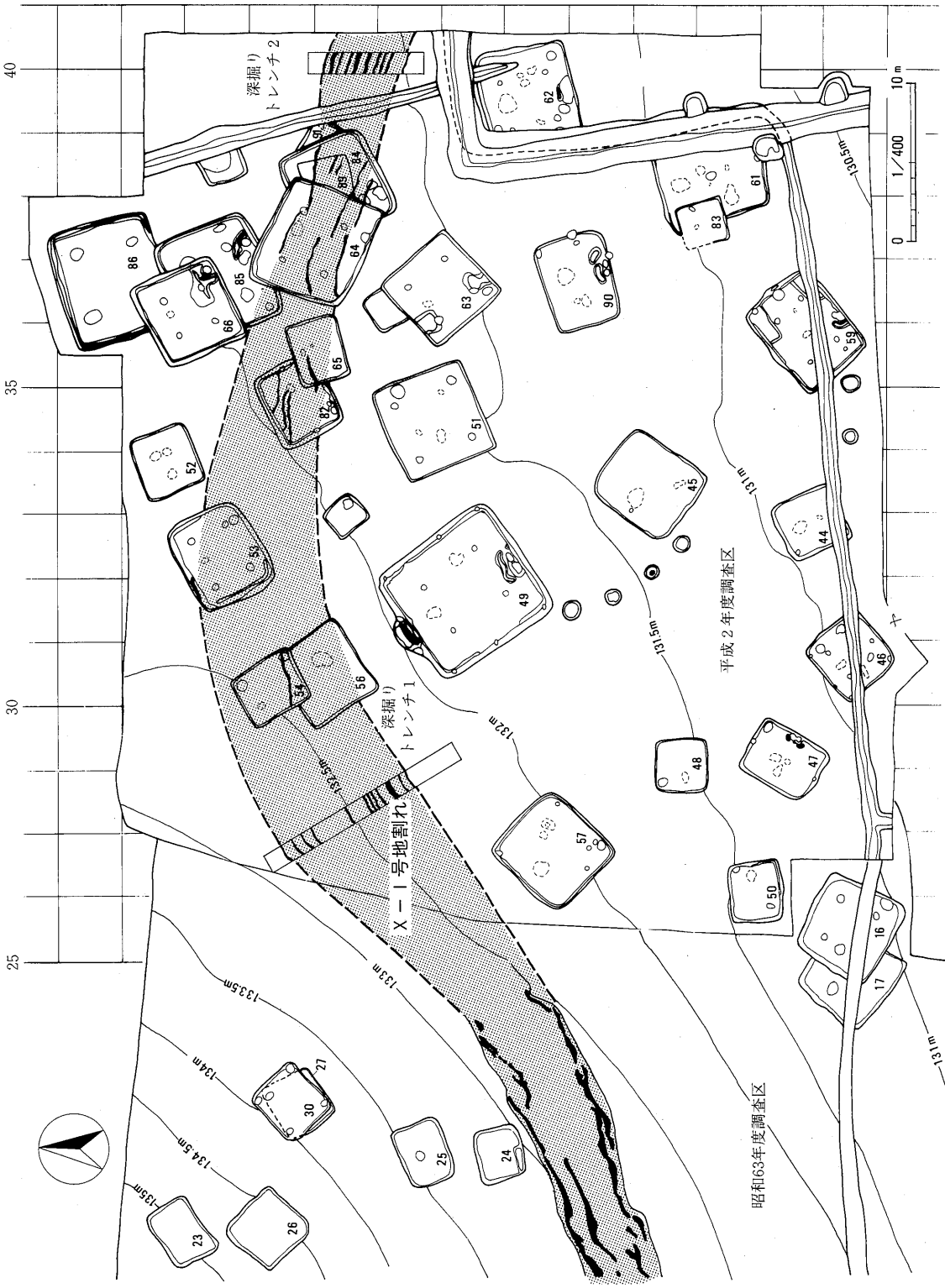
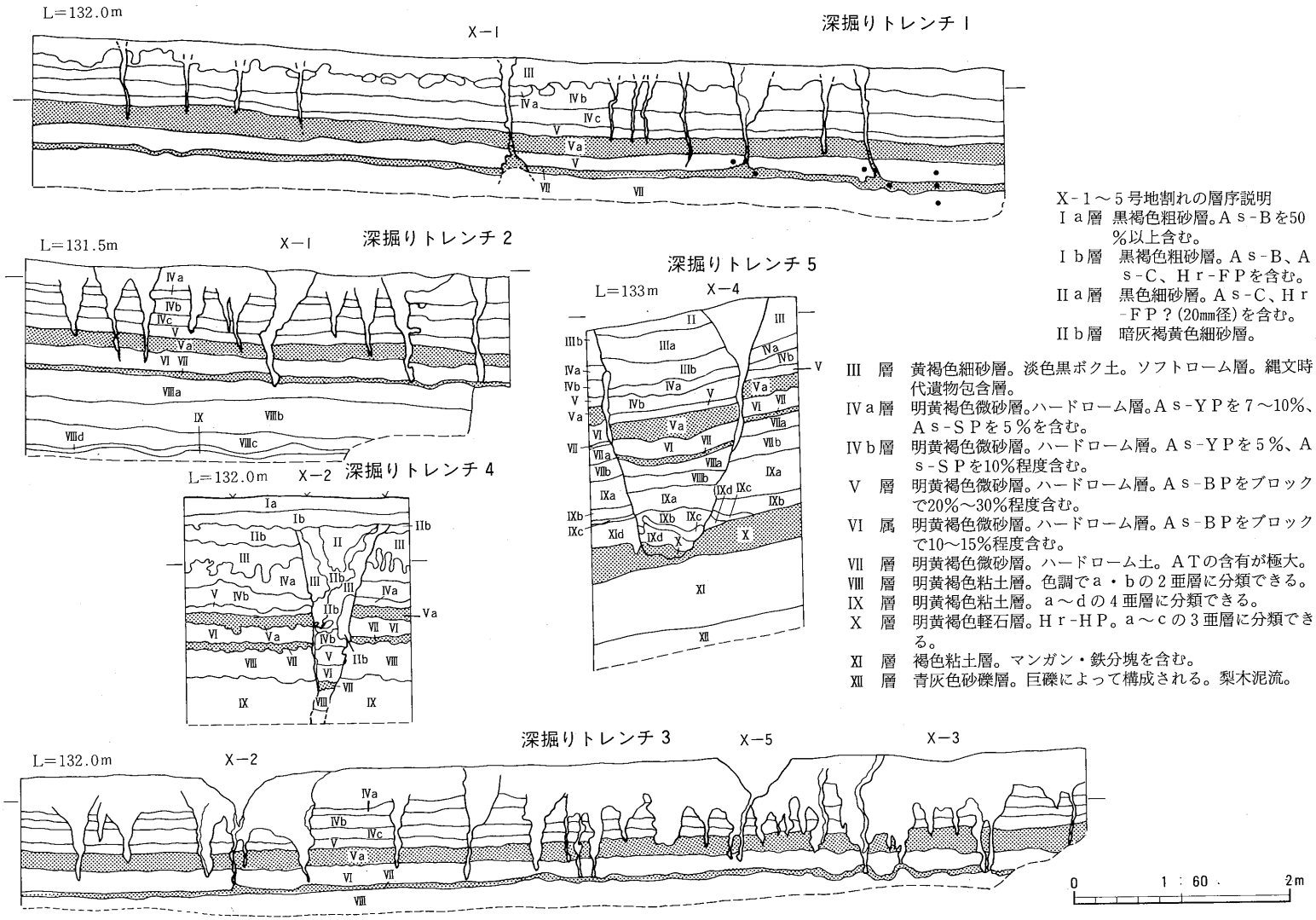


Fig.42　X－1号地割れ



X-1～5号地割れの層序説明

Ⅰa層　黒褐色粗砂層。As-Bを50%以上含む。

Ⅰb層　黒褐色粗砂層。As-B、As-C、Hr-FPを含む。

Ⅱa層　黒色細砂層。As-C、Hr-FP？(20mm径)を含む。

Ⅱb層　暗灰褐黄色細砂層。

Ⅲ　層　黄褐色細砂層。淡色黒ボク土。ソフトローム層。縄文時代遺物包含層。

Ⅳa層　明黄褐色微砂層。ハードローム層。As-YPを7～10%、As-SPを5%を含む。

Ⅳb層　明黄褐色微砂層。ハードローム層。As-YPを5%、As-SPを10%程度含む。

Ⅴ　層　明黄褐色微砂層。ハードローム層。As-BPをブロックで20%～30%程度含む。

Ⅵ　属　明黄褐色微砂層。ハードローム層。As-BPをブロックで10～15%程度含む。

Ⅶ　層　明黄褐色微砂層。ハードローム土。ATの含有が極大。

Ⅷ　層　明黄褐色粘土層。色調でa・bの2亜層に分類できる。

Ⅸ　層　明黄褐色粘土層。a～dの4亜層に分類できる。

Ⅹ　層　明黄褐色軽石層。Hr-HP。a～cの3亜層に分類できる。

Ⅺ　層　褐色粘土層。マンガン・鉄分塊を含む。

Ⅻ　層　青灰色砂礫層。巨礫によって構成される。梨木泥流。

Fig.43　X−1～5号地割れ

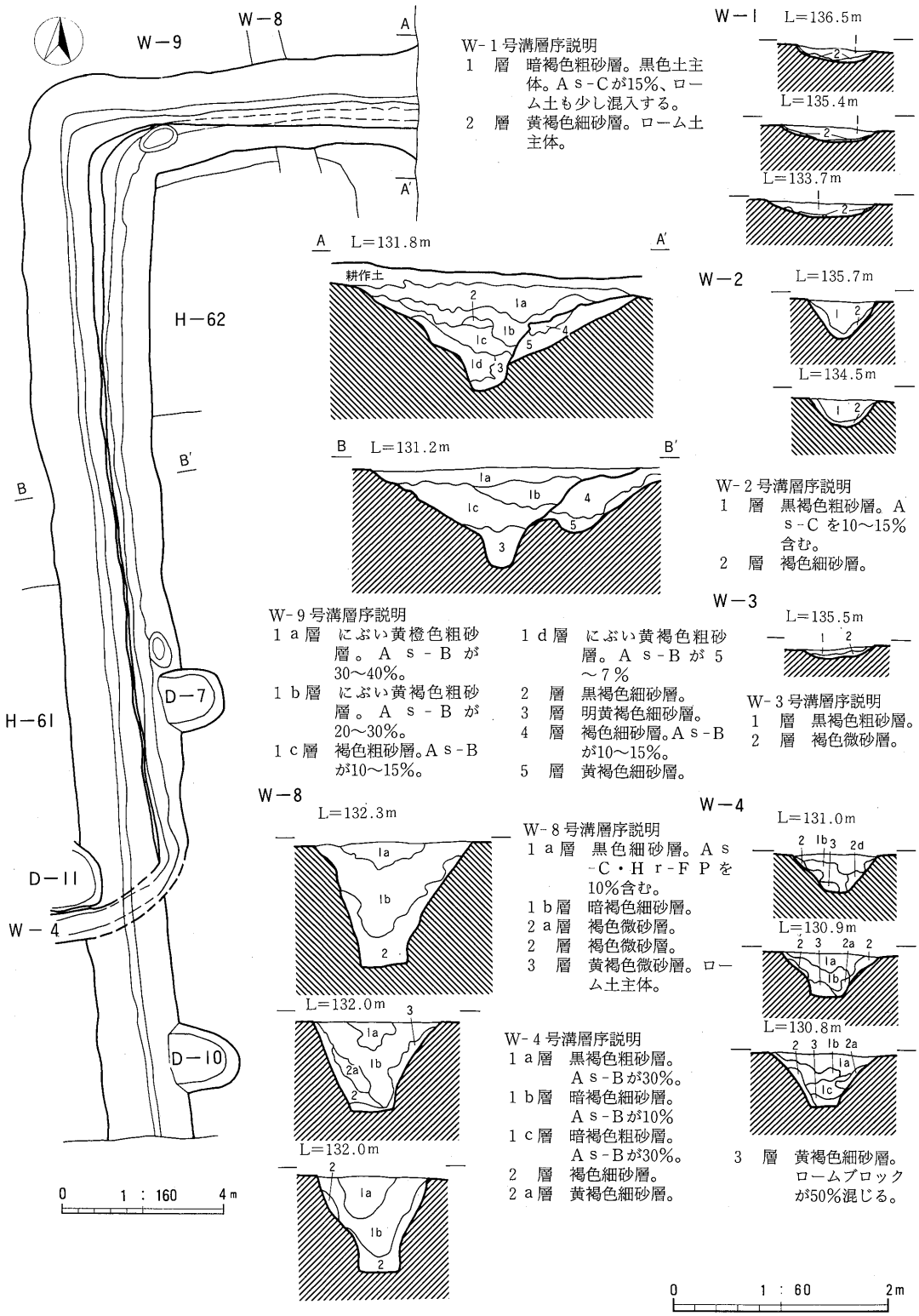


Fig.44 W－1～4・8・9号溝

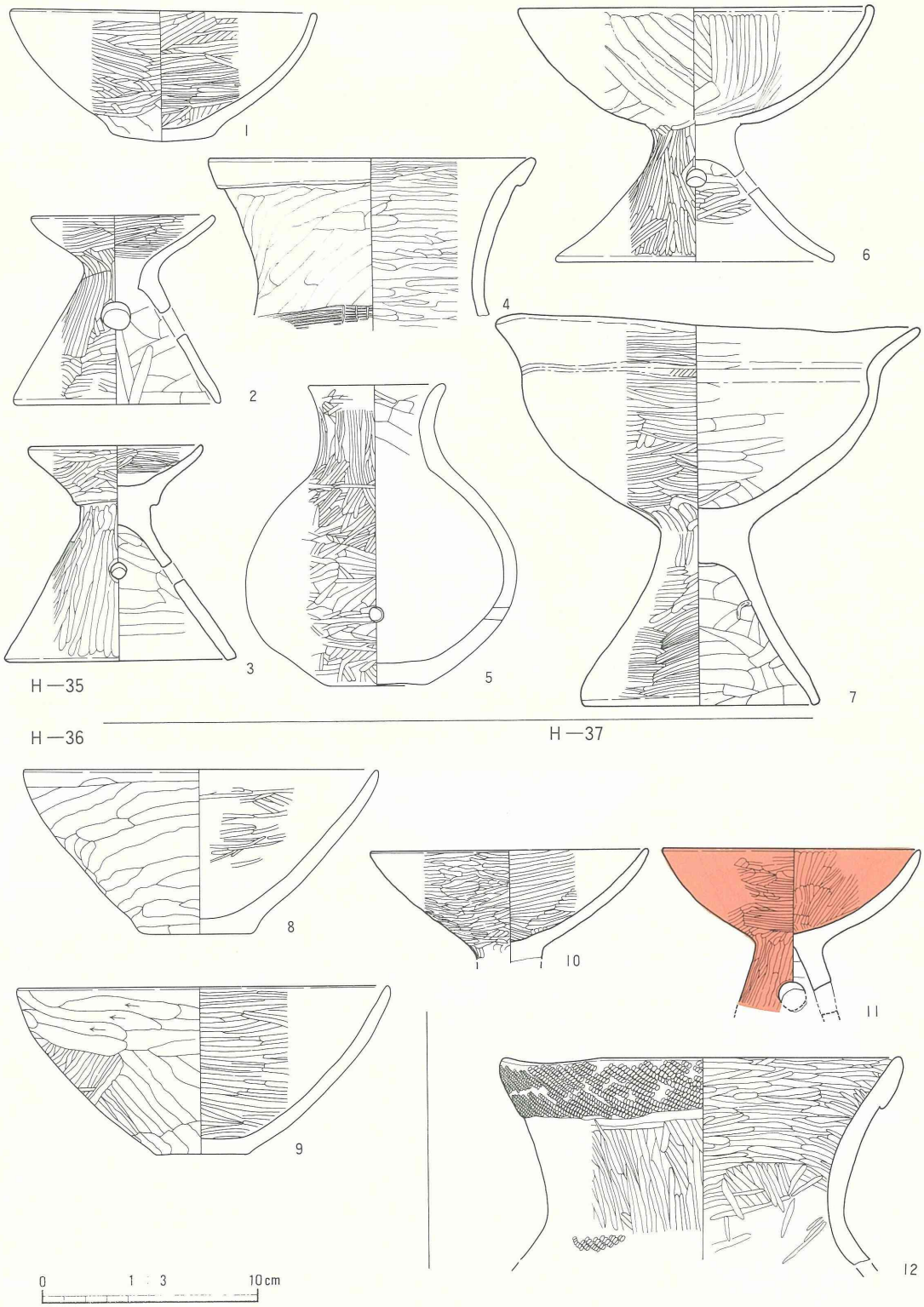


Fig. 45　H—35～37号住居址出土の土器

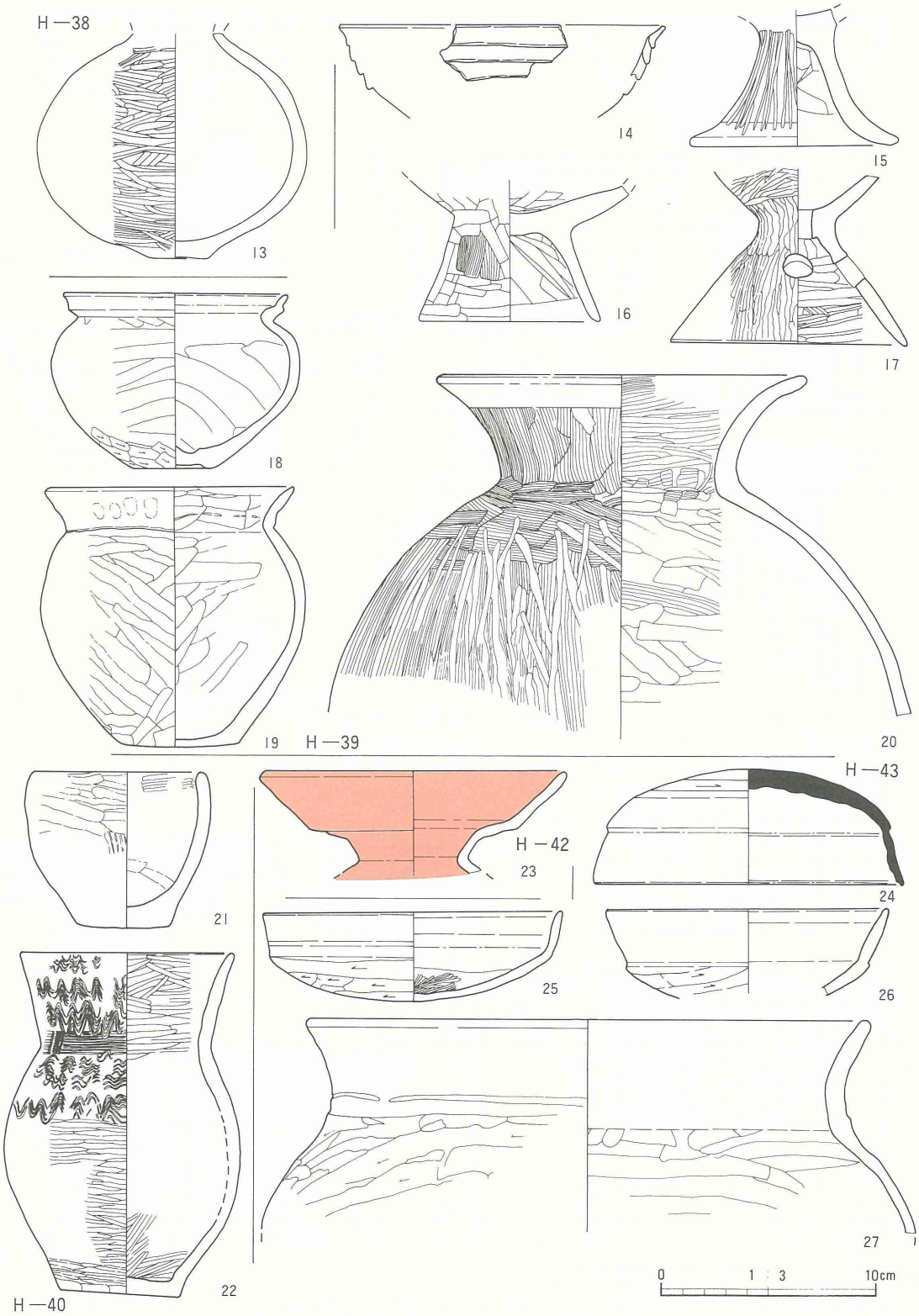


Fig. 46　H—38～40・42・43号住居址出土の土器

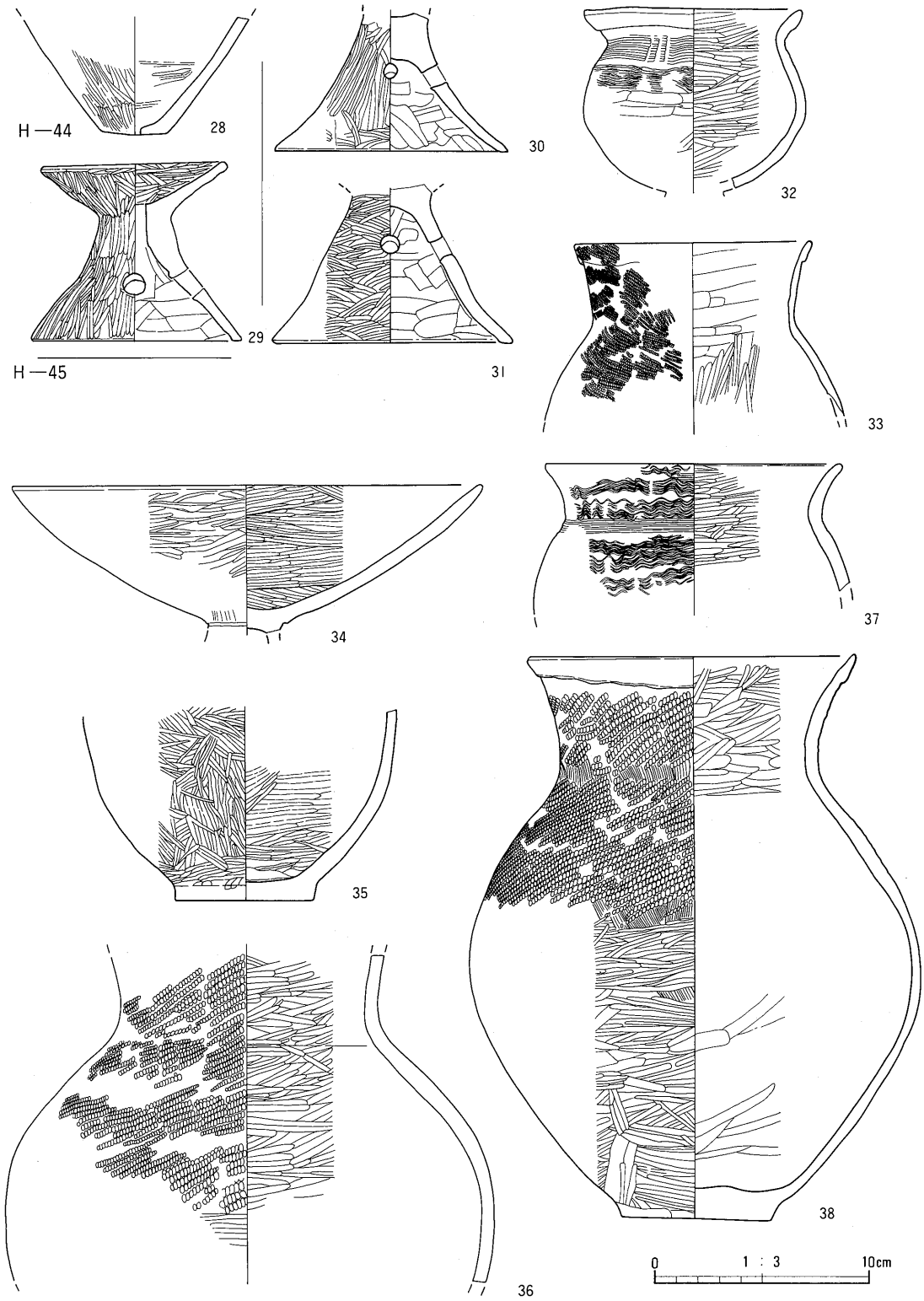


Fig. 47　H—44・45号住居址出土の土器

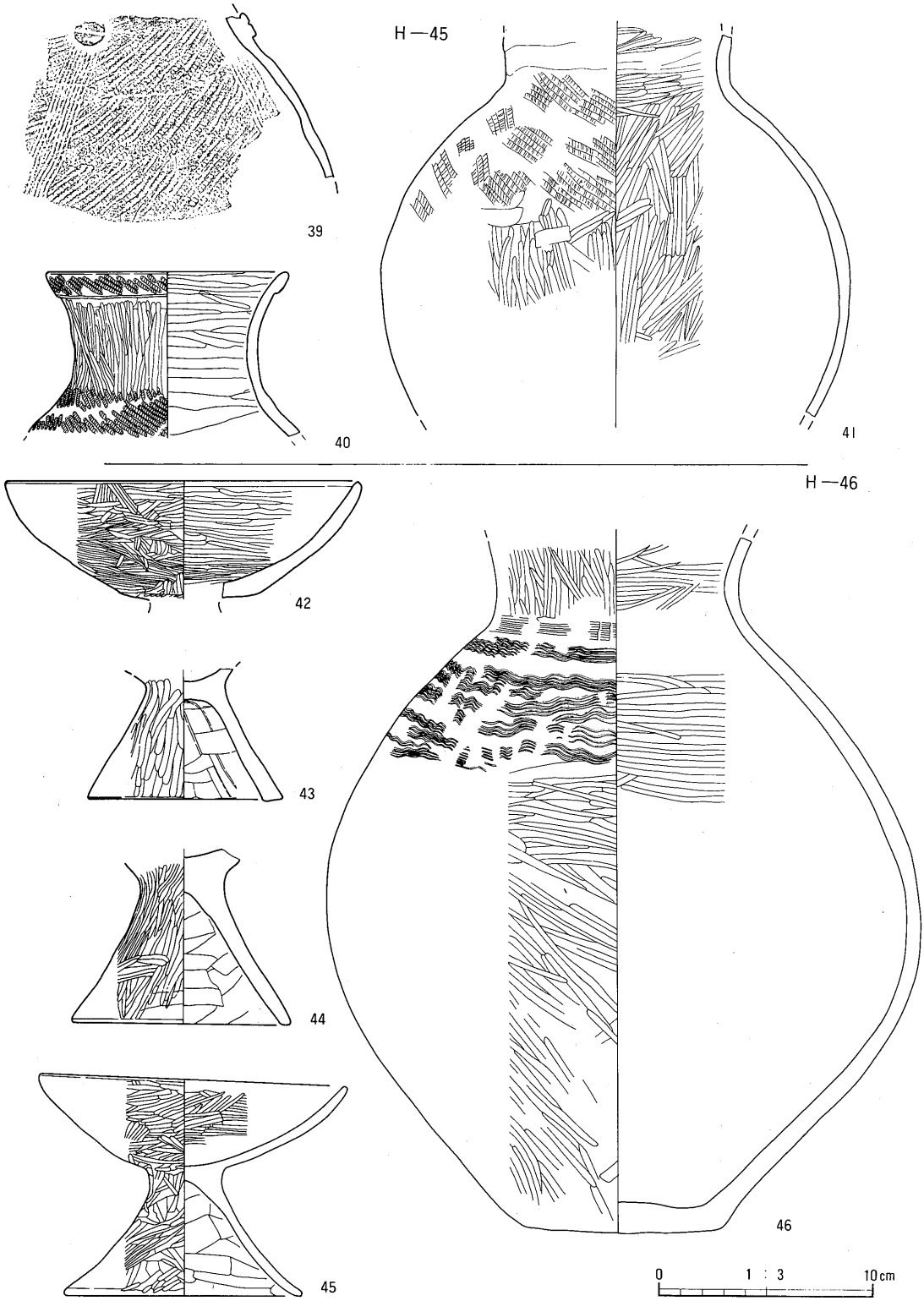


Fig. 48　H—45・46号住居址出土の土器

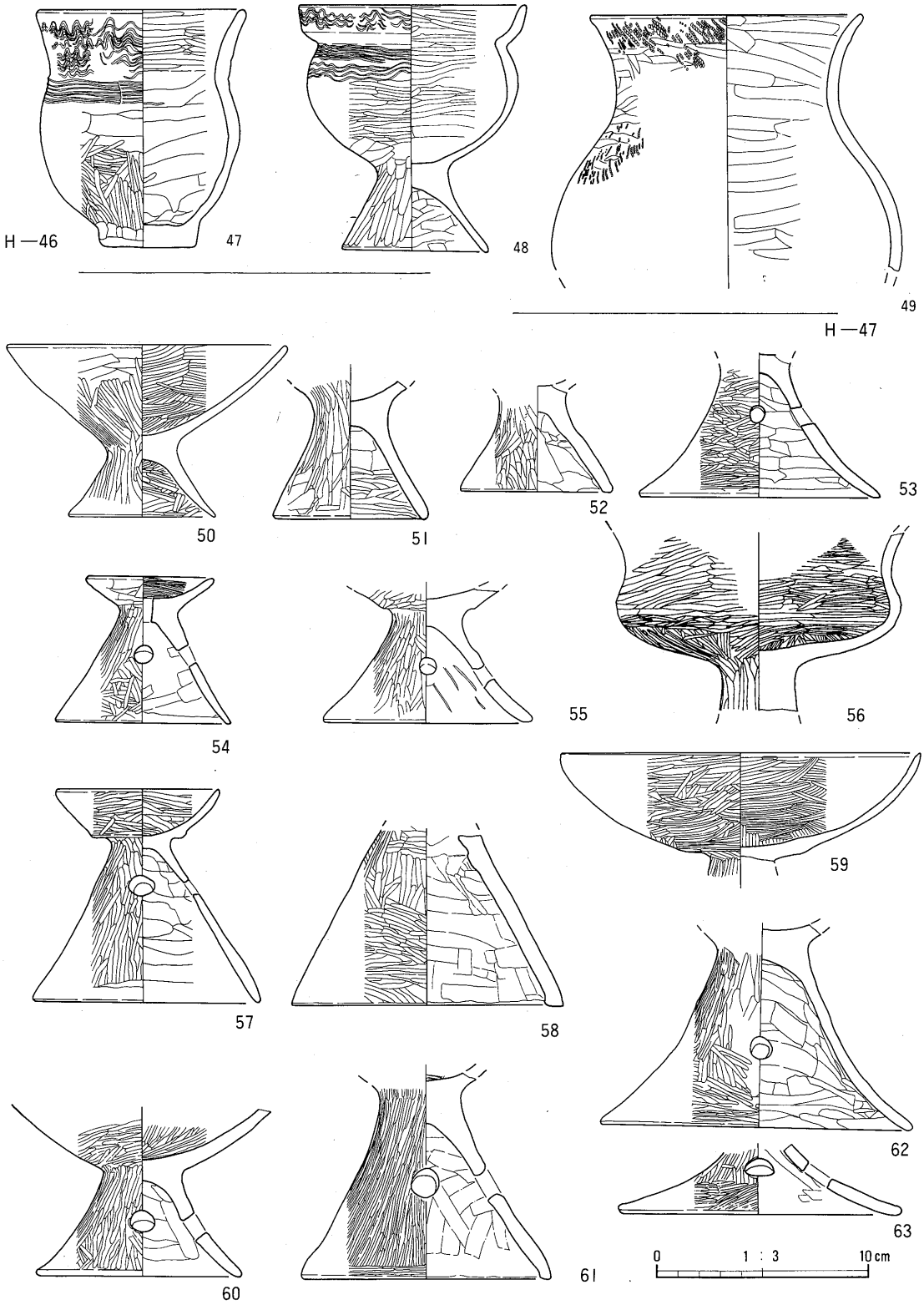


Fig. 49　H—46・47号住居址出土の土器

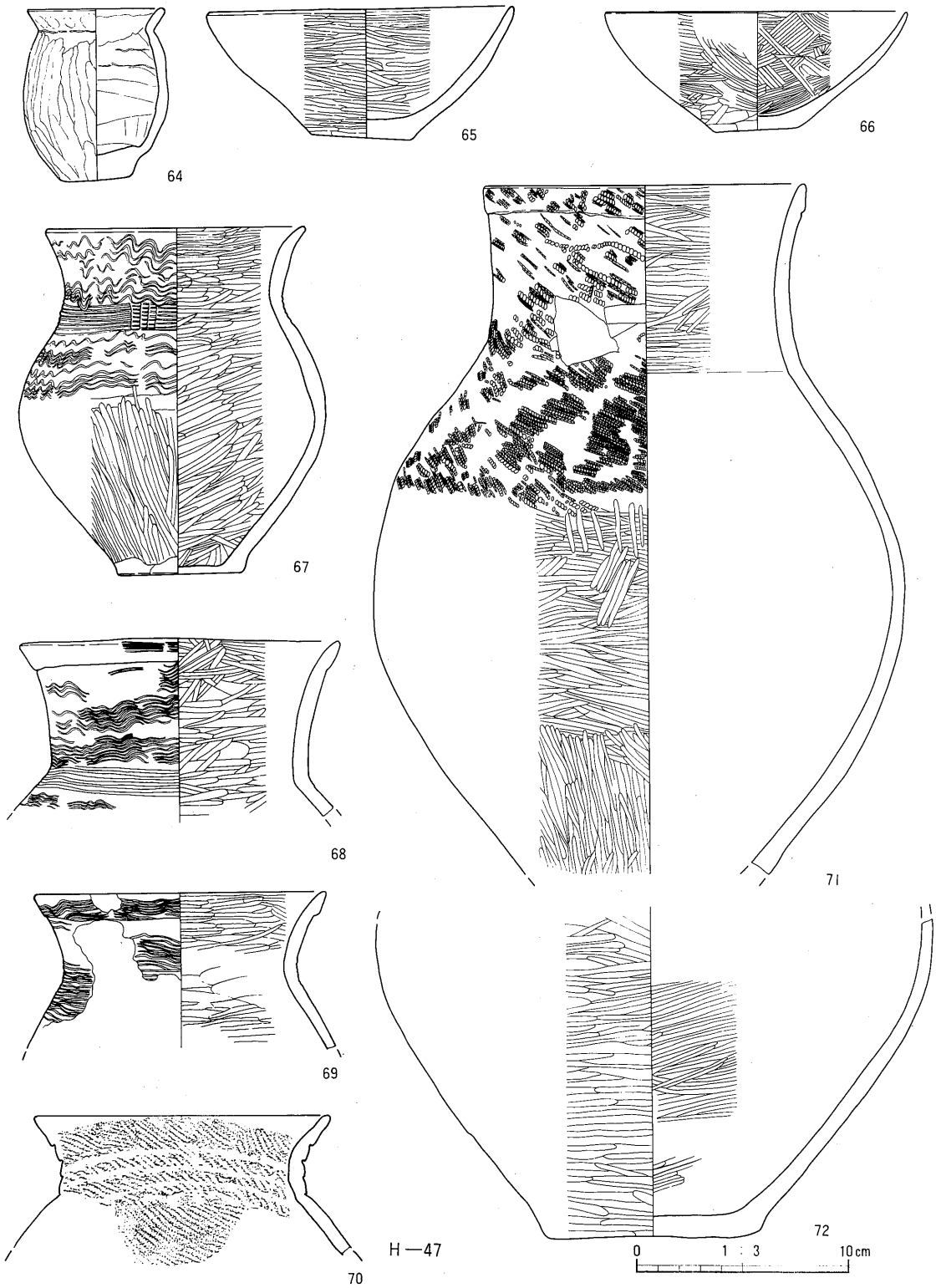


Fig. 50　H—47号住居址出土の土器

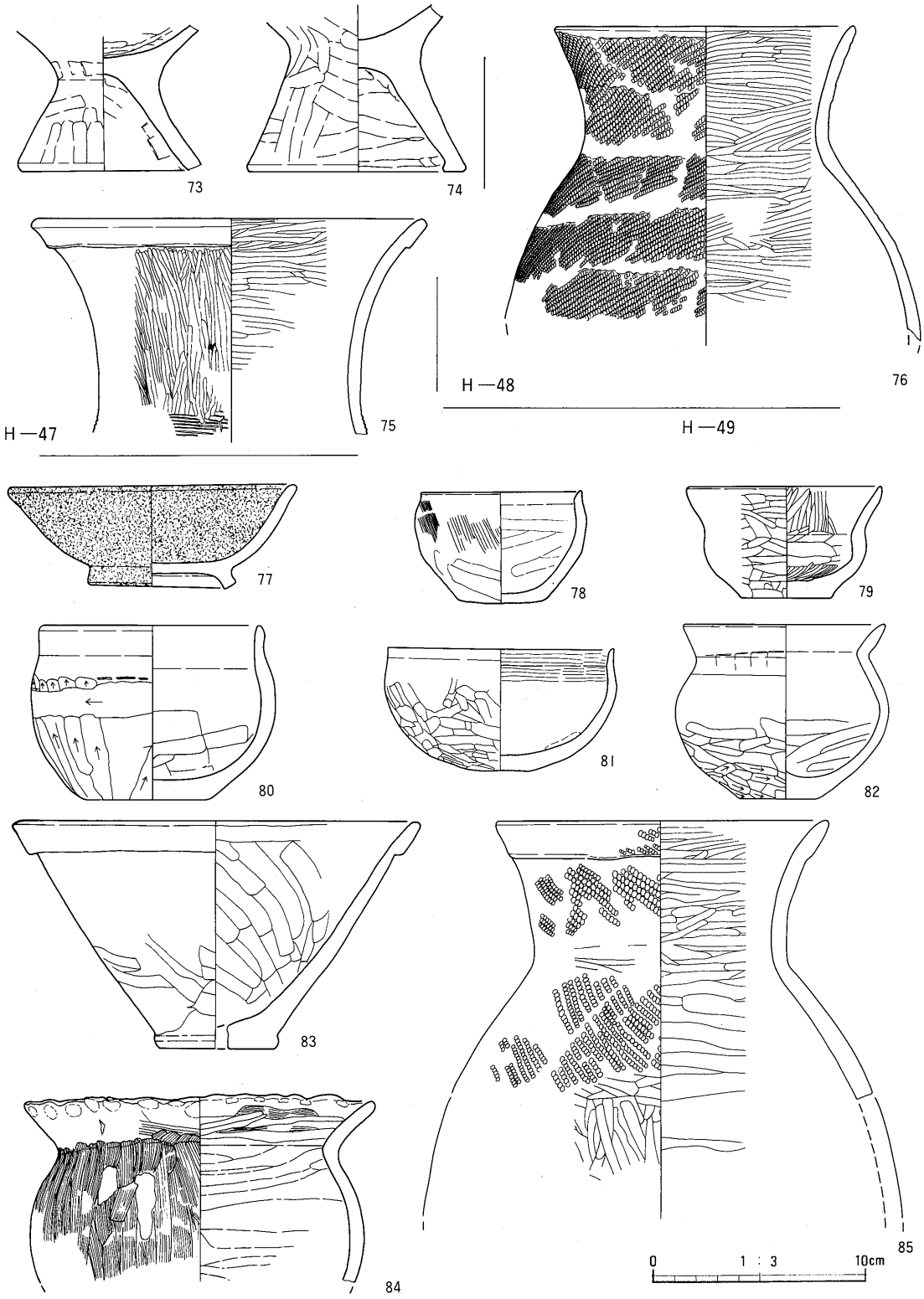


Fig. 51　H—47～49号住居址出土の土器

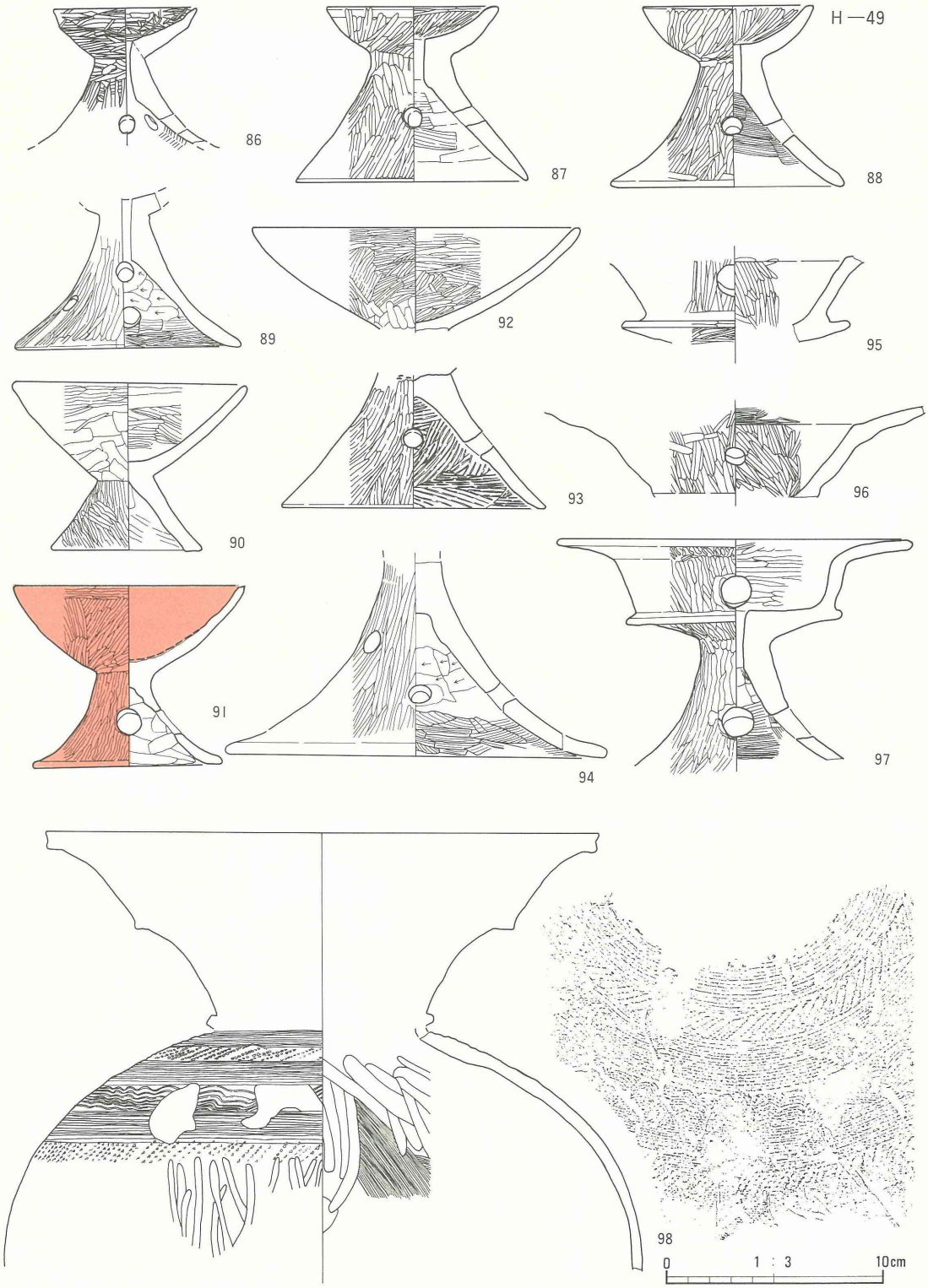


Fig. 52　H—49号住居址出土の土器

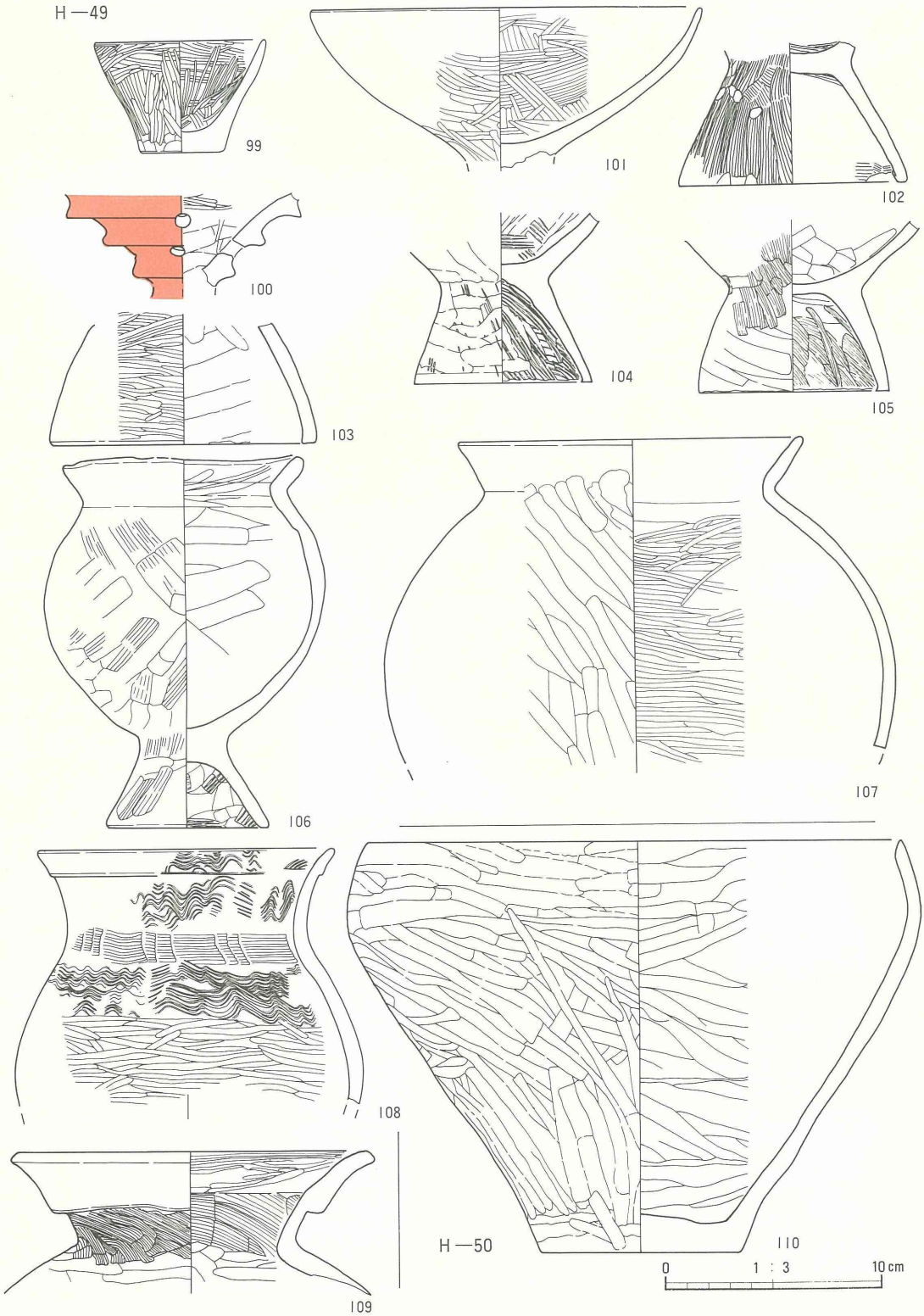


Fig. 53　H—49・50号住居址出土の土器

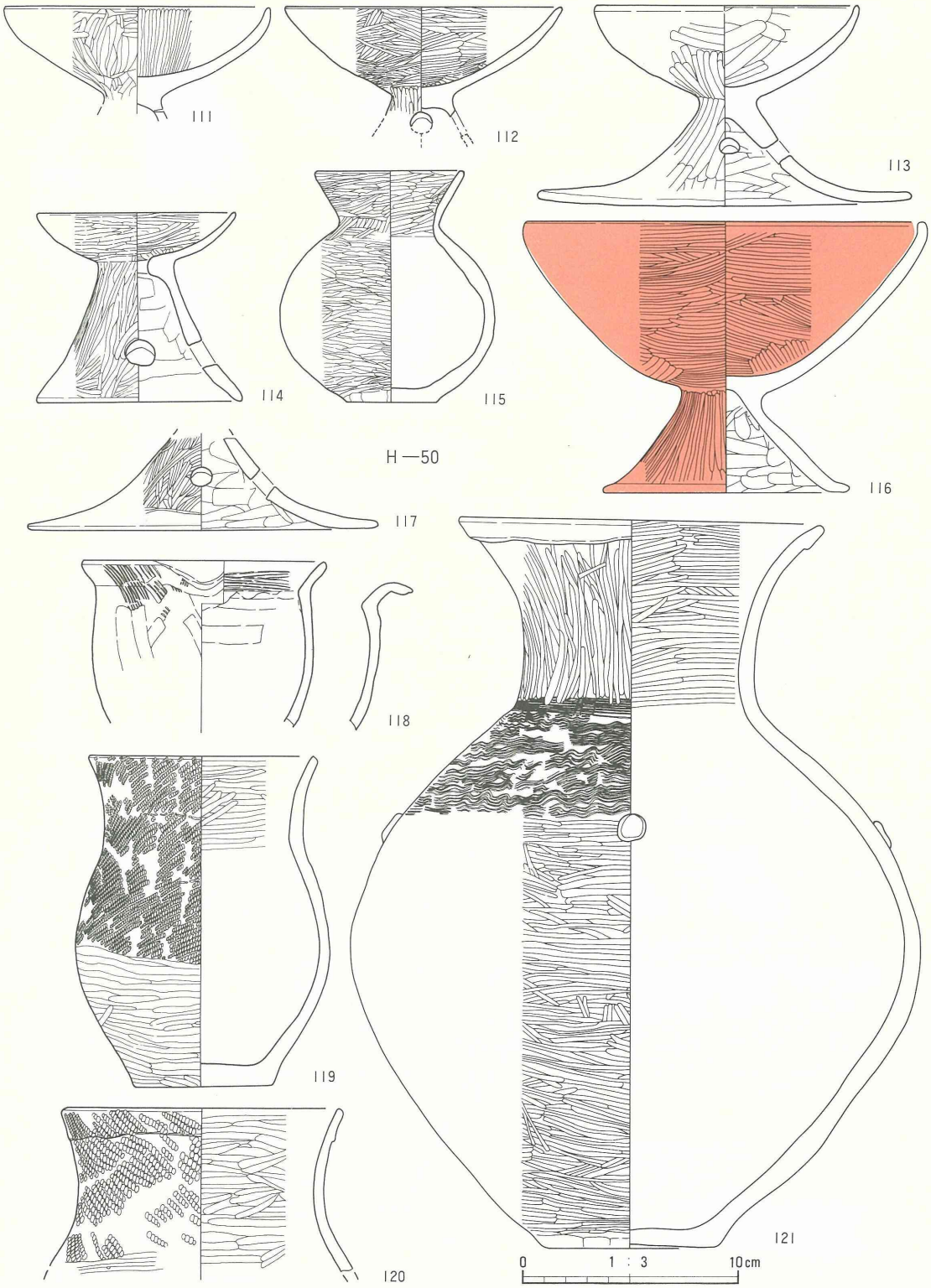


Fig. 54　H—50号住居址出土の土器

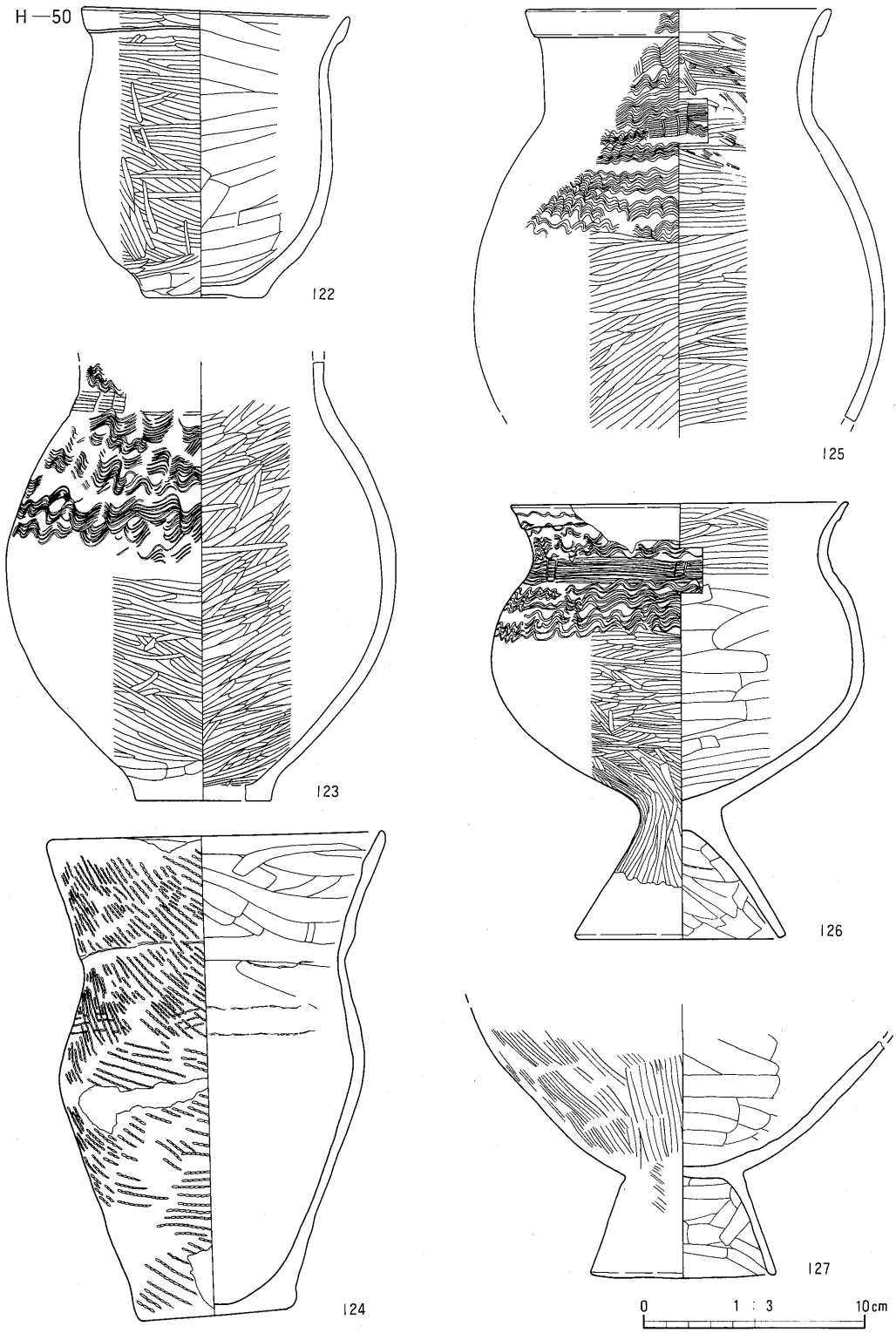


Fig. 55　H—50号住居址出土の土器

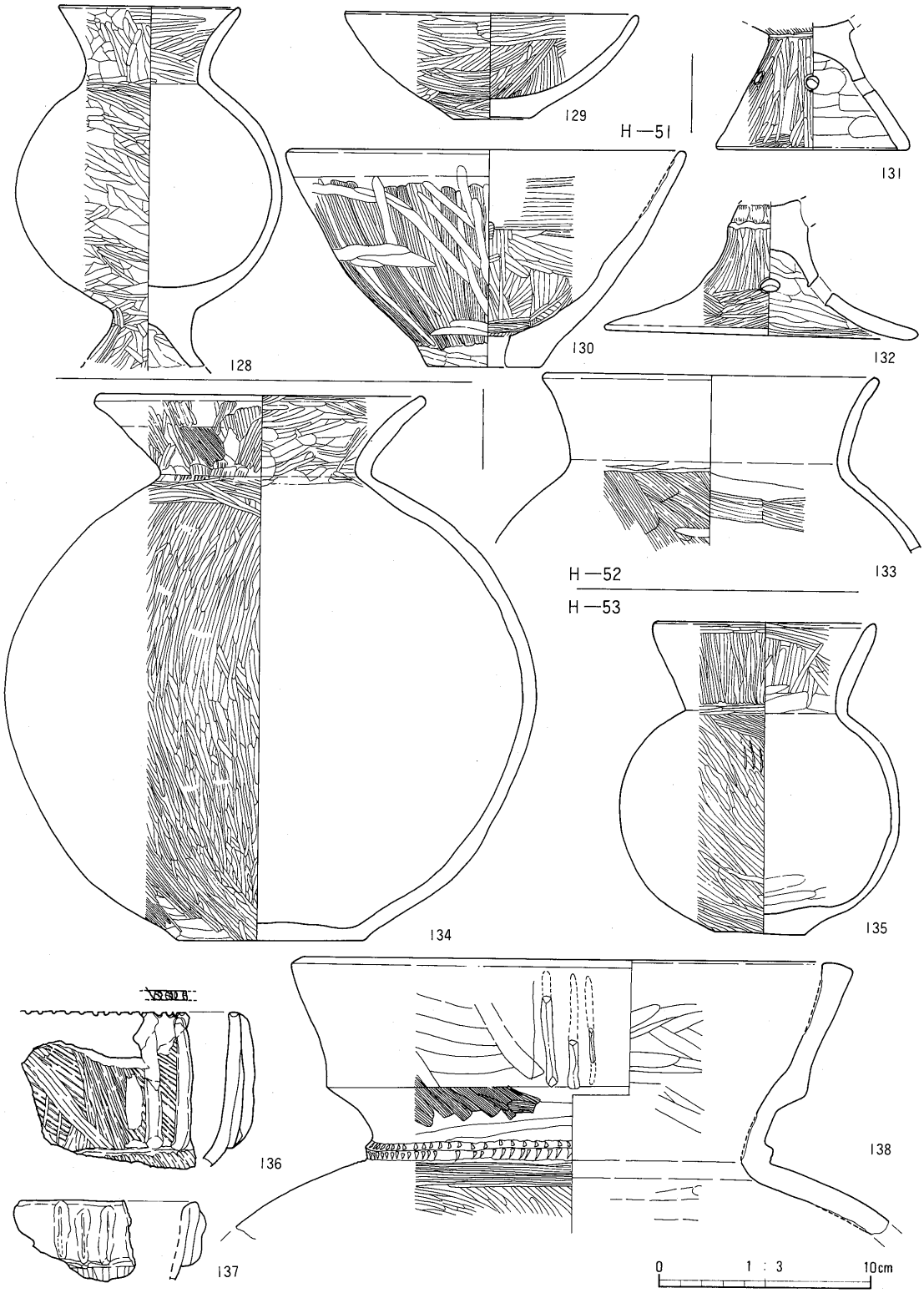


Fig. 56　H—51～53号住居址出土の土器

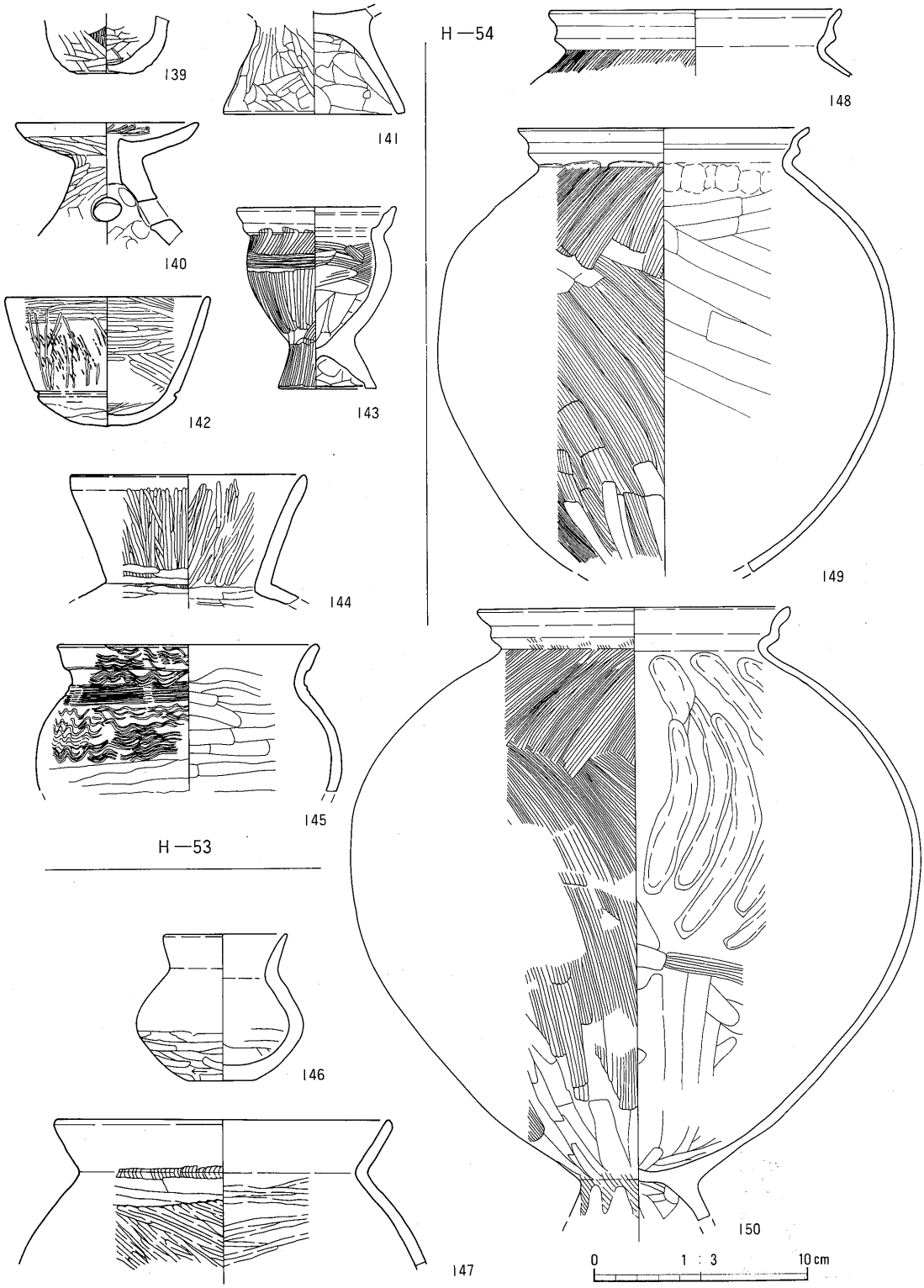


Fig. 57　H—53・54号住居址出土の土器

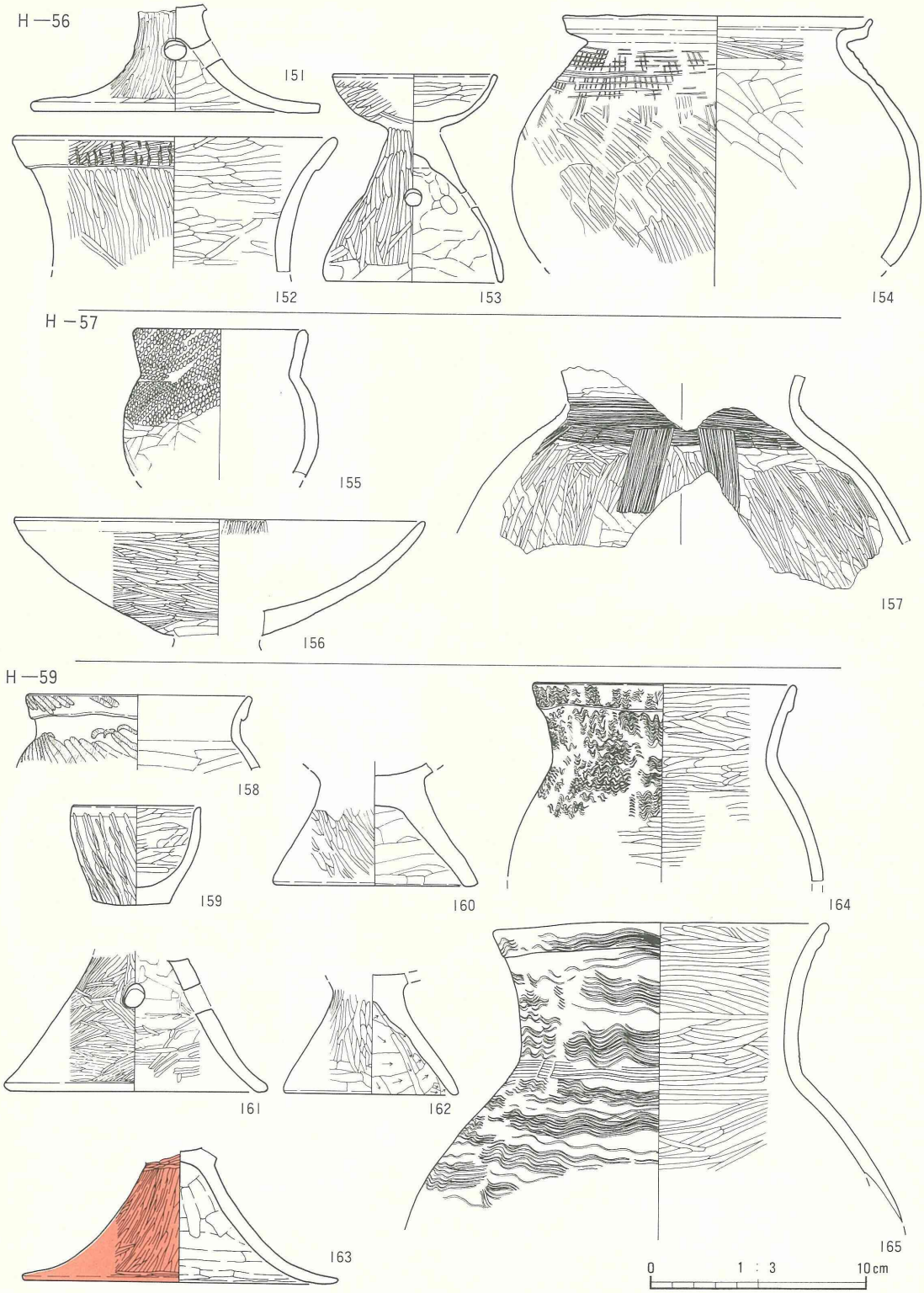


Fig. 58　H—56・57・59号住居址出土の土器

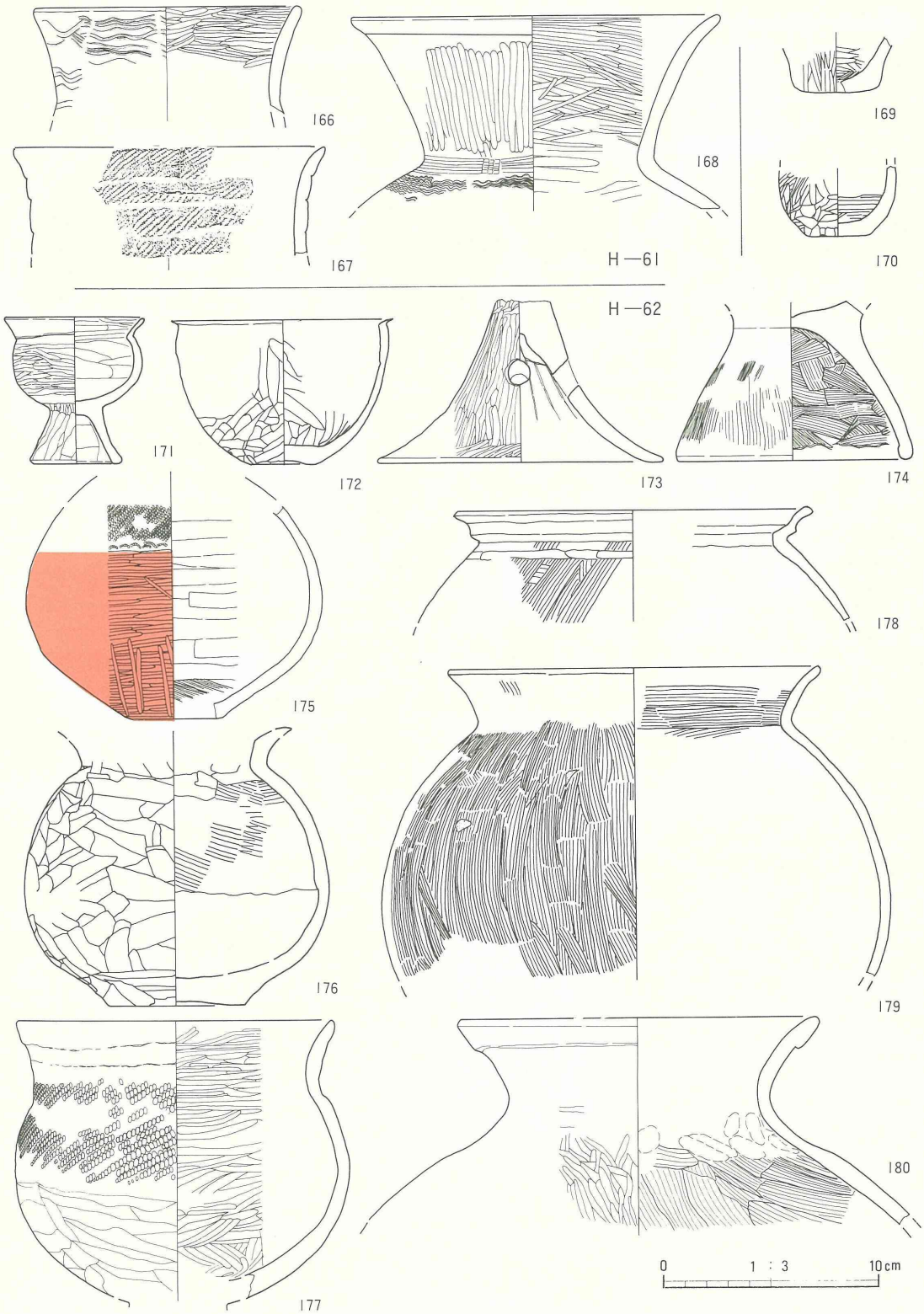


Fig. 59　H—61・62号住居址出土の土器

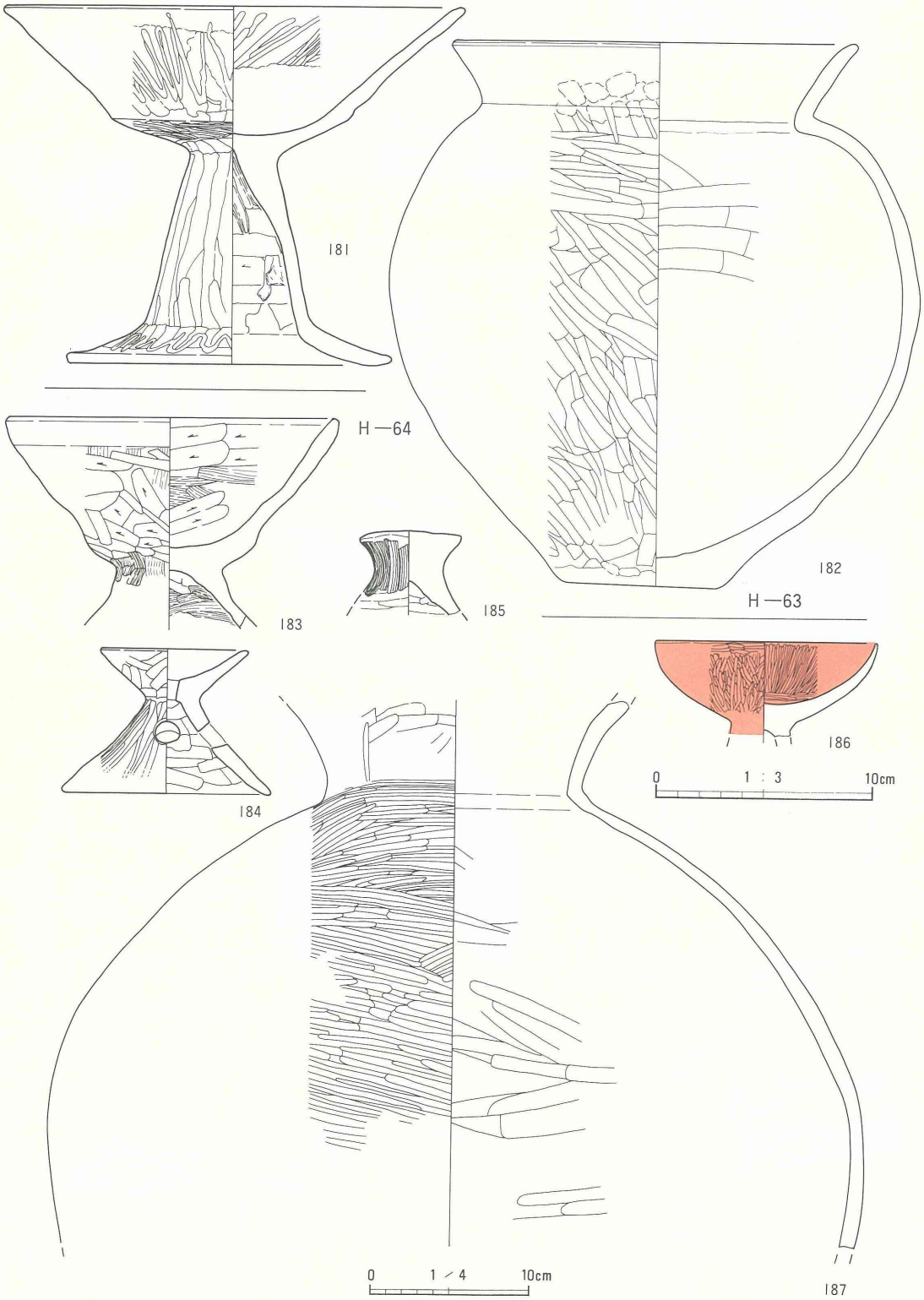


Fig. 60　H—63・64号住居址出土の土器

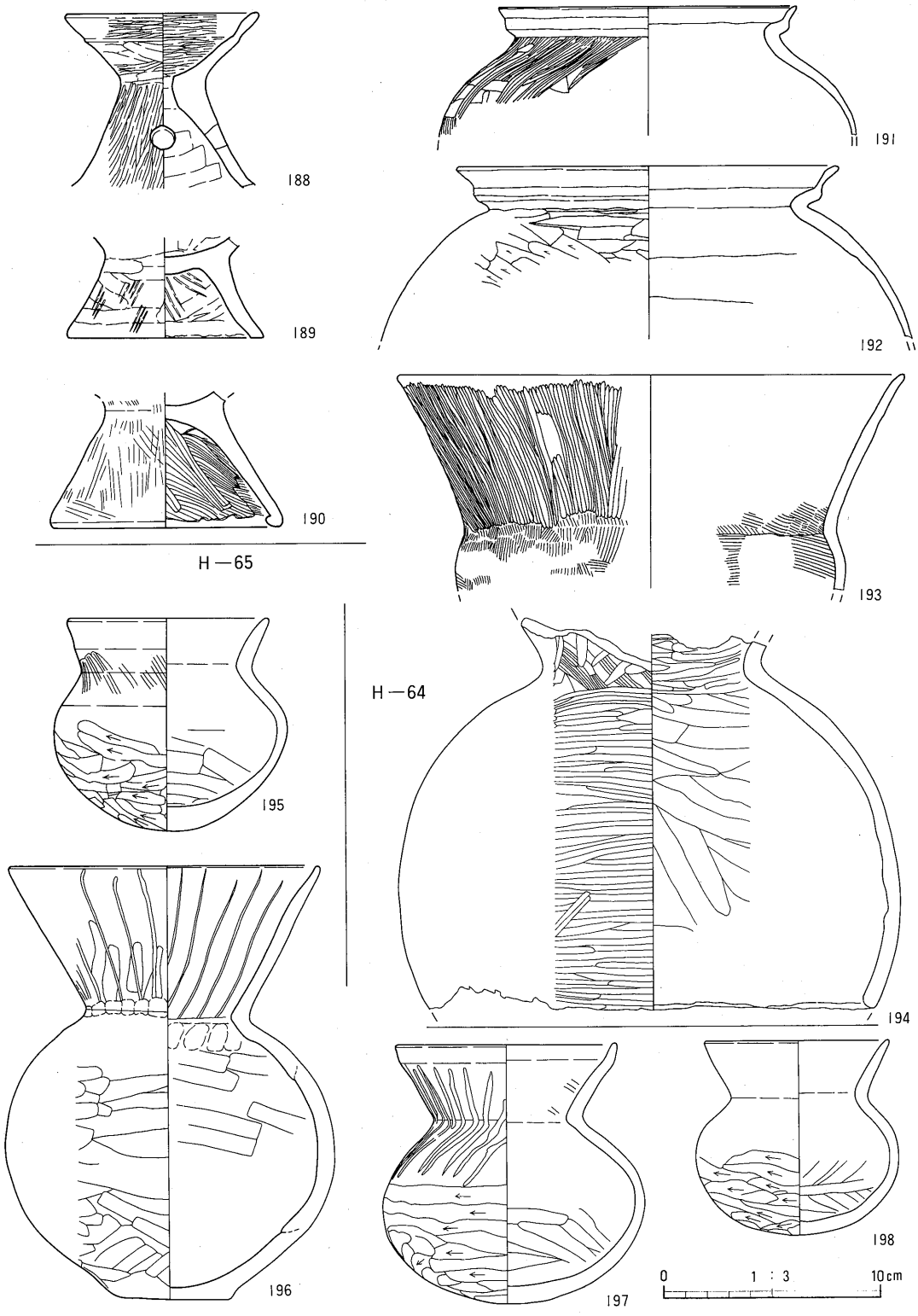


Fig. 61　H—64・65号住居址出土の土器

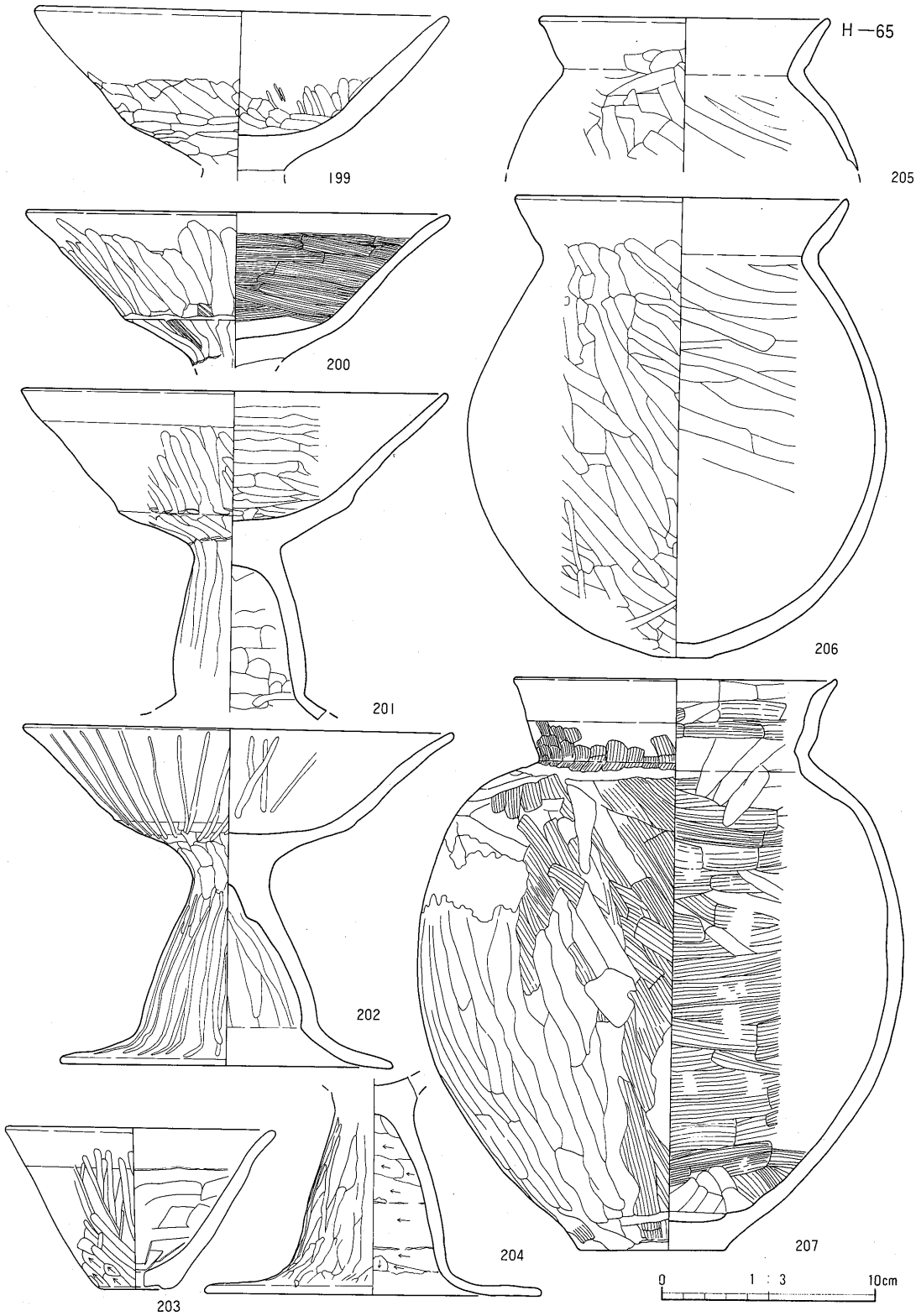


Fig. 62　H—65号住居址出土の土器

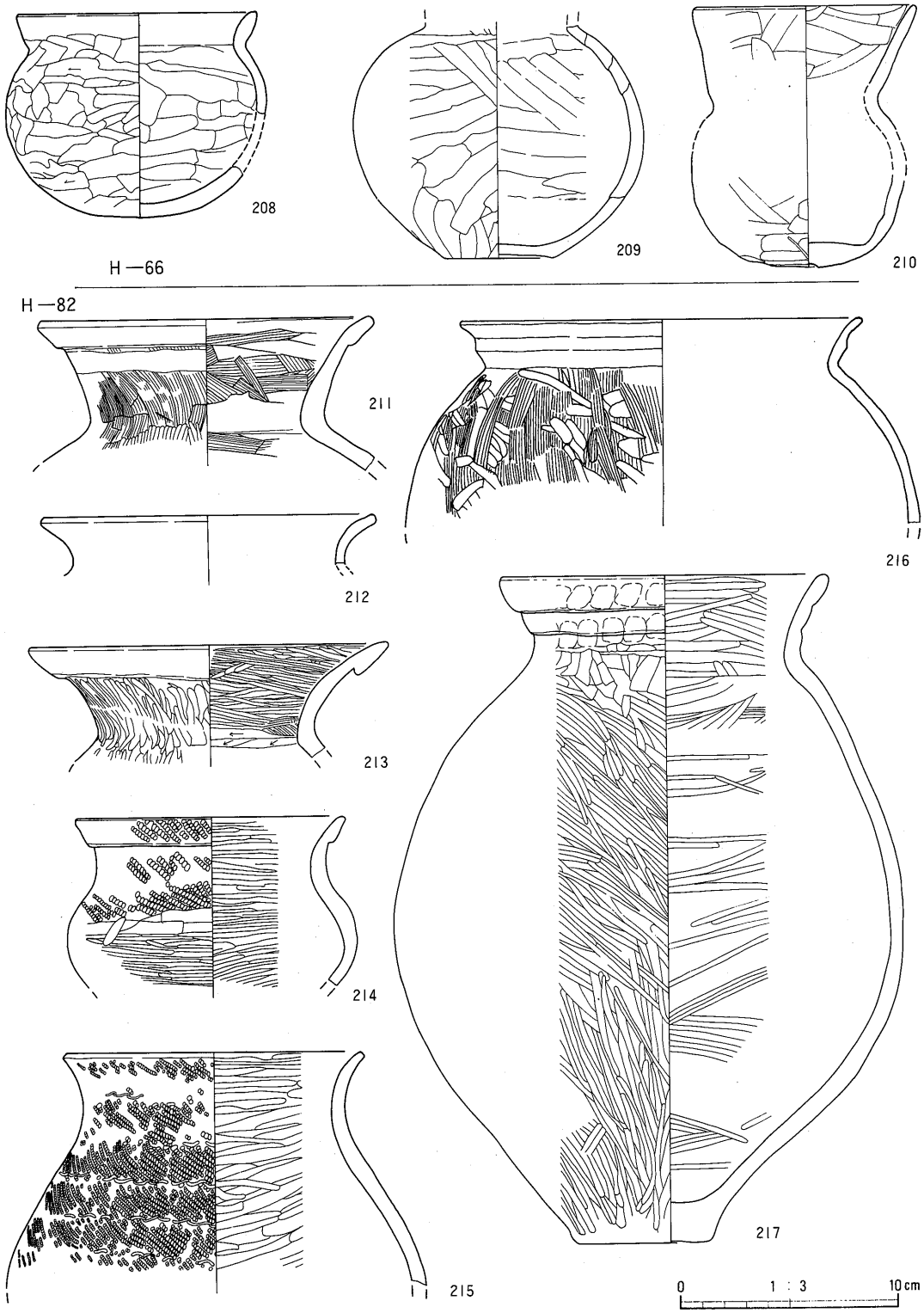


Fig. 63　H—66・82号住居址出土の土器

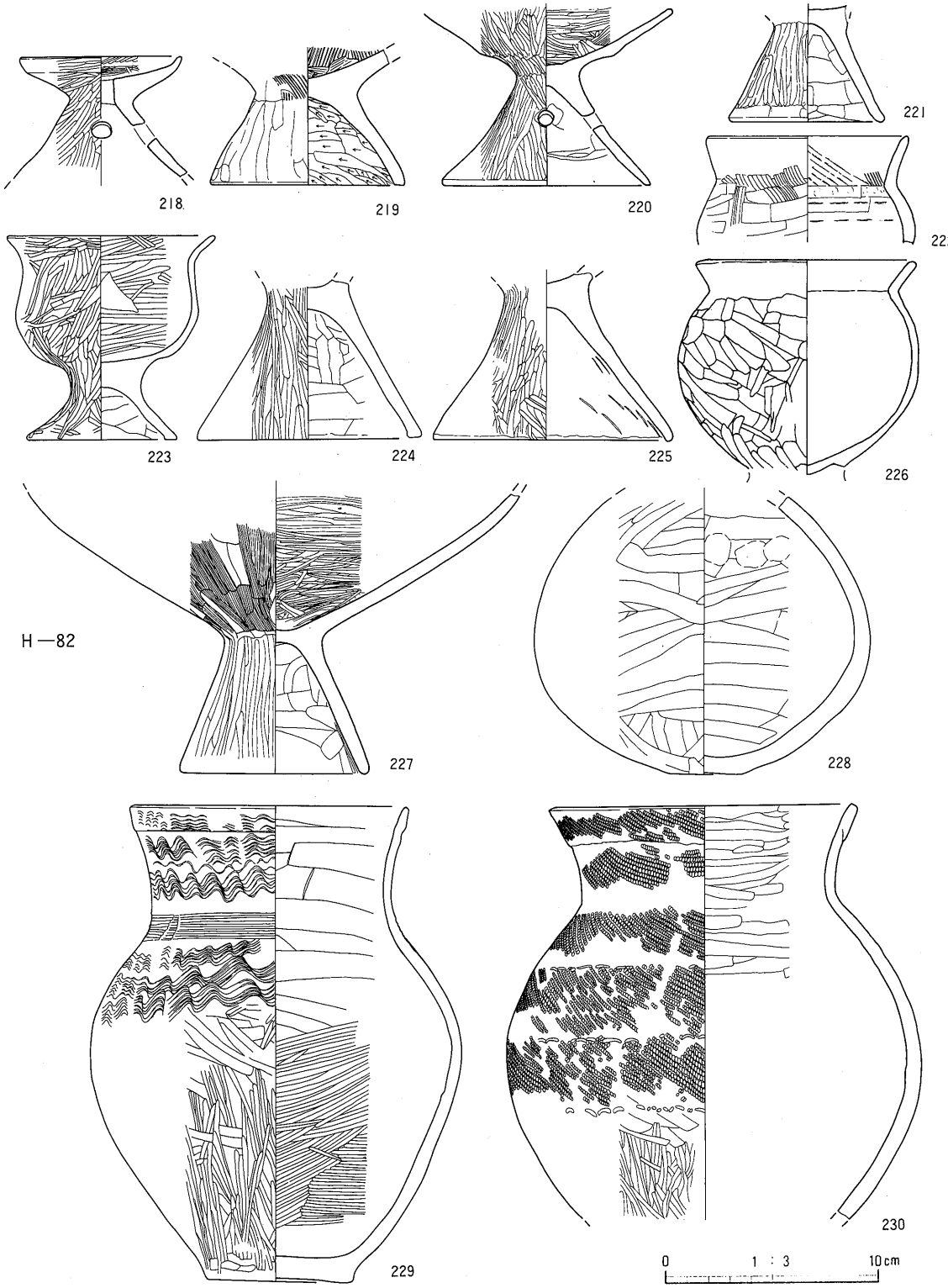


Fig. 64　H—82号住居址出土の土器

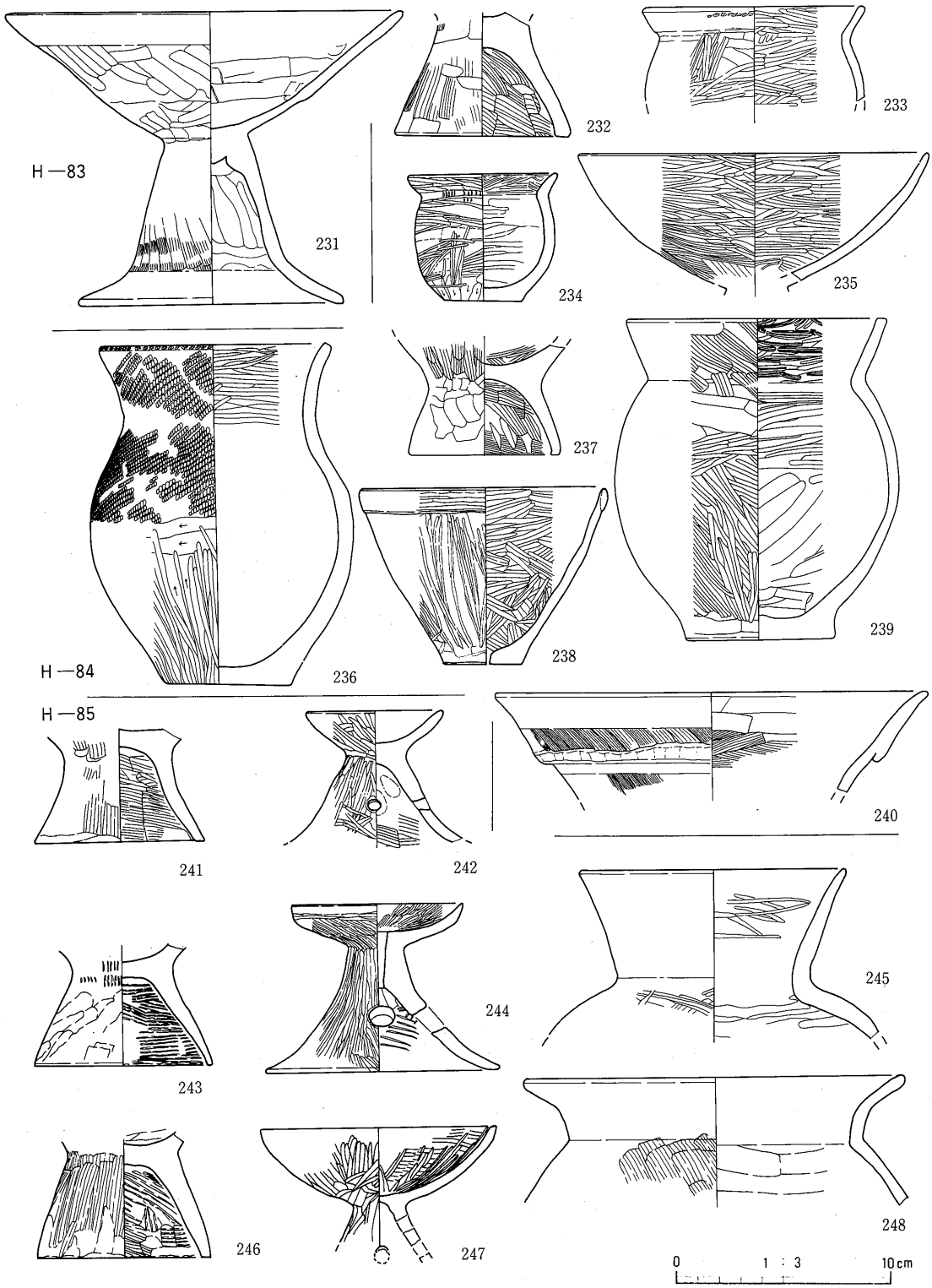


Fig. 65　H—83～85号住居址出土の土器

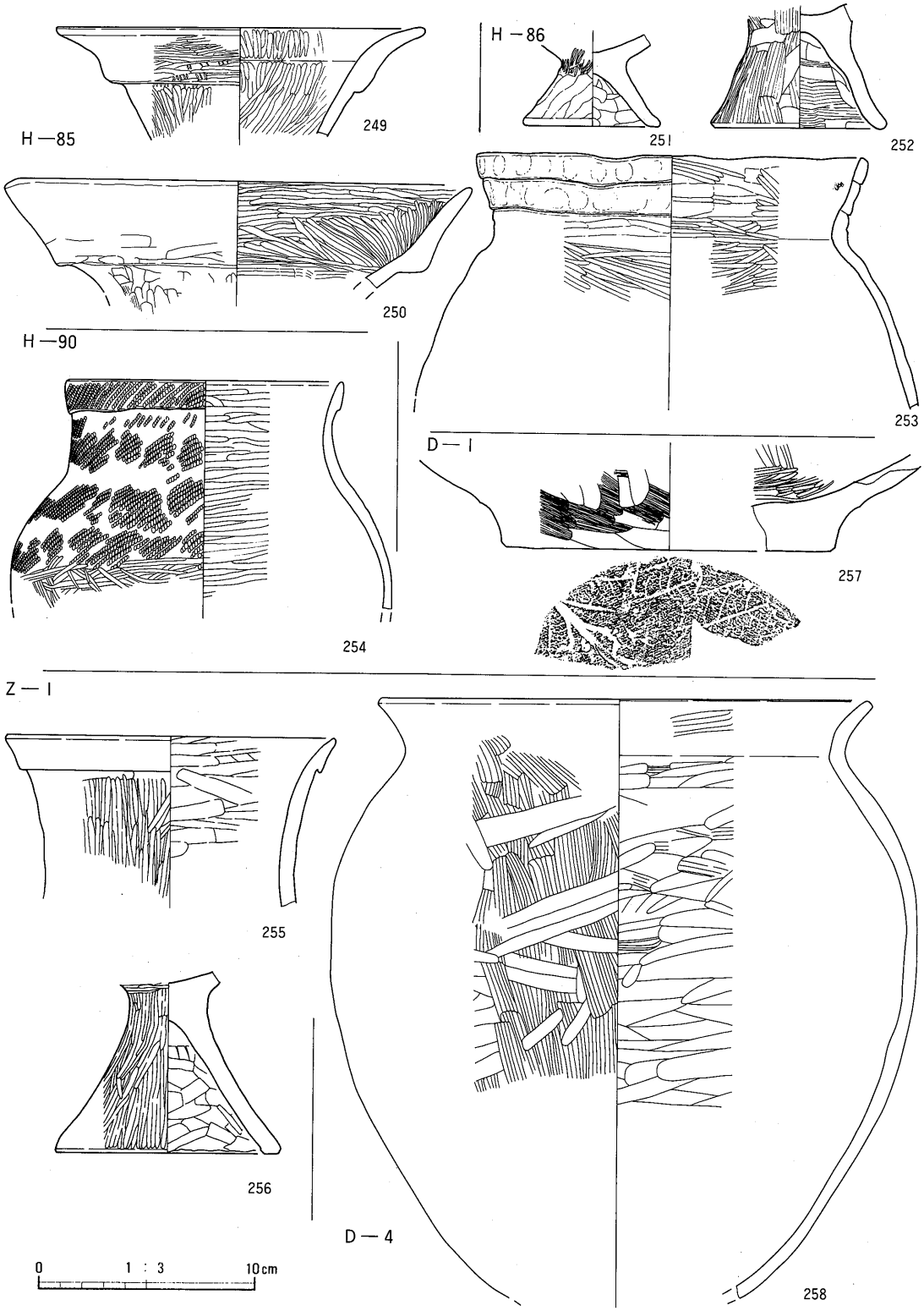


Fig. 66　H－85・86・90号住居址・Z－1号遺物集中区・D－1・4号土坑出土の土器

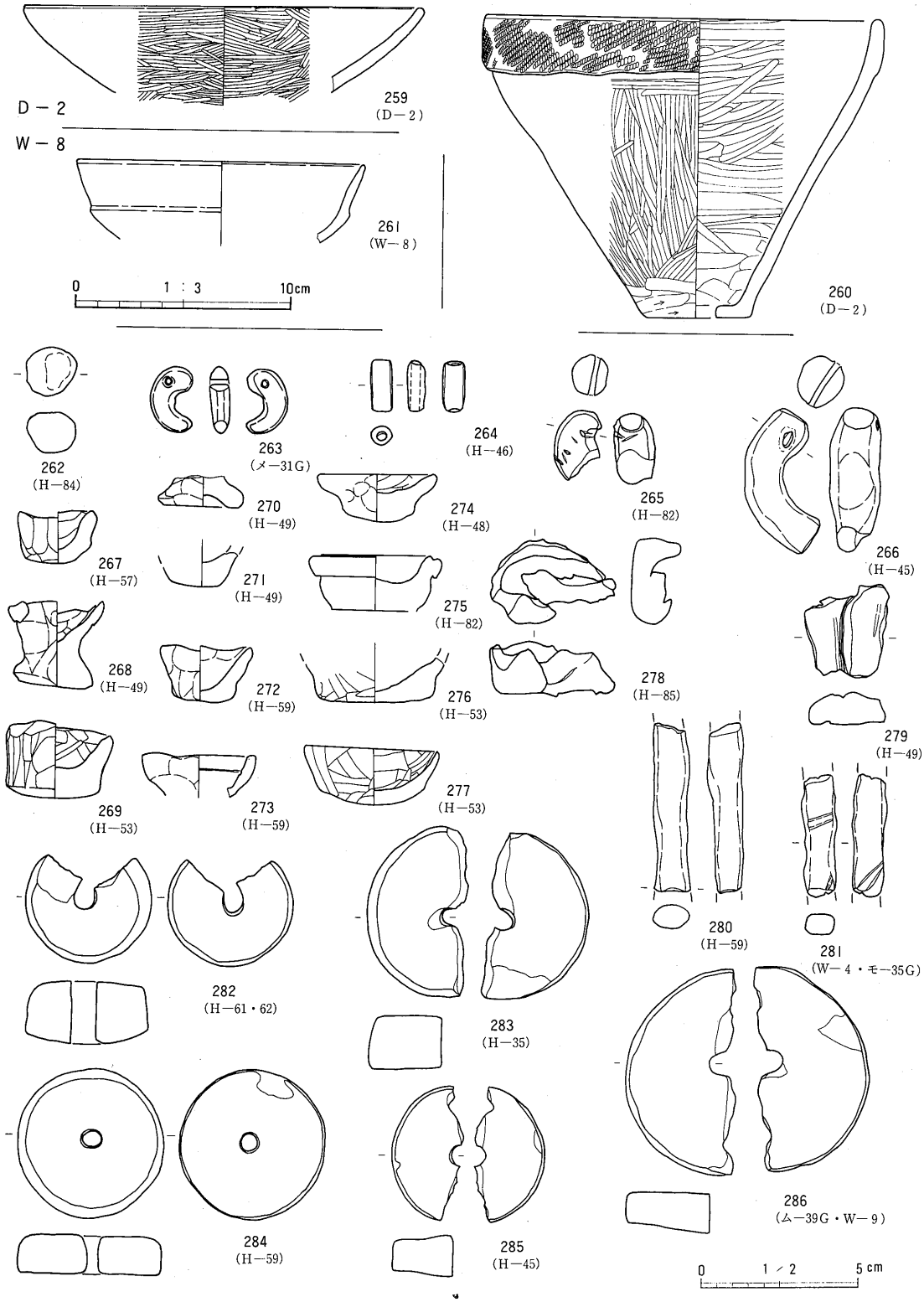


Fig. 67　D－2号土坑・W－8号溝の土器と土・石製品

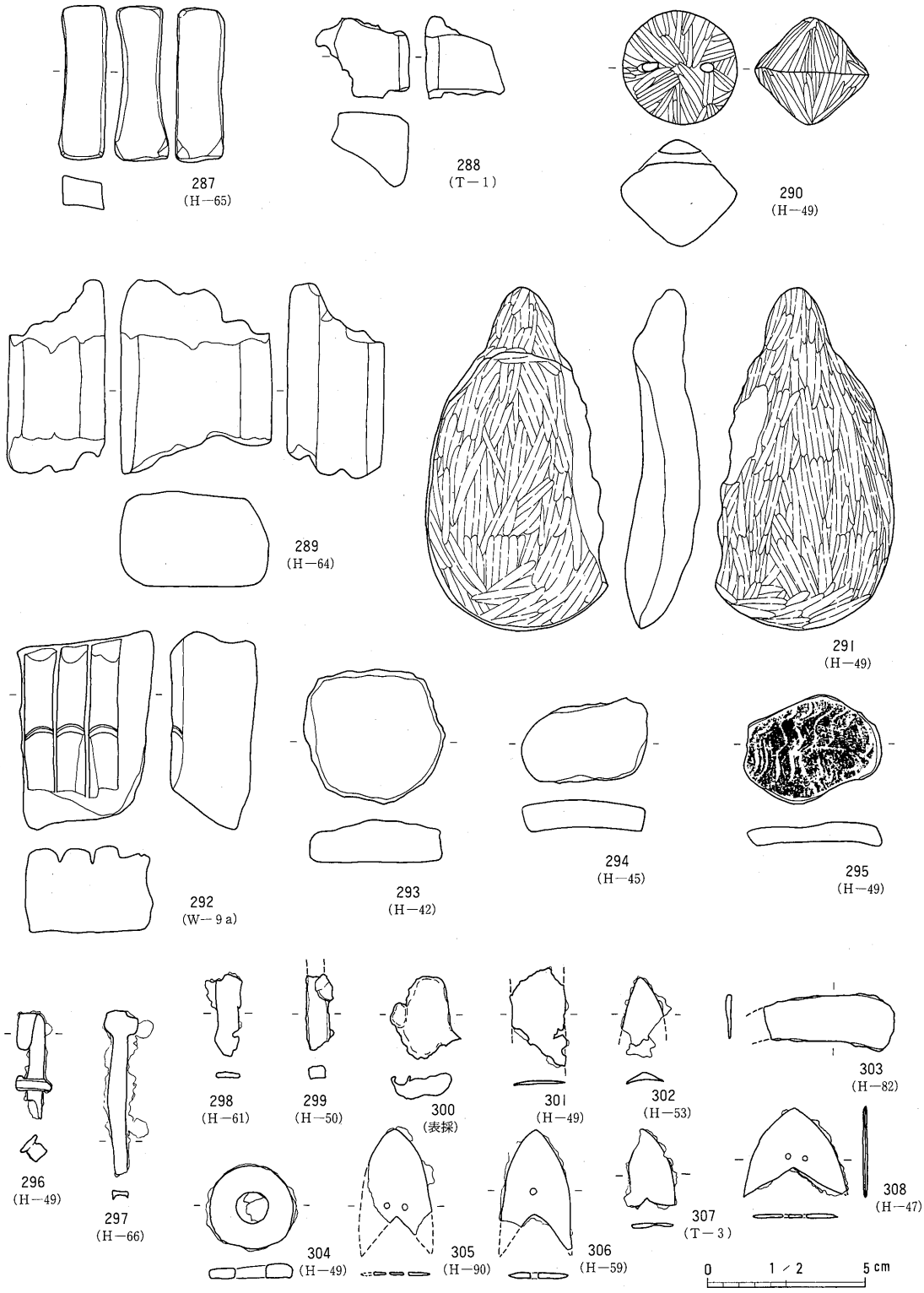


Fig. 68　土製品・石器・鉄器

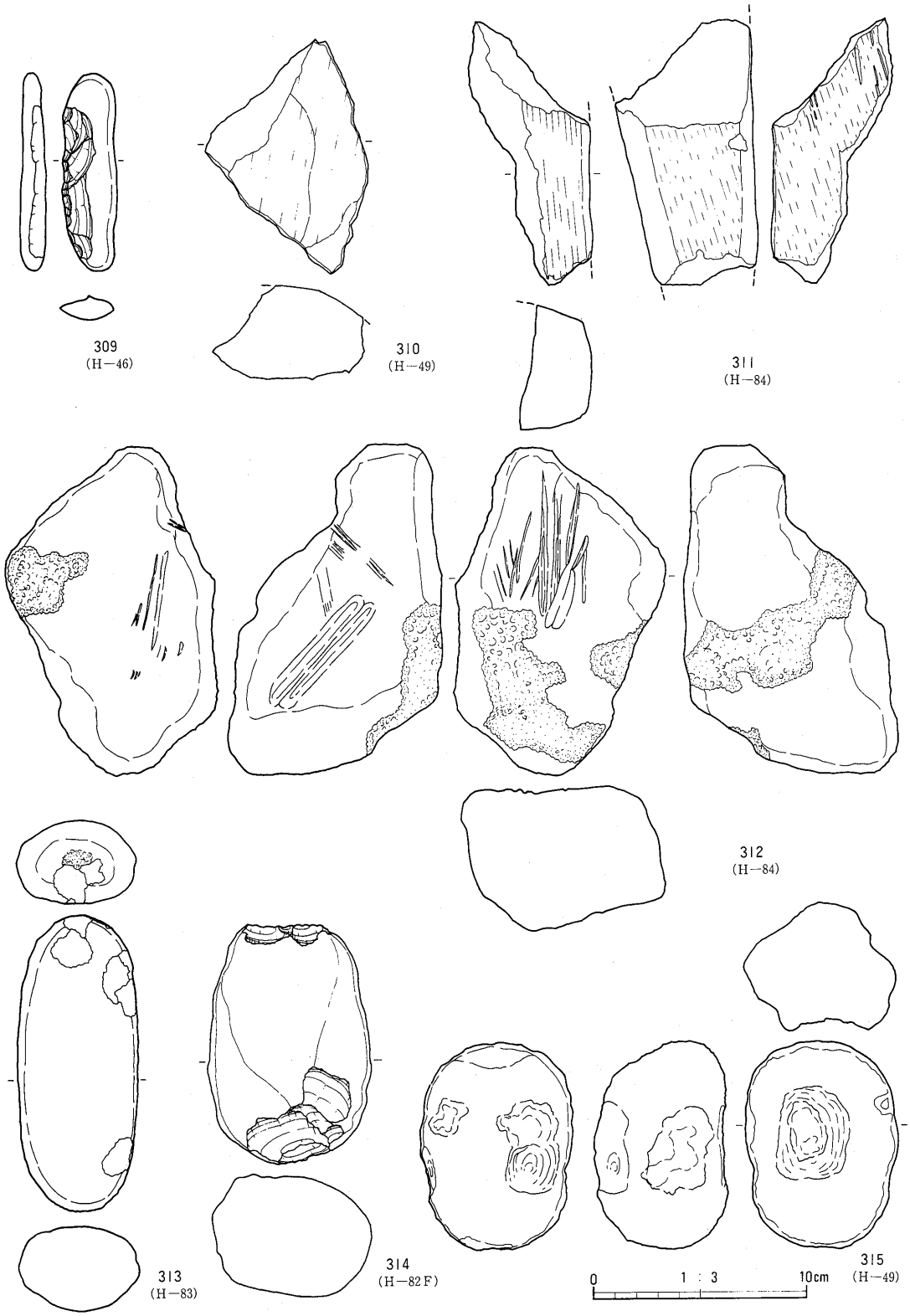

309
(H−46)
310
(H−49)
311
(H−84)
312
(H−84)
313
(H−83)
314
(H−82F)
315
(H−49)
0
1 : 3
10cm

Fig. 69 石 製 品

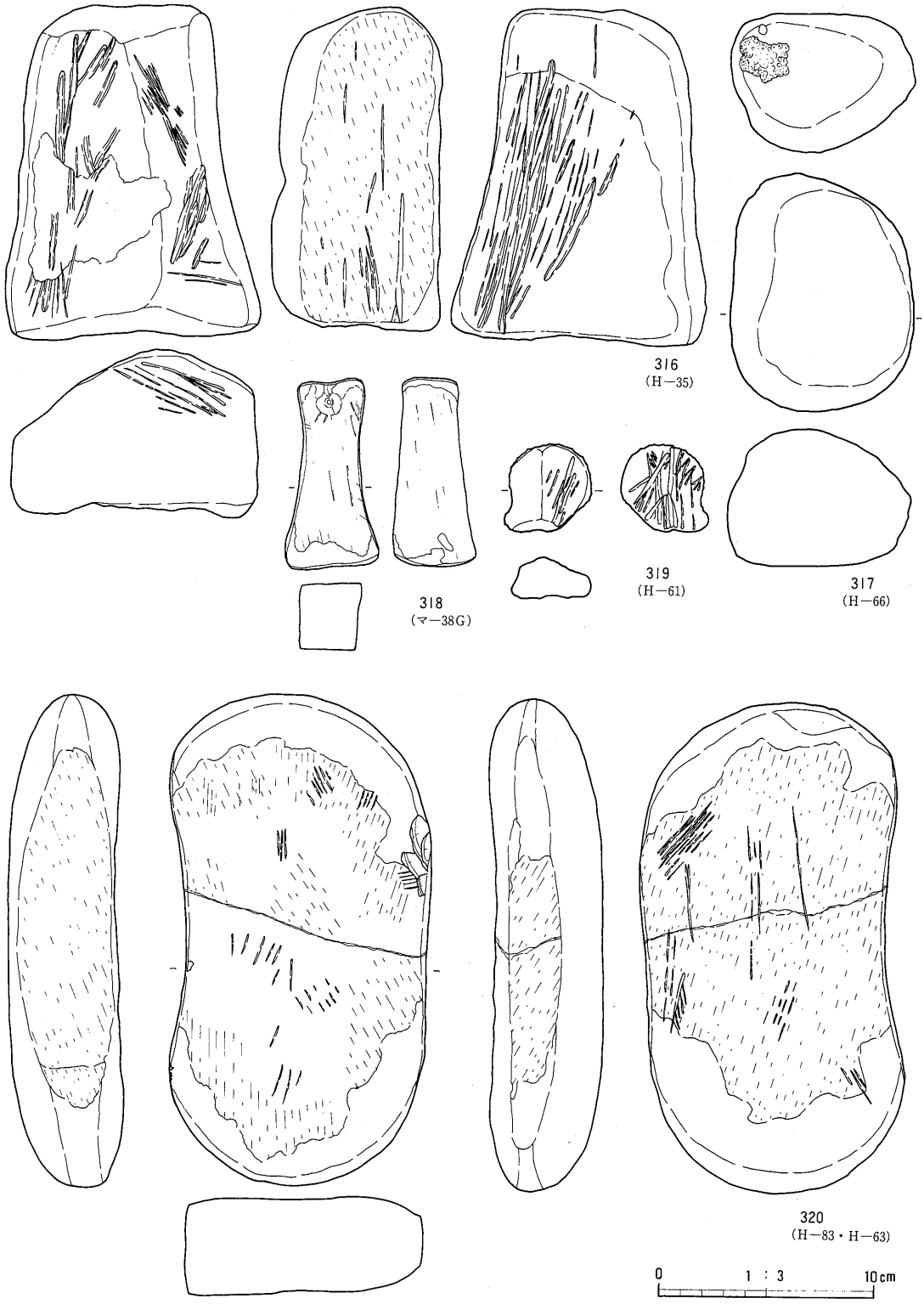


Fig. 70 石 製 品

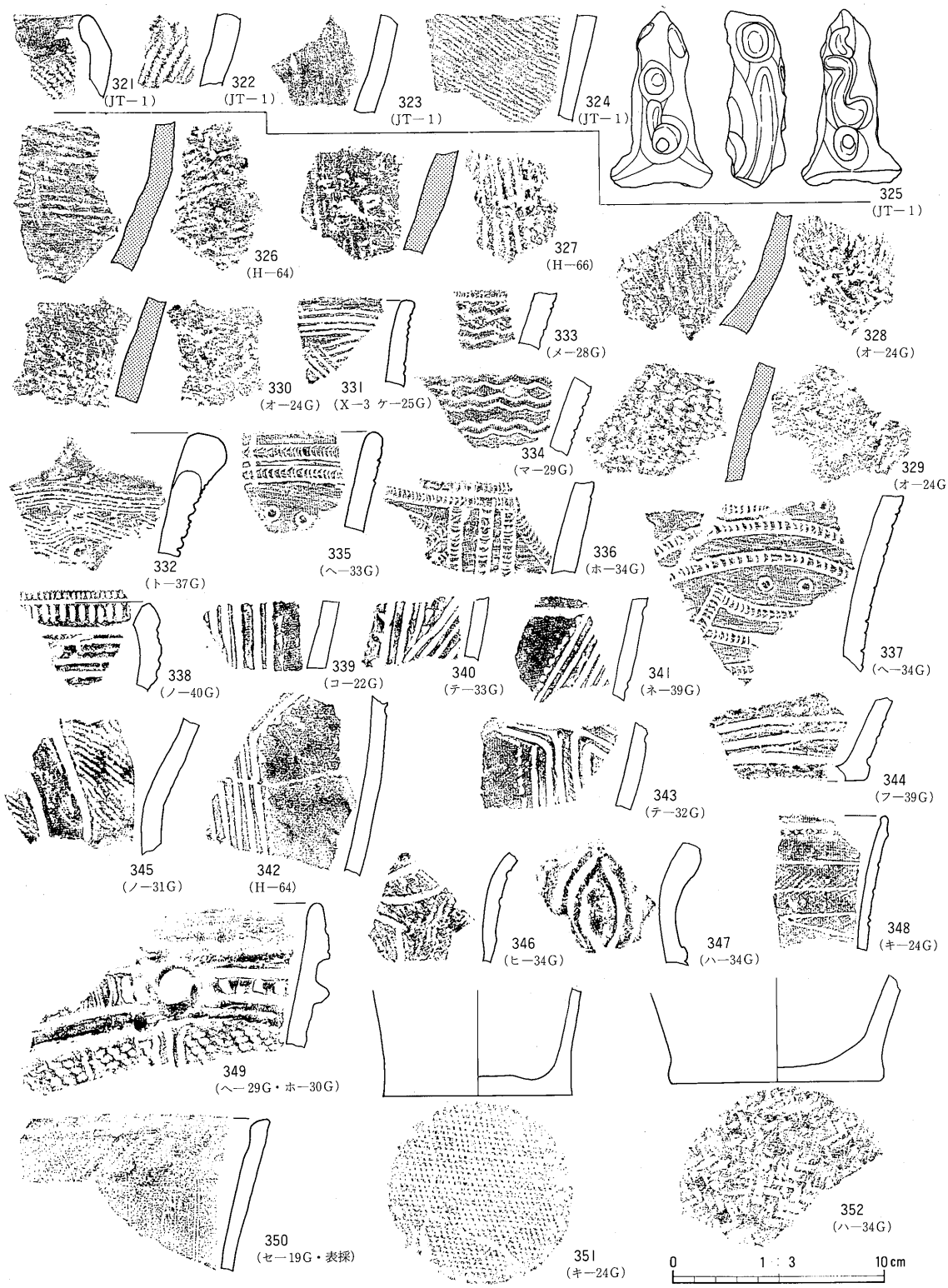

321 (JT−1)
322 (JT−1)
323 (JT−1)
324 (JT−1)
325 (JT−1)
326 (H−64)
327 (H−66)
328 (オ−24G)
329 (オ−24G)
330 (オ−24G)
331 (X−3 ケ−25G)
332 (ト−37G)
333 (メ−28G)
334 (マ−29G)
335 (へ−33G)
336 (ホ−34G)
337 (へ−34G)
338 (ノ−40G)
339 (コ−22G)
340 (テ−33G)
341 (ネ−39G)
342 (H−64)
343 (テ−32G)
344 (フ−39G)
345 (ノ−31G)
346 (ヒ−34G)
347 (ハ−34G)
348 (キ−24G)
349 (へ−29G・ホ−30G)
350 (セ−19G・表採)
351 (キ−24G)
352 (ハ−34G)
0 1 3 10cm

Fig. 71　縄文土器

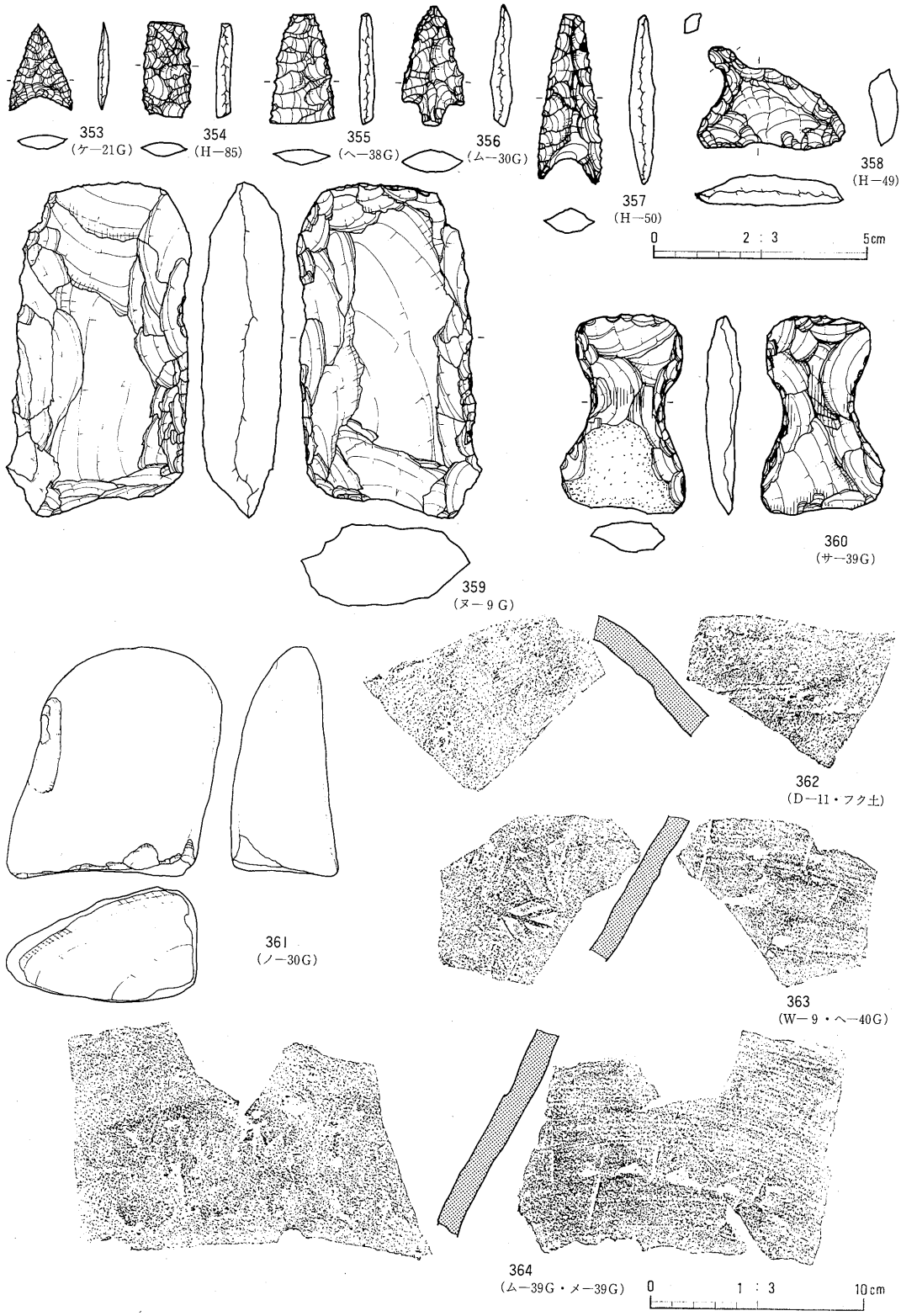
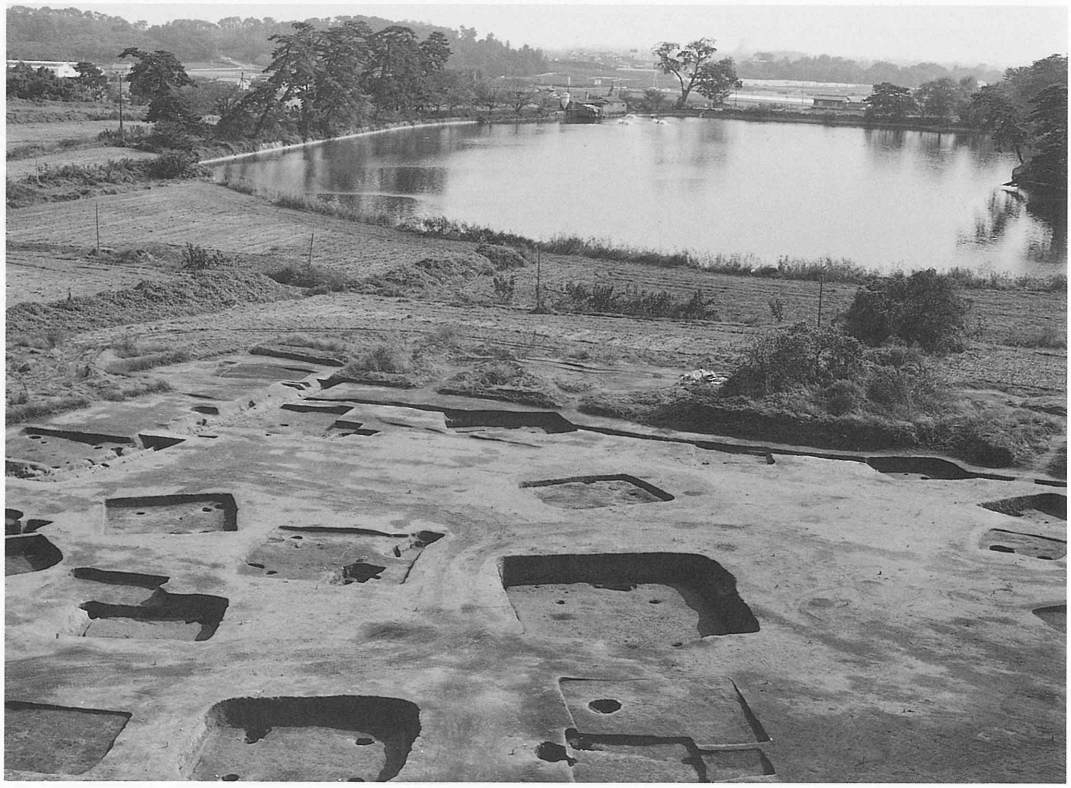


Fig. 72 縄文石器・常滑焼

写　真　図　版

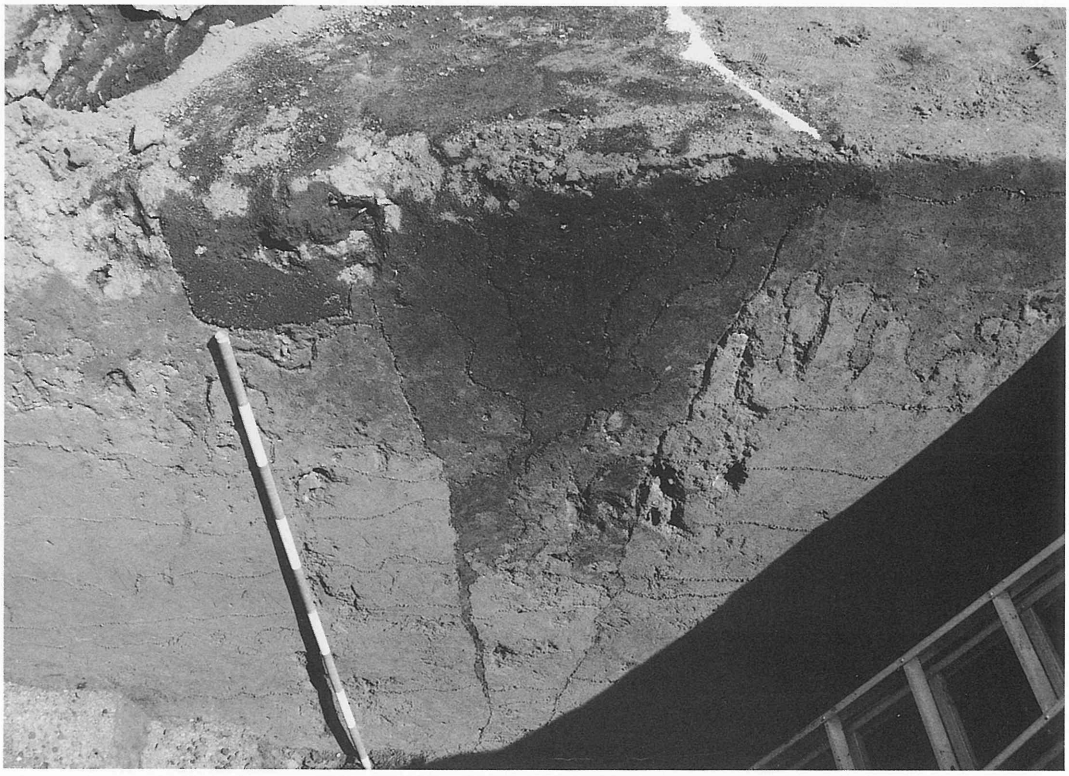
1．平成２年度内堀遺跡群発掘調査区域全景（上が北）

1．平成２年度内堀遺跡群発掘調査区域全景（南東から空撮）

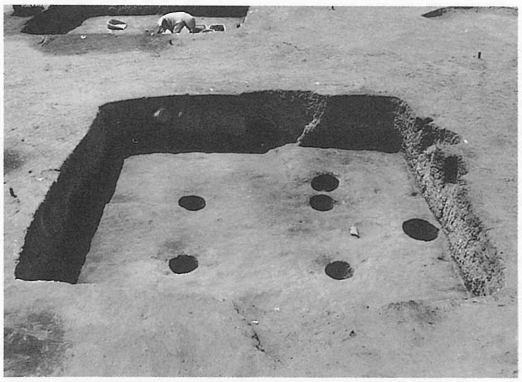


2．大室公園予定地中央の丘陵からみた調査区域と五料沼（北西から）

1．X－1号地割れ（南東から空撮）

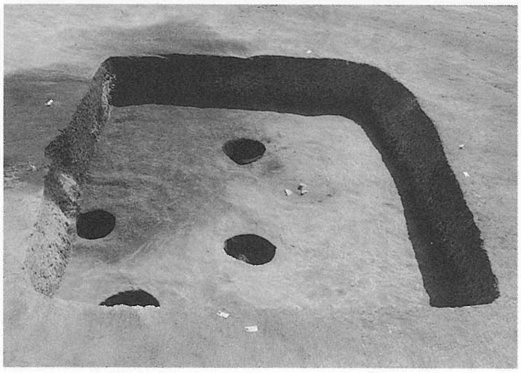


2．X－2号地割れのセクション（北西から）

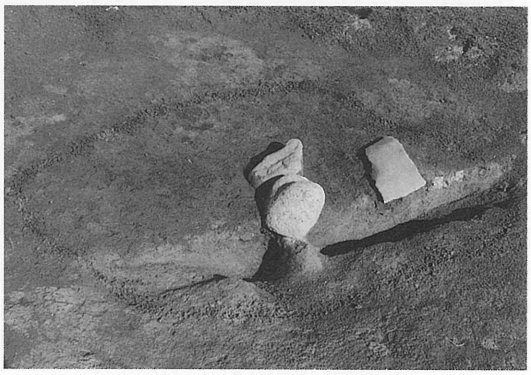


1．H—35号住居址（東から）

2．H—35号住居址遺物出土状態（南西から）

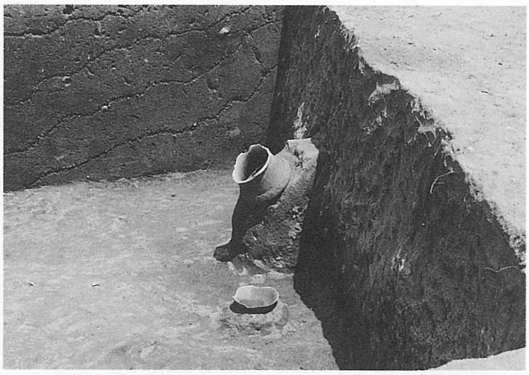


3．H—36号住居址

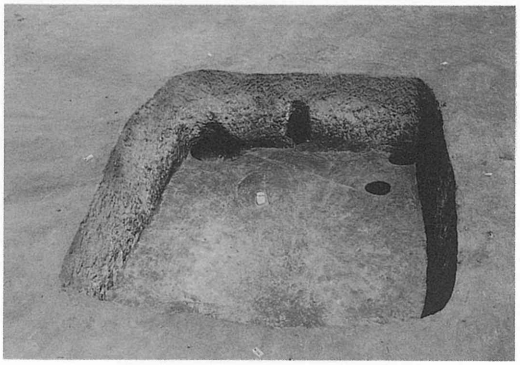


4．H—36号住居址の炉（南から）

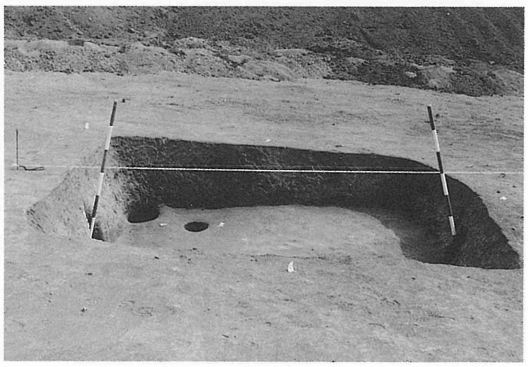
5．H—37号住居址（北から）



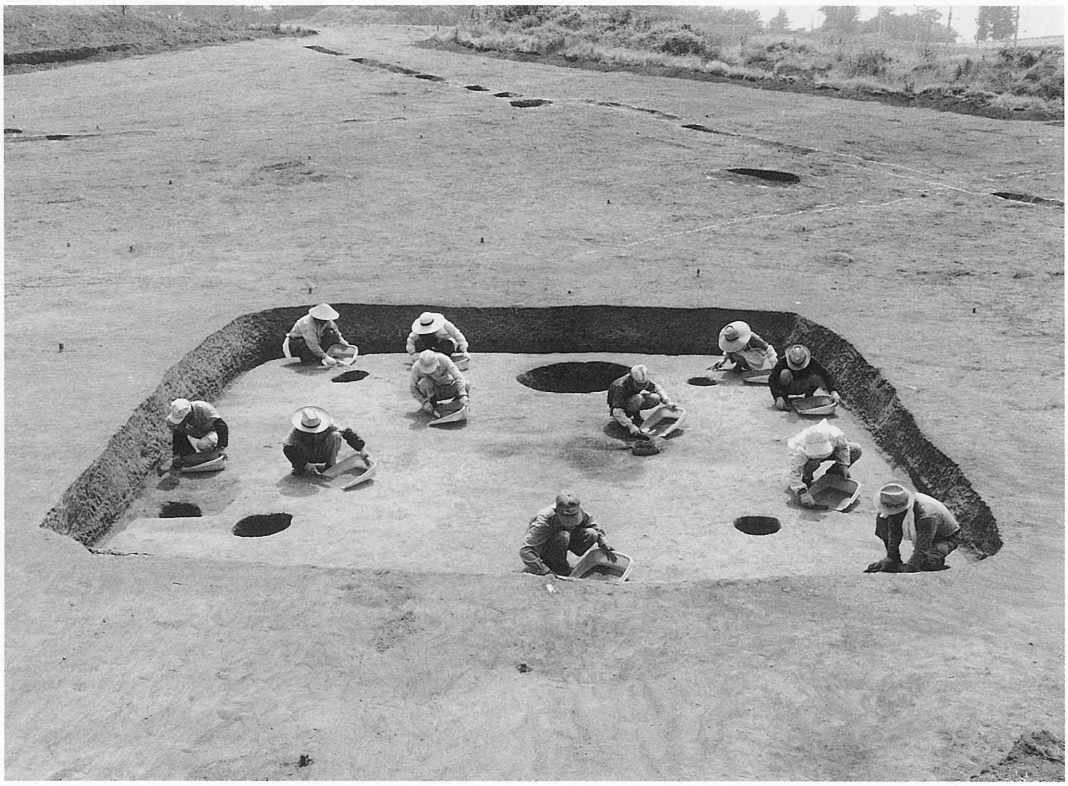
6．H—37号住居址遺物出土状態（南から）



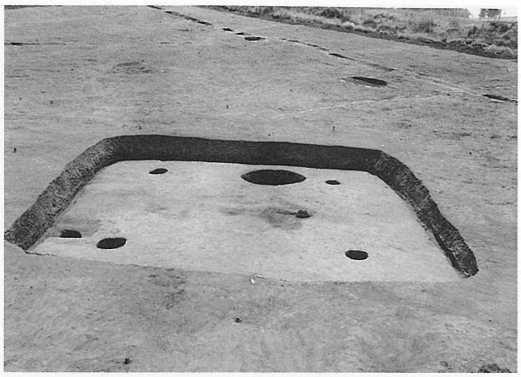
7．H—38号住居址（西から）



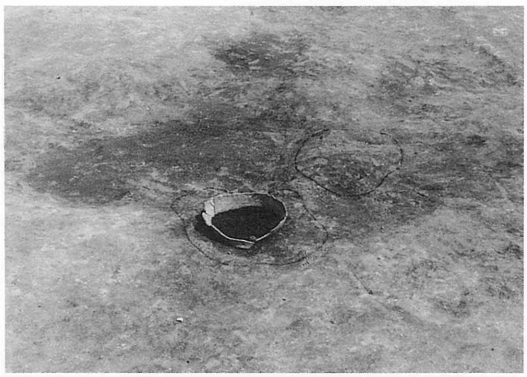
8．H—38号住居址柱穴の立ち上がり（北から）



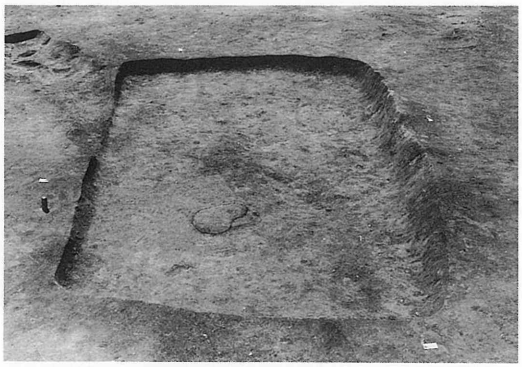
1．H—39号住居址発掘調査風景（北東から）



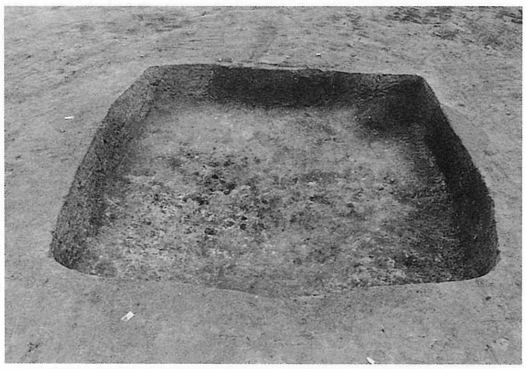
2．H—39号住居址（北東から）



3．H—39号住居址の炉体土器（北西から）



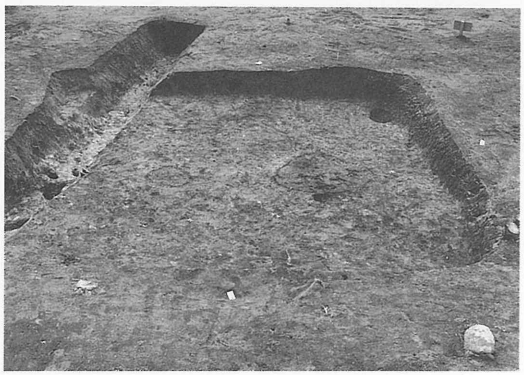
4．H—40号住居址（北西から）



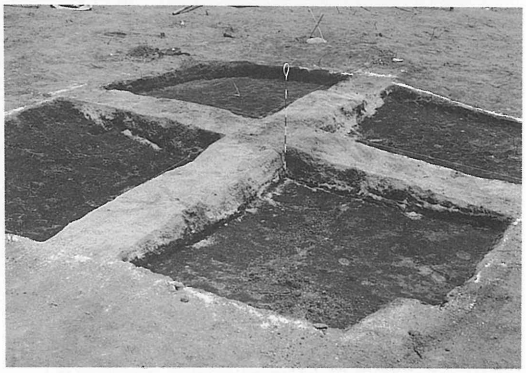
5．H—42号住居址（北から）

1．H—43号住居址（西から）

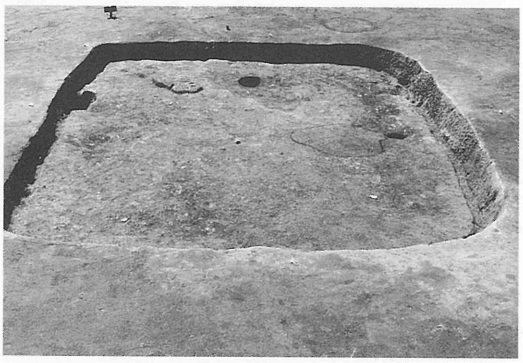
2．H—43号住居址竈のセクション（南西から）



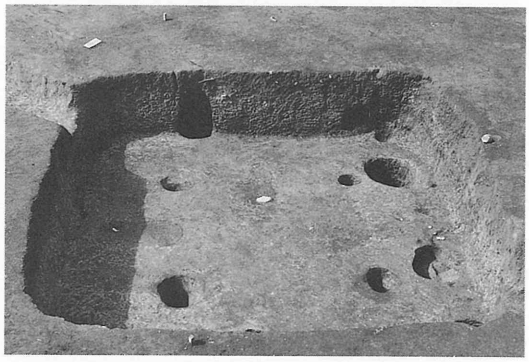
3．H—44号住居址（東から）



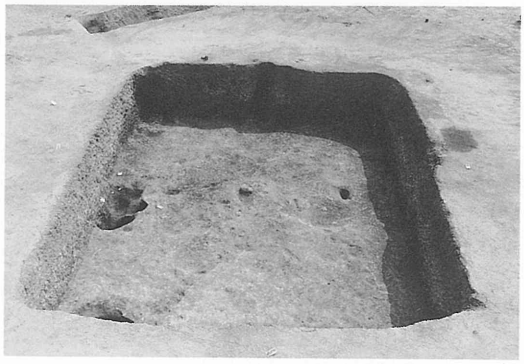
4．H—44号住居址 As—c堆積状態（南西から）



5．H—45号住居址（北東から）

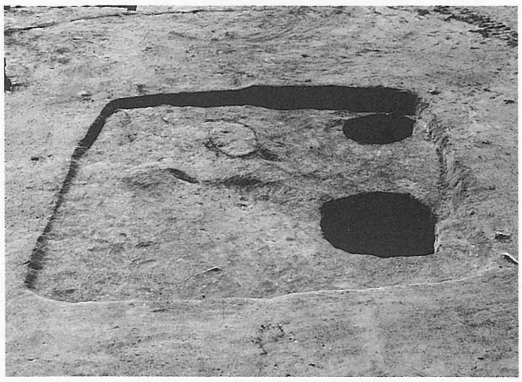


6．H—46号住居址（南東から）

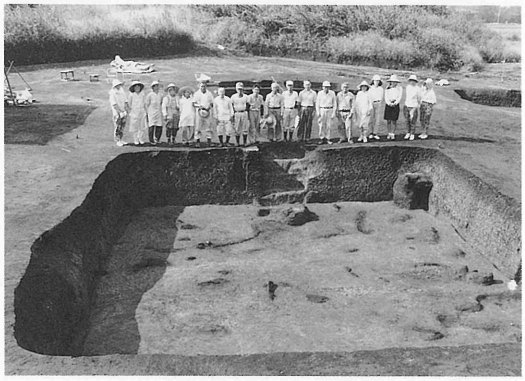


7．H—47号住居址（北から）

8．H—47号住居址の甕出土状態（北から）

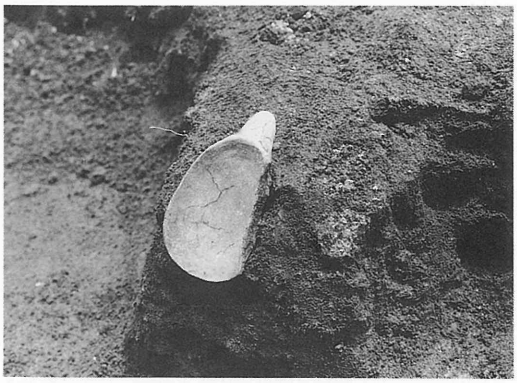


1．H—48号住居址（東から）



2．H—49号住居址炭化物焼土分布状態（東から）

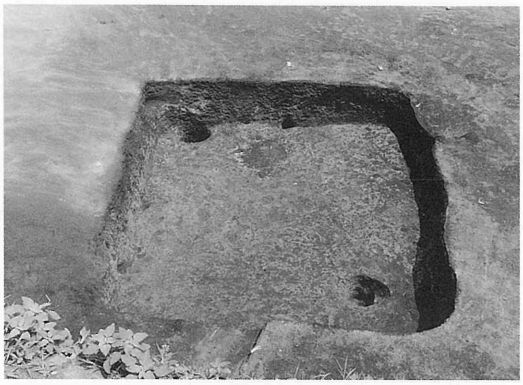
3．H—49号住居址（南から）



4．H—49号住居址の土匙出土状態（西から）

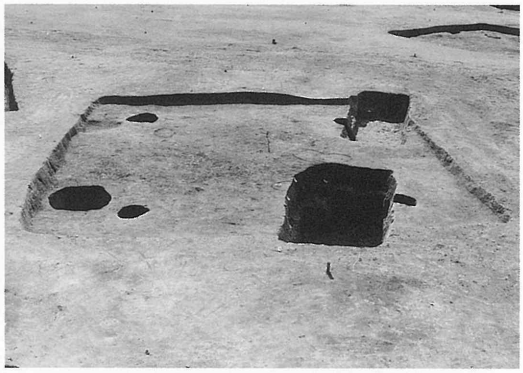
5．H—49号住居址階段状施設のセクション（南東から）

1．H—49号住居址階段状施設（北東から）

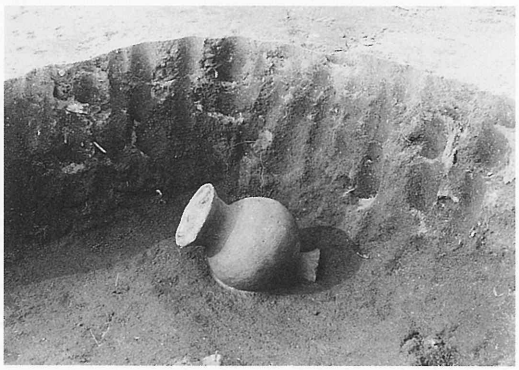


2．H—50号住居址（西から）

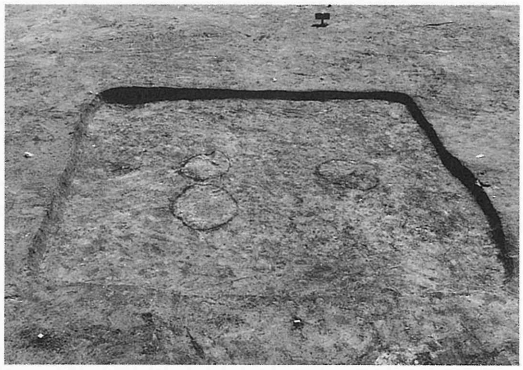
3．H—50号住居址遺物出土状態（東から）



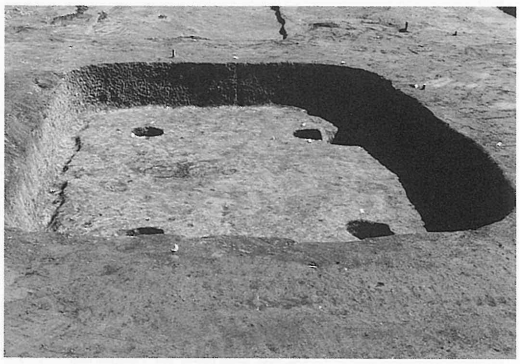
4．H—51号住居址（北から）



5．H—51号住居址の台付壺出土状態（北西から）



6．H—52号住居址（北から）



7．H—53号住居址（南西から）

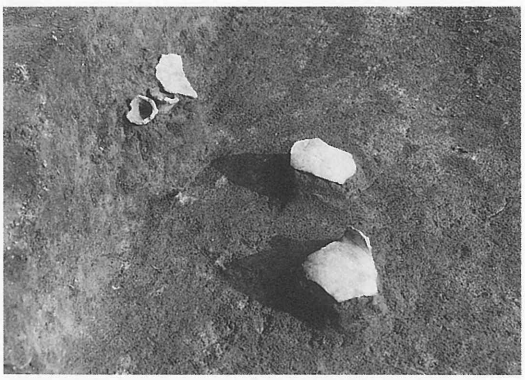
8．H—53号住居址の台付甕出土状態（南西から）

1．H—54号住居址（南から）

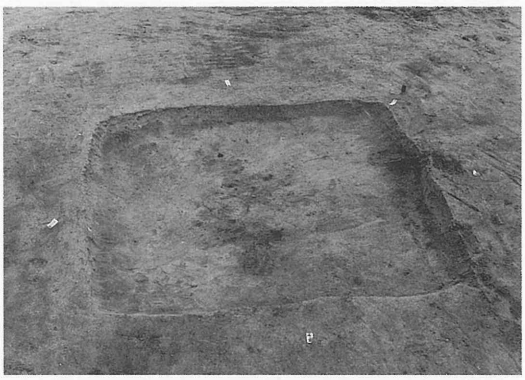
2．H—54号住居址遺物出土状態（南西から）

3．H—56号住居址（西から）

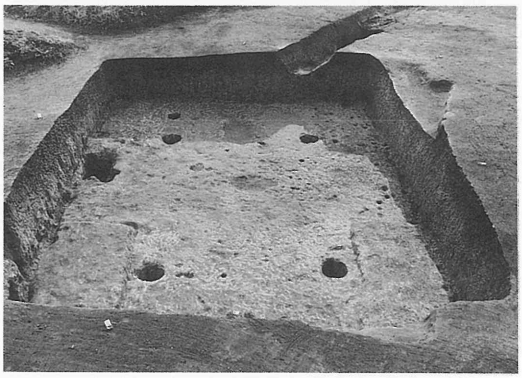
4．H—57号住居址（北西から）



5．H—57号住居址の土器分布状態（北西から）



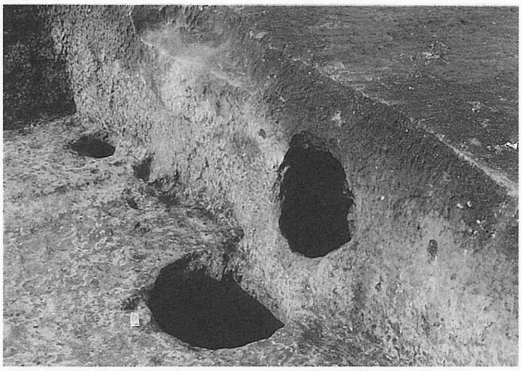
6．H—58号住居址（南から）



7．H—59号住居址（北東から）

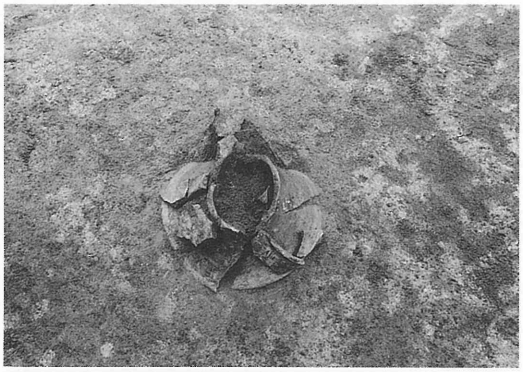
8．H—59号住居址の鉄鏃出土状態（北から）

1．H—59号住居址（南西から）

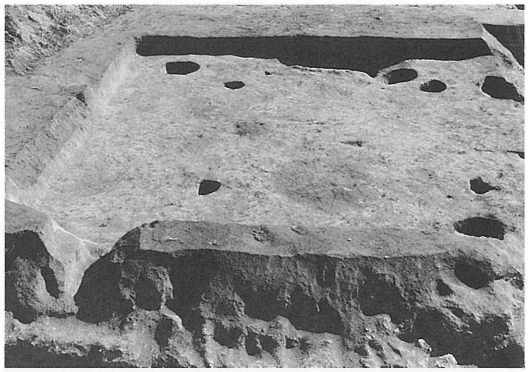


2．H—59号住居址貯蔵穴（南から）

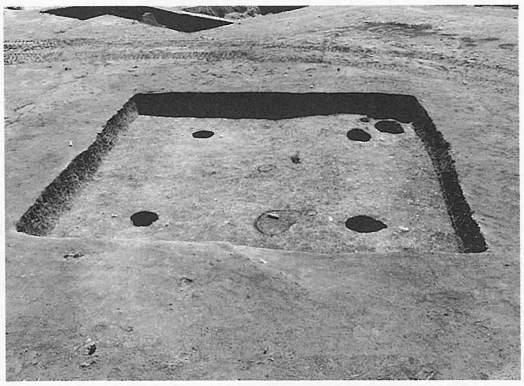
3．H—61号住居址（南から）



4．H—61号住居址の甕出土状態（北西から）



5．H—62号住居址（北から）



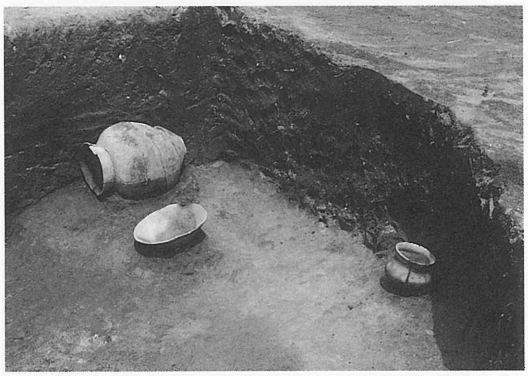
1．H—63号住居址（北西から）

2．H—64号住居址（北西から）

3．H—64号住居址の炉（西から）

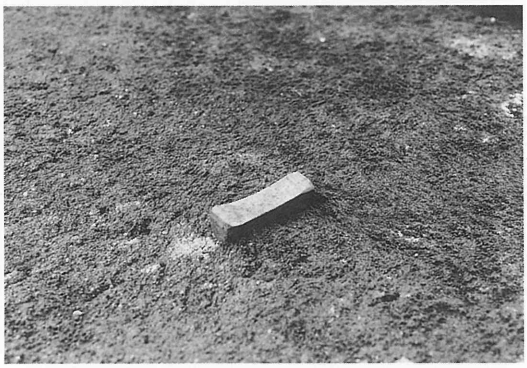
4．H—65号住居址（西から）

5．H—65号住居址遺物出土状態

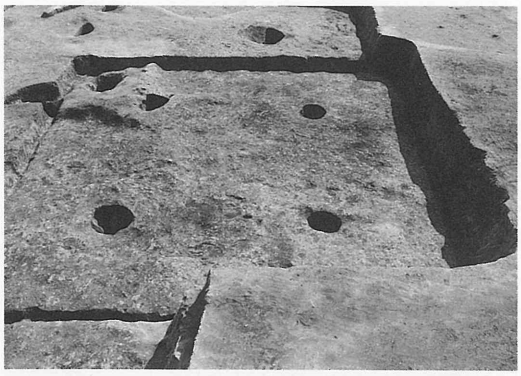


6．H—65号住居址（南から）

7．H—65号住居址の坩出土状態（南東から）



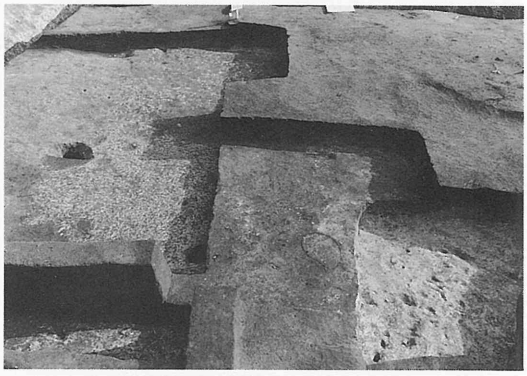
8．H—65号住居址の砥石出土状態（南から）



1．H－66号住居址（北から）

2．H－82号住居址（東から）

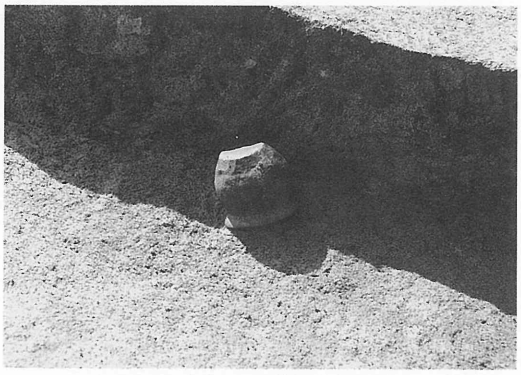
3．H－82号住居址遺物出土状態（南から）



4．H－83号住居址（北から）

5．H－83号住居址の土器分布状態（南西から）

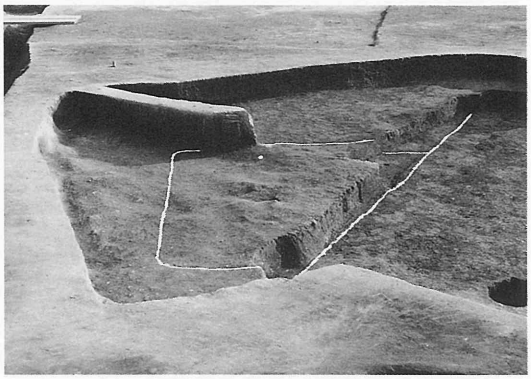
6．H－84号住居址（東から）



7．H－84号住居址の小甕出土状態（北東から）

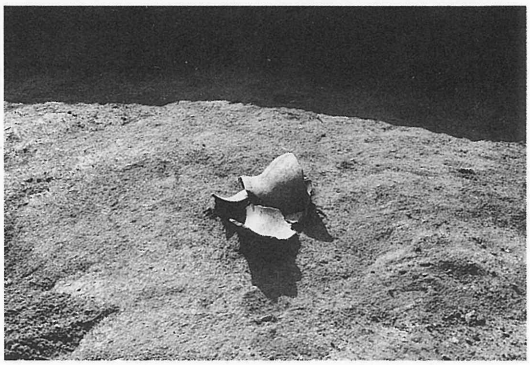
8．H－85号住居址（東から）

1．H—86号住居址（東から）

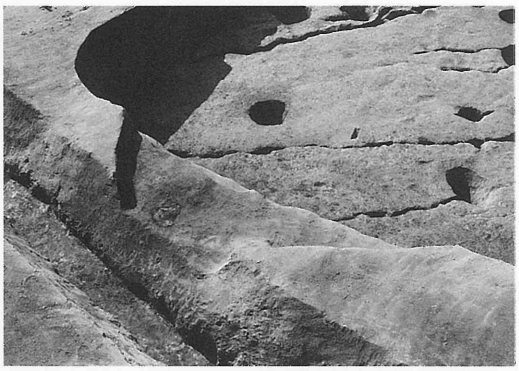


2．H—89号住居址（北から）

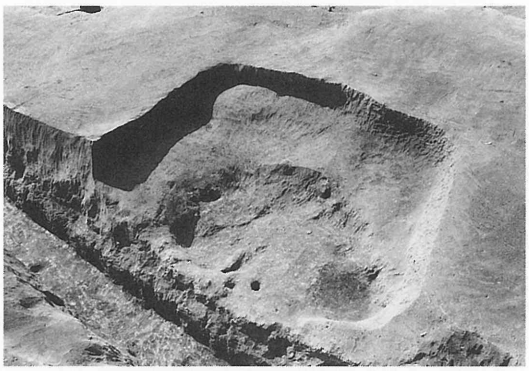
3．H—90号住居址（北から）



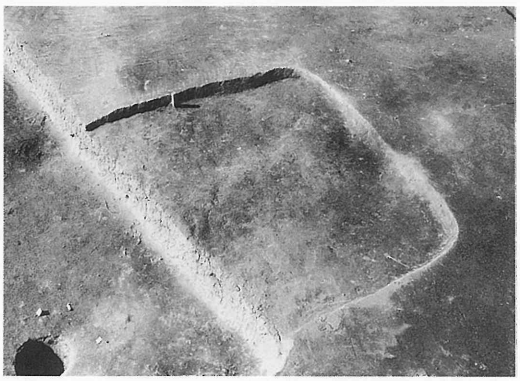
4．H—90号住居址の甕出土状態（北から）



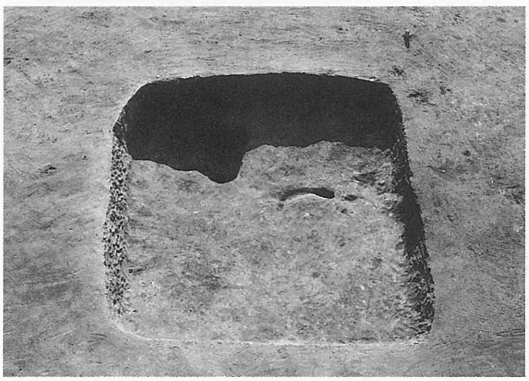
5．H—91号住居址（北東から）



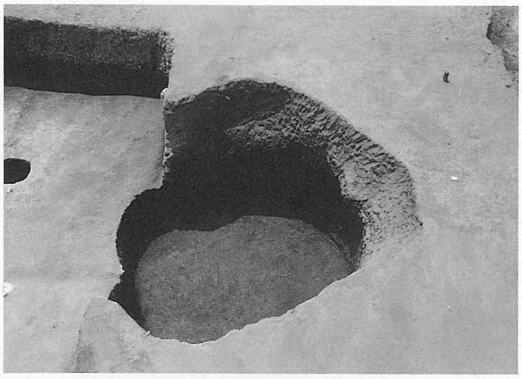
6．T—1号竪穴状遺構（北東から）



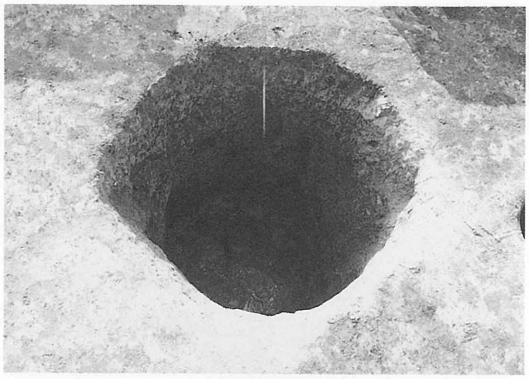
7．T—2号竪穴状遺構（南東から）



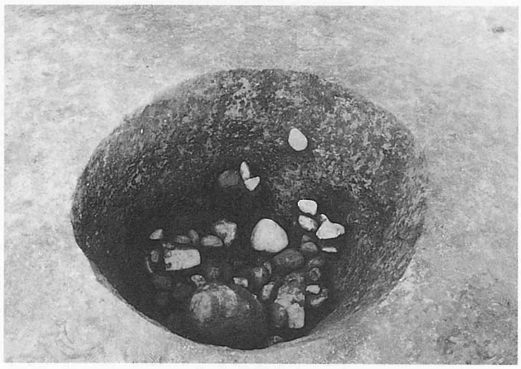
8．T—3号竪穴状遺構（北西から）



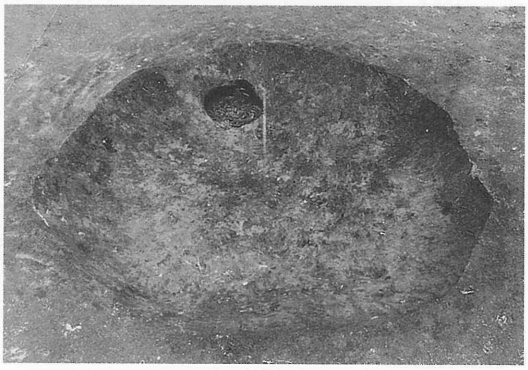
1．ＪＴ－１号竪穴状遺構（北から）



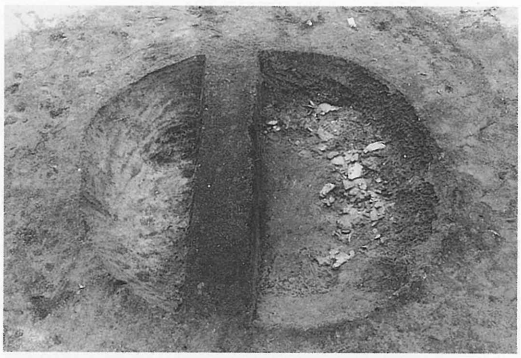
2．Ｉ－１号井戸（東から）



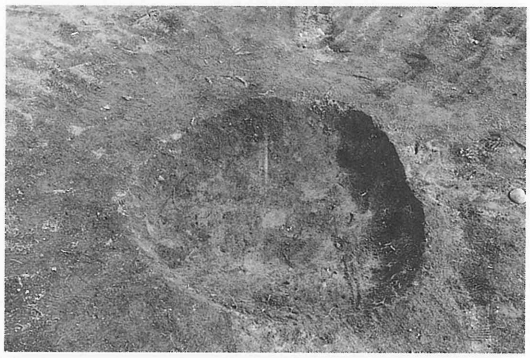
3．Ｉ－１号井戸の石出土状態（南西から）



4．Ｄ－１号土坑（西から）

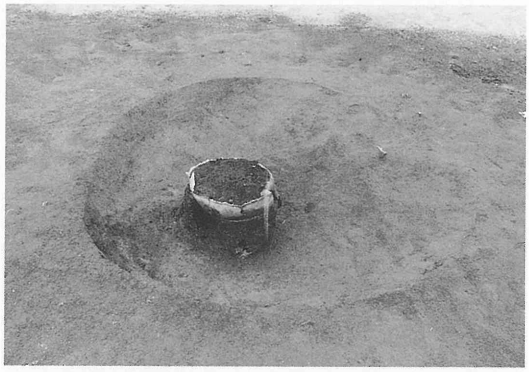


5．Ｄ－１号土坑遺物出土状態（北から）

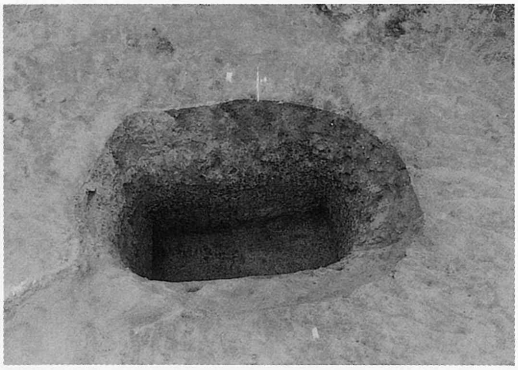


6．Ｄ－２号土坑（北から）

7．Ｄ－３号土坑（北から）

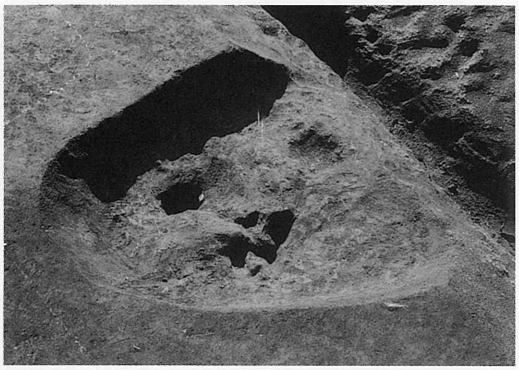


8．Ｄ－４号土坑（南から）



1．D－5号土坑（東から）

2．D－6号土坑（南東から）

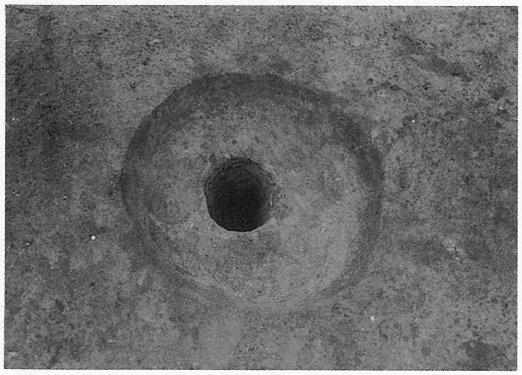


3．D－10号土坑（北東から）

4．D－11号土坑（北から）

5．D－12号土坑（南西から）

6．D－13号土坑（南西から）



7．D－14号土坑（南西から）

8．D－15号土坑（南から）

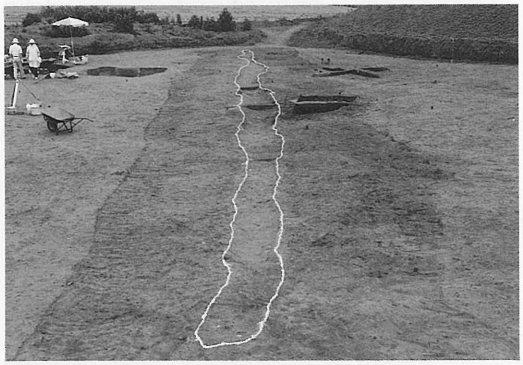
1．D—16号土坑（南西から）

2．D—17号土坑（南西から）

3．W—9号溝（南から）

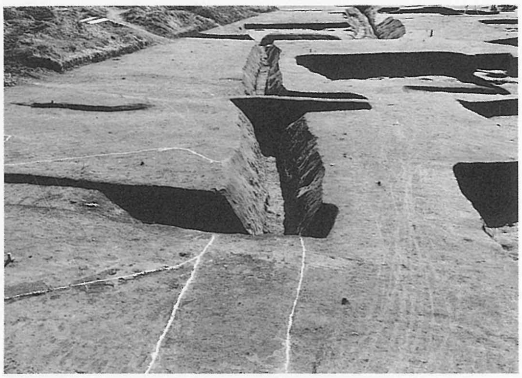
4．W—1号溝（南東から）

5．W—2号溝（北から）



1．W－3号溝（西から）

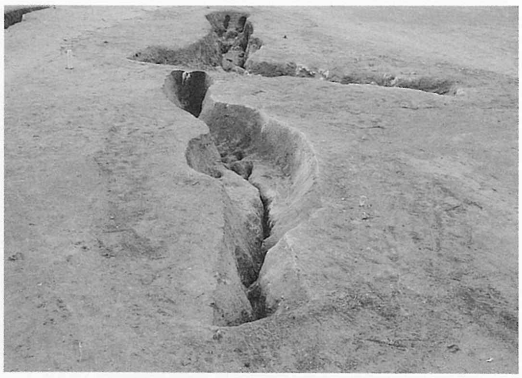
2．W－4号溝（西から）



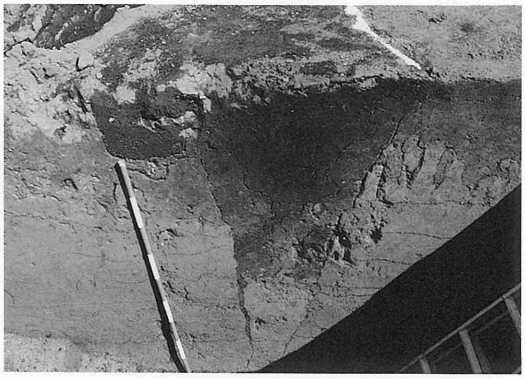
3．W－8号溝（北から）

4．W－10号溝（北から）

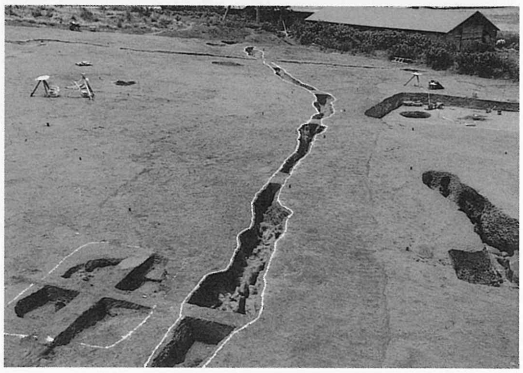
5．X－1号地割れ（東から空撮）



1．X－2号地割れ（南東から）

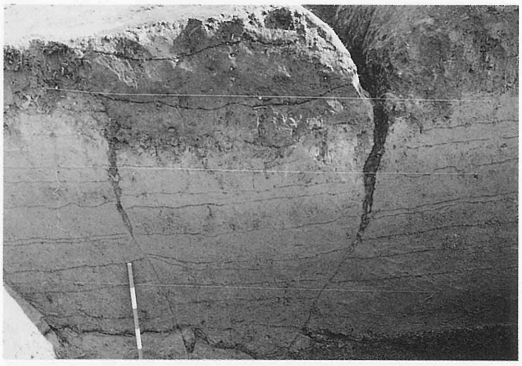


2．X－2号地割れのセクション（北西から）



3．X－3号地割れ（東から）

4．X－4号地割れ（北西から）



5．X－4号地割れのセクション（北西から）

6．X－5号地割れ（南東から）

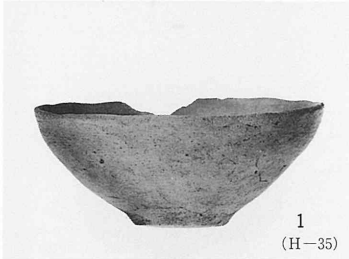
7．瓦塔の出土状態（西から）

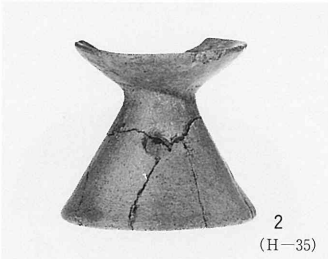
8．記念撮影

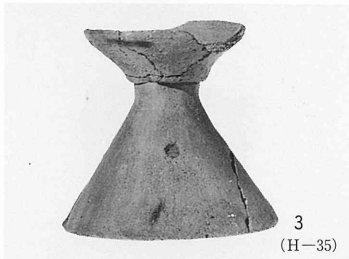
7
(H—35)

5
(H—35)

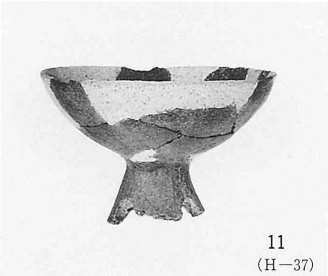
6
(H—35)


1
(H—35)


2
(H—35)

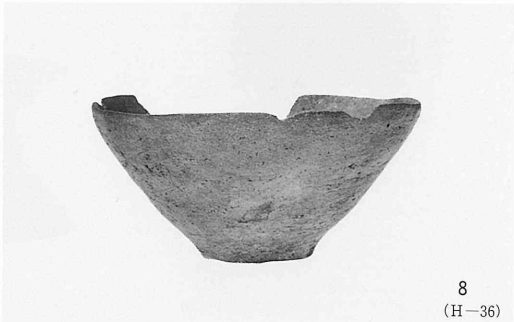

3
(H—35)

13
(H—38)


11
(H—37)

18
(H—39)

9
(H—36)


8
(H—36)

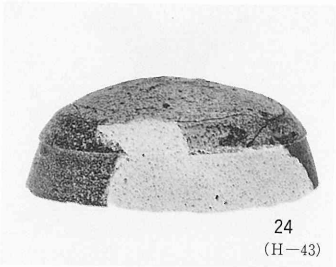
H—35～39号住居址出土の土器

17
(H—39)

38
(H—45)

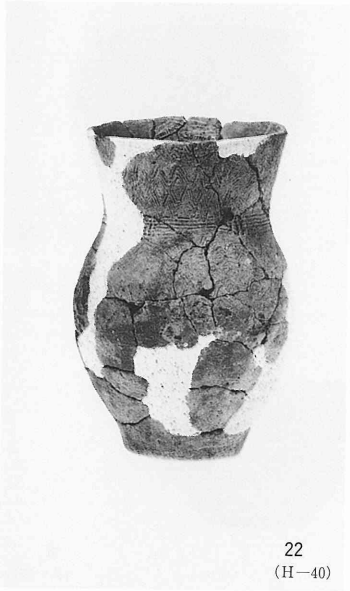
19
(H—39)

21
(H—40)



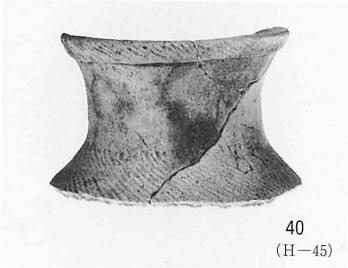
24
(H—43)

32
(H—45)

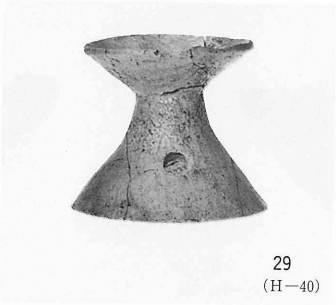


22
(H—40)

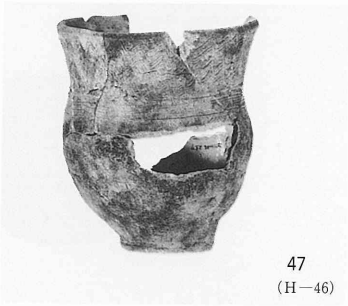
26
(H—43)



40
(H—45)



29
(H—40)



47
(H—46)

H—39・40・43・45・46号住居址出土の土器

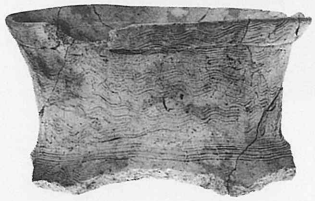
45
(H—46)

46
(H—46)

48
(H—46)

65
(H—47)

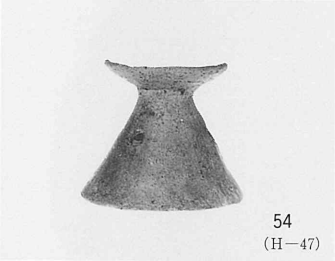
67
(H—47)



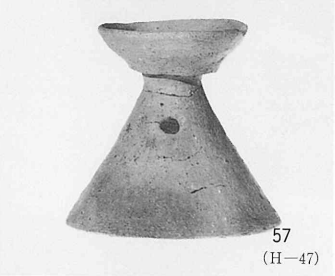
68
(H—47)

H—46・47号住居址出土の土器

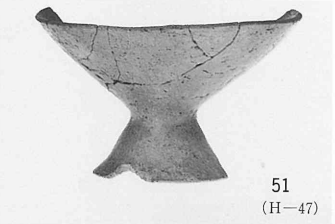
64
(H—47)



54
(H—47)



57
(H—47)



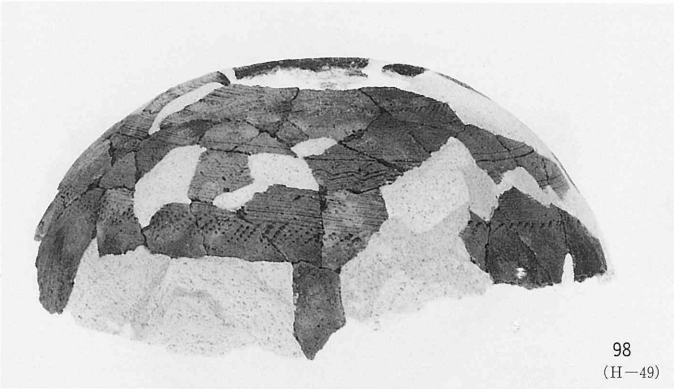
51
(H—47)

106
(H—49)

71
(H—47)

76
(H—48)

H—47～49号住居址出土の土器


98
(H—49)

78
(H—49)

77
(H—49)

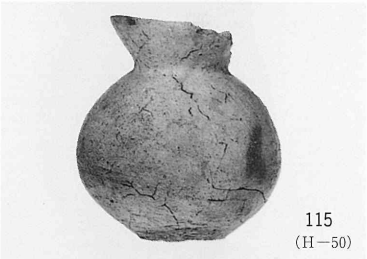
88
(H—49)

91
(H—49)

80
(H—49)

90
(H—49)

82
(H—49)


115
(H—50)

83
(H—49)

116
(H—50)

97
(H—49)

122
(H—50)

H—49・50号住居址出土の土器

126
(H—50)

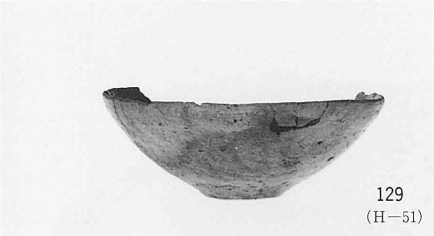
110
(H—50)

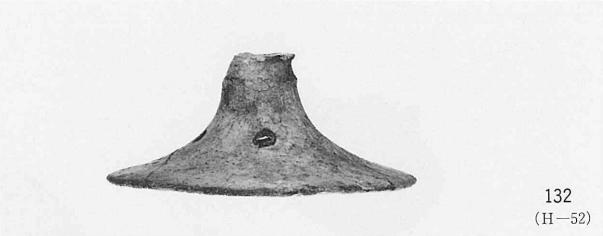
119
(H—50)

121
(H—50)

124
(H—50)

H—50号住居址出土の土器


129
(H—51)


132
(H—52)

128
(H—51)

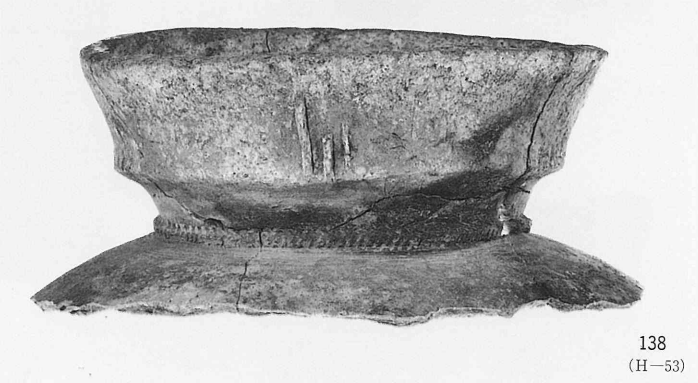
143
(H—53)

142
(H—53)

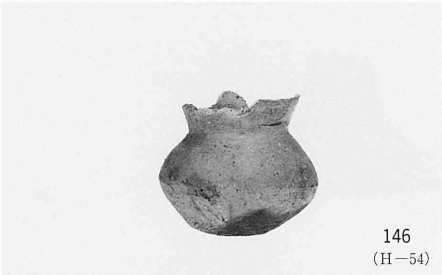
134
(H—53)

130
(H—51)

135
(H—53)

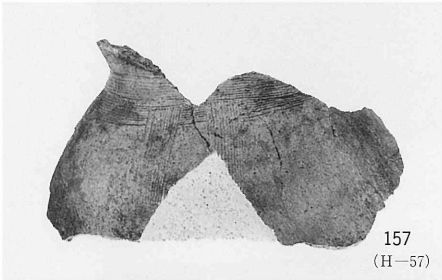

138
(H—53)

H—51～53号住居址出土の土器


146
(H—54)

154
(H—56)

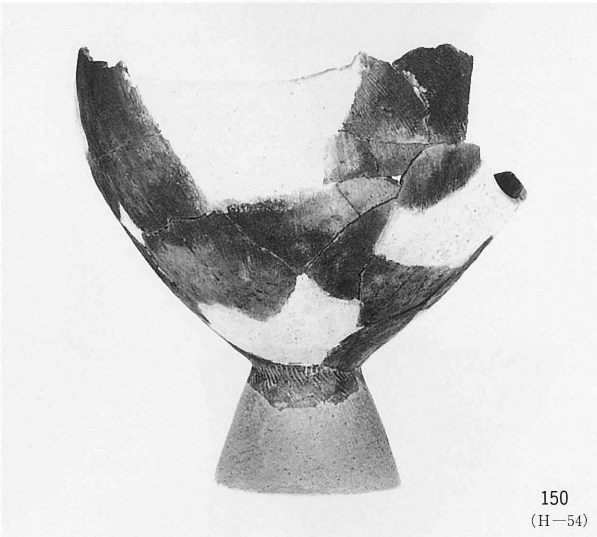
134
(H—56)


157
(H—57)

159
(H—59)

171
(H—62)

150
(H—54)


150
(H—54)

165
(H—59)

H—54・56・57・59・62号住居址出土の土器

177
(H—62)

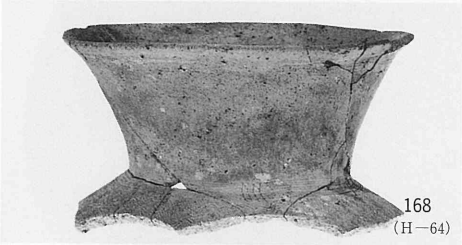
181
(H—63)

182
(H—63)

187
(H—64)

H—62～64号住居址出土の土器

188
(H—64)

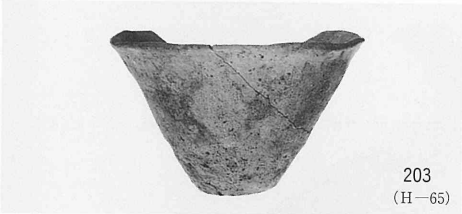

168
(H—64)

94
(H—64)

198
(H—65)

195
(H—65)

197
(H—65)


203
(H—65)

196
(H—65)

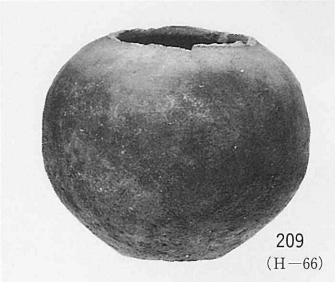
207
(H—65)

H—64・65号住居址出土の土器

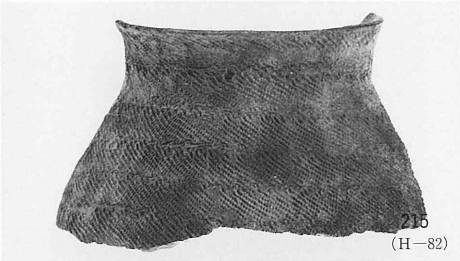
202
(H—65)

206
(H—65)

208
(H—66)


209
(H—66)

223
(H—82)


215
(H—82)

230
(H—82)

217
(H—82)

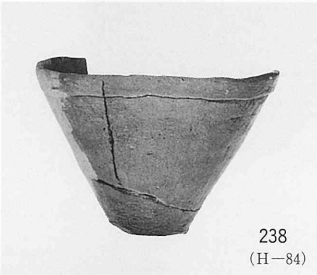
H—65・66・82号住居址出土の土器

229
(H—82)

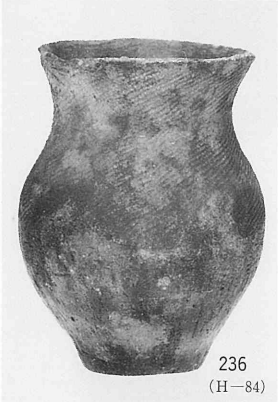
220
(H—82)

231
(H—83)

234
(H—84)

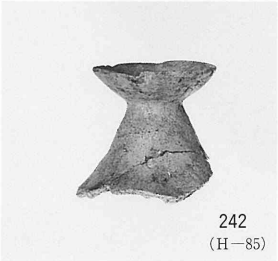

238
(H—84)

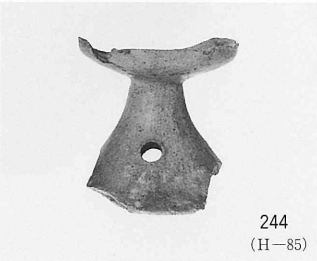
254
(H—90)


236
(H—84)

239
(H—84)

260
(D—2)

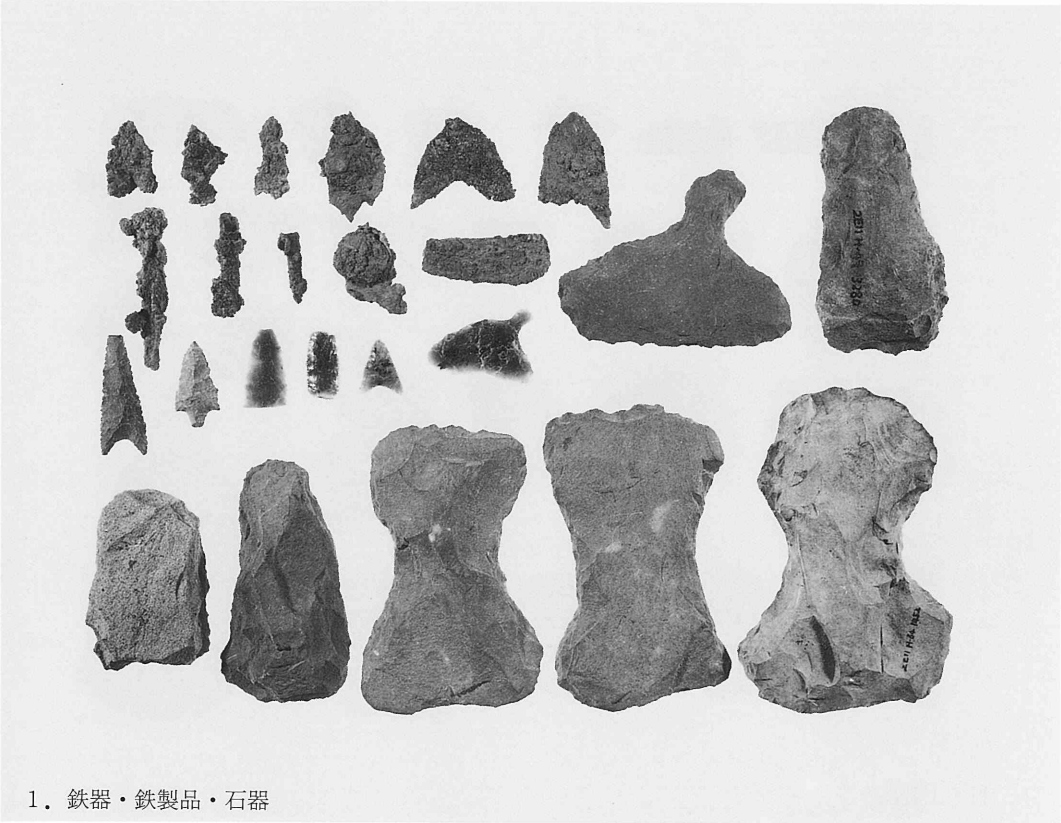

242
(H—85)


244
(H—85)

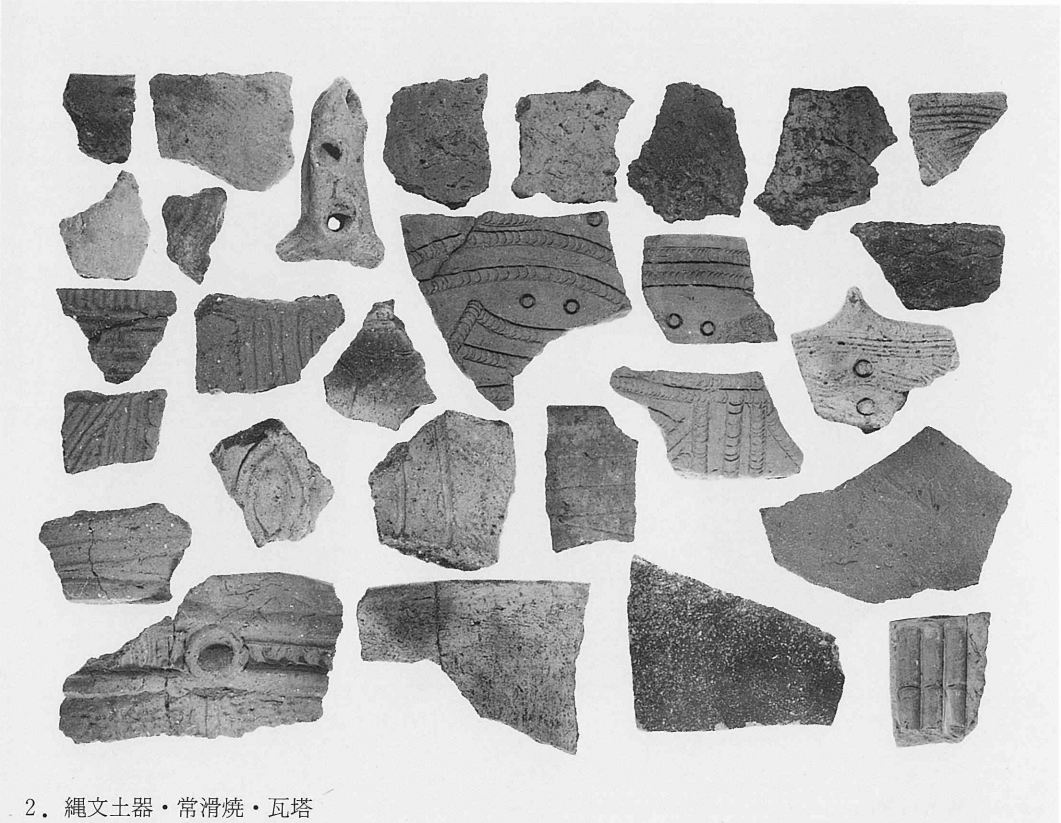
H—82・83・84・85・90号住居址とD—2号土坑出土の土器

1．石・土製品

2．石器・石製品



1．鉄器・鉄製品・石器



2．縄文土器・常滑焼・瓦塔

調 査 要 項

遺跡名称	内堀遺跡群（うちぼりいせきぐん）下縄引II遺跡（しもなわびきにいせき）
遺跡記号	２Ｅ11
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町2521-1・2526・2530番地
調査期間	確認調査・発掘調査　平成２年５月９日～平成２年11月30日
	遺物整理・報告書作成　平成２年12月５日～平成３年３月25日
調査面積	発掘調査…9,000㎡
	確認調査…2,500㎡
	開発面積…369,000㎡
調査原因	公園造成
調査依頼者	前橋市長　藤嶋清多（公園緑地課）
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　遠藤次也
事務局	事務局長 福田紀雄　事務局次長 遠藤和夫　財政係員 内田由治郎　藤岡龍也
	庶務担当 須田みずほ　田野真喜子
調査担当者	前原　豊　伊藤　良
調査参加者	飯塚　明三　石綿　信雄　石綿はるの　伊藤　孝子　井野江利子　岡野　行雄　岡安善次郎
	狩野　美雪　川島　勝治　木村源次郎　木村はる子　久保もり子　近藤　盛次　佐手　利子
	佐藤　佳子　下田　利子　関　トシ子　関口みよ子　高橋きしの　竹内るり子　田中善四郎
	角田正次郎　内藤貴美子　内藤　たか　主代　仲治　巾　千恵子　堀越　豊　峰岸あや子
	横堀　富衛　吉田真理子　小保方豊五郎
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県埋蔵文化財調査事業団　粕川村教育委員会
	公園緑地部公園緑地課
	麻生　優　石川正之助　岡本　東三　女屋和志雄　加部　二生　岸田　治男　木暮　誠
	小島　敦子　小島　純一　佐藤　明人　神保　侑史　杉山　秀宏　関　邦一　早田　勉
	大工原　豊　田口　一郎　能登　健　巾　隆之　細野　高伯　前原　照子　大館　保
	宮本長二郎　山下　歳信　若狭　徹　綿貫　綾子
	イズミトレス　たつみ写真　シン航空　青高館　株式会社測設

内 堀 遺 跡 群 IV

平成３年３月20日　印　刷
平成３年３月25日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
〒371　前橋市上泉町664―4
TEL　0272―31―9531

印　刷　朝日印刷工業株式会社